一般国道3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集

久良々遺跡
倉良遺跡
天神田遺跡

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

1995

福岡県教育委員会

一般国道
3 号 線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集

久良々（くらら）遺跡
倉良（くらよし）遺跡
天神田（てんじんだ）遺跡

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査



1．久良々遺跡　全景（南西から）



2．同　北調査区掘立柱建物群（南東から）



1．倉良遺跡　東側斜面全景（南東から）



2．倉良・天神田遺跡　全景（北から）

序

福岡県教育委員会は建設省の委託を受けて一般国道筑紫野バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和56年度以降実施してまいりました。発掘調査は平成６年度の以来尺遺跡の調査をもって完了しており、今後は調査報告書を順次刊行して行く予定であります。

本書は平成２・４・５年度に発掘調査を行った筑紫野市所在の久良々遺跡・倉良遺跡・天神田遺跡についての調査報告書であります。

本報告書が埋蔵文化財への認識を深め、地域の歴史を解明する一助となれば幸甚であります。

なお、発掘調査から報告書作成に至るまでの多くの方々の御指導・御援助に対し深く感謝いたします。

平成７年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　　光安　常喜

例　言

1．本書は、福岡県教育委員会が建設省福岡国道工事事務所から委託されて発掘調査を実施した一般国道3号線筑紫野バイパス建設予定地内の埋蔵文化財についての第2冊目の報告書である。

2．本書に収録した遺跡は、1990・1992・1993（平成2・4・5）年度に調査を行った福岡県筑紫野市所在の久良々遺跡・倉良遺跡・天神田遺跡である。

3．遺構の実測は馬田・飛野・水ノ江・秦が行い、写真撮影は飛野・水ノ江・秦が行った。

4．出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもとに九州歴史資料館と福岡県文化課太宰府事務所で行った。

5．人骨の鑑定及び執筆（第Ⅱ章　第4節）は、九州大学大学院　比較社会文化研究科　基層構造講座の中橋孝博助教授にお願いした。

6．遺物は実測を飛野・水ノ江・秦が行い、写真は水ノ江・北岡伸一が撮影した。

7．遺構・遺物の挿入図の製図は、豊福弥生・原カヨ子・水ノ江・秦が行った。

8．本書で使用した方位は、新平面直角座標系のⅡ系に基づく座標北で行った。

9．本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅲ章を水ノ江、第Ⅱ章の第1・3節を秦、第2節を馬田、第Ⅳ章を飛野が分担した。

10．本書の各章の編集は担当者が行い、秦が全体をとりまとめた。

本 文 目 次

第Ⅰ章　はじめに …… 1

第１節　調査経過と調査組織 …… 1

第２節　位置と環境 …… 3

第Ⅱ章　久良々遺跡 …… 7

第１節　はじめに …… 7

第２節　北丘陵の調査 …… 8

１．北調査区の遺構と遺物 …… 8

１）掘立柱建物 …… 8

２）土壙 …… 22

３）Ｌ字状小溝 …… 24

２．小　結 …… 24

１）掘立柱建物について …… 24

２）土壙について …… 26

第３節　南丘陵の調査 …… 36

１．南調査区の遺構と遺物 …… 36

１）土壙墓 …… 36

２）土　壙 …… 38

３）その他の遺構と遺物 …… 40

２．小　結 …… 45

第４節　福岡県筑紫野市久良々遺跡出土の中世人骨 …… 50

第Ⅲ章　倉良遺跡

第１節　はじめに …… 55

第２節　発掘調査の記録 …… 56

１．調査の概要 …… 56

２．縄文時代の遺構と遺物 …… 56

3．弥生時代の遺構と遺物……61
4．古墳時代の遺構と遺物……77
5．近世の遺構と遺物……78
6．その他の遺物……85
第3節　まとめ……85

第Ⅳ章　天神田遺跡……91

第1節　はじめに……91
第2節　遺構と遺物……92
1．遺構……92
2．その他の遺物……94
第3節　おわりに……95

図　版　目　次

巻頭図版

図版1　1．久良々遺跡　全景（南西から）
2．同　北調査区掘立柱建物群（南東から）
図版2　1．倉良遺跡　東側斜面全景（南東から）
2．倉良・天神田遺跡　全景（北から）

久良々遺跡

図版1　1．久良々遺跡　全景（南西から）
2．遺跡から南方の倉良遺跡を望む
図版2　1．北調査区　全景（南東から）
2．南調査区　土壙群（北東から）
図版3　1．1・2・4号建物、5号土壙（西から）
2．3号建物（北西から）
図版4　1．5・10号・11号建物（南西から）
2．6～8号建物（東から）
図版5　1．9号建物（南東から）
2．1・2・5・10号建物（南西から）

図版６　１．12～14・16号建物（西から）
　　２．13・14・16号建物（北西から）
図版７　１．15号建物（南から）
　　２．16号建物（西から）
図版８　１．１号土壙（北東から）
　　２．２号土壙（北東から）
　　３．３・４号土壙（北西から）
　　４．５号土壙（北西から）
図版９　１．６号土壙（南から）
　　２．７号土壙（南から）
図版10　１．８号土壙（南から）
　　２．９号土壙（東から）
図版11　１．10号土壙（西から）
　　２．ピット30遺物出土状態（北から）
図版12　１．１号土壙墓（南西から）
　　２．２号土壙墓（北東から）
図版13　　土壙・ピット・表採遺物
図版14　　ピット出土遺物（ピット30・16・17・29）
図版15　　表採遺物①
図版16　１．表採遺物②（石臼）
　　２．調査区内所在の石碑

倉良遺跡

図版１　１．調査区全景（北から）
　　２．調査区全景（南東から）
図版２　１．西側斜面全景（１・２号墳丘　北から）
　　２．東側斜面全景〔甕棺墓・土壙墓群〕（南東から）
図版３　１．西側斜面全景〔土壙群〕（北西から）
　　２．１号土壙（北西から）
図版４　１．２号土壙（北から）
　　２．３号土壙（北西から）
図版５　１．４号土壙（北から）
　　２．５号土壙（北東から）

図版６　１．甕棺墓・土壙墓全景（南東から）
　　２．１号甕棺墓（南から）
図版７　１．２号甕棺墓検出状況（北東から）
　　２．２号甕棺墓（南から）
図版８　１．２号土壙墓土層断面（南西から）
　　２．２号土壙墓（南東から）
図版９　１．３号土壙墓（東から）
　　２．３号土壙墓木蓋痕（東から）
図版10　１．４号土壙墓土層断面（南西から）
　　２．４号土壙墓（南東から）
図版11　１．５号土壙墓土層断面（南から）
　　２．５号土壙墓（南東から）
図版12　１．６号土壙墓土層断面（南西から）
　　２．６号土壙墓（南東から）
図版13　１．７号土壙墓（南東から）
　　２．８号土壙墓（南西から）
図版14　１．９号土壙墓（南東から）
　　２．10号土壙墓（北から）
図版15　１．11号土壙墓（南東から）
　　２．13号土壙墓（東から）
図版16　１．12号土壙墓土層断面（南から）
　　２．12号土壙墓（東から）
図版17　１．１号土壙墓（東から）
　　２．14号土壙墓（南西から）
図版18　１．１号溝全景（東から）
　　２．１号溝土層断面（西から）
図版19　１．１号墳丘検出状況（東から）
　　２．１号墳丘調査風景（西から）
図版20　１．１号墳丘小礫出土状況（西から）
　　２．１号墳丘表土除去状況（南東から）
図版21　１．１号墳丘全景（北東から）
　　２．１号墳丘全景（北西から）
図版22　１．２号墳丘全景（北東から）

2．2号墳丘全景（北東から）
図版23　出土遺物　1
図版24　出土遺物　2

天神田遺跡

図版1　1．遠景（東上空から）
2．全景（東上空から）
図版2　1．溝状遺構土層（北から）
2．道路跡全景（東から）
図版3　1．道路跡土層1（東から）
2．道路跡土層1（東から）
図版4　1．道路跡土層2（東から）
2．道路跡縦断土層（南から）

挿　図　目　次

はじめに　　本文対照頁

第1図　筑紫野バイパス路線図（1/7,500）……2～3間折込
第2図　周辺遺跡分布図（1/50,000）……4～5間折込

久良々遺跡

第1図　久良々遺跡周辺地形図（1/2,000）……7
第2図　1号掘立柱建物実測図（1/60）……9
第3図　2号掘立柱建物実測図（1/60）……10
第4図　3号掘立柱建物実測図（1/60）……11
第5図　4号掘立柱建物実測図（1/60）……12
第6図　5・10号掘立柱建物実測図（1/60）……13
第7図　6～8号掘立柱建物実測図（1/60）……15
第8図　9号掘立柱建物実測図（1/60）……16
第9図　11号掘立柱建物実測図（1/60）……17
第10図　12・13号掘立柱建物実測図（1/60）……19
第11図　14・16号掘立柱建物実測図（1/60）……20

第12図　15号掘立柱建物実測図（1/60）……21
第13図　1～4号土壙実測図（1/40）……23
第14図　北調査区建物群モデル各期配置図（1/200）……27
第15図　1・2号土壙墓実測図（1/15）……37
第16図　1号土壙墓・5号土壙出土遺物実測図（1/3・1/6）……38
第17図　5～7号土壙実測図（1/40）……39
第18図　8～10号土壙実測図（1/40）……40
第19図　ピット30実測図（1/20）……41
第20図　ピット30出土遺物実測図（1/3・1/6）……41
第21図　ピット出土遺物実測図（1/3・1/6）……42
第22図　表採遺物実測図①（1/3）……43
第23図　表採遺物実測図②（1/6）……44
第24図　朝鮮半島の孔列文土器（1/6）……45
第25図　擬孔列文土器分類模式図……46
第26図　各地の擬孔列文土器（1/6）……47
第27図　擬孔列文土器分布図……48
第28図　組織痕土器・無文土器・擬無文土器分布図……48

倉良遺跡

第1図　土壙群配置図（1/200）……57
第2図　1・2号土壙実測図（1/30）……58
第3図　3号土壙実測図（1/30）……59
第4図　4・5号土壙実測図（1/30）……60
第5図　甕棺墓・土壙墓群配置図（1/100）……62
第6図　1・2号甕棺墓実測図（1/30）……63
第7図　1・2号甕棺墓実測図（1/8）……64
第8図　2・3号土壙墓実測図（1/30）……66
第9図　3～5号土壙墓（東から）……67
第10図　4・5号土壙墓実測図（1/30）……68
第11図　6号土壙墓実測図（1/30）……69
第12図　7・9号土壙墓実測図（1/30）……70
第13図　8号土壙墓実測図（1/30）……72
第14図　10号土壙墓実測図（1/30）……73

第15図　11号土壙墓実測図（1/30）……74
第16図　12・13号土壙墓実測図（1/30）……75
第17図　1・14号土壙墓実測図（1/30）……76
第18図　1号土壙墓出土遺物実測図（1/3）……77
第19図　1号溝土層断面実測図（1/30）……77
第20図　1号溝出土土器実測図（1/3）……77
第21図　1・2号墳丘および14号土壙墓配置図（1/400）……78
第22図　1号墳丘実測図（1/60）……79
第23図　1号墳丘出土土器実測図（1/3）……80
第24図　2号墳丘実測図（1/60）……81
第25図　2号墳丘出土土器実測図1（1/3）……82
第26図　2号墳丘出土土器実測図2（1/3）……83
第27図　土壙・ピット出土および表採遺物実測図（1～3は2/3，4～8は1/3）……84
第28図　土壙墓の形態別分類模式図……86
第29図　甕棺墓・土壙墓群形態分類別群構成模式図……87
第30図　西側斜面調査風景（北西から）……89

天神田遺跡

第1図　調査区全体図（1/300）……91
第2図　道路跡土層図（1/60）……92
第3図　溝状遺構土層図（1/60）……93
第4図　1号土壙実測図（1/30）……94
第5図　出土遺物実測図（2/3.1/3）……95

付　図　目　次

付図1　久良々遺跡北調査区遺構配置図（1/300）
付図2　久良々遺跡南調査区遺構配置図（1/300）
付図3　倉良遺跡遺構配置図（1/300）

表　目　次

表1　1号掘立柱建物計測表……28

表 2　2 号掘立柱建物計測表……28
表 3　3 号掘立柱建物計測表……29
表 4　4 号掘立柱建物計測表……29
表 5　5 号掘立柱建物計測表……30
表 6　6 号掘立柱建物計測表……30
表 7　7 号掘立柱建物計測表……31
表 8　8 号掘立柱建物計測表……31
表 9　9 号掘立柱建物計測表……32
表10　10号掘立柱建物計測表……32
表11　11号掘立柱建物計測表……33
表12　12号掘立柱建物計測表……33
表13　13号掘立柱建物計測表……34
表14　14号掘立柱建物計測表……34
表15　15号掘立柱建物計測表……35
表16　16号掘立柱建物計測表……35
表17　出土人骨一覧表……50
表18　大腿骨計測結果一覧表……51

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査経過と調査組織

一般国道３号線筑紫野バイパスは同福岡南バイパス（福岡市東区二又瀬～筑紫野市永岡19.08㎞）の後をうけ、昭和47年度から建設に関わる調査をはじめ、翌48年度から事業化した大規模なバイパスである。筑紫野市永岡から佐賀県三養基郡基山町白坂までの総延長4.3㎞は福岡市と久留米市のほぼ中間地帯に相当し、九州最大のベッドタウンである「筑紫野小郡ニュータウン」の中心地として、また一般国道200号線冷水バイパスとの合流地点として、さらには鳥栖筑紫野有料道路の起点として、極めて重要な位置関係にある。工事は昭和59年度に着手され、昭和62年度４月には筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間の延長2.04㎞を暫定２車線で供用を開始しており、残り筑紫野市永岡～原田間も平成７年度に供用開始予定となっている。

さて、この筑紫野バイパスの建設に先立ち、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所から福岡県教育庁指導第二部文化課に当該地の埋蔵文化財調査に関する依頼があり、文化課は14ヶ所（地点）の文化財包蔵推定地を昭和51年度以前に提示・回答した。そして、建設省福岡国道工事事務所との協議の結果、供用開始を優先させる筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間（第７～14地点）の調査を先行させることとなった。発掘調査は昭和56年度から59年度までの４カ年に亘って実施され、その成果は『一般国道３号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集　合の原遺跡』（佐々木隆彦編　福岡県教育委員会　1986）として報告されている。

第１～６地点（筑紫野市永岡～筑紫）の調査については平成２年度に始まり平成６年度をもって終了した。その所在地及び調査期間については下記の通りである。なお、これらの調査に先立ち、バイパス路線内にあった鉄塔の移転地区の調査が平成２年度５月に実施されている。

第１地点	諸田仮塚遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚および大字永岡字原 平成２年８月～平成３年４月
第２地点	仮塚南遺跡	筑紫野市大字諸田字仮塚 平成３年４月～平成３年11月
第３地点	久良々遺跡	筑紫野市大字筑紫字久良々 平成５年６月～平成５年10月
第４・５地点	倉良遺跡	筑紫野市大字筑紫字倉良・天神田 平成２年５月～平成４年５月

鉄塔移転地区	天神田遺跡	筑紫野市大字筑紫字天神田 平成2年5月～平成2年6月
第6地点	以来尺遺跡	筑紫野市大字筑紫字以来尺 平成4年5月～平成7年1月

このうち本書で報告するのは、第3地点（久良々遺跡）・第4地点（倉良遺跡）・鉄塔移転地区（天神田遺跡）の3遺跡である。なお、平成2・4・5年度と平成6年度の報告書作成に当たっての組織と関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成2年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度
事務所長	中垣　光弘	清水　英治	長谷川正和	長谷川正和
副所長	横溝　敏治	高場　正富	中空　　進	中空　　進
副所長	岩田　秀人	宮崎　鴨隆	宮崎　鴨隆	中馬　正昭
建設監督官	梅田　正信	野鶴　博任	野鶴　博任	野鶴　博任
建設監督官	山田　茂利	岡山　一則	平川　澄雄	平川　澄雄
調査第二課長	並河　良治	尾林　一宇	西原　広寿	西原　広寿
調査係長	後藤　昌隆	島　　義博	島　　義博	芹口　臣也
建設技官	竹下　卓宏	松木　厚廣	神崎　博章	桜井　敏郎
工務課長	肥後橋譲治	久原　義宣	久原　義宣	渕　　幸一
工務第一係長	笹山　勝之	田中　秀明	田中　秀明	逆瀬川方久
工務第三係長	小島　一郎	逆瀬川方久	逆瀬川方久	田口　　仁

福岡県教育委員会

総括				
教育長	御手洗　康	光安　常喜	光安　常喜	光安　常喜
教育次長	浜地　甫伯	月森清三郎	樋口　修資	松枝　　功
指導第二部長	月森清三郎	松枝　　功	丸林　茂夫	丸林　茂夫
文化課長	六本木聖久	森山　良一	森山　良一	松尾　正俊
参事兼文化財保護室長		柳田　康雄	柳田　康雄	柳田　康雄
課長補佐	安野　義勝	石川　元彬	清水　圭輔	清水　圭輔



①諸田仮塚遺跡　②仮塚南遺跡　③久良々遺跡　④倉良遺跡　⑤天神田遺跡　⑥以来尺遺跡

第 1 図　筑紫野バイパス路線図（1/7,500）

技術補佐	石松　好雄			
参事補佐	柳田康雄	井上　裕弘	井上　裕弘	井上　裕弘
	井上　裕弘	副島　邦弘	橋口　達也	橋口　達也
	副島　邦弘	佐々木隆彦	高橋　　章	馬田　稔弘
				池辺　元明
庶務				
管理係長	池原　脩二	毛屋　　信	毛屋　　信	杉光　　誠
技術主査	澤田　俊夫	富田　浩一	富田　浩一	安丸　重喜
調査・整理報告				
参事補佐				馬田　稔弘
技術主査			馬田　稔弘	
主任技師	飛野　博文			飛野　博文
				水ノ江和同
技師		水ノ江和同	秦　　憲二	秦　憲　二
文化財専門員		日高　正幸		

第2節　遺跡の位置と環境

遺跡の位置

久良々遺跡・倉良遺跡・天神田遺跡は福岡県筑紫野市大字筑紫字久良々・倉良・天神田に所在する。筑紫野市北部は基山と宮地岳とこれらに挟まれた狭い平野で構成されている。福岡平野と筑紫平野がこの地域で接しているため古代から肥前地方と筑紫地方をつなぐ交通の要衝であった。江戸時代には長崎街道・日田街道・薩摩街道・太宰府天満宮参詣道が合流しており街道の分岐点であったといえる。そのため福岡市のベッドタウンとして早くから開発が行われており数多くの遺跡が発見されている。

以下代表的な遺跡を時代ごとに挙げる。

周辺の遺跡

旧石器時代の遺跡としては近年調査された筑紫野市上原田遺跡や宗原遺跡でナイフ形石器や台形石器・尖頭器などが出土したほか、多くの石器が採集された筑紫野市常松遺跡・峠田遺跡が挙げられる。

縄文時代の遺跡は少なく夜須町三並柿ノ上遺跡Ａ地点で後期の集落が発見され、梶原遺跡では晩期の埋甕が検出されている。

弥生時代には福岡平野に近いことから稲作の定着も早く、特に小郡市の津古・三国丘陵に多くの前期集落が形成された。中期後半になると永岡遺跡のような共同墓地以外に、鏡や銅剣・鉄戈など豊富な副葬品をもつ二日市峰畑遺跡や東小田峯遺跡や隈・西小田遺跡などの首長墓が出現しており、特定集団と一定の領域を持ったクニが存在していたことをうかがわせる。また隈・西小田遺跡からは一括埋納された23本の銅戈が発見されており、大規模な祭祀も行われていたようだ。

青銅器の生産も活発に行われていたらしく鋳型の出土例が増加している。夜須町ヒルハタ遺跡から出土した鏡・銅鏃・十字形銅器など5面の使用面を持つ鋳型をはじめ、夜須町宮の上遺跡出土の有鉤銅釧の鋳型や筑紫野市仮塚南遺跡・夜須町中原前遺跡・小郡市津古遺跡出土の銅戈の鋳型などが発見されており、春日市周辺に次いで多く出土する地域である。

古墳時代では庄内期の津古生掛古墳（全長33m前方後円墳）や三角縁神獣鏡を出土した原口古墳（全長約80m前方後円墳）などがあり、早くからこの地域で豪族が出現していたことを示している。後期古墳は国指定となっている装飾古墳の五郎山古墳に代表される。

奈良時代においても筑紫野市御笠地区遺跡A地点が蘆城駅家に比定されるほか、夜須町八並遺跡の大型建物があり、公的機関の存在がうかがわれる。また、延喜式に記載されている筑紫神社が所在しており、古代より政治的にも宗教的にも重要な地域だったようである。

中世では筑紫神社の宮司出身ともいわれる有力国人筑紫氏の根拠地となっており、筑紫小学校前の矢倉遺跡は居館址に比定されている。また筑紫神社の北に隣接する丘陵に位置する以来尺遺跡からも居館址が発見されている。

このように旧石器時代から生活の場として利用され、早くから政治権力が成長したことはこの地域の立地条件の良さからだけでなく、交通の要衝としての地理的環境に要因があると思われる。

遺跡の立地

遺跡はこの平野に面する台地の後背丘陵に位置している。丘陵は基山と宝満山の裾に発達した八ツ手状の山麓階であり、湧水の浸食によって深い谷が丘陵間を複雑に走り隔絶された丘陵を形成している。

久良々遺跡は独立丘陵の東端、倉良遺跡は丘陵の頂部、天神田遺跡はその裾部に立地している。標高は久良々遺跡が45～55m、倉良遺跡は55～60mで両者とも谷との比高差は20～30mに達し平坦面は狭いことから、前面に展開する台地上の集落に所属する墓地や狩猟採集の場として利用されたと考えられる。同じような立地条件を持つ東方のちくし台団地の丘陵や北方のむさしヶ丘団地の丘陵にはやはり群集墳や中世の墳墓が存在している。また、ちくし台団地からは弥生前期末の集落も発見されている。



第 2 図　周辺遺跡分布図 (1/50,000)

1 桶田山遺跡
2 大門遺跡
3 武蔵寺跡
4 道場山遺跡
5 原口遺跡
6 八隈遺跡
7 鷺田山遺跡
8 畑添遺跡
9 山の口遺跡
10扇祇古墳群
11ヨロイ田遺跡
12立明寺古墳
13古賀古墳群
14萩原遺跡
15萩原古墳群
16大曲川遺跡
17野黒坂遺跡
18御笠地区遺跡Ｅ地点
19御笠地区遺跡Ｆ地点
20御笠地区遺跡Ｇ地点
21阿志岐古墳群
22シメノグチ遺跡
23脇道遺跡
24峠山遺跡
25老松神社古墳
26天山古墳群
27鞭掛遺跡
28日焼遺跡
29殿様塚古墳群
30筑前山家宿跡
31山家地区遺跡
32大島遺跡
33山家人形原遺跡
34浮殿遺跡
35中島遺跡
36池田遺跡
37池田８号墳
38池田９号墳
39池田古墳群
40永岡遺跡
41常松遺跡
42大牟田西遺跡
43大牟田古墳群
44仮塚古墳群
45矢倉遺跡
46名越古墳群
47兄弟塚古墳群
48薬水古墳群
49前畑遺跡
50天神裏山遺跡
51諸田仮塚遺跡
52仮塚南遺跡
53**久良々遺跡**
54**倉良遺跡**
55**天神田遺跡**
56以来尺遺跡
57上屋敷遺跡
58筑紫神社
59前小原遺跡
60平遺跡
61合ノ原遺跡
62国指定史跡
　五郎山古墳
63筑前原田宿跡
64上原田遺跡
65真竹遺跡
66不別当古墳群
67大振山古墳群
68隈・西小田遺跡７地点
69池ノ上遺跡
70橋詰遺跡
71平原遺跡
72橋詰遺跡
73天神遺跡
74西小田遺跡Ａ地点
75西小田遺跡Ｂ地点
76隈・西小田遺跡２地点
77隈・西小田遺跡３地点
78隈・西小田遺跡13地点
79木那野古墳群
80隈・西小田窯跡
81津古牟田遺跡Ⅰ
82津古牟田遺跡Ⅱ
83津古片曽葉遺跡
84津古東宮原遺跡
85隈・西小田遺跡６地点
86津古空前遺跡
87津古内畑遺跡
88津古脇田遺跡
89津古１号墳
90津古２号墳
91津古３号墳
92津古遺跡Ⅰ
93津古土取遺跡
94津古生掛遺跡
95津古生掛古墳
96津古中勅遺跡
97三国ノ鼻遺跡
98三国ノ鼻１号墳
99横隈北田遺跡
100横隈井ノ浦遺跡
101横隈鍋倉遺跡
103横隈狐塚遺跡
104横隈山遺跡
105三沢東古賀遺跡
106三沢京江ヶ浦遺跡
107三沢遺跡
108みくにの東遺跡
109三沢蓬ヶ浦遺跡
110北牟田遺跡
111三沢種畜場遺跡
112ハサコの宮遺跡
113ハサコの宮５号墳
114松尾口遺跡
115三沢一ノ口遺跡
116鈴隈古墳群
117北松尾口遺跡
118立石古墳群
119上田町古墳群
120永浦Ａ遺跡
121永浦Ｂ遺跡
122永浦Ｃ遺跡
123勝負坂Ａ遺跡
124勝負坂Ｂ遺跡
125勝負坂Ｃ遺跡
126勝負坂Ｄ遺跡
127牟田々遺跡
128三沢栗原・上棚田遺跡
129三沢栗原遺跡
130宮浦遺跡
131西中隈遺跡
132北内畑遺跡

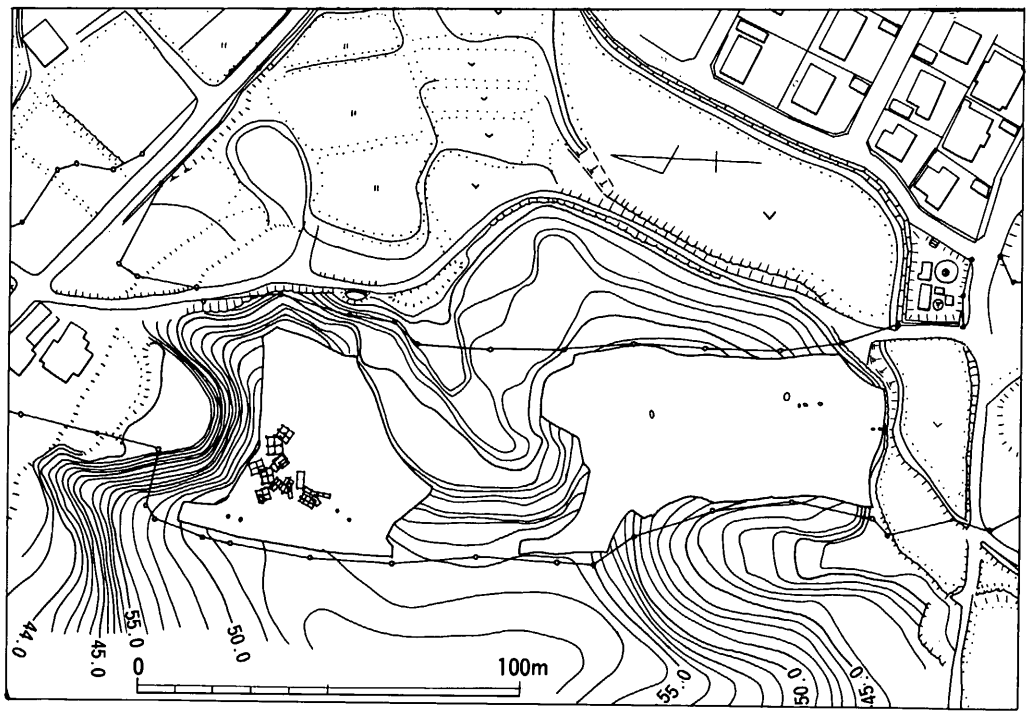
133三沢水島遺跡
134三沢畝道遺跡
135三沢古賀遺跡
136三国小学校遺跡
137みくに保育所内遺跡
138三沢前沢遺跡
139力武宮脇遺跡
140力武宮ノ前遺跡
141大保遺跡群
142干潟向畦ヶ浦遺跡
143干潟遺跡
144東辻古墳
145片曽利古墳
146干潟遺跡Ⅰ
147三京塚古墳
148干潟下屋敷遺跡
149干潟遺跡Ⅱ
150乙隈城址
151花立山城址
152花立山南麓窯跡群
153花立山古墳群
154小郡若山遺跡
155黒岩神社古墳
156花聳古墳群
157吹上南立石遺跡
158吹上赤土遺跡
159下鶴古墳
160井上北内原遺跡
161井上薬師堂遺跡
162井上廃寺
163大板井遺跡
164国指定史跡
小郡官衙遺跡
165坂井田遺跡
166八ヶ坪遺跡
167菊ヶ元遺跡
168宮ノ上遺跡
169ヒラキ遺跡
170坂の下遺跡
171車路遺跡
172茶屋原遺跡
173杓野遺跡
174下杓野遺跡
175竹の子遺跡
176三国手遺跡
177松延遺跡
178切杭遺跡
179深町遺跡
180松菜田遺跡
181畑田遺跡
182竹崎遺跡
183浦ノ原遺跡
184中原遺跡
185廬木薮遺跡
186迫額遺跡
187中原前遺跡
188出口遺跡
189東小田峯遺跡
190夜須中学校遺跡
191塔ノ本遺跡
192七板Ａ遺跡
193向福島遺跡
194七板Ｂ遺跡
195宗原遺跡
196大木Ｂ遺跡
197大木Ａ遺跡
198池田遺跡
199黒水遺跡
200谷頭遺跡
201ヒルハタ遺跡
202立野遺跡
203鷲野塚１号墳
204吹田・小路田遺跡
205松崎遺跡
206惣利遺跡
207横枕遺跡
208吹田古墳群
209久間遺跡
210森原古墳群
211牧ノ谷古墳群
212乙隈天道町遺跡
213金山遺跡
214松尾遺跡
215城山遺跡群
216焼ノ峠遺跡
217特別史跡　基肄城跡
218とうれぎ土塁
219関屋土塁
220城ノ上遺跡
221伊勢山遺跡
222千塔山遺跡
223長ノ原遺跡
224上野遺跡
225今町甕棺遺跡
226八ッ並遺跡
227広田遺跡
228神山古墳群
229梅坂炭化米遺跡
230平原遺跡
231大久保遺跡
232柚比梅坂遺跡
233うつろ坂遺跡
234田代公園遺跡
235永田古墳群
236前田遺跡
237柚比本村遺跡
238大平古墳群

第Ⅱ章　久良々遺跡

第Ⅱ章　久良々遺跡

第１節　はじめに

久良々遺跡は基山の東北山麓に群在する独立丘陵群に位置している。遺跡の所在する丘陵は標高約60ｍの頂部に広い平坦面を持つ独立丘陵で、調査区はこの丘陵の東端に突出する２つの斜面に位置している。その間に大きな谷が入っているため、ここでは便宜上２つの斜面を北丘陵，南丘陵と呼び別個に報告する。



第 1 図　久良々遺跡周辺地形図（1/2,000）

第２節　北丘陵の調査

北丘陵部の調査区（以下、北調査区と略す）の現況は、孟宗竹林部と真竹林部で、その大略を付図１で示すと、４号土壙－９号掘立柱建物以北が孟宗竹、同以南の急傾斜面部が真竹であった。

孟宗林部のなかで、１号土壙から４－９号建物以北はほぼ旧地形を残し、同以南の平坦面（標高56.82～同56.0ｍ）～緩傾斜面（56.0～54.50ｍ）部も、旧地形を利用した畑地開墾の影響をうけてはいるが、大略の地勢の変化はあまりないようである。

付図１は、上記の畑地耕作土（厚さ約20㎝）や孟宗竹根、および南側急傾斜面部の真竹根・表土を重機で除去後に測量した地形図である。

なお、北調査区は前述の平坦面～急傾斜面部にかけては、図版２－１に示すように、重機でも除去できない径約80㎝前後の楠木が随所に所在しており、畑地放棄の時期は相当古いものと思われ、耕作土中からは江戸期の染付け茶埦などが出土した。

１．北調査区の遺構と遺物

北調査区では、掘立柱建物16棟・土壙５基・Ｌ字状小溝１条などを確認し、多数の小ピット群などを検出した。

しかし、遺構からの出土遺物は、１号建物の柱穴Ｐ５から土器細片が１点、５号土壙から若干の土器片のみで、その他には付図１に番号を付した13個の小ピットからの土器細片～小片若干例だけである。

１）掘立柱建物

柱穴配置と柱穴埋土の状態から、掘立柱建物として調査時に確認したものは１～16号建物の計16棟である（付図１）。

１号掘立柱建物（図版３、第２図、表１）

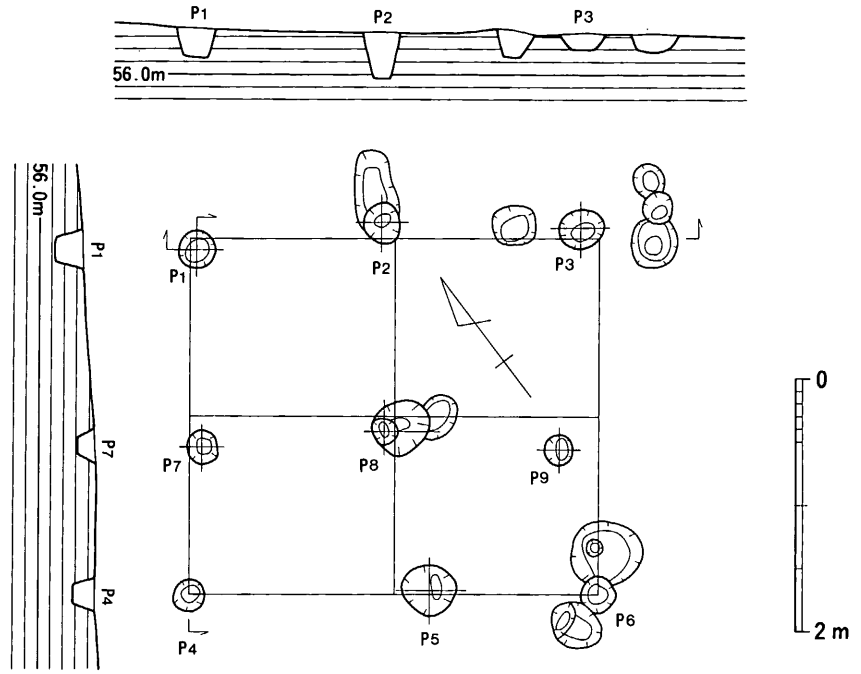
建物規模は２間×２間で、２号建物とは柱穴による切り合い関係や平面プランによる重複はないが、Ｐ３と２号建物のＰ１が約20㎝と近接するため、同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ１－Ｐ４がほぼ直交する。

桁行は316㎝で、Ｐ７・９はＰ１－Ｐ４・Ｐ３－Ｐ６柱列のそれぞれ内側に配す。

梁行柱間は、北半部の柱間Ａが160㎝・南半部の柱間Ｂが120㎝で、Ｐ７～９は梁行283㎝×1/2の南側の柱配置をとる。

また、柱穴からの出土遺物は、Ｐ５から弥生後期中頃の複合口縁細片のみである。



第 2 図　1号掘立柱建物実測図（1/60）

なお、Ｐ５とＰ８のほぼ中間の小ピットＰ29（付図１）からは、弥生後期前半の底部片が１点出土している。

２号掘立柱建物（図版３、第３図、表２）

建物規模は２間×２間で、３号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、平面プランで重複する。

また、１・５号建物とは平面プランで約40㎝・20㎝とそれぞれ近接するため、同時併存しない。

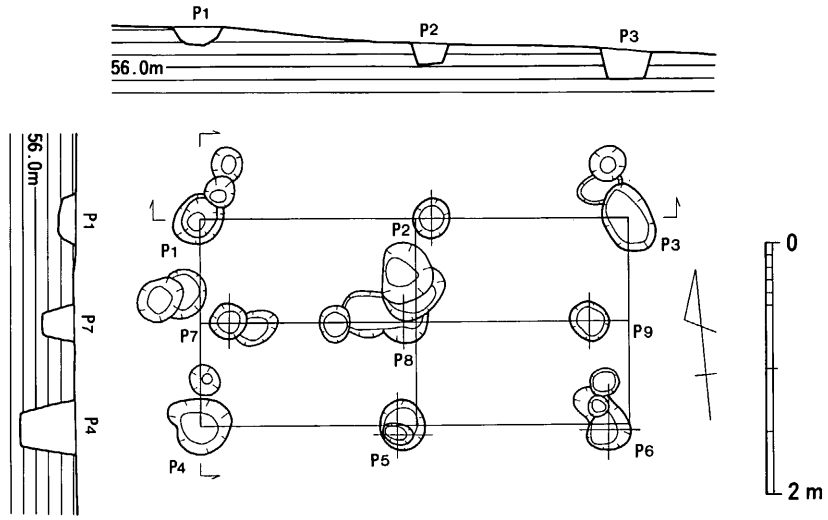
平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ１－Ｐ４が直交する。

桁行は332㎝で、梁行166㎝×２に一致する。

桁行柱間は、北側柱列ではＰ２が桁行332㎝×1/2に東接し、南側柱列ではＰ５が同様に西接する。

また、南・北側柱列の桁行柱間Ａは166㎝であるが、Ｐ７～９柱列の桁行柱間Ｂは143㎝と小さく、Ｐ７・９は西・東側柱列より共に内側の柱配置をとる。

梁行柱間は、いずれも84㎝前後でほぼ一致し、Ｐ７～９柱列はほとんど直線で棟下に位置す



第 3 図　2号掘立柱建物実測図（1/60）

る。

以上のように、きわめて整然とした柱配置の建物である。

なお、柱穴からの出土遺物はない。

3号掘立柱建物（図版3、第4図、表4）

建物規模は2間×2間で、2・4・6号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、平面プランで重複するため、同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ１－Ｐ４がほぼ直交する。

桁行柱間は、西半部の柱間Ａが200㎝・東半部の柱間Ｂが159㎝で、桁行356㎝×1/2から東寄りにＰ２・５・８のいずれもが位置する。

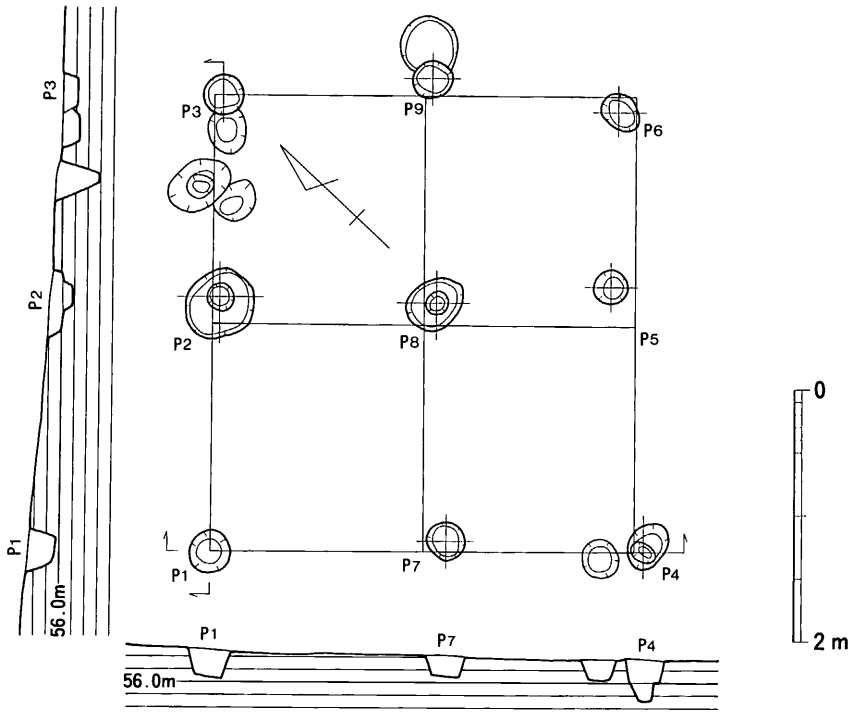
梁行柱間は、北半部の柱間Ａが175㎝・南半部の柱間Ｂが148㎝で、梁行330㎝×1/2にほとんど南側でＰ７～９が接する。

なお、柱穴からの出土遺物はない。

4号掘立柱建物（図版3、第5図、表4）

建物規模は2間×2間で、北側のＰ１・２・７については、バイパス建設路線内ではあるが未買収地であるため、確認することができなかった。

3号建物とは、柱穴による切り合い関係はないが、平面プランが重複するので、同時併存しない。



第 4 図　3号掘立柱建物実測図（1/60）

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ４－Ｐ６とＰ３－Ｐ６がほぼ直交する。

桁行柱間は、未確認のＰ２もＰ５・８同様に桁行387㎝×1/2の東側に位置するものと考えられる。

梁行柱間は、未確認のＰ７もＰ９同様に、Ｐ１－４柱列西側に位置するものと思われるが、３号建物のＰ７例のような柱配置もあるため、断定はできない。

なお、柱穴からの出土遺物はない。

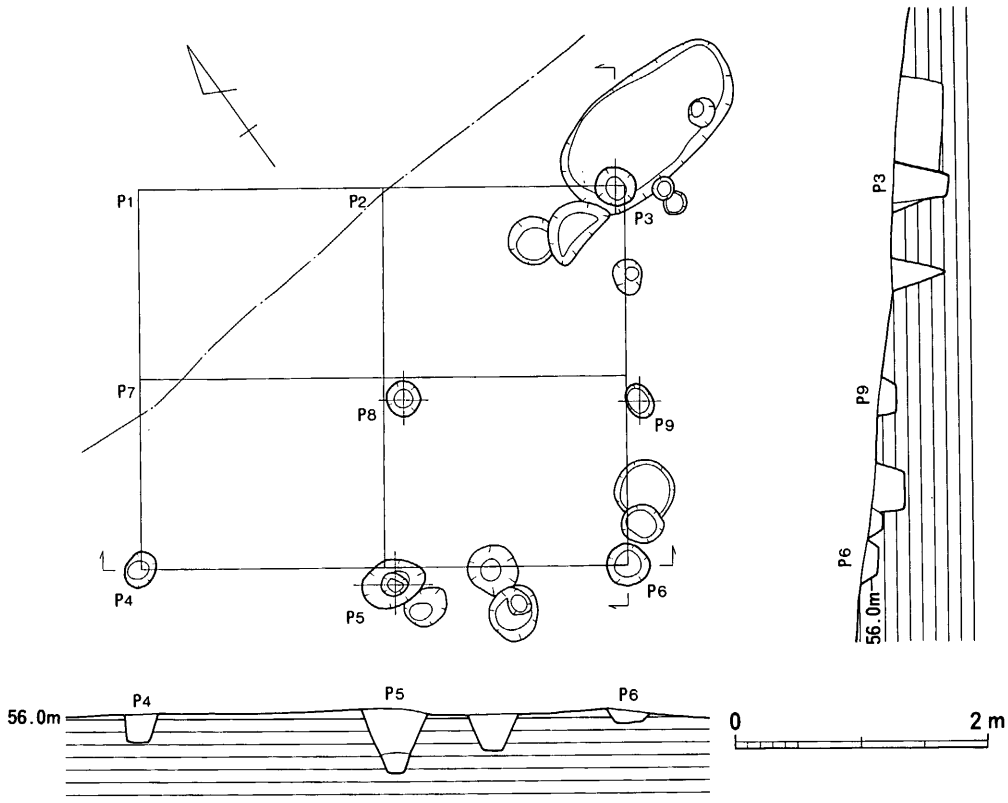
５号掘立柱建物（図版４、第６図、表５）

建物規模は１間×２間で、Ｐ４と10号建物のＰ２との柱穴による切り合い関係はないが、平面プランで重複し、同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ４－Ｐ６がほとんど平行し、後述する棟持柱Ｐ７・９を配す。

桁行柱間は、北側柱列のＰ２・南側柱列のＰ５共に、桁行中心の西側に配す。

梁行柱間は、Ｐ２－Ｐ３間が他より小さく、Ｐ２はＰ１－Ｐ３軸の南側・Ｐ５はＰ４－Ｐ６軸の北側に、共にほぼ接する柱配置である。



第 5 図　4 号掘立柱建物実測図（1/60）

棟持柱Ｐ７－Ｐ９間は472cmを測り、桁行平均は367cmで、（472cm－367cm）×1/2＝52.5cmから、Ｐ７・９は建物平面プラン外に平均52.5cmの位置に配されている。

なお、Ｐ８も棟持柱とすべきか。

柱穴からの出土遺物はない。

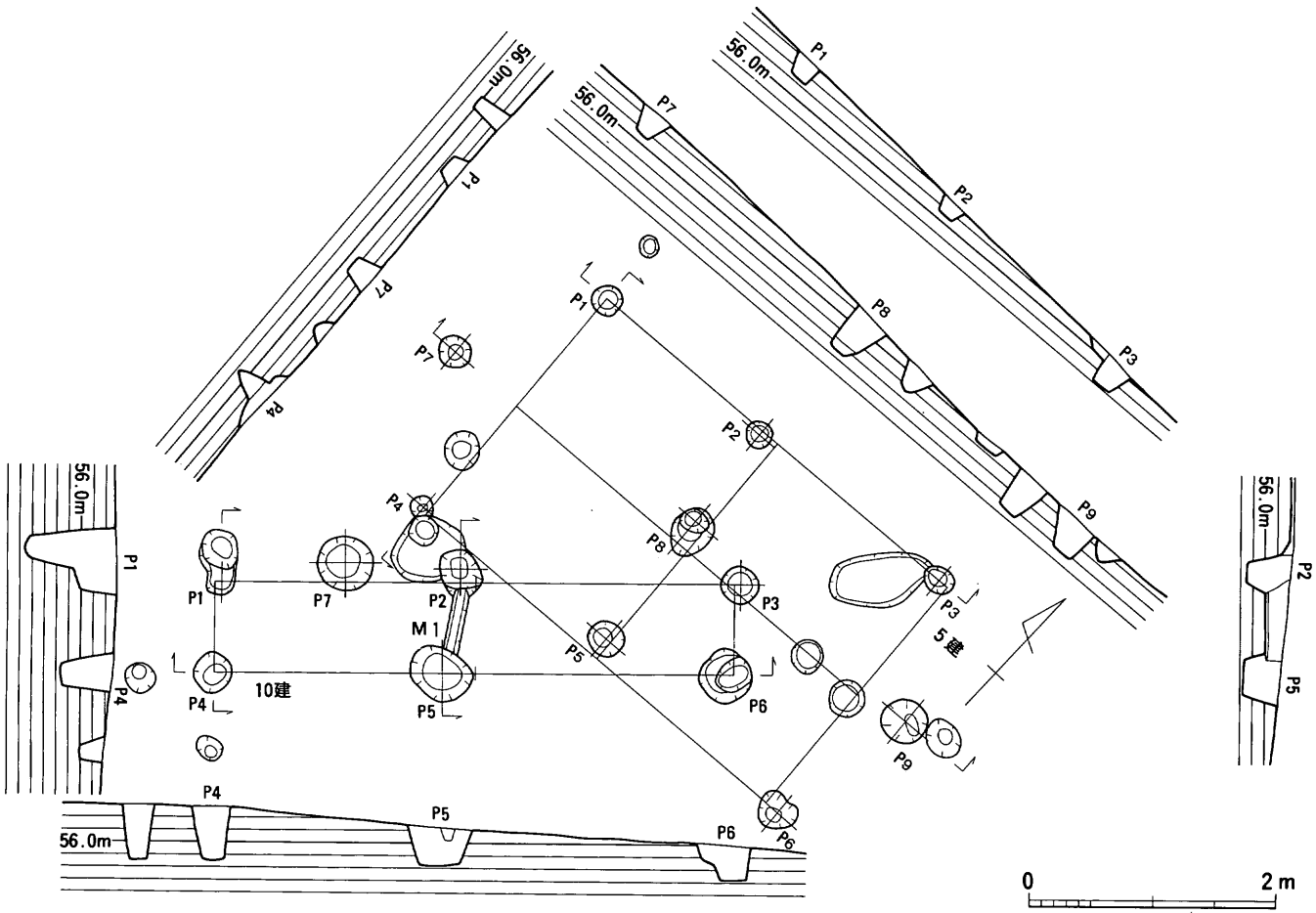
6 号掘立柱建物（図版４、第７図、表６）

建物規模は２間×３間で、Ｐ７・10が７号建物のＰ５・７にそれぞれ切られるので、６号建物が古い。

なお、Ｐ４と９号建物のＰ４は重複するが、柱穴による新旧関係は確認できなかった。

また、８号建物とは柱穴による切り合い関係にはないが、平面プランで重複するため、６～９号建物は同時併存しない。

平面プランは、Ｐ１・４・５・８中心を結ぶ線は若干直交しないが、北側柱列のＰ１－Ｐ４と南側柱列Ｐ５－Ｐ８を結ぶ線はほぼ平行する。



第 6 図　5・10号掘立柱建物実測図（1/60）

なお、西側柱列外でＰ13・東側柱列外でＰ14の棟持柱を整然と配す。

桁行は445㎝で、11号建物の448㎝とほとんど一致する。

梁行は215㎝で、７号建物と一致する。

また、梁行柱間は、梁行215㎝×1/2にＰ９が近接するＰ13と共に南接し、Ｐ12が近接するＰ14と共に北接する整然とした柱配置をとり、７号建物のＰ７・９柱配置と類似する。

なお、柱穴からの出土遺物はないが、Ｐ14東側の小ピットＰ34（付図１）から、縄文晩期中頃の浅鉢底部片が出土している。

７号掘立柱建物（図版４、第７図、表７）

建物規模は２間×２間で、Ｐ５・７が６号建物のＰ７・10をそれぞれ切るので、７号建物が新しい。

また、８・９号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、８号建物とは平面プランで重複し、９号建物のＰ４とは近接するため、６～９号建物は同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ３－Ｐ６がほとんど直交する。

桁行柱間は、北側柱列のＰ２・南側柱列のＰ５が桁行325㎝×1/2にＰ８と共にほぼ東接する。

なお、柱間ＡのＰ７－Ｐ９は362㎝で桁行325㎝より37㎝大きく、Ｐ７・Ｐ９は共に西・東側柱列外側に位置し、前述した６号建物のＰ13・14同様の柱配置をとる。

梁行柱間は、梁行柱間Ｂがほとんど一致し、梁行215㎝×1/2にＰ７は南接・Ｐ９は北接する柱配置をとる。

８号掘立柱建物（図版４、第７図、表８）

建物規模は１間×２間で、６・７号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、３棟は平面プランで重複し、同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３と各Ｐ１－Ｐ４・Ｐ３－Ｐ６がほぼ直交する。

桁行柱間は、南・北両柱列共に、Ｐ２・５が桁行233㎝×1/2の西側にほとんど接した柱穴配置をとる。

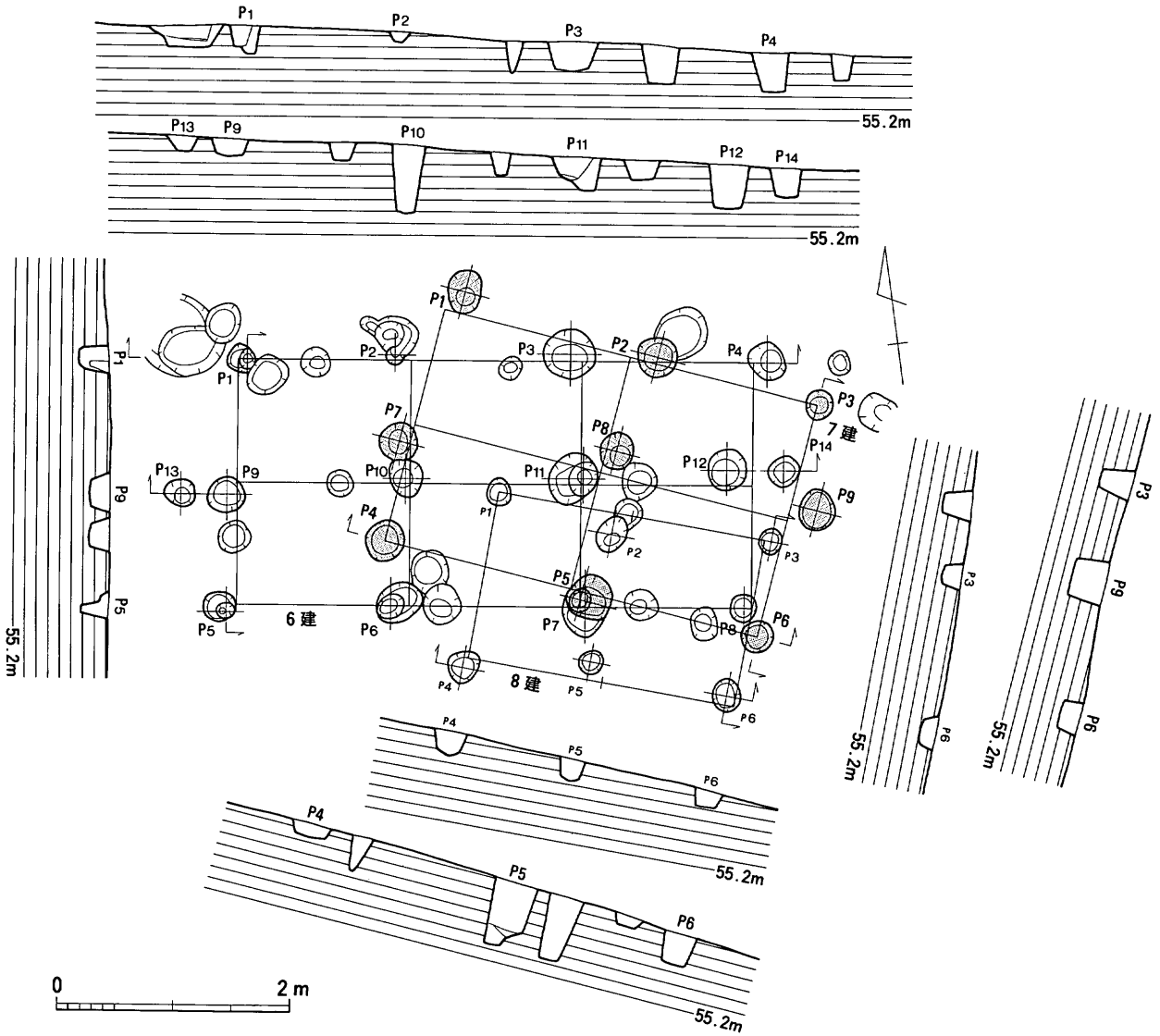
梁行柱間は、Ｐ２－Ｐ５間が110㎝で梁行平均145㎝より小さく、Ｐ２・５を共にＰ１－Ｐ３・Ｐ４－Ｐ６柱列内側に配す。

なお、柱穴からの出土遺物はない。

９号掘立柱建物（図版５、第８図、表９）

建物規模は２間×２間で、Ｐ９が15号建物のＰ１に切られるため、９号建物が古い。

なお、Ｐ４と６号建物のＰ４も重複するが、新旧関係は確認できなかった。



第 7 図　6～8号掘立柱建物実測図（1/60）

また、７号建物とは柱穴による切り合い関係にはないが、平面プランで重複するため、６・７・９・15号建物は同時存在しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ３－Ｐ６が直交し、同様にＰ１－Ｐ４ともほぼ直交する。

また、同様にＰ４－Ｐ６とＰ１－Ｐ４・Ｐ３－Ｐ６もほぼ直交するなど、整然とした柱配置をとる。

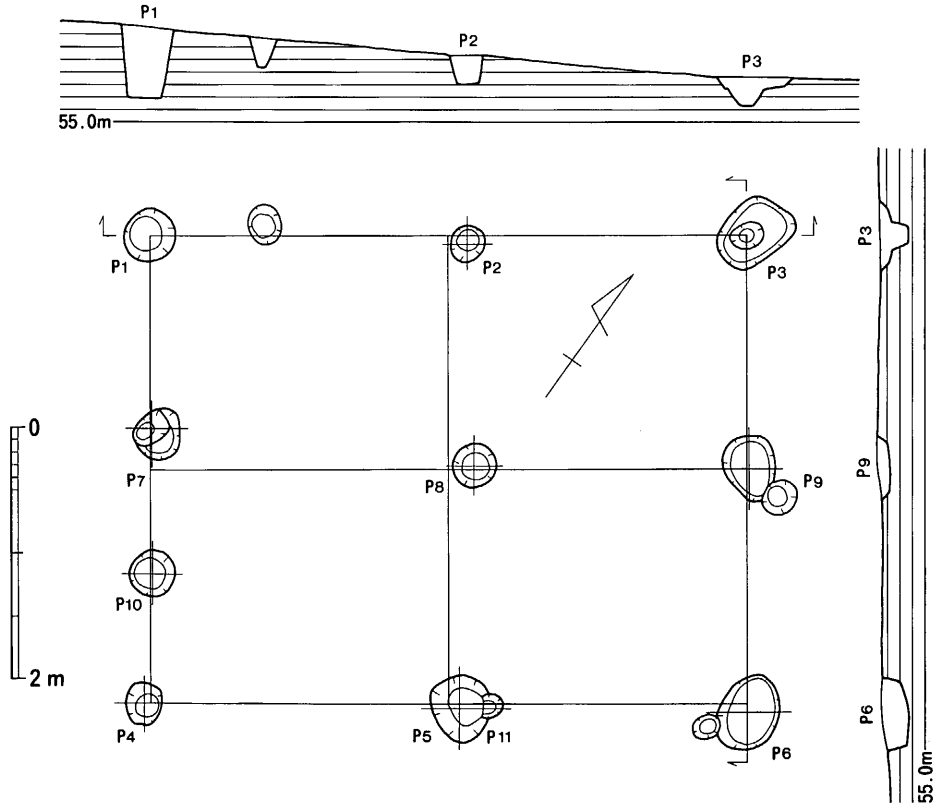
桁行柱間は、柱間Ａが253㎝・柱間Ｂが222㎝で、Ｐ２・８は桁行477㎝×1/2の東側でほぼ接し、Ｐ５も若干東寄りの柱穴配置である。

梁行柱間は、Ｐ９が梁行375㎝×1/2直下に・Ｐ８もほぼ同直下に位置するが、Ｐ７は直下から北に離れて位置する。

このことは、Ｐ７－Ｐ４間の柱間を若干広く取り、この柱間の中央部にＰ10を配して、妻入りとしたためと考えられる。

また、Ｐ５に東接して径約20㎝の小柱穴Ｐ11を検出し、このＰ11は高床部を受ける柱として配されたものと思われるが、他の柱穴部では確認できていない。

なお、柱穴からの出土遺物はない。



第 8 図　9号掘立柱建物実測図（1/60）

10号掘立柱建物（図版５、第６図、表10）

建物規模は１間×２間で、Ｐ２と５号建物のＰ４との柱穴による切り合い関係はないが、平面プランで重複し、同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ４－Ｐ６が平行すると共に、同様に結ぶＰ１－Ｐ４とＰ３－Ｐ６が共にほぼ直交するなどＰ２・Ｐ３を含めて整然とした柱穴配置をとり、後述するように、Ｐ２－Ｐ５間に小溝状遺構Ｍ１を配す。

桁行柱間は、北側柱列のＰ２・南側柱列Ｐ５共に、桁行中心の西側に位置する。

梁行柱間は、Ｐ５中心は南側柱列軸下にあるが、Ｐ２－Ｐ５間が85㎝で梁行73㎝よりも大きく、Ｐ２は北側柱列Ｐ１－Ｐ３より若干北側に位置し、Ｐ５の径は他よりも大きいことから、Ｐ５での柱の位置も、13号建物同様に南側柱列Ｐ３－Ｐ５を結ぶ線より若干南側に配したものと考えられる。

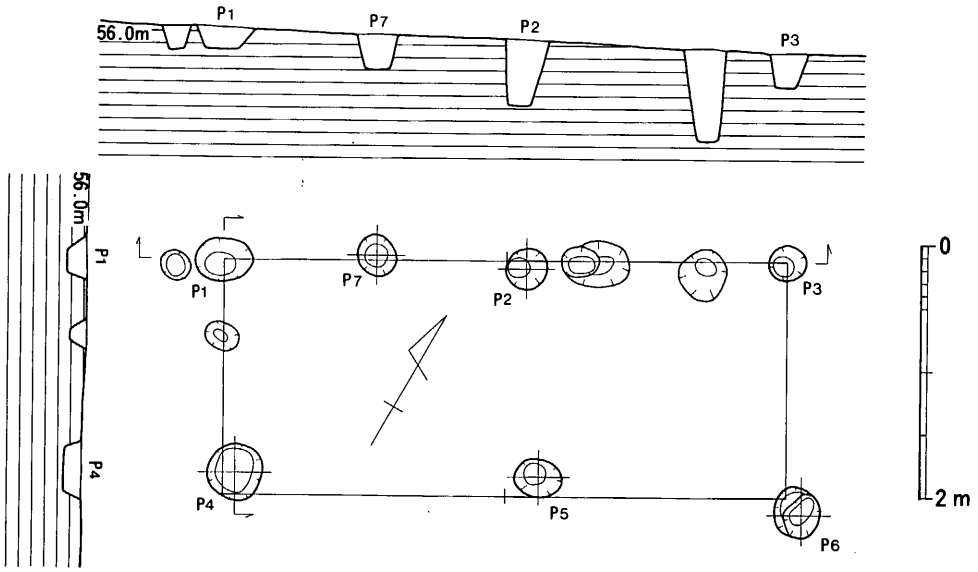
小溝状遺構Ｍ１は、Ｐ13・16号建物同様にＰ２－Ｐ５間に配され、幅12㎝・深さ10㎝を測り、Ｐ２・Ｐ５の深さ74㎝・71㎝よりも浅い。

なお、北側桁行には、Ｐ１－Ｐ２間のほぼ中央部にＰ７が検出されており、11号建物同様に、あるいは平入りの建物となるものかも知れない。

また、柱穴からの出土遺物はない。

11号掘立柱建物（図版４、第９図、表11）

建物規模は１間×２間で、13号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、Ｐ４と13号建物



第 9 図　11号掘立柱建物実測図（1/60）

との距離が約20㎝と近接するので、同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ１－Ｐ４・Ｐ３－Ｐ６がほぼ直交する。

桁行柱間は、南・北側両柱列共にＰ２・５が桁行448㎝×1/2の東側に近接した柱穴配置をとる。

梁行柱間は、Ｐ３－Ｐ６間がＰ１－Ｐ４間やＰ２－Ｐ５間よりも若干大きいが、南側柱列を図示したように結んで11号建物プランとした。

なお、北側桁行には、Ｐ１－Ｐ２間のほぼ中央部にＰ７が検出されており、あるいは平入りの建物となるものかも知れない。

また、柱穴からの出土遺物はない。

12号掘立柱建物（図版６、第10図、表12）

建物規模は２間×３間で、Ｐ３が14号建物のＰ４から切られるので、12号建物の方が古い。

また、13号建物とは柱穴による切り合い関係はなく、主軸や桁行規模がほぼ等しいことなどから近接する時期と思われるが、12号建物の東側柱列と13号建物の西側柱列間が約60㎝と隣接しているので、同時併存ではなく、時期的に前後するものと考えられる。

平面プランは、Ｐ１・４・５・８の各隅柱穴中心を結ぶ線が若干平行四辺形を呈し、桁行柱間（Ａ～Ｃ）・梁行柱間（Ａ・Ｂ）共に等間ではない。

桁行柱間は、桁行385㎝×1/3下にほぼ配されているのはＰ３－Ｐ７柱列で、Ｐ２－Ｐ６柱列は不整列である。

しかし、Ｐ５－Ｐ６間（122㎝）とＰ７－Ｐ８間（115㎝）はほぼ等しく、Ｐ６－Ｐ７間のＰ13は桁行385㎝×1/2近くに位置することから、平入りとしたものか。

梁行柱間は、東側の柱間が139㎝で西側の104㎝より大きく、Ｐ９－Ｐ12柱列はＰ10を除きすべて梁行243㎝×1/2に西側でほとんど接する柱配置をとる。

なお、柱穴からの出土遺物はない。

13号掘立柱建物（図版６、第10図、表13）

建物規模は１間×２間で、14・16号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、平面プランで重複し、隣接する12号建物とも既述のように同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ４－Ｐ６柱列が平行で、後述するように、Ｐ２－Ｐ３間に小溝状遺構Ｍ１を配す。

桁行柱間は、北側柱列ではＰ２が桁行390㎝×1/2より若干西寄りに位置し、南側柱列ではＰ５が同様に東寄りに位置し、14号建物と類似した柱穴配置をとる。

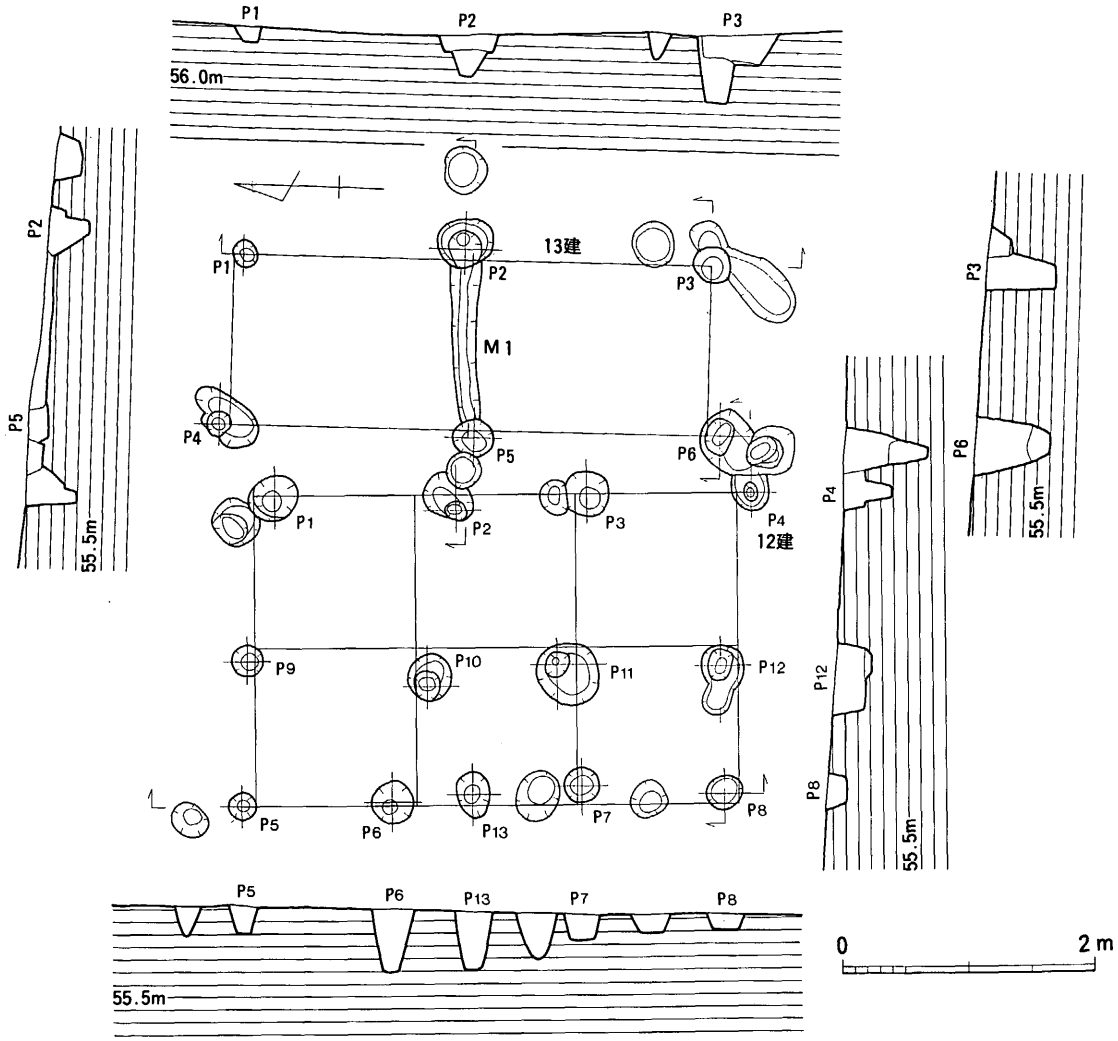
梁行柱間は、Ｐ２－Ｐ５間が152㎝で梁行平均138㎝より大きく、Ｐ２・５を共に各Ｐ１－Ｐ

3・P4－P6柱列外側に配すことも、14号建物と同様である。

小溝状遺構M1は、P2－P5間に配され、幅20～25cm・深さ6cmを測り、P2・5の深さ30cm・14cmよりも浅い。

なお、西側に約60cm離れて検出した12号建物とは、主軸方向がほとんど一致するだけでなく、梁行138cmは12号建物西半部の梁間A138cmと一致し、桁行（390cm）も12号建物の桁行385cmとほぼ一致する。

また、柱穴からの出土遺物はない。



第 10 図　12・13号掘立柱建物実測図（1/60）

14号掘立柱建物（図版６、第11図、表14）

建物規模は１間×２間で、Ｐ４が12号建物のＰ３を切るので、14号建物の方が新しい。

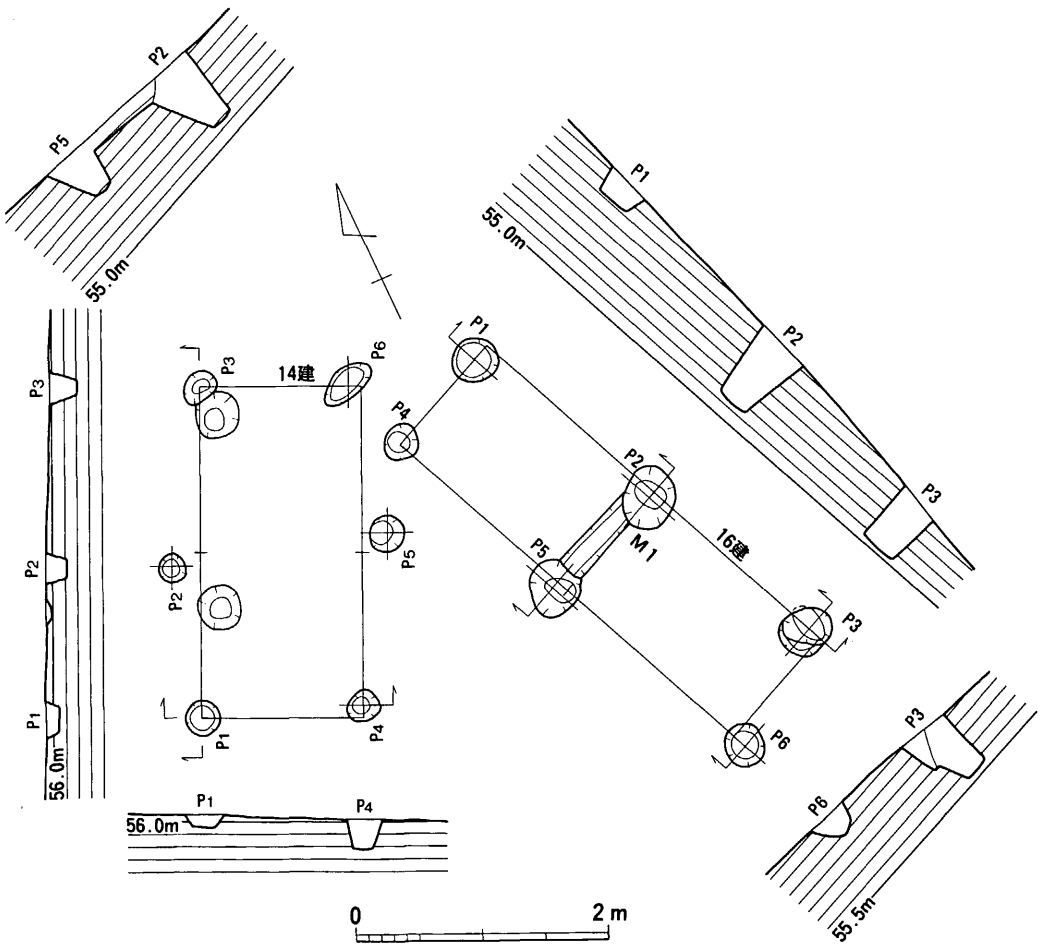
また、13号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、平面プランで重複し、16号建物とも近接することから、13・16号建物とも同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ３－Ｐ６が直交する。

桁行柱間は、西側柱列ではＰ２が桁行258㎝×1/2に北接し、東側柱列ではＰ５が同様に南接する。

梁行柱間は、Ｐ２－Ｐ５間が172㎝で梁行123㎝より大きく、Ｐ２・５は共に各Ｐ１－Ｐ３・Ｐ４－Ｐ６柱列外側に配す。

以上のように、平面プランは、Ｐ２・５も含めて整然とした柱穴配置である。



第 11 図　14・16号掘立柱建物実測図（1/60）

なお、梁間123㎝×２＝246㎝は、桁行258㎝に近く、12号建物の桁行241㎝とほぼ一致する。

なお、柱穴からの出土遺物はない。

15号掘立柱建物（図版７、第12図、表15）

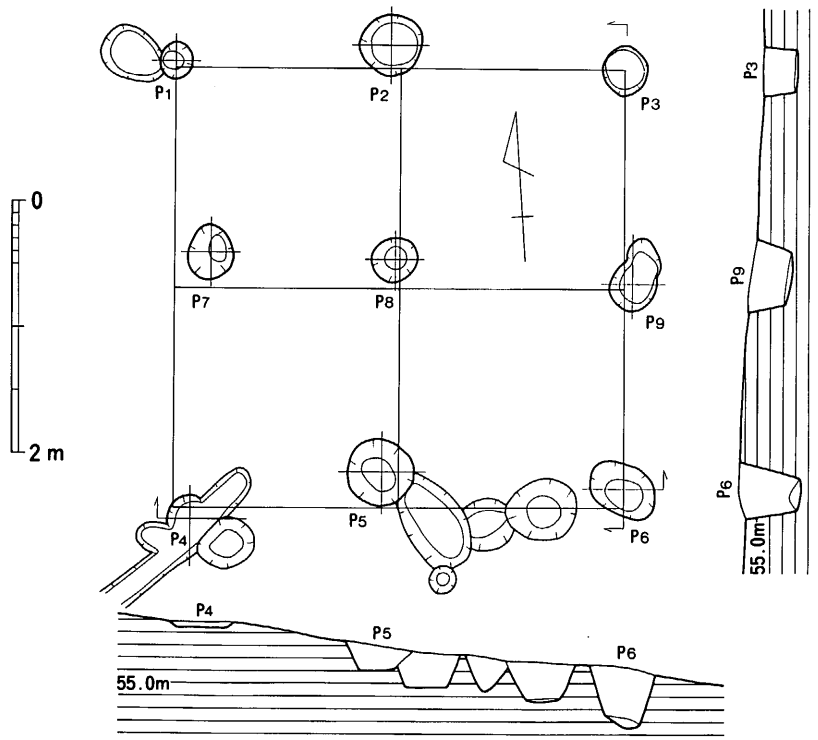
建物規模は２間×２間で、Ｐ１がＰ９を切るため、15号建物が新しい。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ３とＰ３－Ｐ６がほぼ直交し、桁行351㎝・梁行348㎝でほとんど方形に近い。

桁行柱間は、柱間Ａが156㎝・柱間Ｂが189㎝で、桁行351㎝×1/2から若干西寄りにＰ２・５・８が位置する。

梁行柱間は、柱間Ａが164㎝・柱間Ｂが181㎝で、梁行348㎝×1/2から若干北寄りにＰ７～９が位置する。

また、平面プランと中央部柱列配置の関係では、Ｐ７－Ｐ９柱列ではＰ７が平面プラン内側・Ｐ９が同プラン外側、Ｐ２－５柱列ではＰ５が平面プラン内側・Ｐ２が同プラン外側に配され、同一柱列両端の柱穴が平面プランの共に内側あるいは外側といった統一性が認められない。



第 12 図　15号掘立柱建物実測図（1/60）

なお、桁行351cmは16号建物の桁行352cmにほとんど一致する。

また、柱穴からの出土遺物はない。

16号掘立柱建物（図版７、第11図、表16）

建物規模は１間×２間で、13・14号建物とは柱穴による切り合い関係はないが、平面プランで重複し、同時併存しない。

平面プランは、柱穴中心を結ぶＰ１－Ｐ４とＰ４－Ｐ６が直交し、後述するように、Ｐ２－Ｐ５間に小溝状遺構Ｍ１を配す。

桁行柱間は、東側柱列ではＰ２が桁行352cm×1/2に位置し、西側柱列ではＰ５が同南寄りに位置し、13・14号建物とほぼ類似した柱穴配置をとる。

梁行柱間は、Ｐ２－Ｐ５間が104cmで梁行96cmより大きく、Ｐ５を西側柱列外側に配することも13・14号建物と同様である。

小溝状遺構Ｍ１は、10・13号建物同様に、Ｐ２－Ｐ５間に配され、幅約20cm・深さ４～14cmを測り、Ｐ２・５の深さ60cm・41cmよりも浅い。

なお、柱穴からの出土遺物はない。

２）土　壙

掘立柱建物の柱穴よりも大きい平面プランのものは、北調査区全体で約20個ほどを検出したが、そのなかで、埋土に焼土・炭を含み、床面全体から壁の一部にかけて赤変しているものは、１～４号土壙の計４基である。

なお、いずれも赤変して焼土化している程度は弱く、出土遺物はない。

１号土壙（図版８、第13図１）

径約70cm・深さ約20cm弱の土壙で、床面に径約20cm・深さ約15cmの小ピットを設ける。

２号土壙（図版８、第13図２）

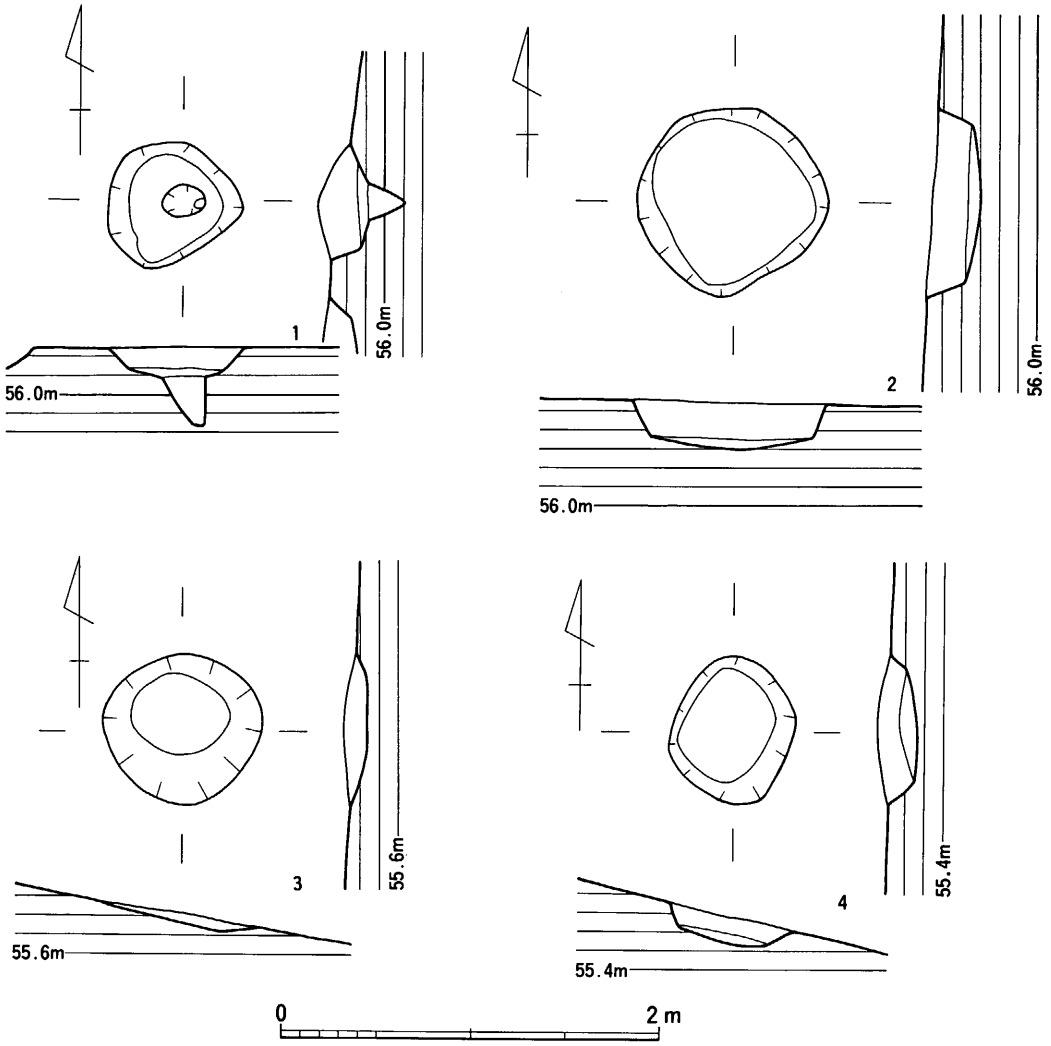
径約１ｍ・深さ約25cmの土壙で、平面プランは隅丸方形に近い。

３号土壙（図版８、第13図３）

径約85cm・深さ約15cmの土壙で、平面プランはほぼ円形を呈す。

４号土壙（図版８、第13図４）

径70cm・深さ約20cmの土壙で、現状では若干隅丸長方形の平面プランを呈すが、削平を考え



第 13 図　1～4 号土壙実測図（1/40）

ると隅丸方形であったとも考えられる。

5 号土壙

北丘陵平坦面中央部に位置し、1 号建物と重複するが切り合わない。北東に主軸をとる長方形プランの土壙で上面での長さは250㎝、幅は60～70㎝で深さは40㎝を測り、床面は南側に下がっているもののほぼ平坦と言える。木棺墓の可能性もあるが土壙墓としたい。

時期は出土遺物から弥生中期後半と考えられる。

出土遺物

鉢（３～５）　口縁部・胴部・底部が小片で出土しており、接合部を持たないが同一個体と考えられる。口縁部と胴部は内外ともナデ、底部は内外にわずかにハケが残る。丹塗りは見られないが赤橙色を呈しており、祭祀に用いたものかも知れない。

複合口縁壺(2)　口縁部の小片でやや厚い。弥生後期後半～末のものと思われる暗黄白色を呈する。胎土はチョウ石の混入が目立つ。

3）Ｌ字状小溝（付図１）

９号掘立柱建物の南側柱列から南に、1.30ｍ離れて検出した。

幅約20㎝・深さ約５㎝の小溝で、西側部小溝内に柱穴様小ピットを検出し、北側でも小溝の一部を確認した。

小溝の方向が９号建物とほぼ一致し、その他の周辺の柱穴様ピットの所在などから、小溝を伴う建物の可能性も考えられる。

なお、Ｐ30からは、後述する弥生後期前半頃の甕底部片（第20図）などが出土している。

2．小　結

1）掘立柱建物について

時期

１～16号建物の計16棟の時期は、既述のように、建物の柱穴からの遺物の出土が、１号建物Ｐ５（付図１－Ｐ28）からの弥生時代後期中頃の複合口縁細片だけで、また、調査区から住居の明確な出土もなく、不明確と言わざるを得ない。

しかし、既述のように、調査区の13個の柱穴・小ピット群や５号土壙から若干の土器片の出土があるので、大略の時期幅を概観するために、列記すれば以下のとおりである（第20・21図）。

Ｐ２・16からは、縄文時代の土器細片が出土。

Ｐ９からは、弥生時代の土器細片が出土。

Ｐ21からは、縄文時代と思われる土器細片と弥生時代の土器細片が出土。

Ｐ８からは、弥生時代中期前半の甕底部片（器周残1/4弱）が出土。

Ｐ14からは、弥生後期の甕口縁部片が出土。

Ｐ17からは、弥生前期中頃よりも若干新しい甕底部片（同1/8）が出土。

Ｐ28からは、弥生後期中頃の複合口縁片が出土。

Ｐ29からは、弥生後期後半の底部片（同1/4弱）が出土。

P30からは、縄文晩期の鉢（第20図）や弥生後期前半の底部片が出土。

P34からは、縄文晩期の浅鉢片（同1/4弱）、P35からは同期の深鉢口縁片が出土。

P39からは、弥生中期後半以降の鉢口縁片（同1/8）が出土。

5号土壙からは、弥生中期中葉でも古い甕口縁・胴・底部片や、同後期中頃の口縁・底部片（第16図）が出土。

以上のことから、建物の大略の時期として、縄文晩期、弥生前期中頃、同中期前半、同後期中頃、同後期後半などが考えられる。

また、建物の柱穴による切り合い関係を古→新で示すと、6号→7号、12号→14号、15号→9号の3組が確認され、平面プランの重複から6～8号、12～14号などはそれぞれ同時存在しない。

建物規模と特徴

確認した建物規模を大略A～Cで示すと、A（1間×2間）、B（2間×2間）、C（2間×3間）の三者があり、これらを平面プランの特徴で細分すると、以下のとおりである。

A_1……中央の梁行柱間間に小溝M1を配すもので、10・13・16号があり、10号例に代表されるように、梁行に対して著しく桁行が大きい建物である。

A_2……A_1に比べて、梁行に対する桁行の比が大きくなく、通有の建物で、小溝M1を配さない。8・11・14号がある。

B_1……棟持柱を平面プラン上に配さないもので、同プラン外に著しく離す5号、同プラン内に著しく離す2号、その両者が認められる7号がある。

B_2……2間×2間規模では通例のもので、1・3・4・9・15号がある。

C_1……棟下の柱列に加えて、平面プラン外に棟持柱を著しく離すもので、6号がある。

C_2……2間×3間規模では通例のもので、12号がある。

以上の規模と特徴から、大略ではあるが、A_1・A_2・B_1・B_2・C_1・C_2の6類は、それぞれ建物の機能上の性格を別途にするものと考えてもよいであろう。

なお、各建物別に既述してきたように、桁行・梁行や柱間の1/20実測図上での計測値がほとんど一致するものの大略を示すと、以下のａ～ｆなどの例が指摘され、これらの建物群が時期的に連続するものであることを強く示唆する。

ａ……4・12・13号の桁行。

ｂ……2・3・7・15・16号の桁行。

ｃ……6号と11号の桁行。

ｄ……6号と7号の梁行。

ｅ……8号の梁行と6号の桁行柱間。

ｆ……11号の梁行と15号の梁行柱間。

建物配置

16棟の建物群全体の出土状態の特徴として、北東端部の15号～西側中央部の２号～南端部の16号にかけての半円状のライン上に群在することが指摘できる（付図１）。

また、その群在のあり方が、建物の平面プランで重複・近接状態で上記の半円状ライン上に連続し、例外の５号と11号間の距離すら約１ｍということも指摘できる。

そしてまた、重複・近接状態を既述のA_1～C_2の６類別に概観すると、A_1(13・16号が重複)、A_2（８・11・14号は約３ｍ間で点在)、B_1（２・５号が近接)、B_2（３・４号および９・15号が重複）の４類内で重複・近接状態の建物を含む。

以上の出土状態の特徴は、機能上の性格を別途にする建物を、A_1～C_2の６類をセットとして、既述の半円上ライン上に、建物群以西にも建物を配する空間が存在するにもかかわらず、整然と配し、機能上の性格が同じ建物は重複あるいは近接して建て替えられたものと考えられる。

また、６類個別の半円状ラインの大略の位置は、同ライン内側から順に、A_1・A_2・B_1・C_1・C_2・B_2が配されている。

なお、６類の建物の性格としては、A_1類は特殊な小型高床建物、A_2類は小・中型高床倉庫、B_1類は特殊な中型高床建物、B_2類は大型高床倉庫、C_1類は特殊な大型高床建物、C_2類は大型高床建物がそれぞれ考えられる。

最後に、既述してきた建物の新旧関係（古→新で示すと、６号→７号、15号→９号、12号→14号の３組)・規模・特徴・性格などに、建物主軸の方向などを考慮し、16棟の時期を、㋑２・６・７・13・15号、㋒４・７・11・16号、㋓１・５・８・12号、㋔３・９・10・14号の４期にモデル的に分けたものを第14図に示す。

なお、モデル各期のなかにはA_1～C_2の６類中に不足するものがあり、未確認の例もあるかも知れないが、６類が必ずセットで配されたとまで考える必要はないであろう。

また、モデル４期の一応の時期幅は、弥生時代後期と思われ、建物群の存立を支えた竪穴住居群は、調査区外の西緩傾斜面部に所在したものか。

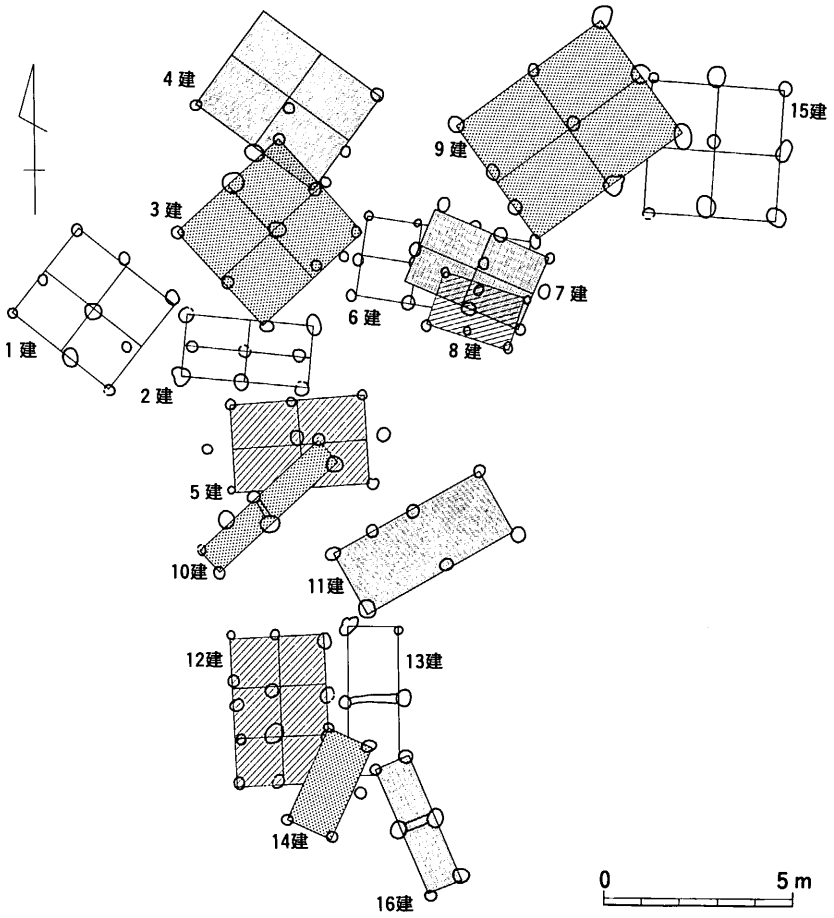
２）土壙について

１～４号土壙の時期と性格は、いずれも出土遺物もなく不明確であるが、付図１に示すＰ２（１－２号土壙間）やＰ14・16（２号土壙東側）からは縄文時代晩期と思われる土器細片、Ｐ８（１号土壙北側）からは弥生時代中期前半の甕底部片が出土している。

上記のことから、４基の土壙は、所謂、松菊里型住居に伴う炉で、同型住居例に認められる炉周辺の主柱穴が削平をうけて消失したものとも考えられる。

また、Ｐ14からは弥生時代後期の甕口縁部細片、後述する５号土壙からは同後期中頃の土器

片などが出土していることから、4基の土壙は、後期の住居に伴う炉とも思われるが、同期以



第 14 図　北調査区建物群モデル各期配置図（1/200）

降に認められる例が多い住居壁沿い中央土壙・主柱穴が別途に確認されていない。削平されたものか。

なお、4基の土壙以東では、掘立柱建物のみが確認され、焼土壙は確認されていない。

また、調査区外の西側は緩傾斜面が広がる。

以上のことから、4基の土壙以西から調査区外の西側に、縄文時代晩期～弥生時代後期にかけて、住居群が所在した可能性が指摘できよう。

表1　1号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－52.5°－W	

番号	検出面標高
P_1	56.35
P_3	56.32
P_4	56.45
P_6	56.42

	桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間A	
	P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2	P_1-P_7	
	305	274	146	156	
	P_4-P_6	P_3-P_6	P_2-P_3	P_2-P_8	
	326	291	159	166	
平均	316	283	P_4-P_5	P_3-P_9	
			191	159	
			P_5-P_6	160	平均
			135	梁行柱間B	
		平均	158	P_7-P_4	
			桁行柱間B	118	
			P_7-P_8	P_8-P_5	
			145	126	
			P_8-P_9	P_9-P_6	
			139	116	
		平均	142	120	平均

番号	標高
P_1	56.20
P_2	55.97
P_3	56.13
P_4	56.28
P_5	56.07
P_6	56.29
P_7	56.31
P_8	55.82
P_9	56.27

表2　2号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－84.5°－W	

番号	検出面標高
P_1	56.18
P_3	56.15
P_4	56.32
P_6	56.14

	桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間	
	P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2	P_1-P_7	
	340	164	183	82	
	P_4-P_6	P_3-P_6	P_2-P_3	P_7-P_4	
	324	168	157	82	
平均	332	166	P_4-P_5	P_2-P_8	
			155	(82？)	
			P_5-P_6	P_8-P_5	
			169	(90？)	
		平均	166	P_3-P_9	
			桁行柱間B	82	
			P_7-P_8	P_9-P_6	
			138	86	
			P_8-P_9	84	平均
			148		
		平均	143		

番号	標高
P_1	56.18
P_2	56.02
P_3	55.90
P_4	55.88
P_5	55.76
P_6	55.98
P_7	56.06
P_8	56.00
P_9	56.05

表 3　3 号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－47°－E	

番号	検出面標高
P_1	56.24
P_3	56.01
P_4	56.20
P_6	55.99

	桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間A
	P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2	P_1-P_7
	362	345	202	188
	P_4-P_6	P_3-P_6	P_4-P_5	P_2-P_8
	349	314	210	172
平均	356	330	P_7-P_8	P_3-P_9
			189	166
		平均	200	175
			桁行柱間B	梁行柱間B
			P_2-P_3	P_7-P_4
			160	157
			P_5-P_6	P_8-P_5
			139	139
			P_8-P_9	P_9-P_6
			178	148
		平均	159	148

番号	標高
P_1	56.03
P_2	55.93
P_3	55.88
P_4	55.86
P_5	55.90
P_6	55.83
P_7	56.07
P_8	55.95
P_9	55.91

表 4　4 号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西	P_1・P_2
N－54.5°－W	P_7

番号	検出面標高
P_1	
P_3	55.78
P_4	56.04
P_6	56.07

	桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間A	
	P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2	P_1-P_7	
	P_4-P_6	P_3-P_6	P_4-P_5	P_2-P_8	
	387	301	202		
平均	387	301	202	P_3-P_9	
			桁行柱間B	171	
			P_2-P_3	171	平均
				梁行柱間B	
			P_5-P_6	P_7-P_4	
			185		
		平均	185	P_8-P_5	
			柱間	146	
			P_8-P_9	P_9-P_6	
			187	130	
				138	平均

番号	標高
P_1	
P_2	
P_3	55.37
P_4	55.82
P_5	55.57
P_6	55.95
P_7	
P_8	55.83
P_9	55.79

表5　5号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－87°－E	

番号	検出面標高
P_1	56.24
P_3	56.05
P_4	56.26
P_6	55.96

桁　行	梁　行	桁行柱間A
P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2
354	224	166
P_4-P_6	P_3-P_6	P_4-P_5
380	228	182
平均 367	226	174
柱間A	柱間B	桁行柱間B
P_7-P_9	P_2-P_5	P_2-P_3
472	206	188
		P_5-P_6
		198
		平均 193

番号	標高
P_1	56.13
P_2	56.05
P_3	55.91
P_4	56.19
P_5	55.76
P_6	55.34
P_7	56.07
P_8	55.83
P_9	55.68

表6　6号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－82°－W	

番号	検出面標高
P_1	56.00
P_4	55.79
P_5	56.03
P_8	55.85

桁　行	梁　行	桁行柱間	梁行柱間
P_1-P_4	P_1-P_5	P_1-P_2	P_1-P_9
445	217	126	117
P_5-P_8	P_2-P_6	P_2-P_3	P_9-P_5
444	215	150	100
平均 445	P_3-P_7	P_3-P_4	P_2-P_{10}
柱間A	217	169	106
$P_{13}-P_{14}$	P_4-P_8	P_5-P_6	$P_{10}-P_6$
517	212	140	109
平均	215	P_6-P_7	P_3-P_{11}
		167	107
		P_7-P_8	$P_{11}-P_7$
		137	(110？)
		P_9-P_{10}	P_4-P_{12}
		152	93
		$P_{10}-P_{11}$	$P_{12}-P_8$
		152	119
		$P_{11}-P_{12}$	108 平均
		124	
		平均 146	

番号	標高
P_1	55.76
P_2	55.85
P_3	55.61
P_4	55.45
P_5	55.79
P_6	55.70
P_7	55.55
P_8	55.73
P_9	55.86
P_{10}	55.54
P_{11}	55.60
P_{12}	55.45
P_{13}	55.91
P_{14}	55.55

表7　7号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－68°－W	

番号	検出面標高
P_1	55.87
P_3	55.77
P_4	55.96
P_6	55.84

桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間A	
$P_1－P_3$	$P_1－P_4$	$P_1－P_2$	$P_1－P_7$	
318	224	174	138	
$P_4－P_6$	$P_3－P_6$	$P_4－P_5$	$P_8－P_5$	
331	205	175	130	
平均 325	215	175	$P_9－P_6$	
柱間A		桁行柱間B	117	
$P_7－P_9$		$P_2－P_3$	128	平均
362		144	梁行柱間B	
		$P_5－P_6$	$P_7－P_4$	
		156	86	
	平均	150	$P_2－P_8$	
		柱間B	88	
		$P_7－P_8$	$P_3－P_9$	
		182	88	
		$P_8－P_9$	87	平均
		180		
	平均	181		

番号	標高
P_1	55.52
P_2	55.51
P_3	55.51
P_4	55.82
P_5	55.35
P_6	55.68
P_8	56.52
P_7	55.54
P_9	55.49

表8　8号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－72°－W	

番号	検出面標高
P_1	55.93
P_3	55.82
P_4	55.76
P_6	55.72

桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間A
$P_1－P_3$	$P_1－P_4$	$P_1－P_2$	$P_2－P_5$
238	153	102	110
$P_4－P_6$	$P_3－P_6$	$P_4－P_5$	
228	137	108	
平均 233	145	105	
		桁行柱間B	
		$P_2－P_3$	
		136	
		$P_5－P_6$	
		120	
	平均	128	

番号	標高
P_1	55.70
P_2	55.47
P_3	55.66
P_4	55.76
P_5	55.74
P_6	55.72

表 9　9 号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－54°－E	

番号	検出面標高
P_1	55.79
P_3	55.35
P_4	55.79
P_6	55.28

	桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間A
	$P_1－P_3$	$P_1－P_4$	$P_1－P_2$	$P_1－P_7$
	473	372	252	153
	$P_4－P_6$	$P_3－P_6$	$P_4－P_5$	$P_2－P_8$
	480	378	251	176
平均	477	375	$P_7－P_8$	$P_3－P_9$
			257	185
		平均	253	171
			桁行柱間B	梁行柱間B
			$P_2－P_3$	$P_7－P_4$
			221	219
			$P_5－P_6$	$P_8－P_5$
			228	193
			$P_8－P_9$	$P_9－P_6$
			217	193
		平均	222	202
				柱間
				$P_7－P_{10}$
				116
				$P_{10}－P_4$
				103
			平均	110

番号	標高
P_1	55.19
P_2	55.32
P_3	55.28
P_4	55.45
P_5	55.37
P_6	55.19
P_7	55.44
P_8	55.07
P_9	55.28
P_{10}	55.48
P_{11}	55.37

表10　10号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－47°－E	

番号	検出面標高
P_1	56.28
P_3	56.08
P_4	56.28
P_6	55.97

	桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁 間 A	
	$P_1－P_3$	$P_1－P_4$	$P_1－P_2$	$P_2－P_5$	
	442	73	194	85	
	$P_4－P_6$	$P_3－P_6$	$P_4－P_5$	柱　間	
	423	73	185	$P_1－P_7$	
平均	423	73	190	100	
			桁行柱間B	$P_7－P_2$	
			$P_2－P_3$	94	
			228	97	平均
			$P_5－P_6$		
			238		
		平均	233		

番号	標高
P_1	55.96
P_2	55.86
P_3	55.87
P_4	55.85
P_5	55.83
P_6	55.72
M_1	56.01

表11　11号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－60°－E	

番号	検出面標高
P_1	56.05
P_3	55.86
P_4	55.99
P_6	55.71

桁　行	梁　行	桁行柱間	桁行柱間A
P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2	P_1-P_7
447	169	239	121
P_4-P_6	P_2-P_5	P_2-P_3	P_7-P_2
449	164	208	118
平均 448	P_3-P_6	P_4-P_5	120 平均
	201	240	
	平均 178	P_5-P_6	
		209	
		平均 224	

番号	標高
P_1	55.86
P_2	55.43
P_3	55.58
P_4	55.85
P_5	55.28
P_6	55.25
P_7	55.71

表12　12号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
南－北 N－2°－W	

番号	検出面標高
P_1	56.02
P_4	56.01
P_5	56.24
P_8	56.14

桁　行	梁　行	梁行柱間A	桁行柱間A
P_1-P_4	P_1-P_5	P_1-P_9	P_1-P_2
384	253	135	146
P_5-P_8	P_2-P_6	P_2-P_{10}	P_9-P_{10}
390	237	143	145
P_9-P_{12}	P_3-P_7	P_3-P_{11}	P_5-P_6
382	237	139	122
平均 385	P_4-P_8	P_4-P_{12}	138 平均
	244	140	桁行柱間B
	平均 243	139	P_2-P_3
		梁行柱間B	106
		P_9-P_5	$P_{10}-P_{11}$
		118	106
		$P_{10}-P_6$	P_6-P_7
		94	153
		$P_{11}-P_7$	122 平均
		98	桁行柱間C
		$P_{12}-P_8$	P_3-P_4
		104	132
		平均 104	$P_{11}-P_{12}$
			131
			P_7-P_8
			115
			126 平均

番号	標高
P_1	55.80
P_2	55.61
P_3	55.64
P_4	55.62
P_5	55.01
P_6	55.69
P_7	55.93
P_8	56.00
P_9	55.90
P_{10}	55.81
P_{11}	55.80
P_{12}	55.79

表13　13号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
南－北 N－0.5°－W	

番号	検出面標高
P_1	55.91
P_3	55.92
P_4	55.99
P_6	56.01

	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁 間 A
	P_1-P_3 376	P_1-P_4 138	P_1-P_2 178	P_2-P_5 152
	P_4-P_6 403	P_3-P_6 138	P_2-P_3 198	
平均	390	138	P_4-P_5 205	
			P_5-P_6 198	
			平均 195	

番号	標高
P_1	55.98
P_2	55.56
P_3	55.40
P_4	55.70
P_5	55.85
P_6	55.41
M_1	55.84

表14　14号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
南－北 N－24.5°－E	

番号	検出面標高
P_1	56.04
P_3	56.02
P_4	56.02
P_6	55.97

	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁 間 A
	P_1-P_3 263	P_1-P_4 128	P_1-P_2 121	P_2-P_5 172
	P_4-P_6 253	P_2-P_5 118	P_2-P_3 142	
平均	258	123	P_4-P_5 136	
			P_5-P_6 117	
			平均 129	

番号	標高
P_1	55.96
P_2	55.89
P_3	55.80
P_4	55.79
P_5	55.14
P_6	55.79

表15　15号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
東－西 N－86°－W	

番号	検出面標高
P_1	55.30
P_3	54.94
P_4	55.49
P_6	55.09

	桁　行	梁　行	桁行柱間A	梁行柱間A
	P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2	P_1-P_7
	357	(363)	170	151
	P_4-P_6	P_3-P_6	P_4-P_5	P_2-P_8
	344	333	152	171
平均	351	348	P_7-P_8	P_3-P_9
			146	170
		平均	156	164
			桁行柱間B	梁行柱間B
			P_2-P_3	P_7-P_4
			187	212
			P_5-P_6	P_8-P_5
			192	169
			P_8-P_9	P_9-P_6
			189	163
		平均	189	181

番号	標高
P_1	55.14
P_2	54.97
P_3	54.70
P_4	55.45
P_5	55.10
P_6	54.65
P_7	55.24
P_8	54.93
P_9	54.73

表16　16号掘立柱建物計測表

主軸方向	欠　番
南－北 N－24°－W	

番号	検出面標高
P_1	55.94
P_3	55.61
P_4	55.99
P_6	55.72

	桁　行	梁　行	桁行柱間	梁 間 A
	P_1-P_3	P_1-P_4	P_1-P_2	P_2-P_5
	340	89	176	104
	P_4-P_6	P_3-P_6	P_2-P_3	
	364	103	164	
平均	352	96	P_4-P_5	
			166	
			P_5-P_6	
			198	
			平均	176

番号	標高
P_1	55.73
P_2	55.14
P_3	55.05
P_4	55.61
P_5	55.48
P_6	55.49
M_1	55.66

第３節　南丘陵の調査

１．南調査区の遺構と遺物

南調査区は南丘陵の細長い緩斜面に位置しており遺構は尾根の部分に存在している。旧状は雑木林で大小の倒木根や立ち腐れた木の根が多数存在しており、検出段階では土壙やピットと見まちがえたものもあった。

南調査区の南端は断崖絶壁になっており、遺跡の形成された当時も南に開けた見晴らしの良い場所だったと考えられる。中世の土壙墓はこの地点に位置しており、ほぼ同時期の墳丘のある倉良遺跡を見通すことができる。

１）土壙墓

調査区内からはいくつかの土壙が検出されたがそのうち確実に土壙墓と認めうるものは２基であった。

１号土壙墓（図版12、第15図１）

南丘陵の稜線上の南端に位置する。北西に主軸をとる隅円方形プランの土壙で上面での長さは250cm、幅70cmで深さは80～90cm。底部は南西側がやや低い。人骨は頭蓋骨片・下顎骨・骨盤・下肢骨が遺存している。頭位は北西で顔は西を向いており、下肢骨はやや乱れている。墓壙西南に床面より浮いた状態で土師器の皿が出土しており、この副葬品から本遺構の時期は15ｃ末～16ｃ初頭と考えられる。

出土遺物（図版13、第16図）

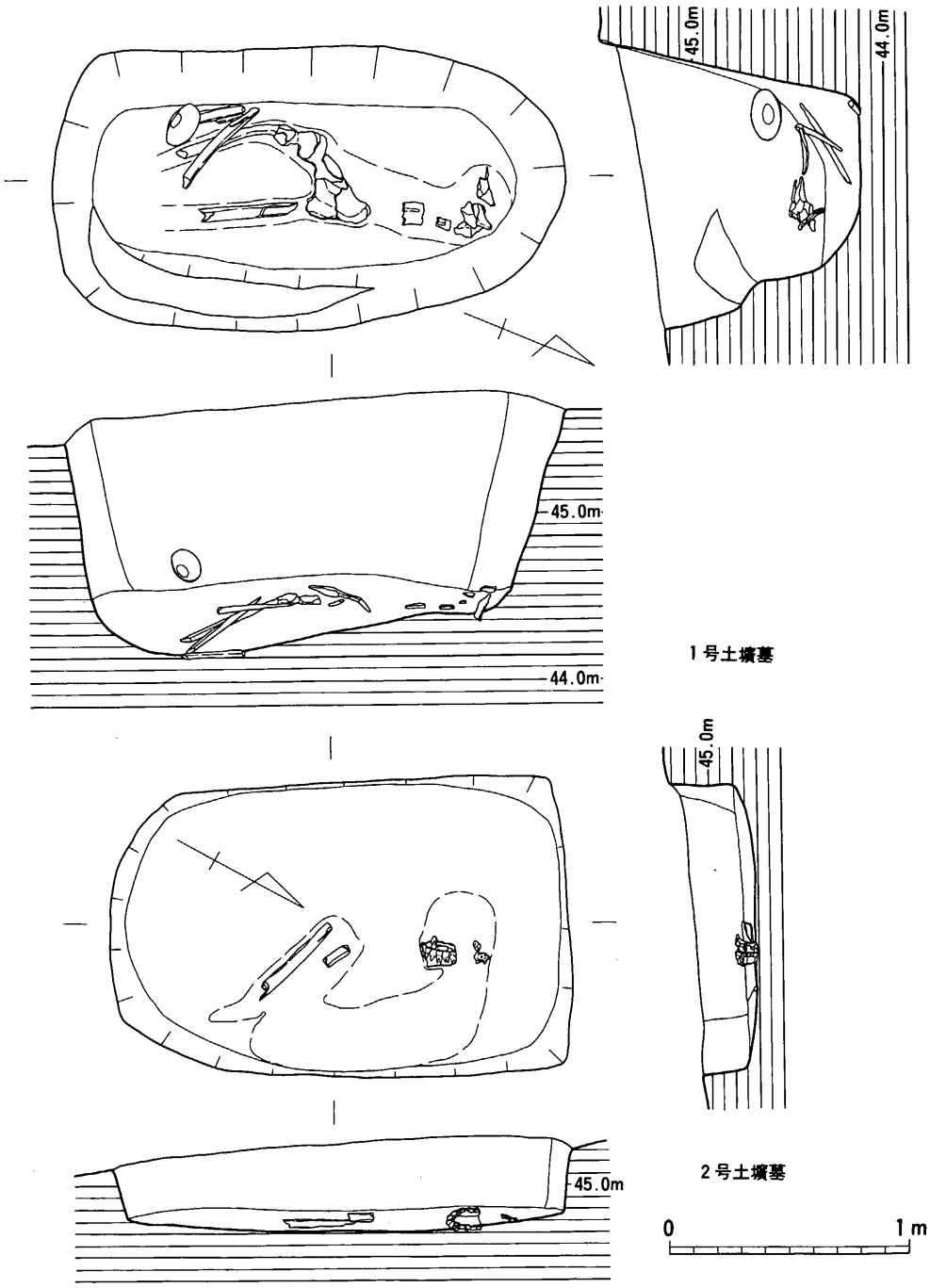
土師器杯(1)　完形品で口径10.3cm、底径4.2cm、器高2.3cmを計る。口縁部は直線的に開き内外面ともヨコナデ調整されている。底部は回転糸切り。胎土は精良で混入物を含まず軟質、橙白色を呈する。口唇部にタールが付着している。

２号土壙墓（図版12、第15図２）

南丘陵の稜線上の南端に位置する。北西に主軸をとる隅円方形プランの土壙で検出面での長さは長軸195cm、短軸125cmで深さは35cmと浅い。底部はほぼ平坦であった。

人骨は上下顎骨と下肢骨の一部が遺存している。頭位は北西で顔は南を向く。底面の変色の範囲から遺体は墓壙の東側に脚を曲げて埋葬されたと考えられる。

出土遺物はないが１号中世墓と主軸方向が同じで近接していることから同時期のものと思われる。



第 15 図　1・2号土壙墓実測図 (1/15)

2）土壙

南丘陵では5基が検出された。

6号土壙（図版9、第17図2）

南丘陵の稜線上の北よりに位置する。北東に主軸をとる隅円方形プランの土壙で上面での長軸は160cm、短軸95cmで深さは95cmと深い。西側にテラスがあり、テラスと底部はほぼ平坦である。形態から土壙墓の可能性がある。

出土遺物がないので時期は不明である。

7号土壙（図版9、第17図3）

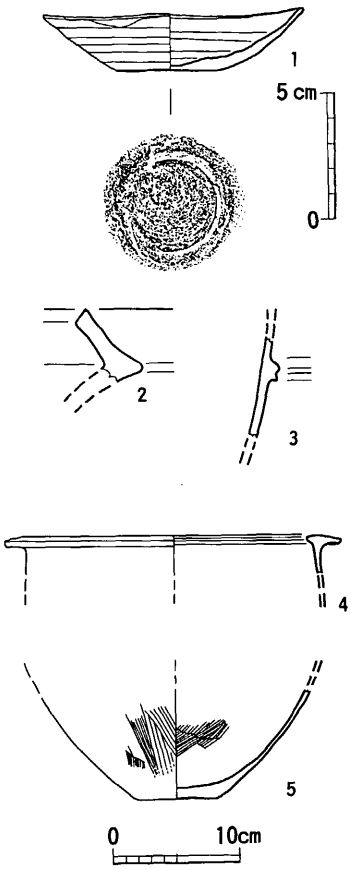
南丘陵の稜線上の南東の土壙群の最も北に位置する。ほぼ東西に主軸をとる隅円方形プランの土壙で検出面で長軸は190cm、短軸110cmで深さは70cm。西側にテラスがあり、テラスと底部は東にやや傾斜している。形態から土壙墓の可能性がある。

出土遺物がないので時期は不明である。

8号土壙（図版10、第18図1）

南丘陵の稜線上の南東の土壙群の中央に位置する。ほぼ東西に主軸をとる隅円方形プランの小型の土壙で検出面での長軸は105cm、短軸50cmで深さは70cm。底部はほぼ平坦で土壙墓の可能性がある。

出土遺物がないので時期は不明である。



第16図　1号土壙墓・5号土壙出土遺物実測図(1/3・1/6)

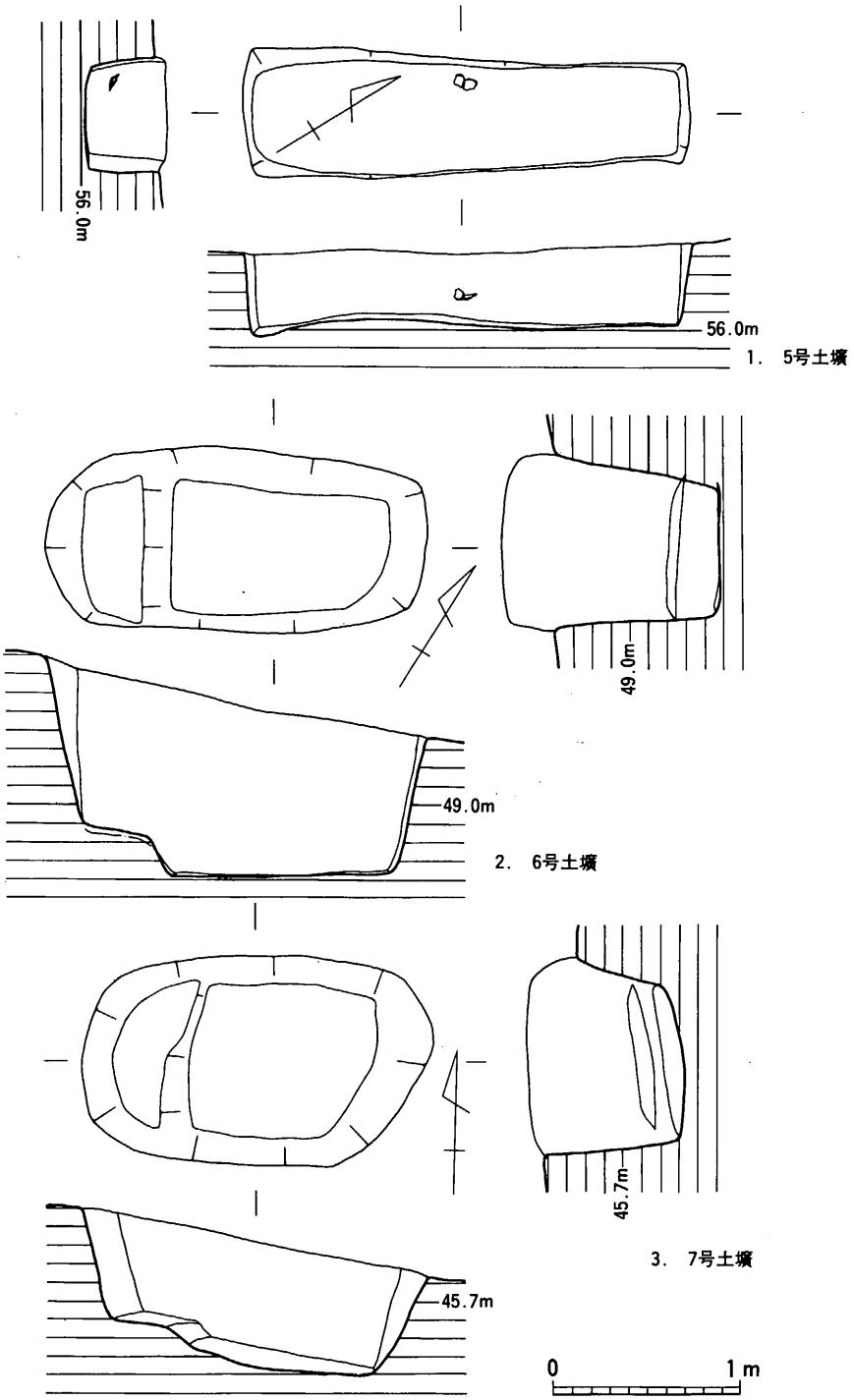
9号土壙（図版10、第18図2）

南丘陵の稜線上の南東の土壙群の中央に位置する。ほぼ南北に主軸をとる隅円方形プランの小型の土壙で検出面での長軸は125cm、短軸70cmで深さは65cm。底部はほぼ平坦で土壙墓の可能性がある。

出土遺物がないので時期は不明である。

10号土壙（図版11、第18図3）

南丘陵南東の稜線上の土壙群の南よりに位置する。北東に主軸をとる隅円方形プランの土壙



第 17 図　5 ～ 7 号土壙実測図 (1/40)

で検出面での長軸は130㎝、短軸75㎝で深さは50㎝。底部は中央がやや高い。

出土遺物がないので時期は不明である。

3）その他の遺構と遺物

ここでは図化可能な遺物とそれを出土したピットについて簡単な説明を付す。

ピット30（図版11、第19図）

北丘陵平坦面の東よりの9号建物の南に位置する。長軸90㎝、短軸65㎝の楕円形プランで深さ10㎝の浅いピットで、建物の柱穴にはならない。

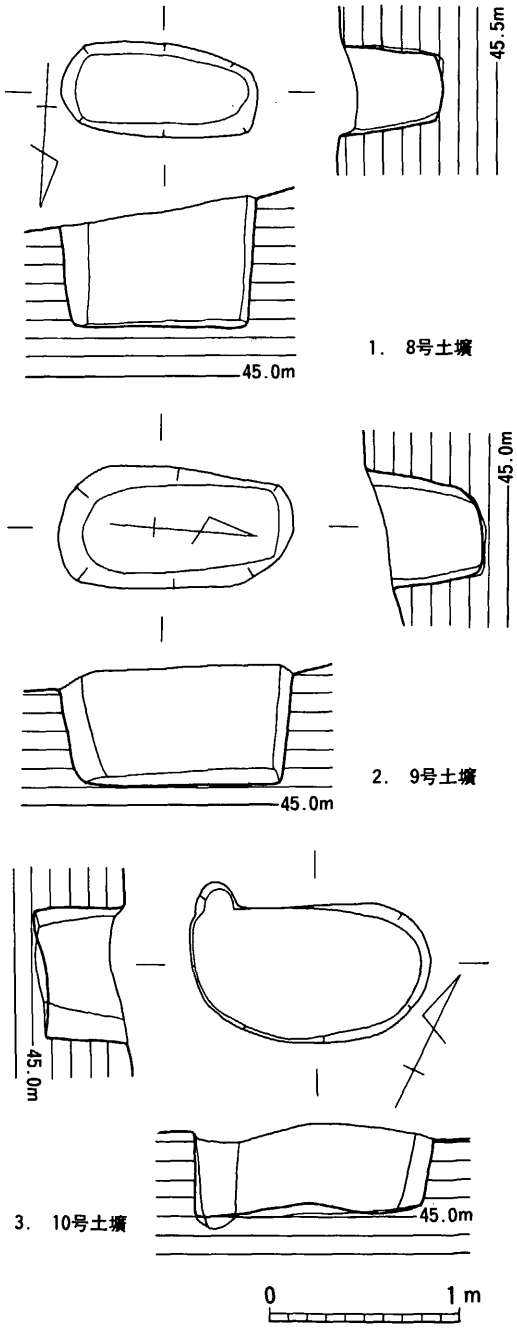
土器は中央部のやや北東よりに集中しており、同一個体の浅鉢の口縁部の破片が重なっており底部の開いた小型の鉢と接していることから故意に埋置あるいは廃棄されたものと考えられる。

出土遺物（図版14、第20図）

擬孔列文土器（1・2）　接合部がないが同一個体と思われる。浅鉢の口縁下に径3.5㎜の小孔が内器面から穿孔されている。調整は外器面が貝殻条痕、内器面はナデ。胎土は内器面は茶褐色、外器面はススが付着している。

鉢（3）　肩部と口縁部に接合痕が残る。口唇部に突起があり、口縁下に一条の沈線がめぐる。黒色磨研の精製土器だが器面が剝落しているため研磨痕は観察できない。内器面は茶褐色。外器面は灰黒色を呈する。胎土に粗砂粒を含む。

浅鉢（4）　黒色磨研の精製土器だが器面が剝落しており調整は観察できなかったが内外面ともに研磨が施されていたと思われる。口縁部は直線的で胴部は直線的に立ち上がるの



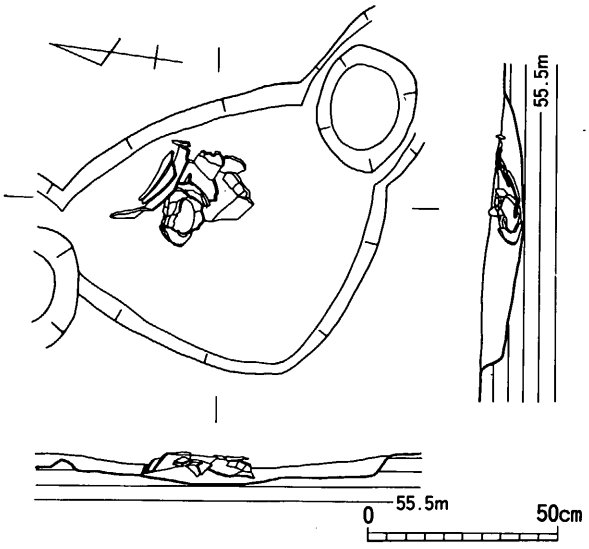
第 18 図　8～10号土壙実測図（1/40）

で平底気味の底部を呈するものと思われる。胎土に粗砂粒を含み、内外面ともに暗褐色をなす。

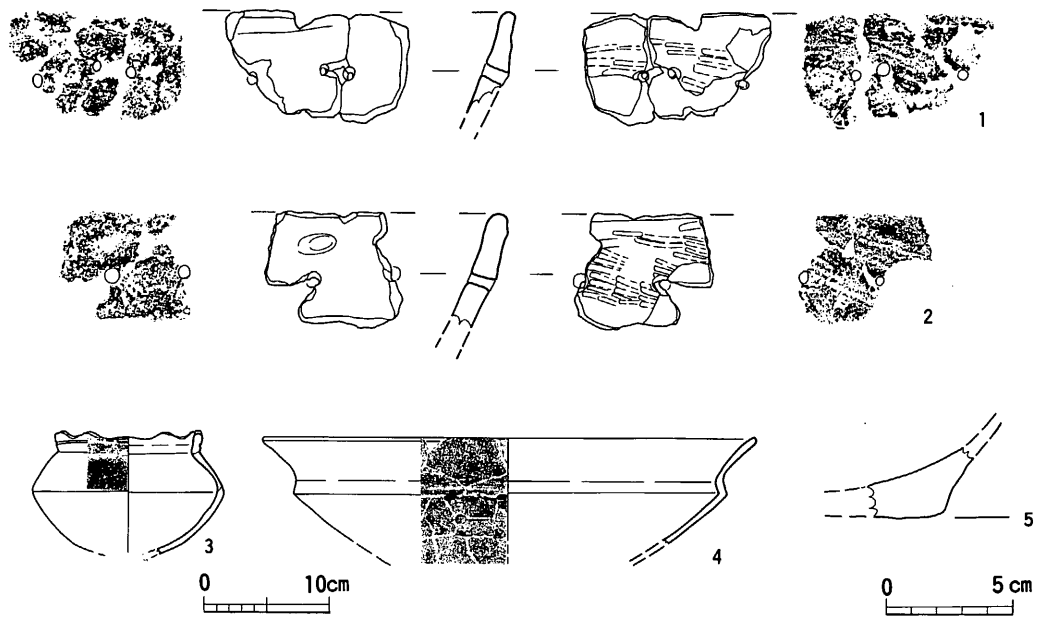
弥生土器底部片（5）　凸レンズ状を呈しているので後期後半の壺か甕と思われる。

表採遺物（図版15、第22・23図）

1は縄文晩期の粗製深鉢肩部片と思われる。器面摩滅のため調整は不明。2は弥生後期中葉～後葉の壺の底部らしく凸レンズ状を呈する。3は須恵器甕胴部片で外器面は細かいタタキ、内器面は同心円の当具痕がみられる。



第 19 図　ピット30実測図（1/20）



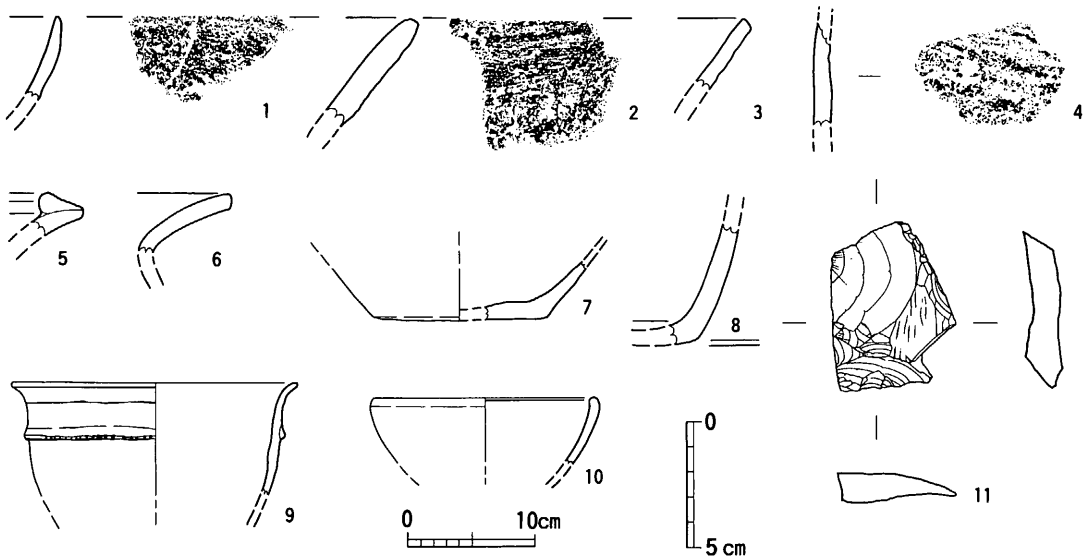
第 20 図　ピット30出土遺物実測図（1/3・1/6）

4・7～9・11は伊万里系の磁器である。4は灯明皿で口唇部にタールが付着している。釉は薄黄緑色で鉢部の口唇部と受け皿の口唇部・外器面は無釉で胎は薄灰緑色。底部は回転ヘラ切りである。7～9は染付椀の底部片で内外に界線などの文様がある。7には見込みに漢字らしいものが見られるが判読できない。9・11は低い高台の付く染付の皿で見込みには山・湖・雲を描く。11は白磁皿で見込みにドーナツ状の釉の掻き取りがあり、高台下部と高台内器面は無釉。釉は透明で質が良い。全体の釉は濁白色を呈する。

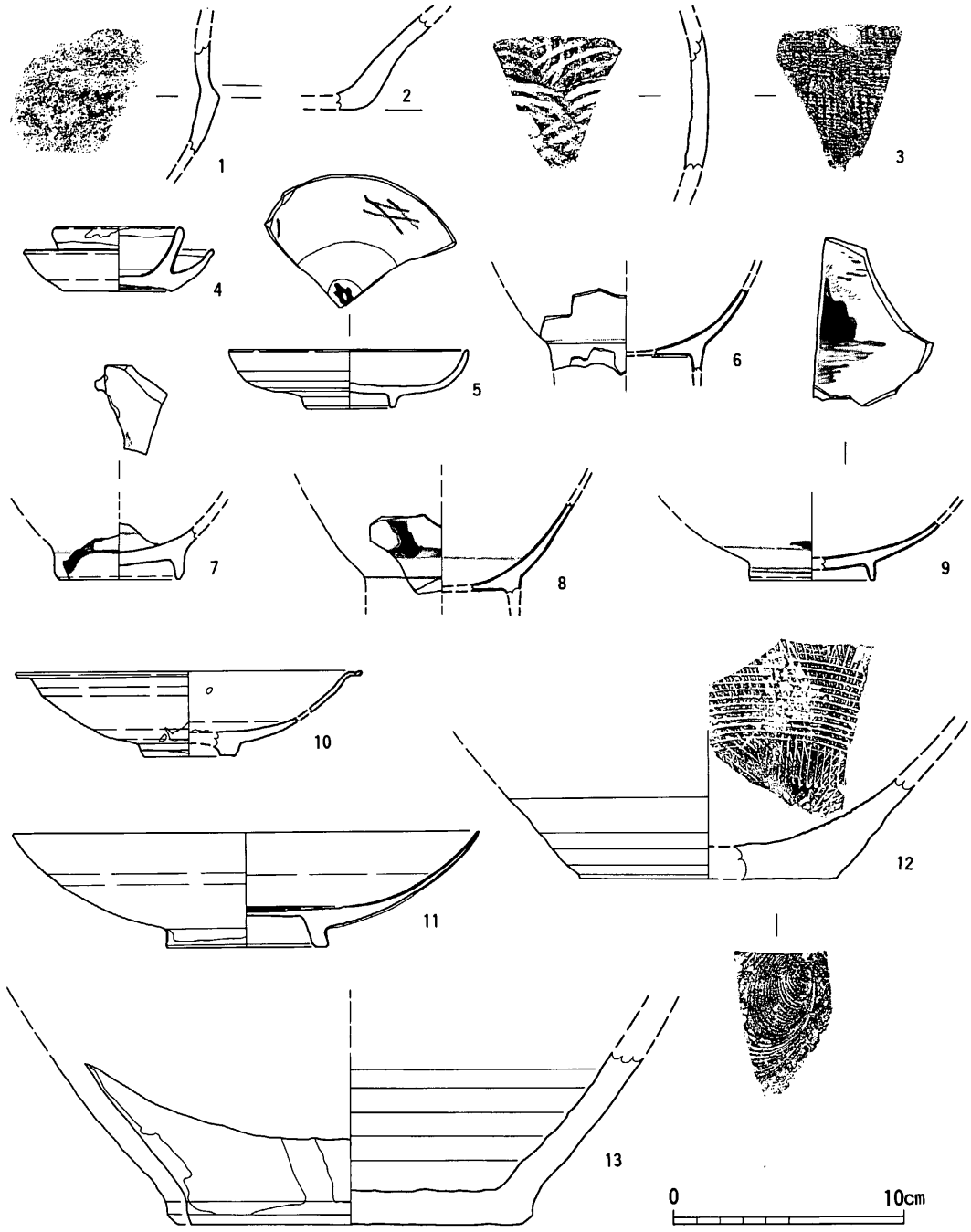
5・6・10・12・13は陶器で、5は染付の小皿で見込みにドーナツ状の釉の掻き取りあり、残った中央部は井の字の模様が入っている。また同じ模様が体部内面にもある。6は染付椀の底部片で内外に界線などの文様がある。10は皿で内外ともに薄黄緑の釉がかかっており内底は無釉。12は摺鉢で底部回転糸切り内器面には櫛目がある。色調は明赤褐色を呈する。13は甕の底部で底部はヘラ切り外器面に横方向に掻き目がありそこに釉が溜まって黒く見えている。胎は淡茶褐色で外器面のみ褐色の釉がかかる。縦に垂れた釉底端部の平坦面で削られていることからこの部分は焼成後のカット面と考えられる。

14は素焼土器で外面は粗いタテ方向のハケ目をほぼ全面に施す。内外ともに淡灰黒色を呈し、胎土は混入物が多い。焼成はやや悪く軟質。

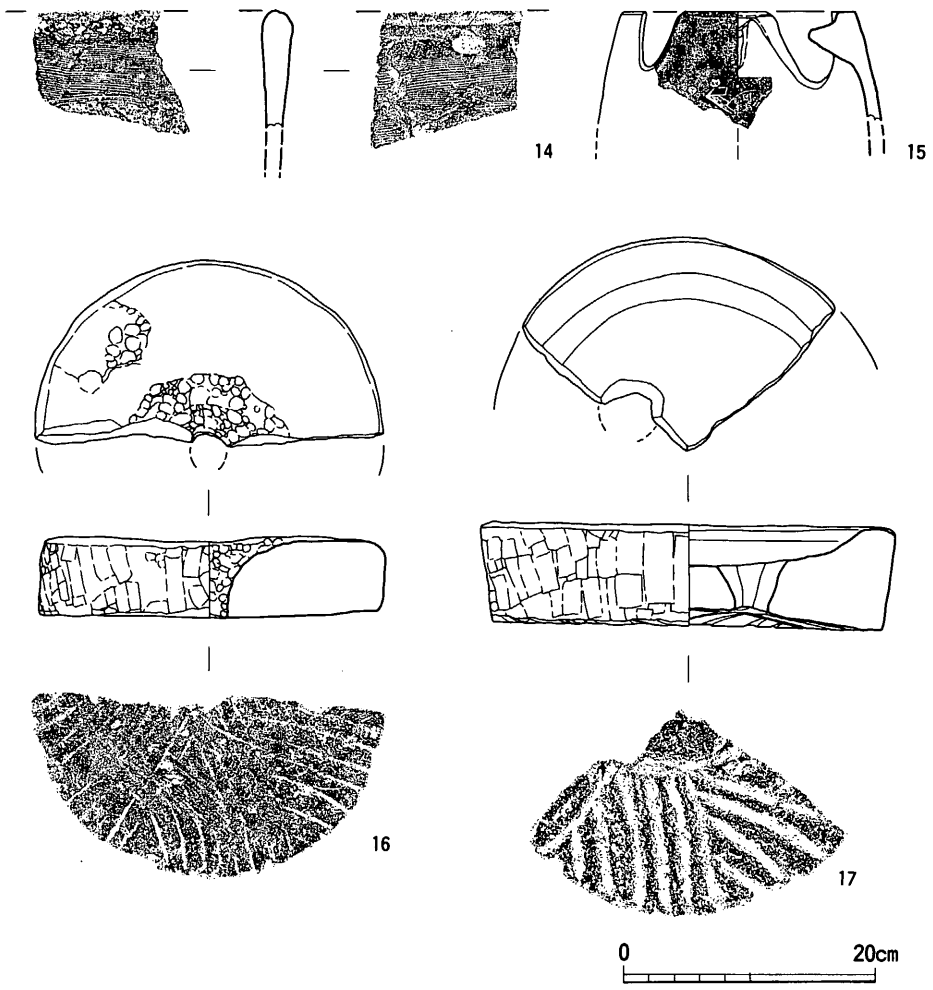
15は瓦器の火鉢で内器面の突起は貼り付け。内器面は暗赤橙色で外器面は灰黒色を呈する。胴部には商標と思われるスタンプがあり「開萬國奉」まで読み取れる。



第 21 図　ピット出土遺物実測図（1/3・1/6）



第 22 図　表採遺物実測図①（1/3）



第 23 図　表採遺物実測図②（1/6）

16・17は石臼の上臼で16は中央に孔が開けられており、下面にはかなり摩滅しているが８本の目が認められる。硬質の砂岩と思われ、加工は粗く孔の縁には細かい彫琢がみられる。17は下にすぼまる孔が開けられており、下面には孔のところから回転方向に合わせた溝と６本の目が掘られている。材質は軟質な凝灰岩と思われ、つくりは丁寧で側面にはノミ状の工具によって平坦に加工されている。

４～17の遺物はいずれも江戸時代後半～近代に位置づけられる。

2．小　結

南丘陵では中世の土壙墓と時期の不明確な土壙が確認されたのみで遺構は希薄だった。遺跡の中心は調査区西方の丘陵の平坦面と思われる。南丘陵は平坦面とは狭い尾根でつながっているだけで遺跡の中心地からみると隔絶した別区のような場所である。平坦面に集落があるとすれば墓地として利用するのに良好な立地条件といえよう。

本遺跡の南と東に谷を挟んで隣接する丘陵にはそれぞれ倉良遺跡と薬水古墳群がありやはり墓地として利用されている。両者とも中世～近世初期の墓制は周溝墓であり本遺跡では見られないものだった。本遺跡の所在する丘陵は「阿蘇４」火砕流堆積物によって形成されており、土壌が軟質なため地上標識をもつ墓は壊れやすいので作られなかったのかもしれない。

土地の古老の話しでは北丘陵に産婆さんの家があったらしく、近世末期～近代の遺物はその住居に伴うものかも知れない。産婆さんの家とすれば人里から離れた山中にあることも首肯できる。

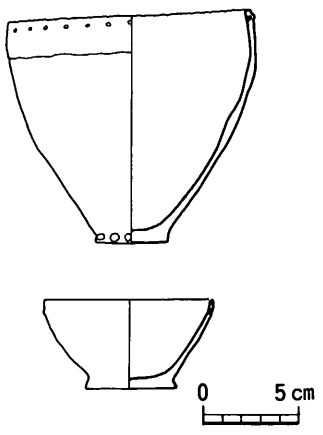
また南丘陵内にあったらしい「城山大明神守護」の石碑（図版16）は日付などの記載はないが異なる石材を組み合わせていることから近代以降のもので表採遺物と近い時期のものである。この石碑が存在する理由は不明確だが、城山大明神とは筑紫神社を拠点とする基山信仰に関係するものらしく、出産に際しての安産祈願のためであったと推察される。

擬孔列文土器について

本遺跡ではピット30から擬孔列文土器が浅鉢・鉢とセットで出土した。擬孔列文土器は包含層出土の資料が多く、遺構に伴う一括資料はまれである。伴出した土器は縄文晩期中葉の黒川式期のものであり擬孔列文土器の出現期にあたる。

擬孔列文土器は口縁部下に径３～５㎜の小孔がめぐるもので器種には深鉢・浅鉢・鉢がある。この文様が朝鮮半島の孔列文土器と酷似することから「孔列文土器」という名称が用いられているが、胎土や調整は縄文土器のそれであり朝鮮半島からの搬入品ではない。したがってここでは模倣品については「擬孔列文土器」と呼称する。

擬孔列文土器は一般に出土量が少なく縄文晩期の様式構造の一角を占めるものではない。また忠実に模倣したもののほかに突帯文の下に孔列をほどこすような文様の



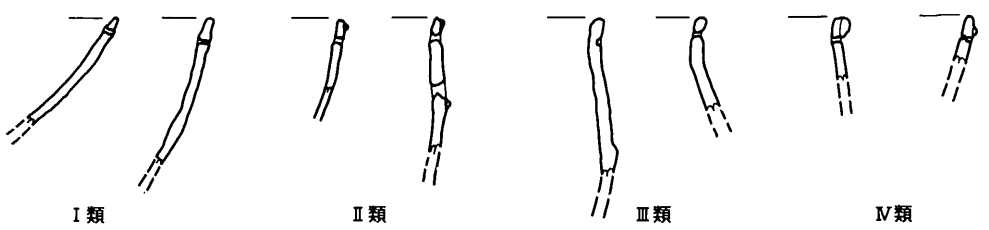
第 24 図　朝鮮半島の孔列文土器(1/6)

融合したものもある。武末純一や田中良之はこの特徴的な現象に早くから着目し、擬孔列文土器は情報が伝播していながら定着しなかった折衷土器であり、定着した丹塗磨研壺と対象的な存在と考えた。また下山覚は擬孔列文土器の存在を九州島と朝鮮半島との間に情報の隔絶がなかった事を示すものとしている。

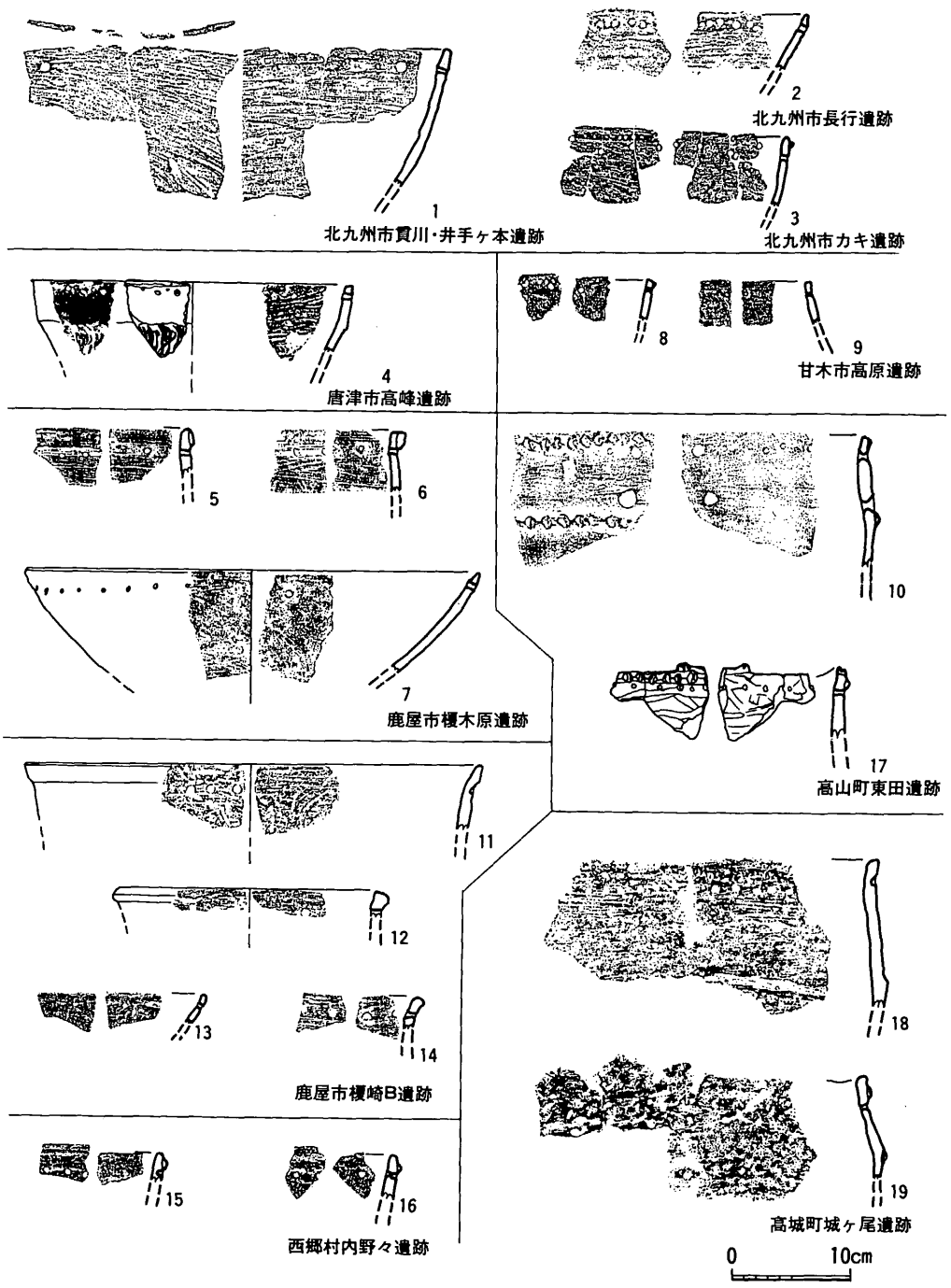
これらの論考はいずれも折衷土器としての擬孔列文土器の在り方に着目したものだが、稲作の伝播との関係から位置づけようとする考え方もある。擬孔列文土器の出現する黒川式期には籾痕のついた土器などが存在しており、すでに国内にコメが持ちこまれていることは確実である。これまでのところ当該期には稲作が受容された確実な証拠は発見されておらず、擬孔列文土器とともに伝播した最初の稲作技術はどの地域でも定着しなかった「失敗作」と捉えられている。しかし稲作に関連する遺物が出土していないことは擬孔列文土器が稲作技術に伴って伝播した事を示す遺物もまた確認されていないということでもある。このことを考慮した上で擬孔列文土器の分布からその性格について若干の考察を加えたい。擬孔列文土器は口縁部片でなければ認識できず、しかも絶対数が少ないために資料収集が難しく今回入手しえた資料では十分とはいえないがある程度の推察はできるだろう。

まず分類だが第25図のように4類に分けることができた。Ⅰ類は典型的な擬孔列文土器で内器面から穿孔されたものである。Ⅱ類は刻目突帯文と融合しており孔列文が刻目突帯文の下に施されている。穿孔方法はⅠ類と同じで内器面から穿孔されている。Ⅲ類は外器面からあるいは内外両方から穿孔しており、忠実には模倣されていないものである。Ⅳ類は刻目のない突帯文と融合するものである。

これらの分布をみると次のようなことがわかる。まず北部九州で出土するのはⅠ類・Ⅱ類のみであり、南九州ではⅠ類も見られるが多くはⅢ類・Ⅳ類であり、一口に「孔列文土器」といっても大きく九州の南北でわかれていることがわかる。忠実に模倣したⅠ類が北部九州に多く、南九州に穿孔方法の異なるⅢ類・Ⅳ類が多いことは朝鮮半島からの情報が北部九州により多く伝わったことを示している。朝鮮半島から近い北部九州にⅠ類が多いことは当然だが、南九州でもⅠ類が分布し独自の折衷型の土器が製作されていることについてはどう考えるべきなのだろうか。



第 25 図　擬孔列文土器分類模式図



第 26 図　各地の擬孔列文土器（1/6）

時期は異なるが擬孔列文土器と同様に朝鮮半島と関係の深い無文土器・擬無文土器と組織痕土器の分布を擬孔列文土器のそれと比較してみよう。まず無文土器・擬無文土器の分布だが北部九州の特に筑紫平野から佐賀平野に集中し、大阪など関西に広がりをみせ南九州には見られない。九州においては擬孔列文土器に比べて分布が狭い地域に限られる。擬無文土器の分布は銅や鉄など朝鮮半島からの物の流れに沿ったものと考えられる。

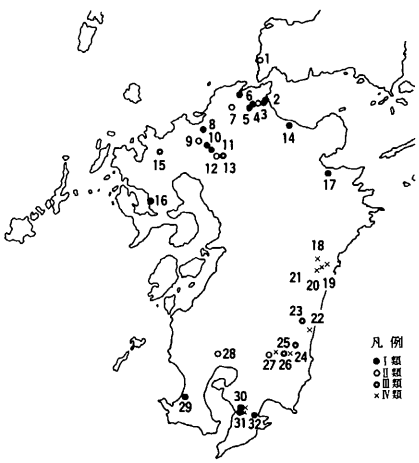
これに対して擬孔列文土器は南九州にも分布の集中がみられるという大きな相違点があり、かつ北部九州においても散見される程度で擬無文土器のようなまとまりをもたない。このことから同じ朝鮮半島の無文土器を模したものでもその在り方が異なるといえる。

次に擬孔列文土器とほぼ併行する時期で朝鮮半島との関わりが指摘される組織痕土器の分布を見てみると西北九州から南九州一帯に広がっており擬孔列文土器の分布と重複する部分が多い。擬孔列文土器は組織痕土器と共伴する例も多く、唐津市高峰遺跡では組織痕土器に孔列文のあるものもある。

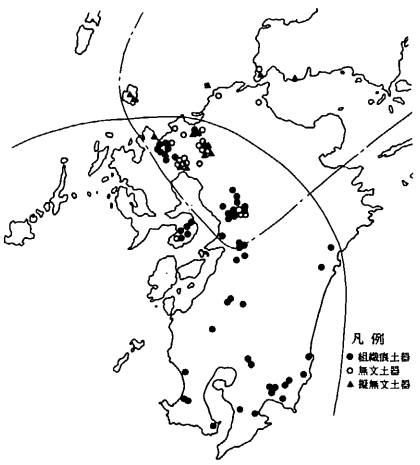
このことから擬孔列文土器の分布は組織痕土器のそれに近く、北九州・大分・山口などへの広がりは交流範囲の拡大を示すものかもしれない。つまり擬孔列文土器は当時の朝鮮半島との交流を示すものではあるが必ずしも稲作の伝播と直接結びつくものではない。むしろ組織痕土器と在り方が近いことは擬孔列文土器は縄文時代の交流と性格的にはそれほど変わらないのではないだろうか。

これは出現期の支石墓の在り方とよく似ている。出現期の支石墓は西北九州人に取り入れられた墓制であり渡来人や稲作とは必ずしも関係しておらず、縄文人が情報から模倣したものの１つとみることができる。

擬孔列文土器や国内の支石墓は縄文晩期中葉以降からみられるようになることから、この時



第 27 図　擬孔列文土器分布図



第 28 図　組織痕土器・無文土器・擬無文土器分布図

期から朝鮮半島との交流が活発になったことがうかがえる。活発化した交流の中でコメなどの生産物や墓制・土器製作技術の情報が西北九州を中心に伝わり、各地域で選択的に受容されたと考えられる。

つまり玄海灘沿岸の一部地域は稲作の情報を受け入れ、西北九州は支石墓を取り入れている。北九州地域では擬孔列文土器が目立つことから土器の製作技術を受容したのではないだろうか。こうした受容の仕方の違いが弥生時代初頭の地域差を形成したと考えられる。したがって擬孔列文土器もまた交流のなかで入手した情報の一つであったと考えたい。

分布図掲載遺跡一覧表

1 下関市吉母浜遺跡
2 北九州市貫川遺跡
3 北九州市貫・井手ヶ本遺跡
4 北九州市カキ遺跡
5 北九州市長行遺跡
6 北九州市黒崎貝塚
7 小竹町遠賀川床採集品
8 福岡市野多目遺跡
9 春日市門田遺跡
10筑紫野市久良々遺跡
11小郡市津古土取遺跡
12甘木市高原遺跡
13浮羽町柳瀬遺跡
14新吉富村宇野台遺跡
15唐津市高峰遺跡
16大村市野田の久保遺跡
17狭間町北原遺跡
18西郷村内野々遺跡
19東郷町樋田遺跡
20東郷町下水流遺跡
21東郷町赤松遺跡
22西都市宝財原遺跡
23新富町祇園原遺跡
24田野町黒草遺跡
25高崎町様屋敷第2遺跡
26都城市中尾山・馬渡遺跡
27蒲生町竹牟礼遺跡
28金峰町木落遺跡
29鹿屋市榎崎B遺跡
30鹿屋市榎木原遺跡
31高山町東田遺跡

このほか未確認だが福岡市板付遺跡・人吉市アンモン遺跡・鹿屋市水の谷遺跡・志布志町小迫遺跡で出土している。

参考文献

下山　覚「南部九州のいわゆる『孔列文土器』について」
『鹿児島大学考古学会報』第5号　1987
武末純一「縄文晩期農耕論への断層」『古文化談叢』第30集　1987
武末純一「北九州市長行遺跡の孔列文土器」『記録』第24冊　1987
武末純一「近年の時代区分論議－特に弥生時代の開始を中心に－」
『日本における初期弥生文化の成立　横山浩一先生退官記念論文集』Ⅱ　1991
田中良之「縄紋土器と弥生土器　1．西日本」『弥生文化の研究』第3巻　1986
家根祥多「遠賀川式土器の成立をめぐって」『論苑考古学』1993

第4節　福岡県筑紫野市久良々遺跡出土の中世人骨

中橋　孝博（九州大学比較社会文化研究科）

はじめに

福岡県筑紫野市一帯は、北の福岡平野と南の筑紫平野のちょうど境界域に位置し、古来より筑前、筑後、肥前という三国の国境にもなってきた地域である。これまでは主に弥生時代や近世期の古人骨資料が多く出土し、たとえば弥生人骨については強度の渡来人骨的特徴や激しい戦闘の痕跡が見出されるなど、当地のそうした地理的、社会的環境との関係を窺わせる知見が得られている。しかし、中世期については依然として人骨資料が少なくその特徴は不明のままであり、当地における人骨形質の時代変化を追う上で空白域として残されたままである。

1993年8月、当地における道路工事（国道3号線バイパス）に伴う発掘調査（福岡県教育委員会）によって、新たに中世人骨が出土した。僅かに2体でしかも保存不良のためにその詳しい特徴を明らかにすることは出来なかったが、分析の結果、いくつか知りえたところもあるので、ここにその結果を報告しておく。

遺跡・資料・方法

久良々遺跡は、福岡県筑紫野市大字筑紫に所在する。1993年8月、国道3号線バイパス工事に伴う発掘調査が福岡県教育委員会によって実施され、2基の土壙墓から人骨が出土した（表17）。他にも墓壙らしき遺構が5基検出されているが、いずれも人骨は確認されなかった。

表17　出土人骨

番号	性別	年齢	埋葬施設	頭位	埋葬姿勢	副葬品
1	女性	成年	土壙	北北西	不明	土師皿
2	男性？	成年？	土壙	北西	右側臥屈肢？	

1号人骨に副葬されていた土師皿に関する考古所見から、15～16世紀のほぼ室町時代に属する遺骨と見なされている。

人骨の一部については、Martin（1957）に従って計測を行った。また、1号人骨については主に四肢の計測値に基づいて性判定（中橋、1988）を行った。

結　果

(1) 1号人骨

土壙墓中に、体軸をほぼ北北西に向けた屈肢状態で出土した。埋葬姿勢の詳細は不明である。なお、副葬品として土師皿が下肢近くから出土している。

人骨は、歯を伴う左下顎体と上顎の遊離歯の他、脊椎、寛骨の各小片、両大腿骨、右脛骨、腓骨が確認された。しかしいずれも保存不良で計測値が得られたのは左大腿骨のみに留まった。その周径や歯のサイズから見て女性の可能性が強く、また歯の咬耗が比較的軽度であることから、成年個体と見なされる。

残存歯の歯式を以下に示す。

／ $\dot{M}^2$ ／ ／ ／ $\dot{C}$ ／ $\dot{I}^1$	$\dot{I}^1$ $\dot{I}^2$ ／ $\dot{P}^1$ $\dot{P}^2$ ／ $\dot{M}^2$ ／
／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	$\dot{I}_1$ ／ P_1 P_2 M_1 ／ ／

（／：欠損、・：遊離歯）

左上第2大臼歯の遠心歯頸部に齲喰が認められ、またほぼ全歯にかなり明確なエナメル質減形成が見られた。

大腿骨の計測結果を比較群と共に表2に示す。

表18　大腿骨計測結果一覧表

Martin No.	久良々（中世）	吉母浜[1)]（中世） N	M	材木座[2)]（中世） N	M	天福寺（近世） N	M	九州[3)]（現代） N	M
6．中央矢状径	25	25	23.3	27	22.9	21	23.6	13	23.6
7．中央横径	25	28	24.8	27	23.5	21	24.0	13	23.2
8．中央周径	79	28	76.1	26	73.8	21	75.2	13	74.2
9．骨体上横径	31	28	29.1	37	29.1	17	27.7	13	27.5
10．骨体上矢状径	21	28	20.9	37	20.9	17	22.7	13	21.3
6/7 中央断面示数	100.0	28	94.5	27	94.5	21	98.7	13	102.0
10/9上骨体断面示数	67.7	28	72.0	37	72.0	17	82.3	13	77.1

1）中橋・永井（1956）　2）鈴木（1956）　3）阿部（1955）

得られた計測値で見るかぎり、やや頑丈な骨体を持ち、骨体上部には少し扁平傾向が認められる。粗線の発達は比較的弱い。

(1)2号人骨

頭骨、及び下肢骨の位置から判断して、頭をほぼ北西に向けた屈肢状態で検出された。顔面（上・下顎）や右錐体の位置、及び下肢骨の位置から考えて、右側臥屈肢の姿勢で埋葬された可能性が考えられる。いずれもしかし、骨は小片化しており、わずかに歯のみがほぼ原形が保って出土した。

歯のサイズが比較的大きく男性の可能性が強い。また咬耗はごく弱く、かなり若い個体と見なされ、まだ若年個体である可能性も否定できない。

残存歯の歯式を以下に示す。齲喰はなく、明瞭なエナメル質減形成も認められない。

$\dot{M}^2\ \dot{M}^1\ \dot{P}^2\ \dot{P}^1\ \dot{C}\ \dot{I}^2\ \dot{I}^1$	$\dot{I}^1\ \dot{I}^2\ \dot{C}\ \dot{P}^1\ \dot{P}^2$ ／ ／
$\dot{M}_2\ \dot{M}_1\ \dot{P}_2\ \dot{P}_1\ \dot{C}\ \dot{I}_2\ \dot{I}_1$	$\dot{I}_1\ \dot{I}_2\ \dot{C}\ \dot{P}_1\ \dot{P}_2\ \dot{M}_1\ \dot{M}_2$

（／：欠損、・：遊離歯）

考　察

わが国の中世人骨には、ほぼ全国的に強度の長頭傾向や低顔、歯槽性突顎など、やや特異な時代特性の認められることが知られている（鈴木、1956：内藤、1973：中橋・永井、1985：佐熊、1986)。九州北部の中世人については、博多等で小数の出土はあるものの（中橋、1989)、しかしまだ全体的に資料が少なく、その詳しい特徴は明らかではない。久良々遺跡出土の中世人骨についても、残念ながら保存不良なため形態的な特徴についてはほとんど摑めなかった。ただ、1号人骨に明瞭なエナメル質減形成が認められたこと、及び、2号人骨がほぼ北に頭を向け、右側臥で埋葬されていた可能性のある点を挙げておきたい。いずれもまだ1体づつの所見であり、現時点での立ち入った言及は避けるべきだろうが、例えば北頭位、右側臥の埋葬姿勢は、近年、他地域の中、近世遺跡でもかなりの事例が知られるようになってきている。当地でも近世の原田遺跡（未報告）において、類似の姿勢で統一された状況が見られたが、その一方、博多では統一した埋葬姿勢は見いだし難く、おそらくは宗派との関係もあってかなりの地域性があるものと考えられる。埋葬習俗の一つとして、その起源や地域性、時代推移等、今後とも注目していきたい。

謝　辞

当人骨を分析する機会を与えていただき、種々の御教授をいただいた福岡県教育委員会の諸先生に深謝いたします。

文　献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」人類学研究 2

Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. 1. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

内藤芳篤（1973）：「尾窪－熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査」
熊本県文化財調査報告第12集　熊本県教育委員会

中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）六興出版

中橋孝博（1989）：「博多遺跡群第26次調査・築港線関係第 3 次調査出土の中世人骨について」
福岡市埋蔵文化財調査報告書204　福岡市教育委員会

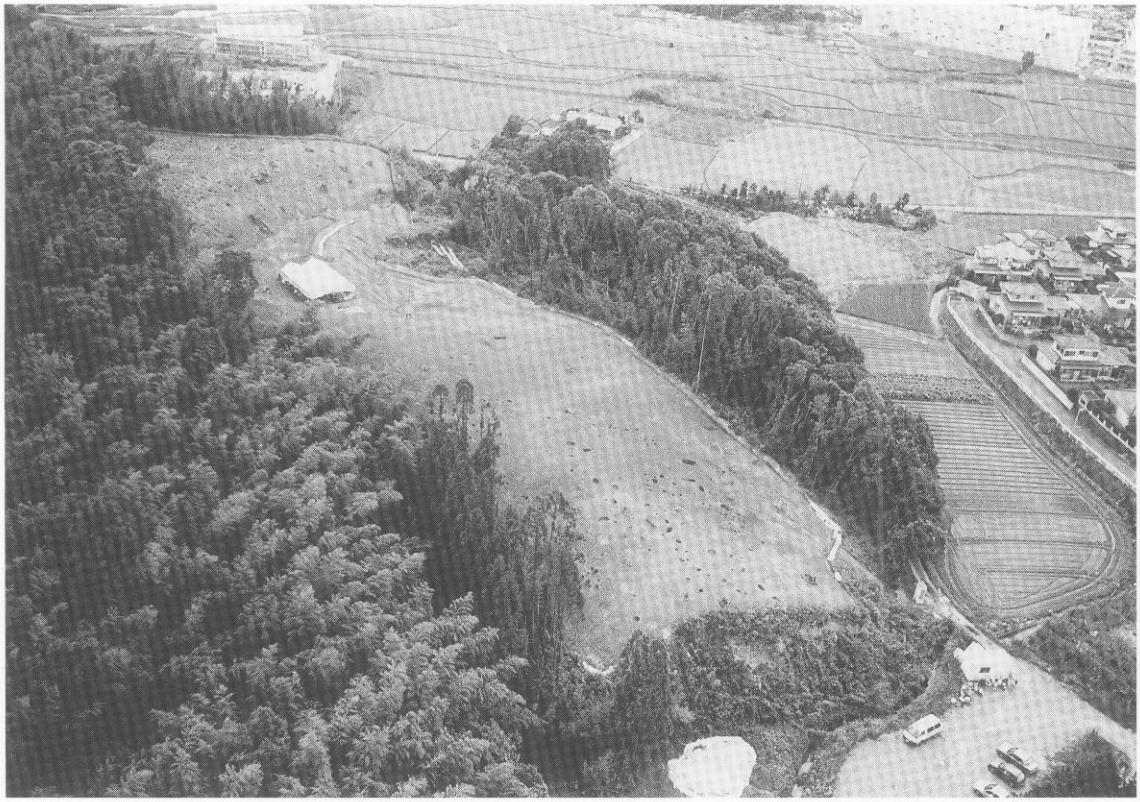
中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨」吉母浜遺跡
下関市教育委員会

佐熊正史（1986）：「中世九州人頭蓋の人類学的研究」長崎医学会雑誌

鈴木　尚（1956）：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」岩波書店

図　　版

久良々遺跡



1．久良々遺跡全景（南西から）



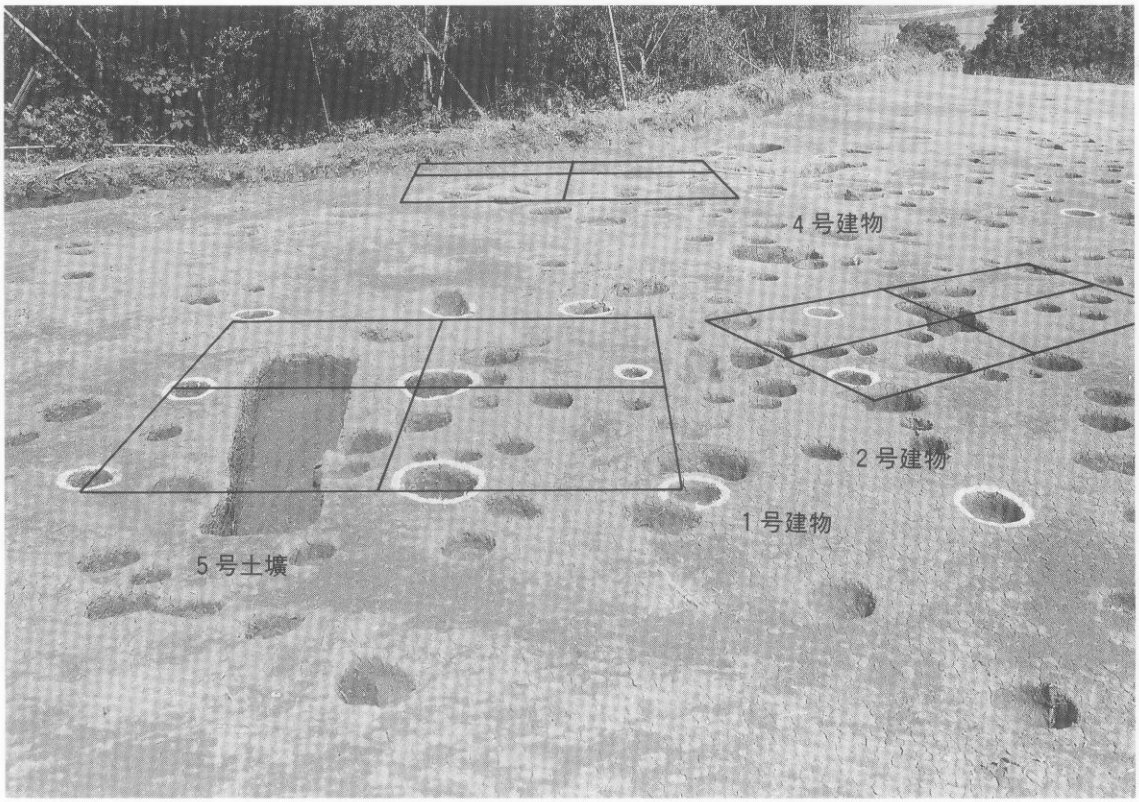
2．遺跡から南方の倉良遺跡を望む



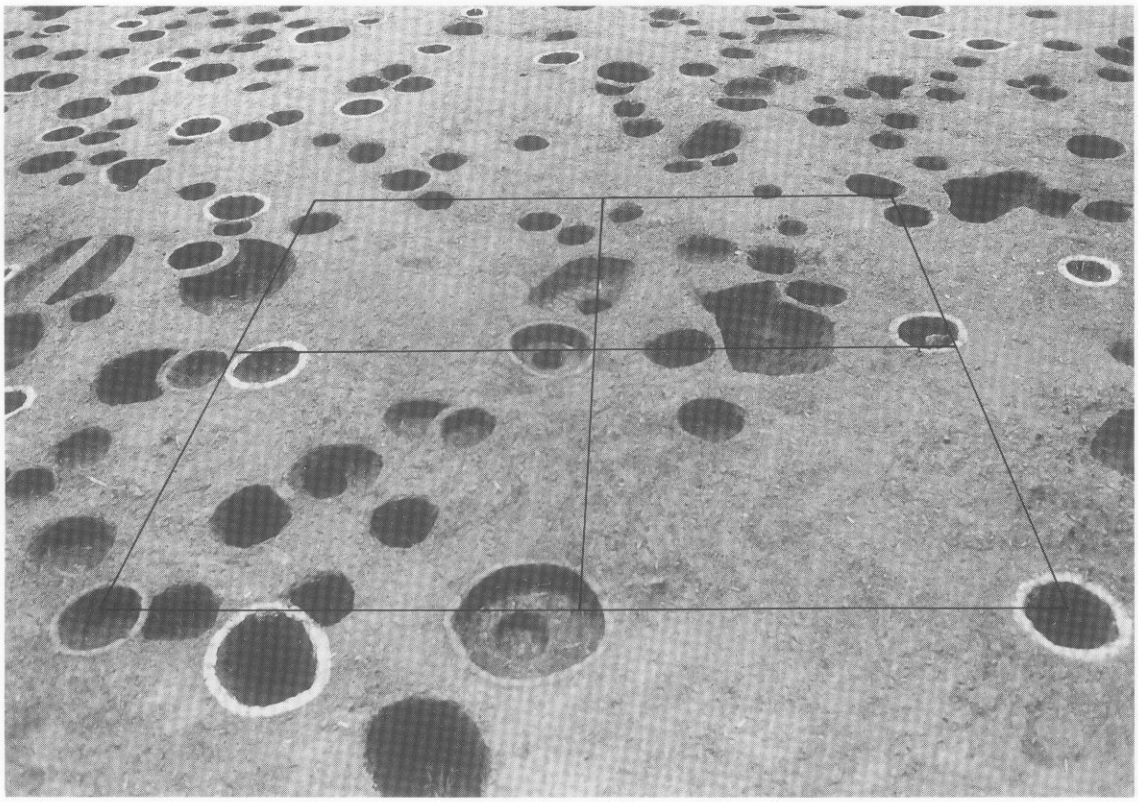
1．北調査区全景（南から）



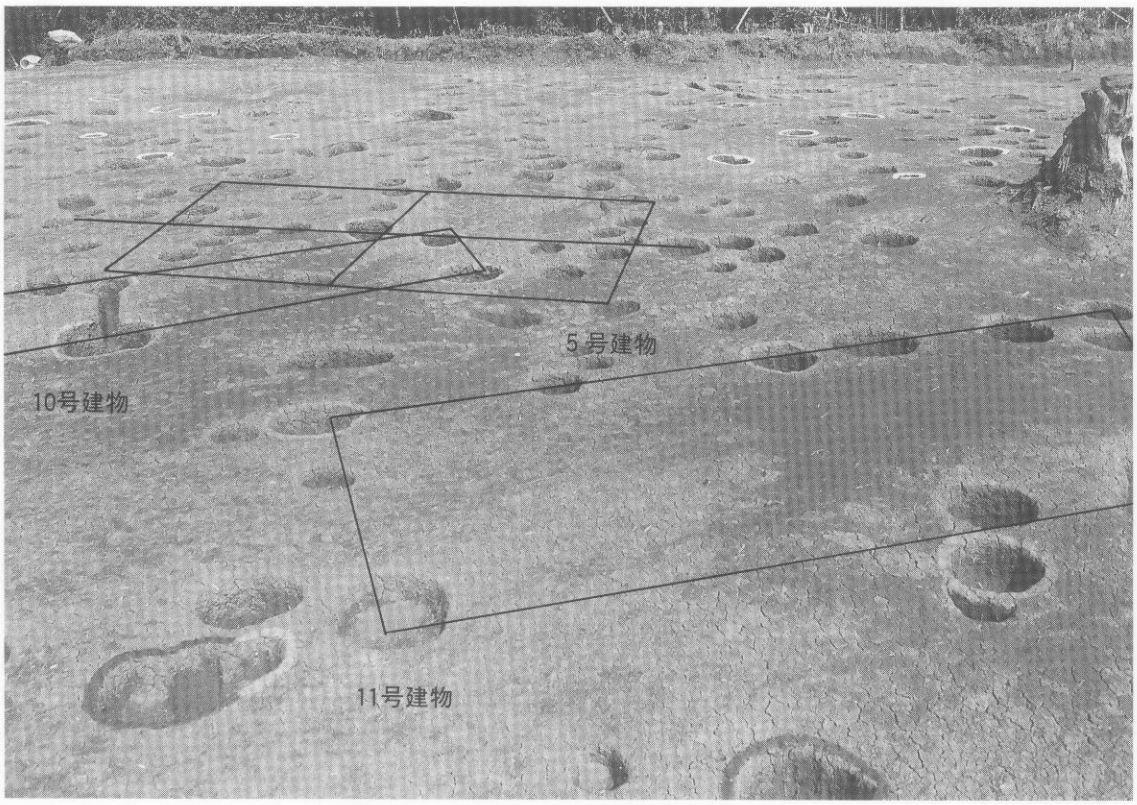
2．南調査区土壙群（北東から）



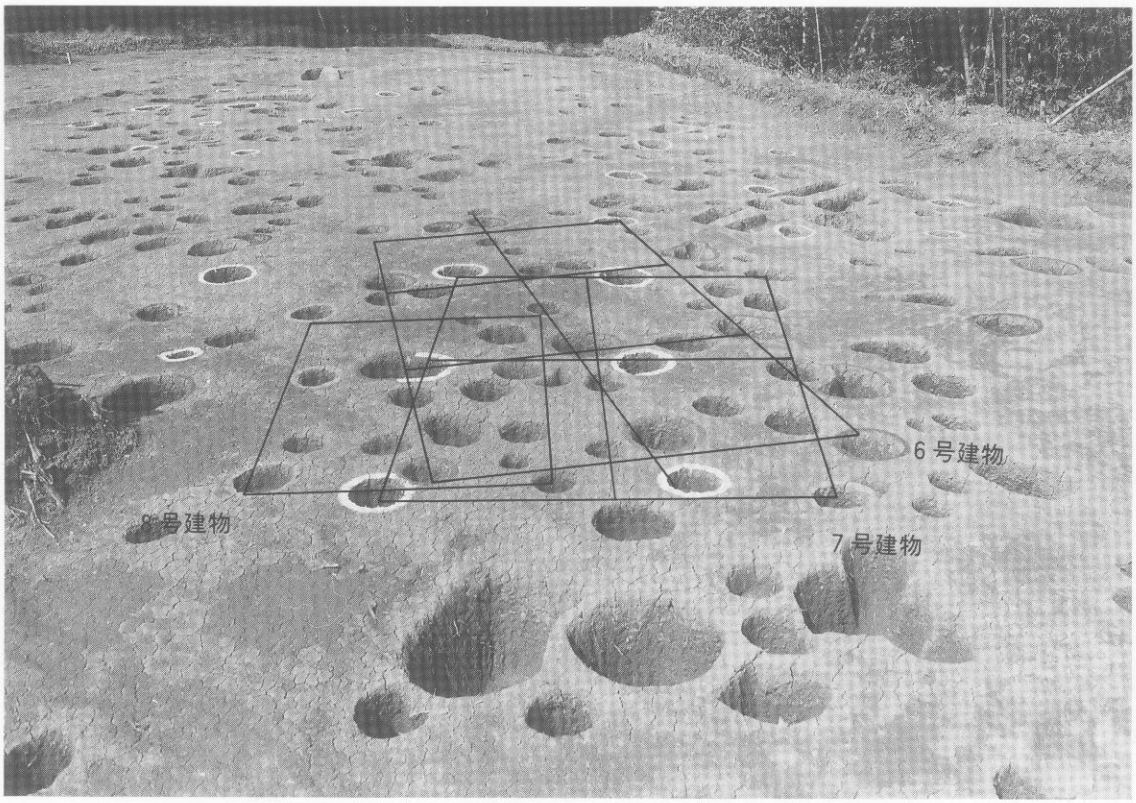
1．1・2・4 号建物、5 号土壙（西から）



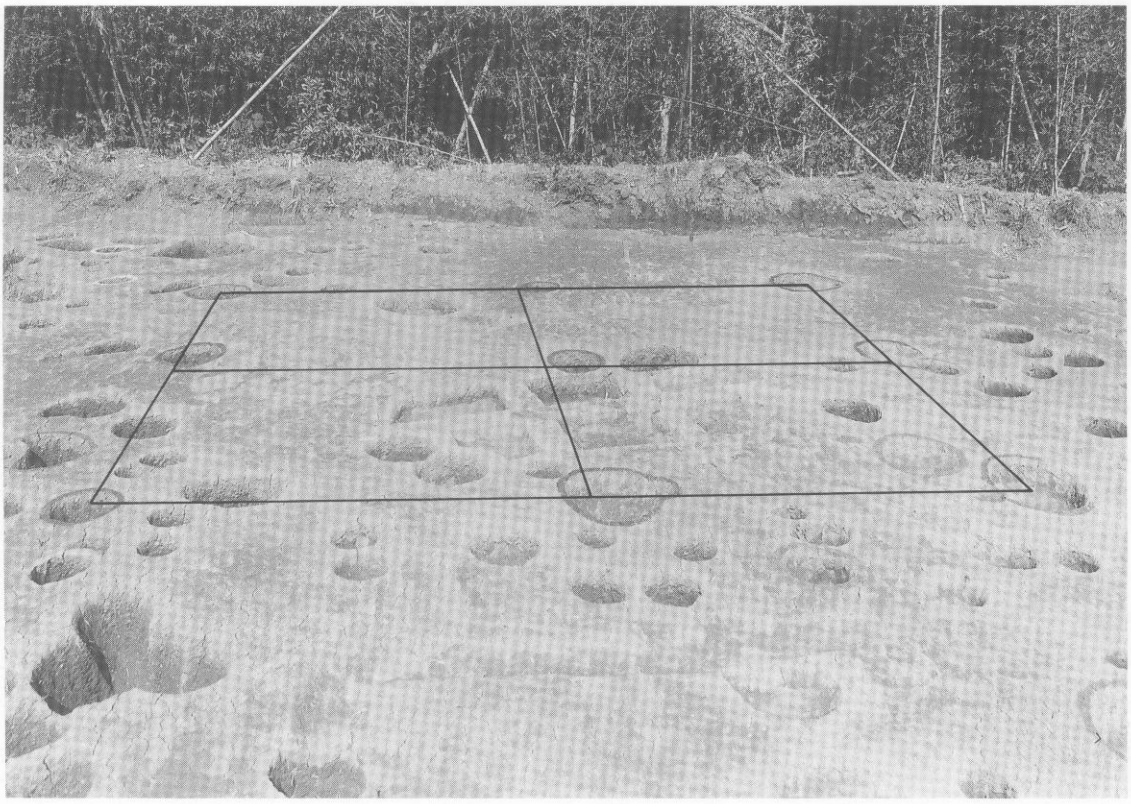
2．3 号建物（北西から）



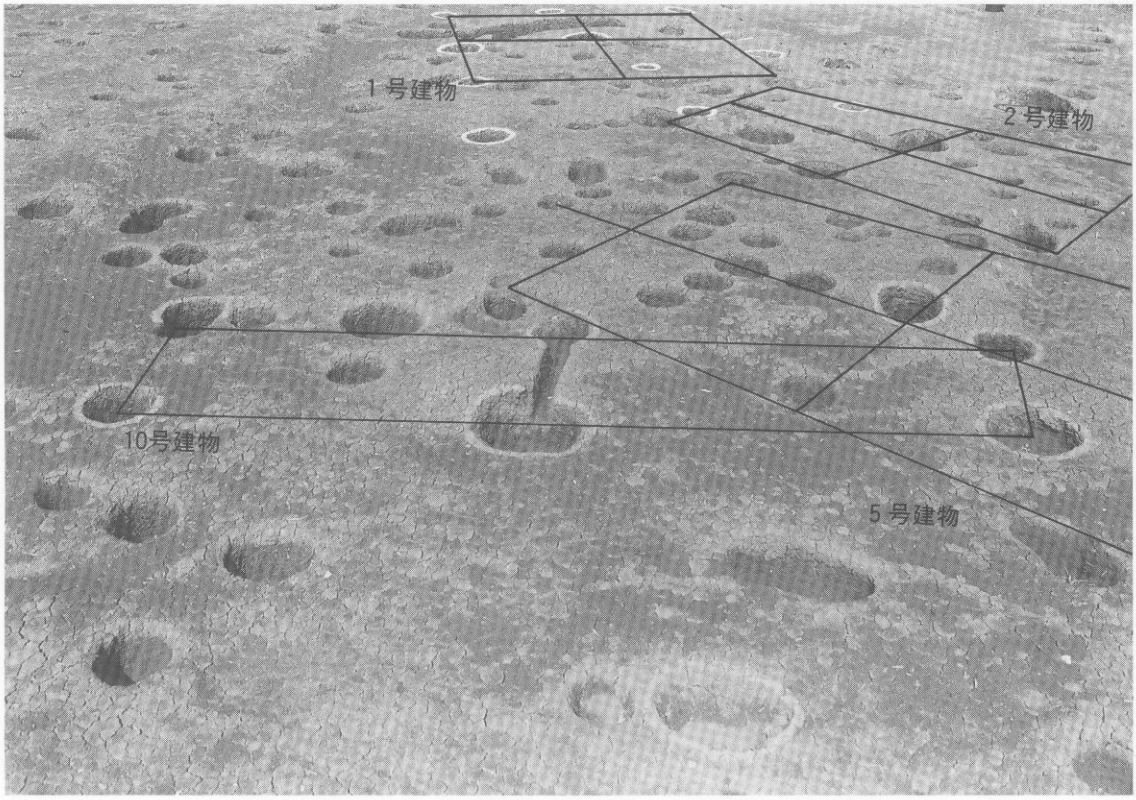
1．5・10・11号建物（南西から）



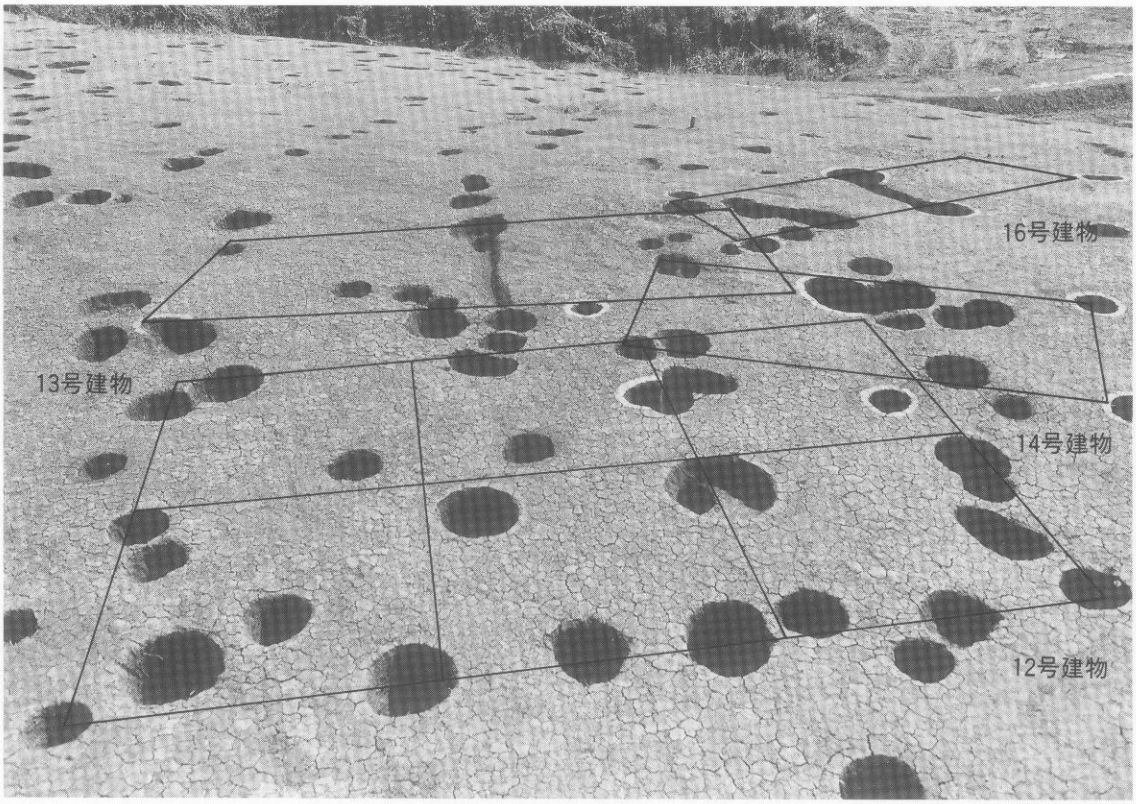
2．6～8号建物（東から）



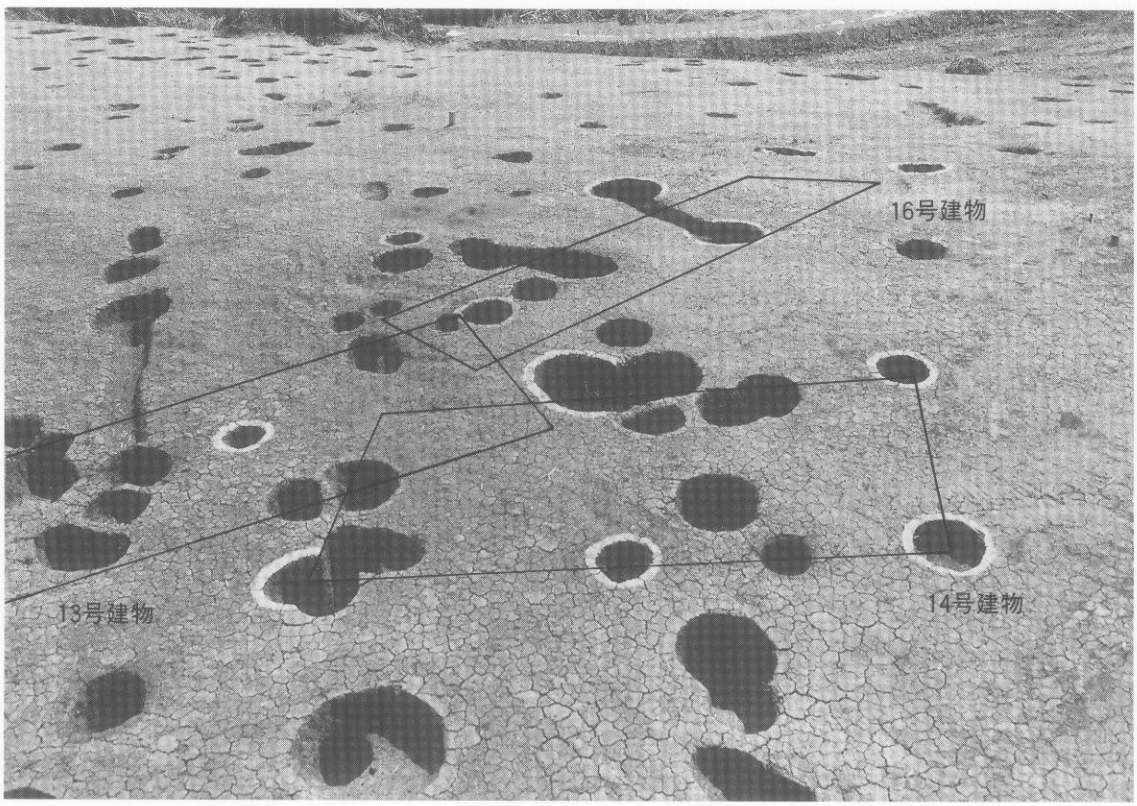
1．9号建物（南東から）



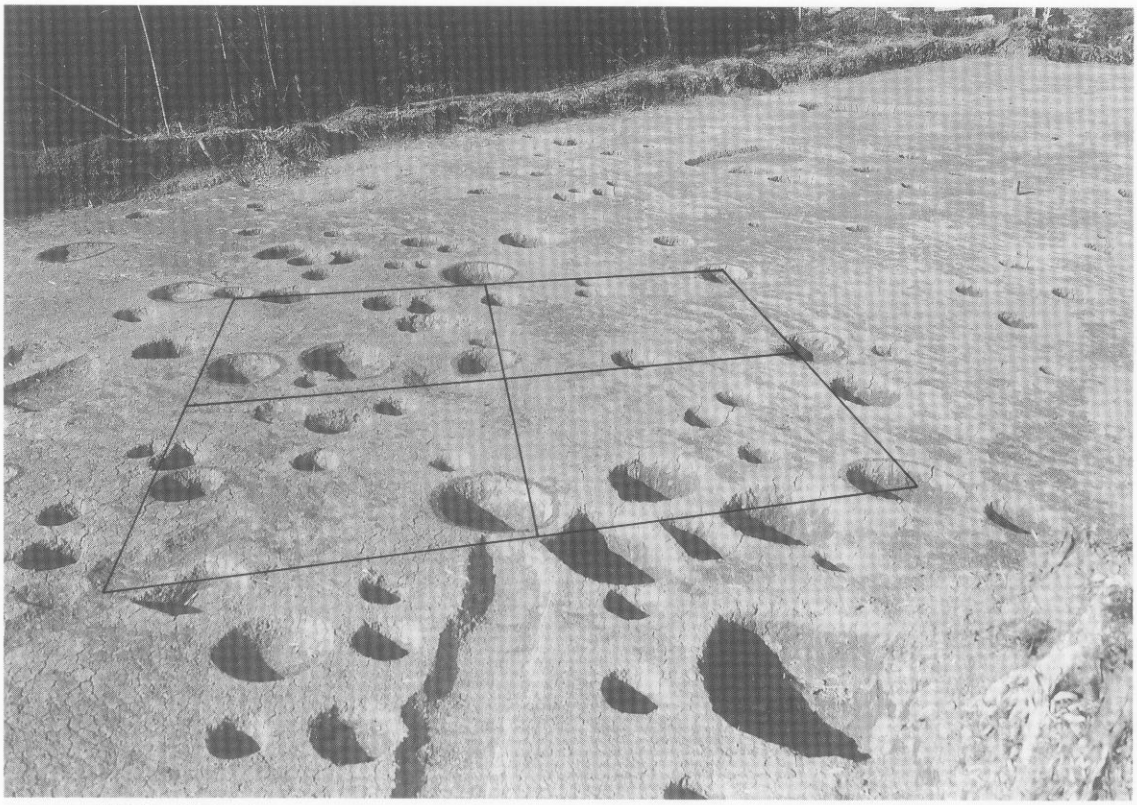
2．1・2・5・10号建物（南西から）



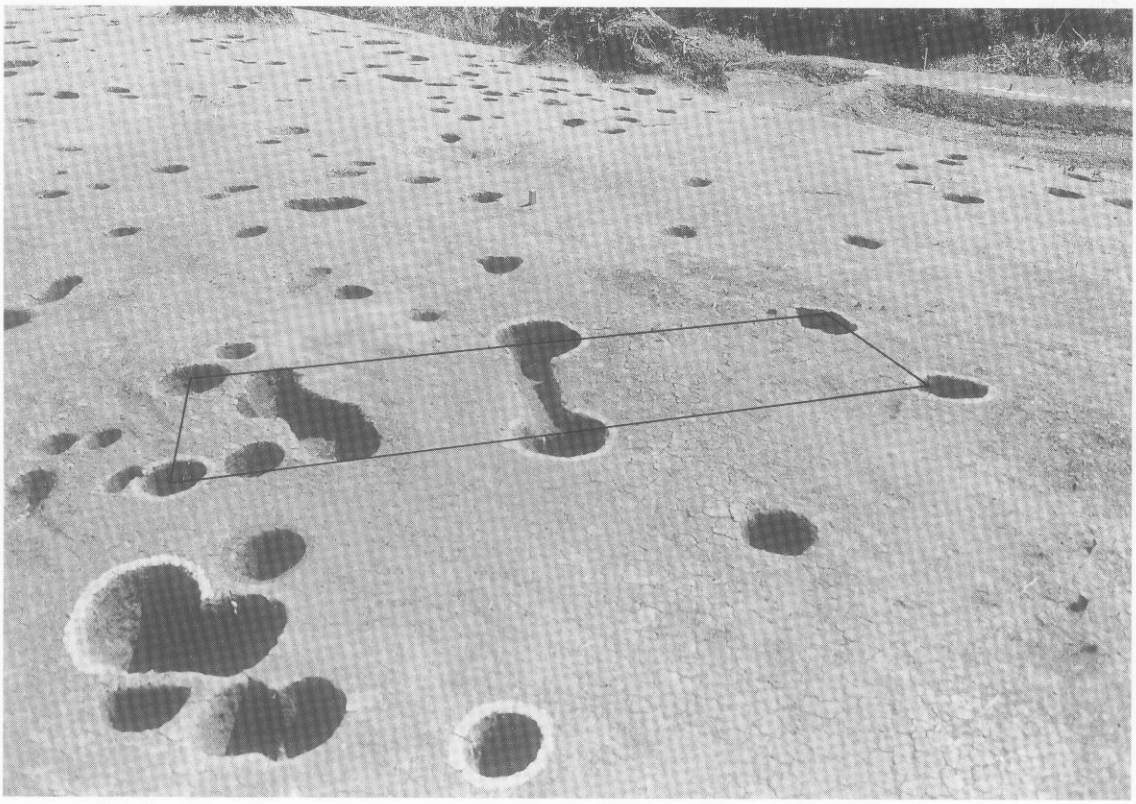
1．12～14・16号建物（西から）



2．13・14・16号建物（北西から）



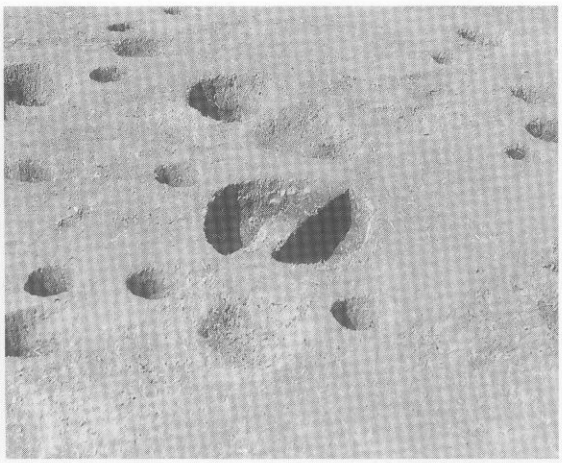
1．15号建物（南から）



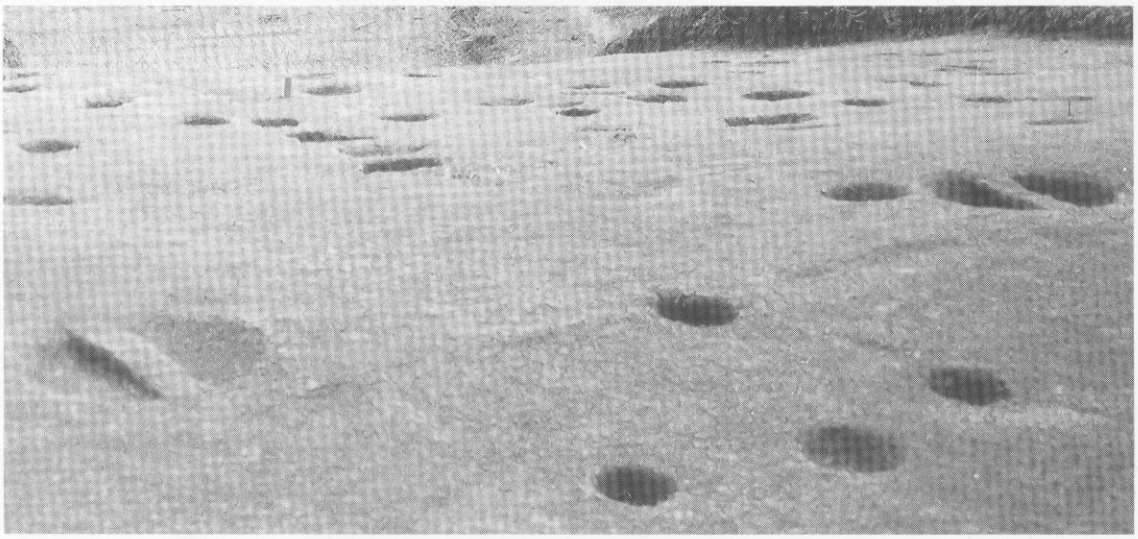
2．16号建物（西から）



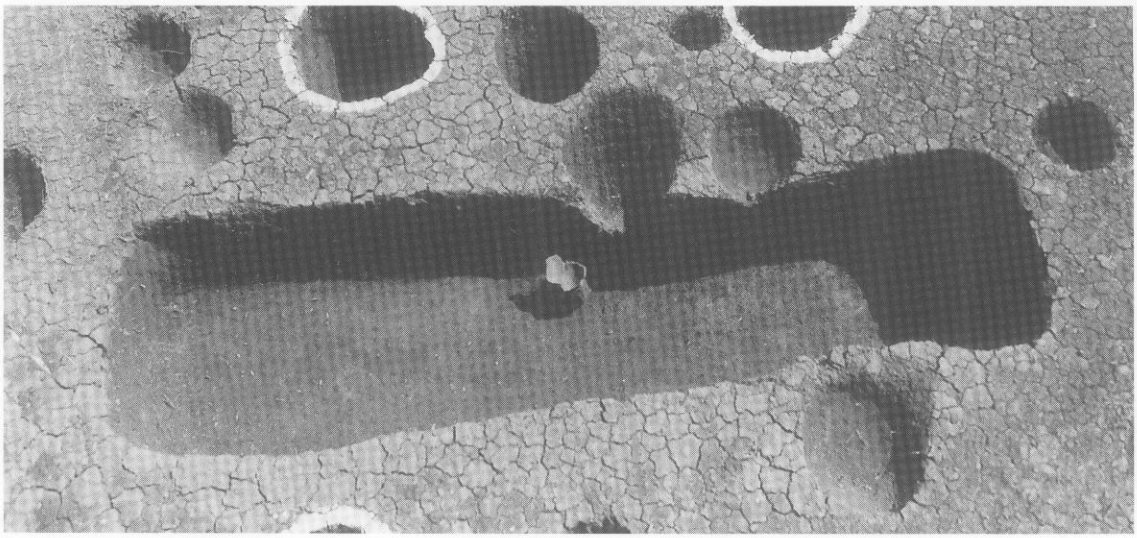
1．1号土壙（北東から）



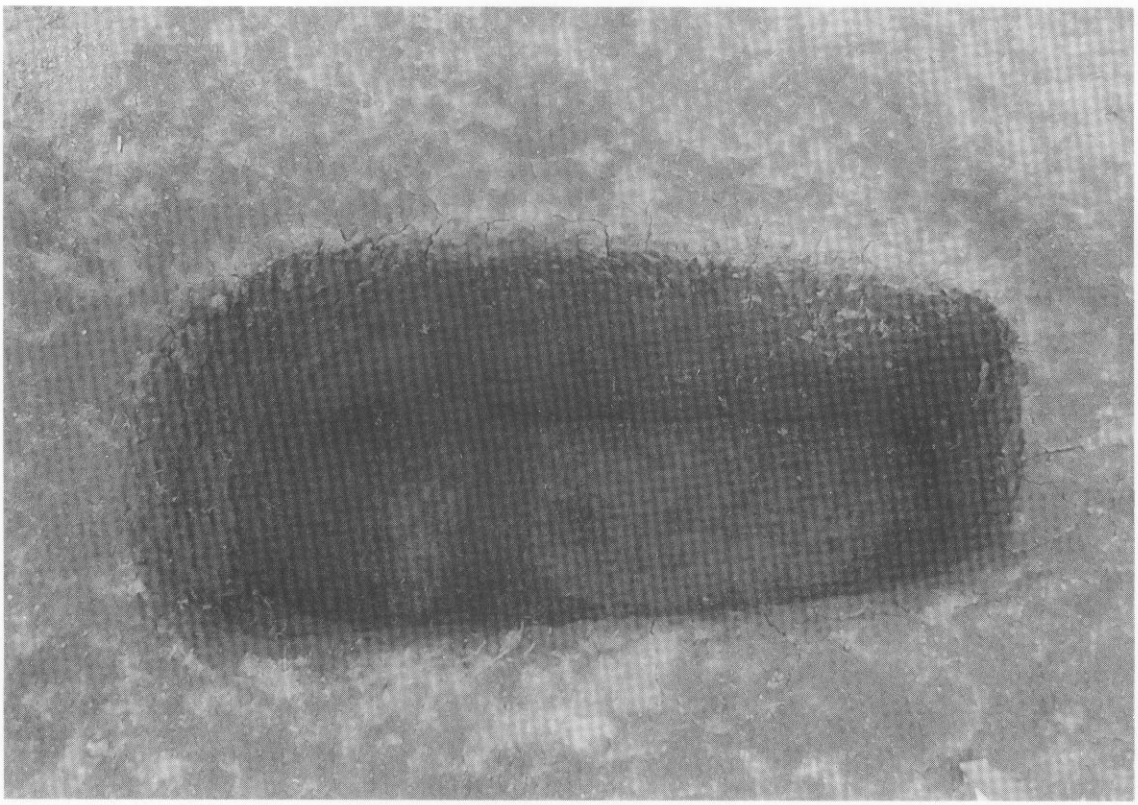
2．2号土壙（北東から）



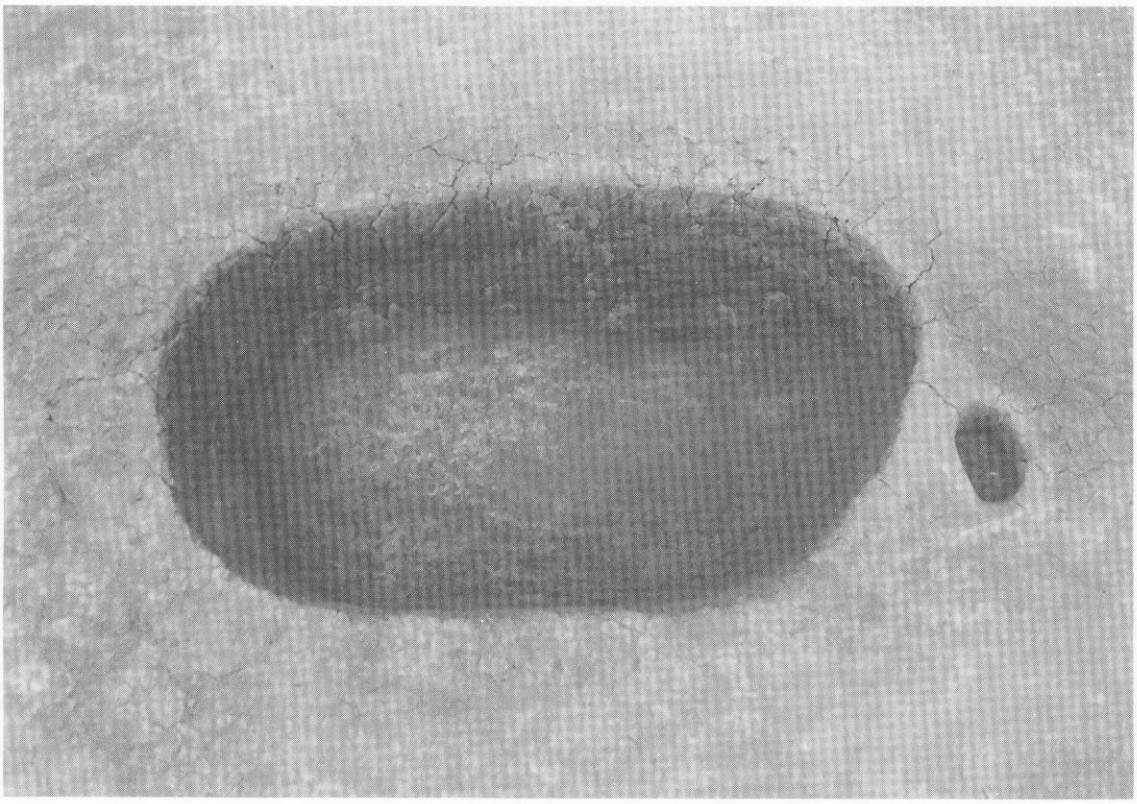
3．3・4号土壙（北西から）



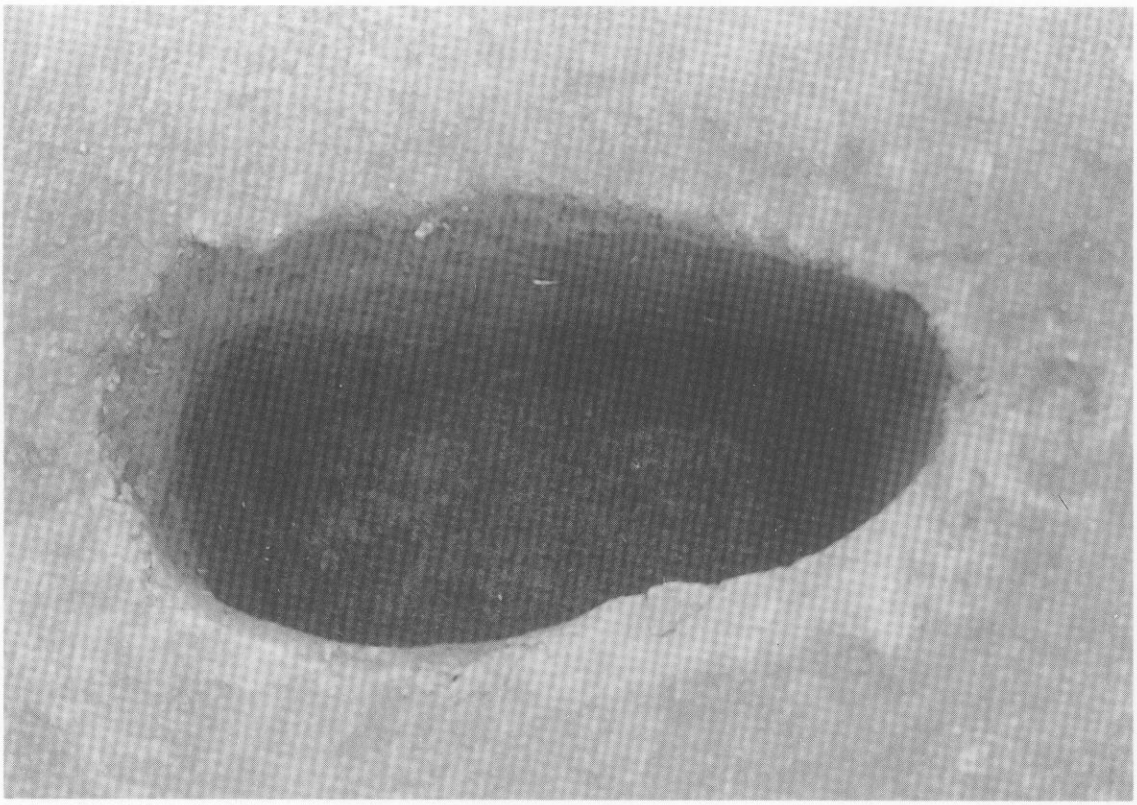
4．5号土壙（北西から）



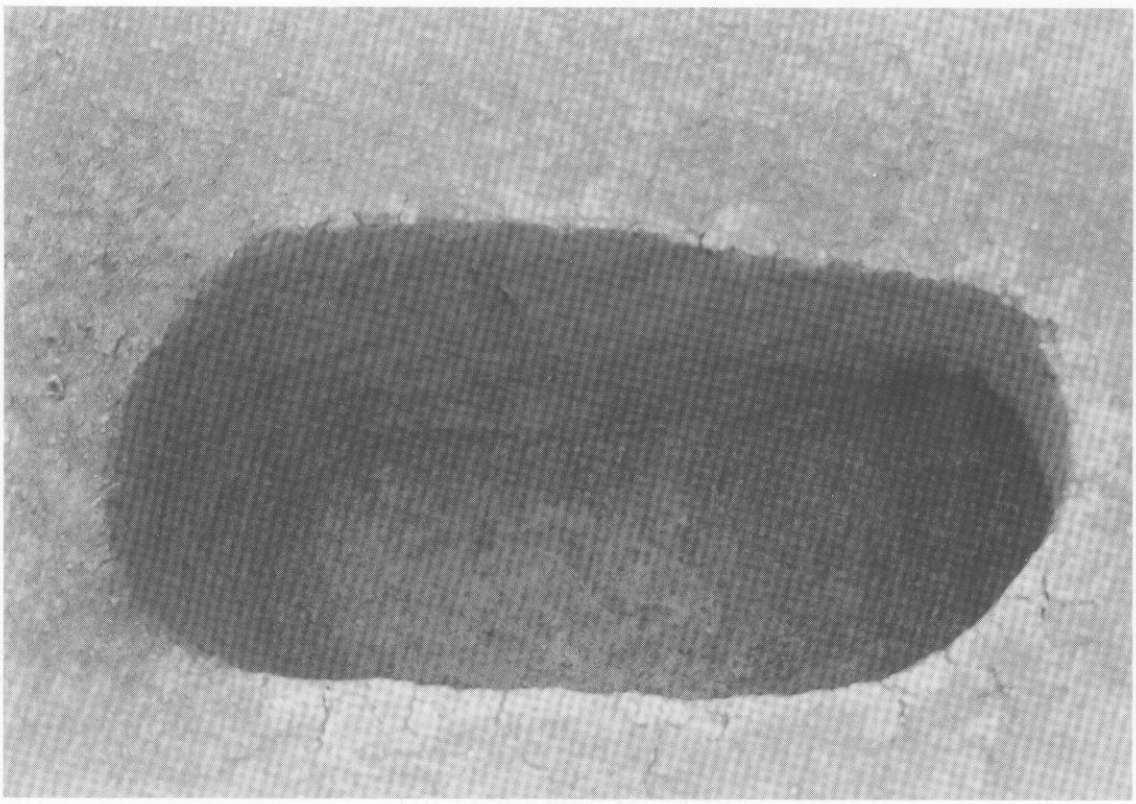
1．6号土壙（南から）



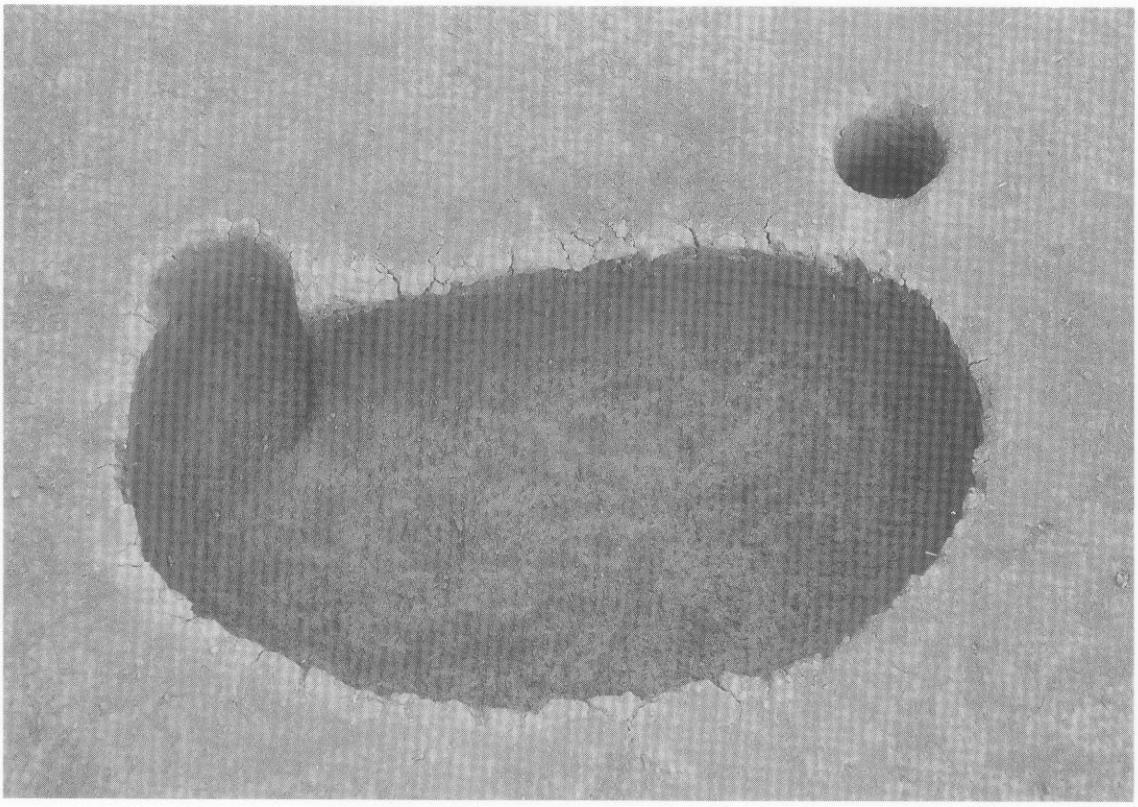
2．7号土壙（南から）



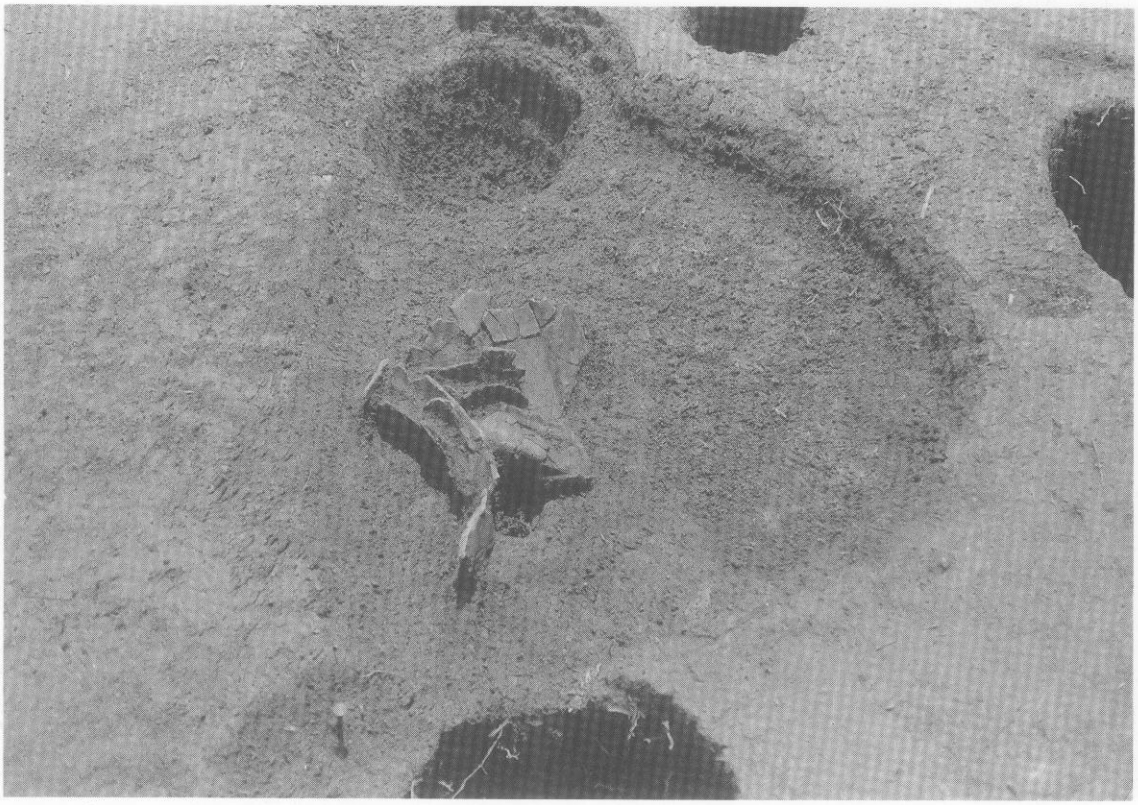
1．8号土壙（南から）



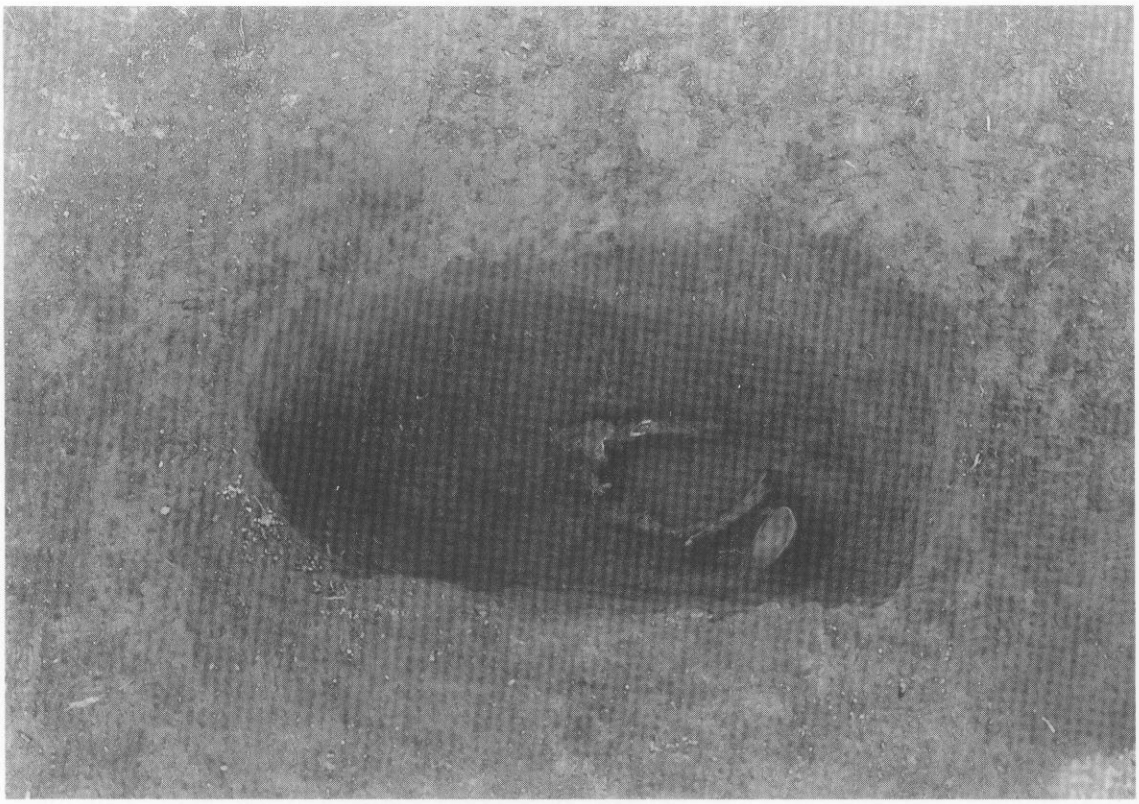
2．9号土壙（東から）



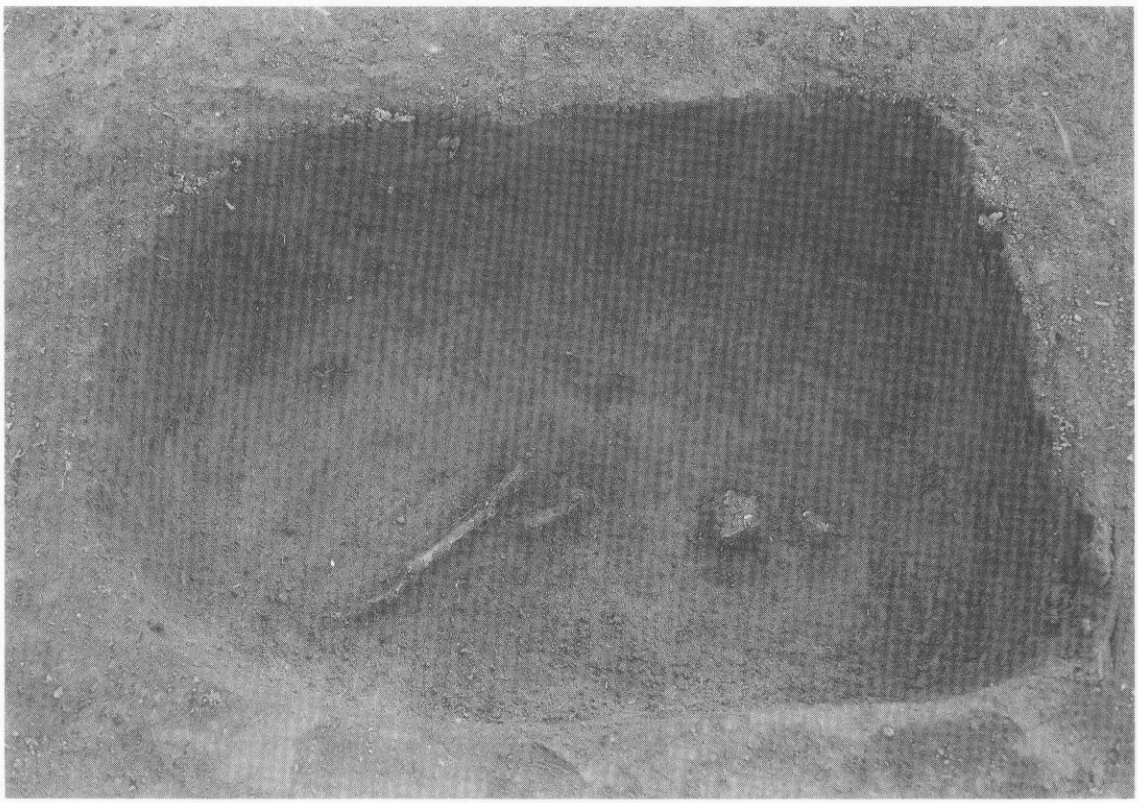
1．10号土壙（西から）



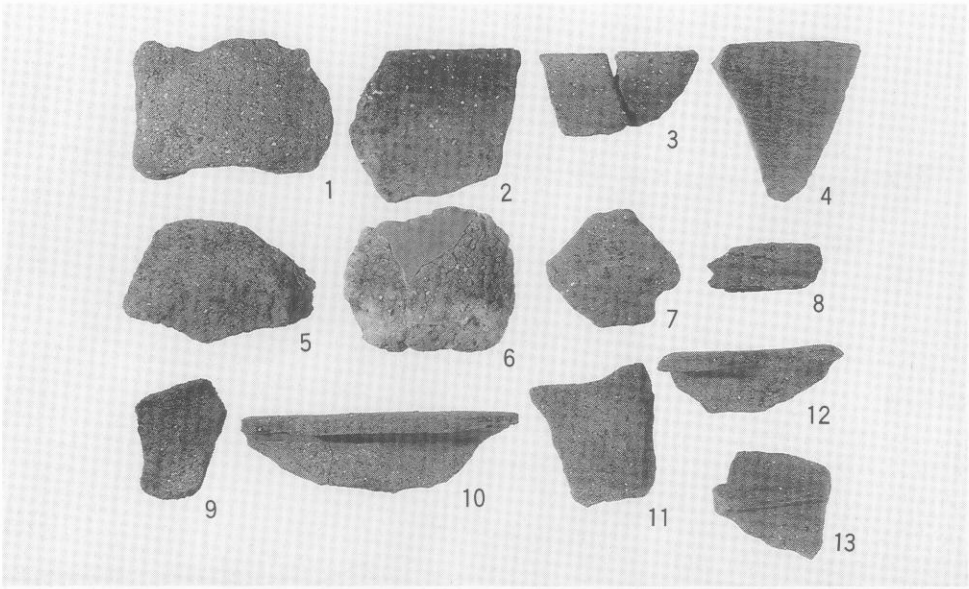
2．ピット30遺物出土状態（北西から）



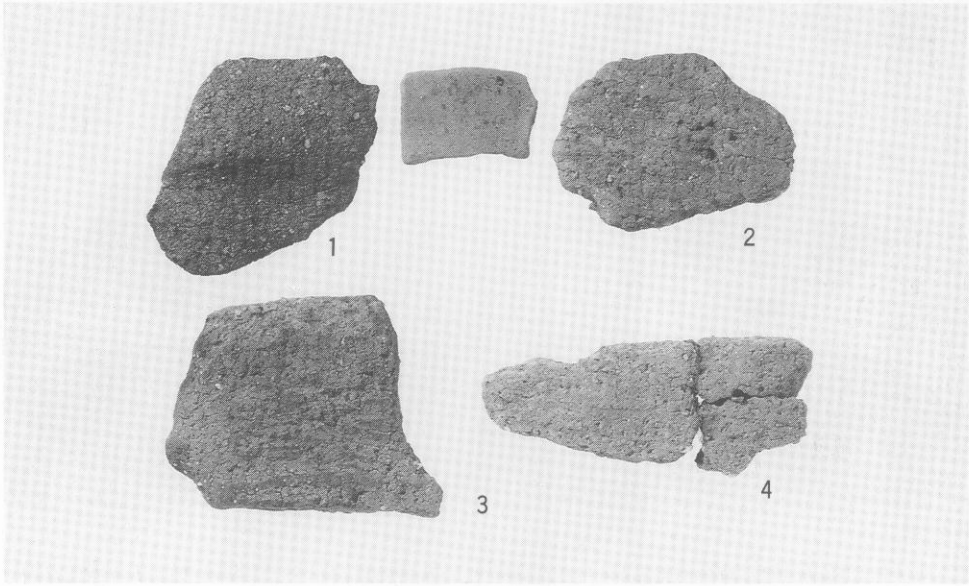
1．1号土壙墓（南西から）



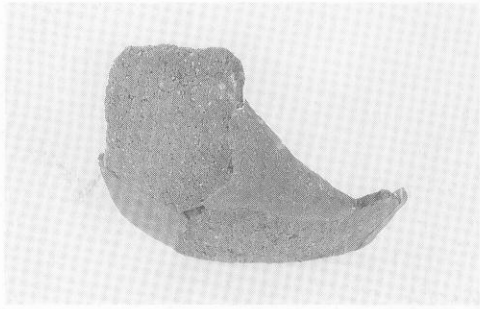
2．2号土壙墓（北東から）



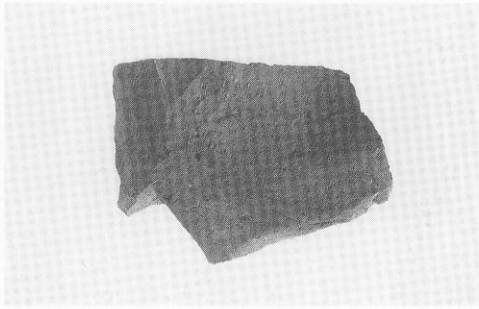
5号土壙（3・10～13）・ピット8（1）・ピット14（9）・ピット28（8）・ピット39（2）



ピット16（2）・ピット35（3・4）・表採（1）



5号土壙

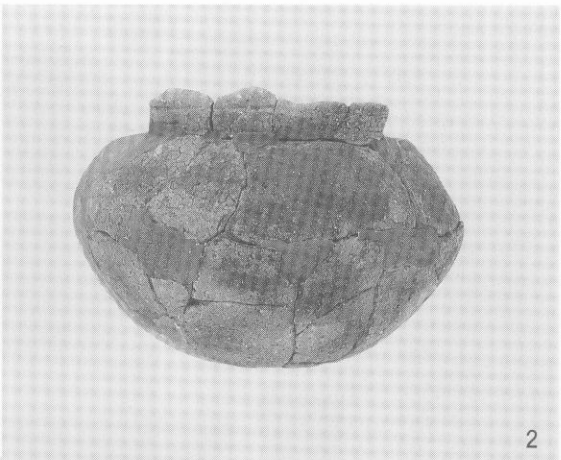


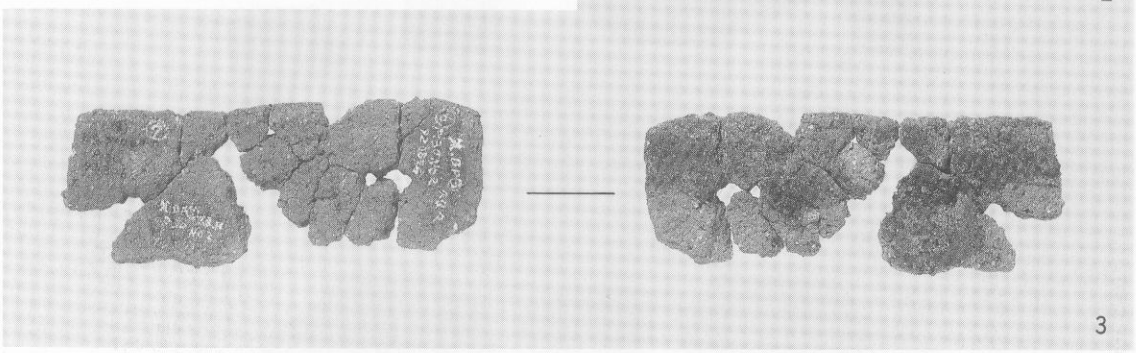
表採石器

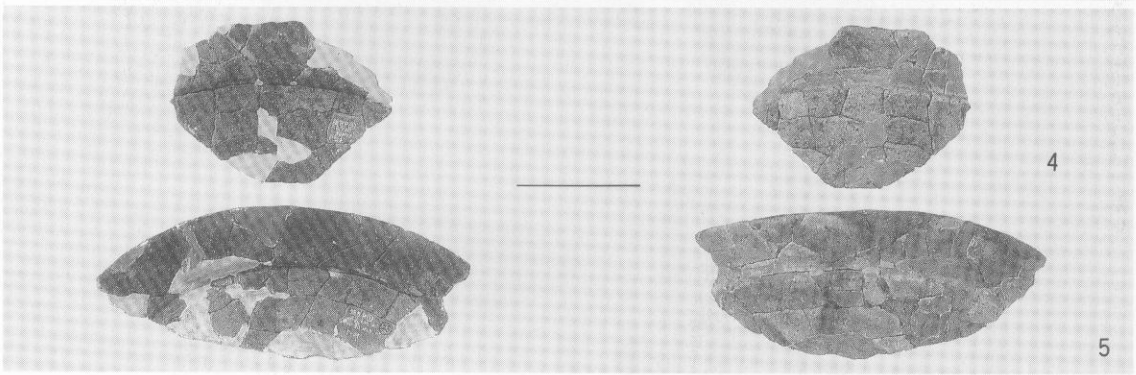
土壙・ピット・表採遺物



1号土壙墓出土土器







ピット30出土土器

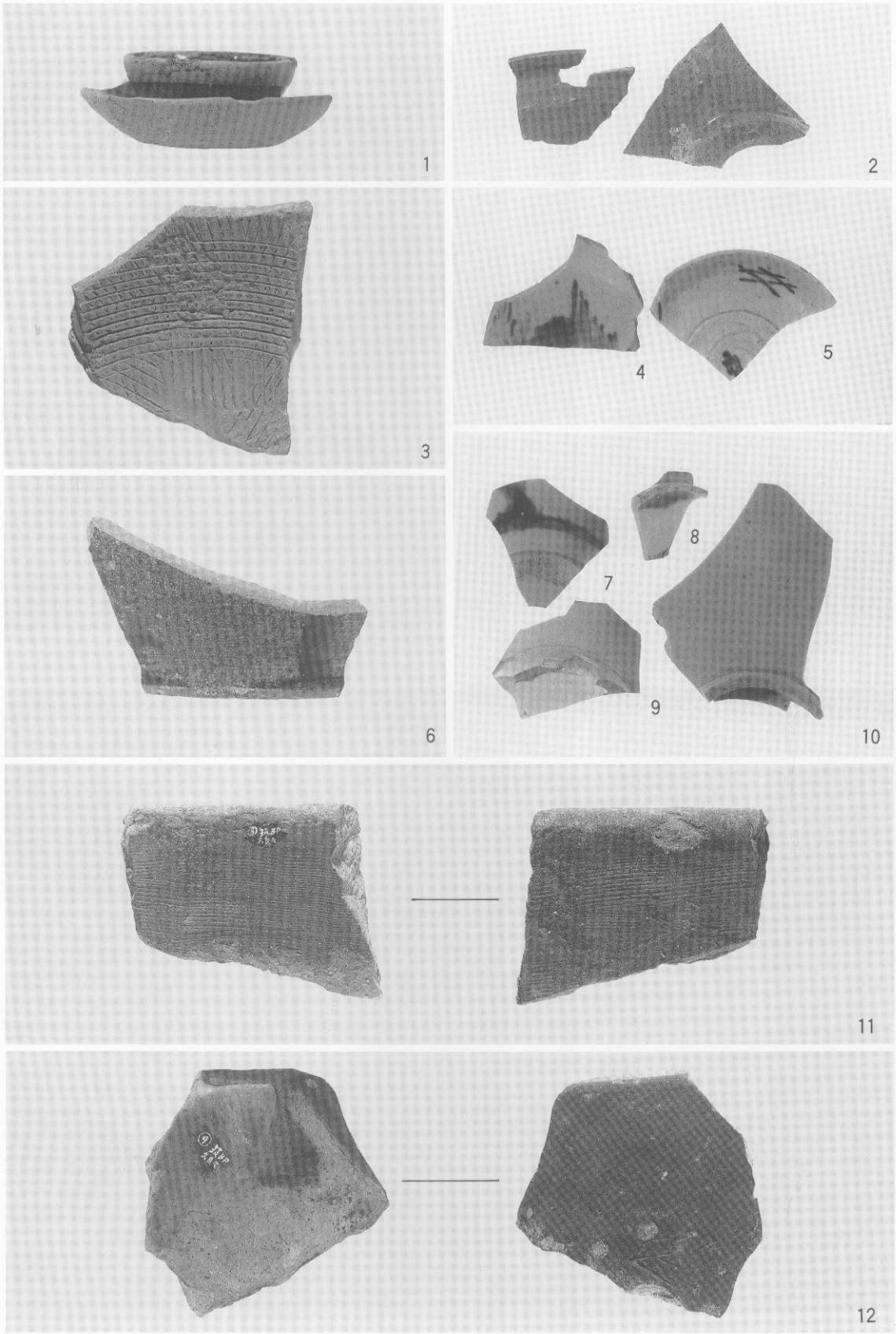


ピット16・17出土土器

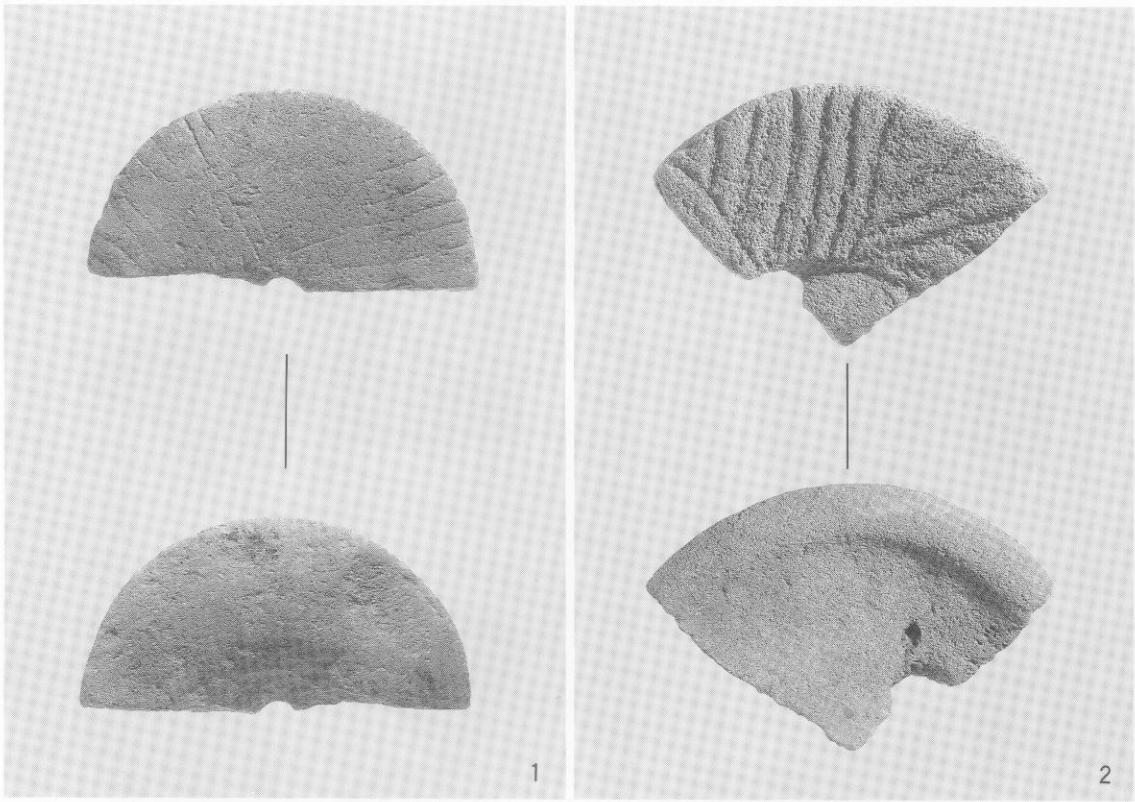


ピット42出土土器

ピット出土遺物（17・29）



表採遺物①



1．表採遺物②（石臼）



2．調査区内所在の石碑

第Ⅲ章　倉良遺跡

第1節　はじめに

倉良遺跡の発掘調査は一般国道3号線筑紫野バイパスの建設に伴う事前調査として、平成4年2月5日から同年5月6日までの約3カ月間に亘って実施された。調査の対象になった範囲は、JR筑豊本線を挟んで北に約130m、南に約50mの全長約200m。幅については、JR筑豊本線をトンネル状に潜り抜けるようにするため、現在の地表面を大きく削平することから大幅なのり面が必要となり、最大で約70m、最小で約50mを測る。当初の調査対象面積は約9,800㎡であったが、試掘や表土除去作業中の所見から実際の調査面積は約6,700㎡に変更した。調査の対象となった地区の名称は筑豊本線の北側を筑紫野バイパス4地点、その南側を筑紫野バイパス5地点と設定されており、その区分けに準じて小字名から前者を倉良遺跡、後者を天神田遺跡として分別した。しかし、遺跡自体は同じ丘陵上に立地した一連の遺跡であるため、敢えて異なった遺跡名を付ける必要性が見い出せず、本報告では両者を併せて筑紫野バイパス4・5地点「倉良遺跡」とした。

倉良遺跡は福岡県筑紫野市大字筑紫字倉良および天神田に所在し、背振山地から派生して南西から北東へ延びる丘陵の最東端部で、標高45～62mの範囲に立地する。調査以前は植林された杉林と雑木に覆われており、丘陵の頂部には墓地が設定され、東側斜面にはこの墓地に通じる歩道が作られていた。この丘陵の東南方向にある狭い低地は通称「二日市地峡」と呼ばれ、福岡平野と筑後平野を分断する歴史的にも意義深い地点である。

平成4年2月5日より表土の除去作業をはじめ、2月17日から発掘機材の搬入と作業員の投入を行ない、テントやユニットハウスも併せて設営した。調査は北風が直接吹きつける季節を中心に約2ヵ月半行ない、5月6日に完全に終了し、撤収に至った。

調査および報告書の作成に際しては、筑紫野市教育委員会より多大のご配慮・ご協力を賜わりました。記して感謝の意を申し上げます。なお、実際の調査作業に従事して頂いた方々は以下の通りである。

松田　運　岡部孝徳　田中泰彦　久保キン子　吉田アサヨ　片田清子　相良幸子　前原芳子
牛島充子　田中紘子　田中初子　田中律子　田中清子　細谷末子　内田智子　大島幸子
磯田房恵　石橋丸子　因間美枝子　山本文子　伊藤夏子　柴山ヤス子　中村和子　高瀬節子

（順不同敬称略）

第２節　発掘調査の記録

１　調査の概要

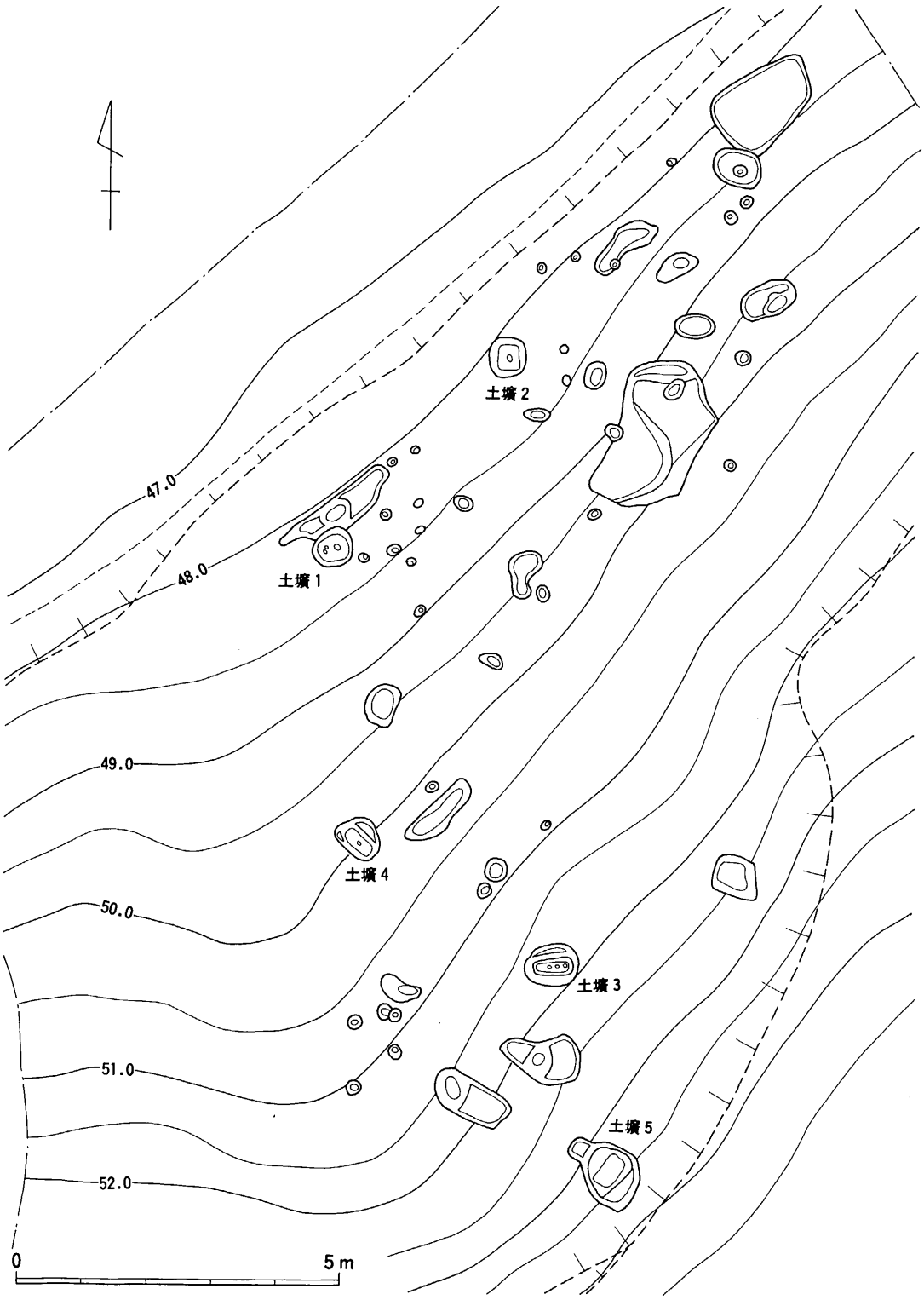
倉良遺跡は背振山地から派生する丘陵の先端部、標高45～62ｍに立地する。調査は丘陵頂部、東側斜面、西側斜面、JR 筑豊本線南側（筑紫野バイパス５地点）の順で行なった。所属時期は縄文時代、弥生時代後期前半、古墳時代後期、近世（16世紀代）の５期に大きく分かれるが、遺構の密度や遺物の出土量は必ずしも多くない。

縄文時代では西側斜面において陥し穴状遺構が、密集するように５基確認された。弥生時代は後期前半代の甕棺墓２基と土壙墓12基が東側斜面の限られた範囲で切り合うことなくかなりの密集状況で検出され、その性格が注目される。古墳時代は調査区北端部で検出された土壙墓１基と、調査区南端部（５地点）で検出された溝１本だけで、遺物も極めて少ない。近世（16世紀）としては丘陵頂部に近い北側斜面において、性格不明の墳丘状遺構２基と土壙墓１基が検出された。このように、倉良遺跡では遺構や遺物は少ないながらも注目すべきものもあり、以下では時代別にその内容を説明していきたい。

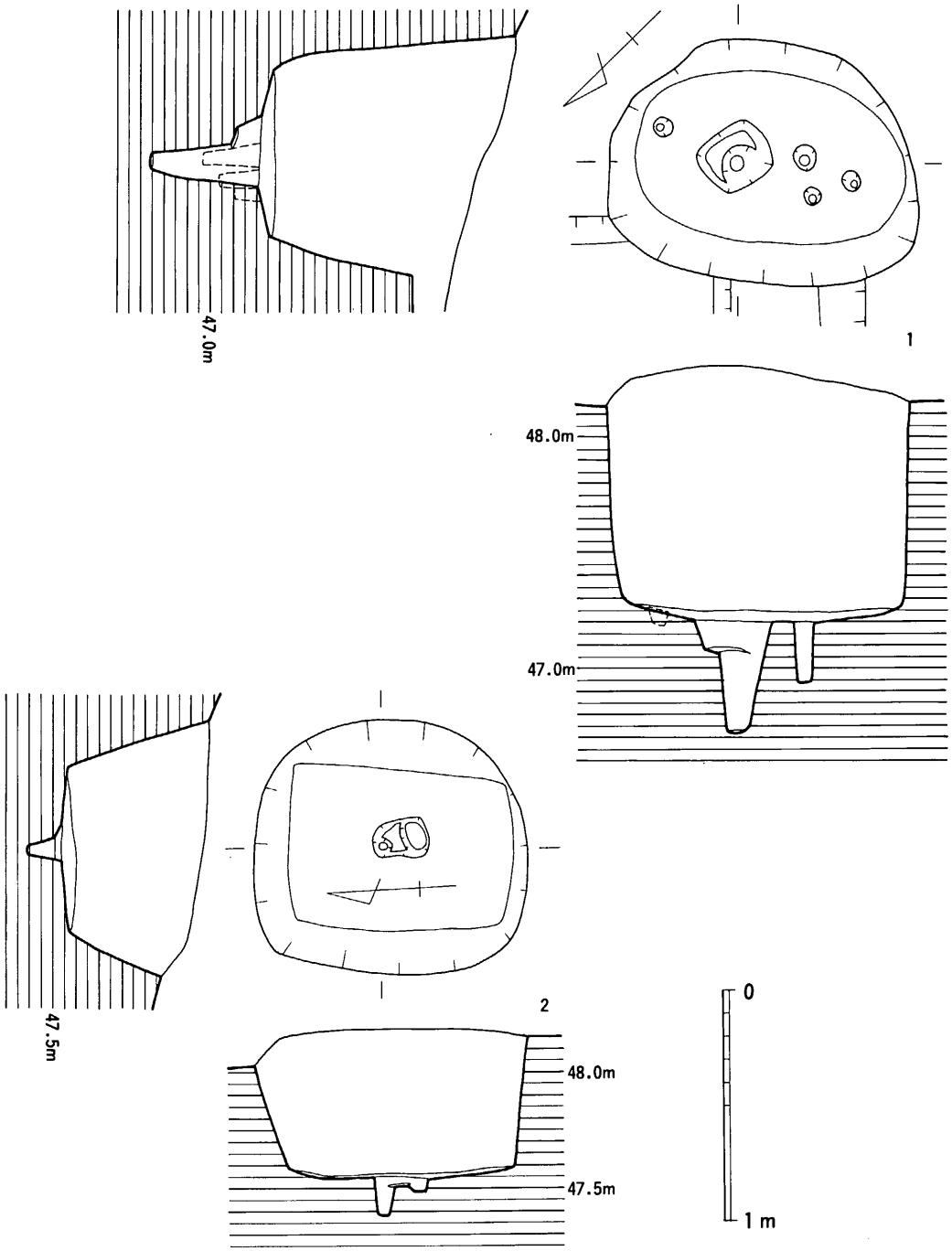
２　縄文時代の遺構と遺物（図版３　第１図）

縄文時代の遺構と考えられるのは西側斜面で検出された５基の土壙である（第１図）。これらの遺構からは４号土壙において石鏃が１点出土しただけで、他に遺物の出土が全くなく所属時期の決定に困難をきたした。しかし、近年各地で確認されている縄文時代の陥し穴状遺構とほぼ同様の特徴を保持することから、とりあえず縄文時代として位置づけた。標高48～54ｍの等高線を直交するように幅７ｍ、長さ23ｍの範囲で、縦方向に細長く密集する。概して平面プランの長軸方向を等高線と平行するように掘り込まれているが、平面プラン自体や深さはまちまちで統一されていない。かなりの急斜面にあるためはたして陥し穴として機能したかはいささか疑問は残るが、各地での類似例や仮に陥し穴でないとして他に適当な機能が想定されないことなどから、本報告では縄文時代の陥し穴状遺構として位置づけた。

１号土壙（図版３　第２図）　１号土壙は５基からなる陥し穴状の土壙群の中でも２号土壙と共に最も北側、すなわち東側斜面裾部の標高48ｍ付近で、北東方向の２号土壙からは８ｍ、南方向の４号土壙からは９ｍの距離にある。検出時点での平面プランは130×114㎝の楕円形を呈し、深さ109㎝で至る底面も120×76㎝のほぼ同じプランになる。この底面の中央やや北東寄りには30×24×46㎝の比較的深いピットが掘り込まれ、その周辺に径８㎝、深さ20㎝程度の小ピットが４つ見られるが、この小ピットに関しては掘り込まれたというよりは、むしろ棒状の



第 1 図 土壙群配置図 (1/200)

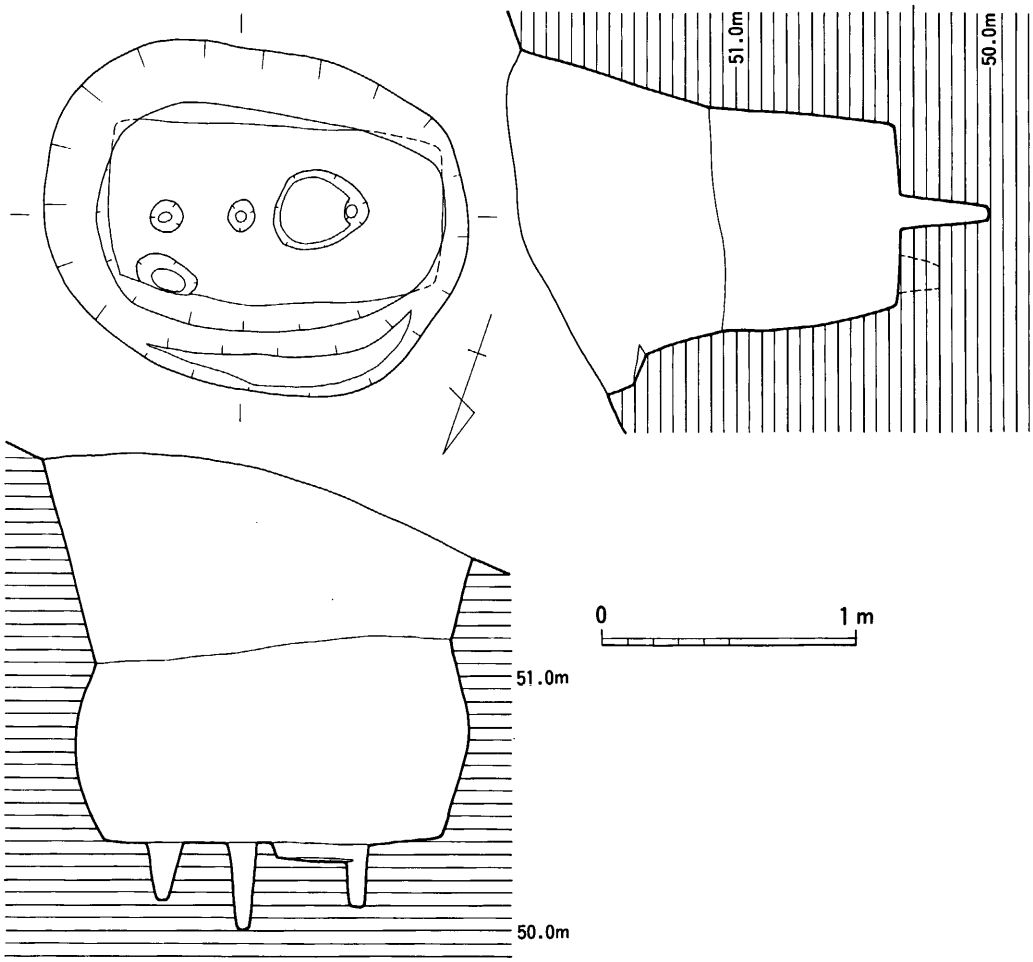


第 2 図　1・2号土壙実測図 (1/30)

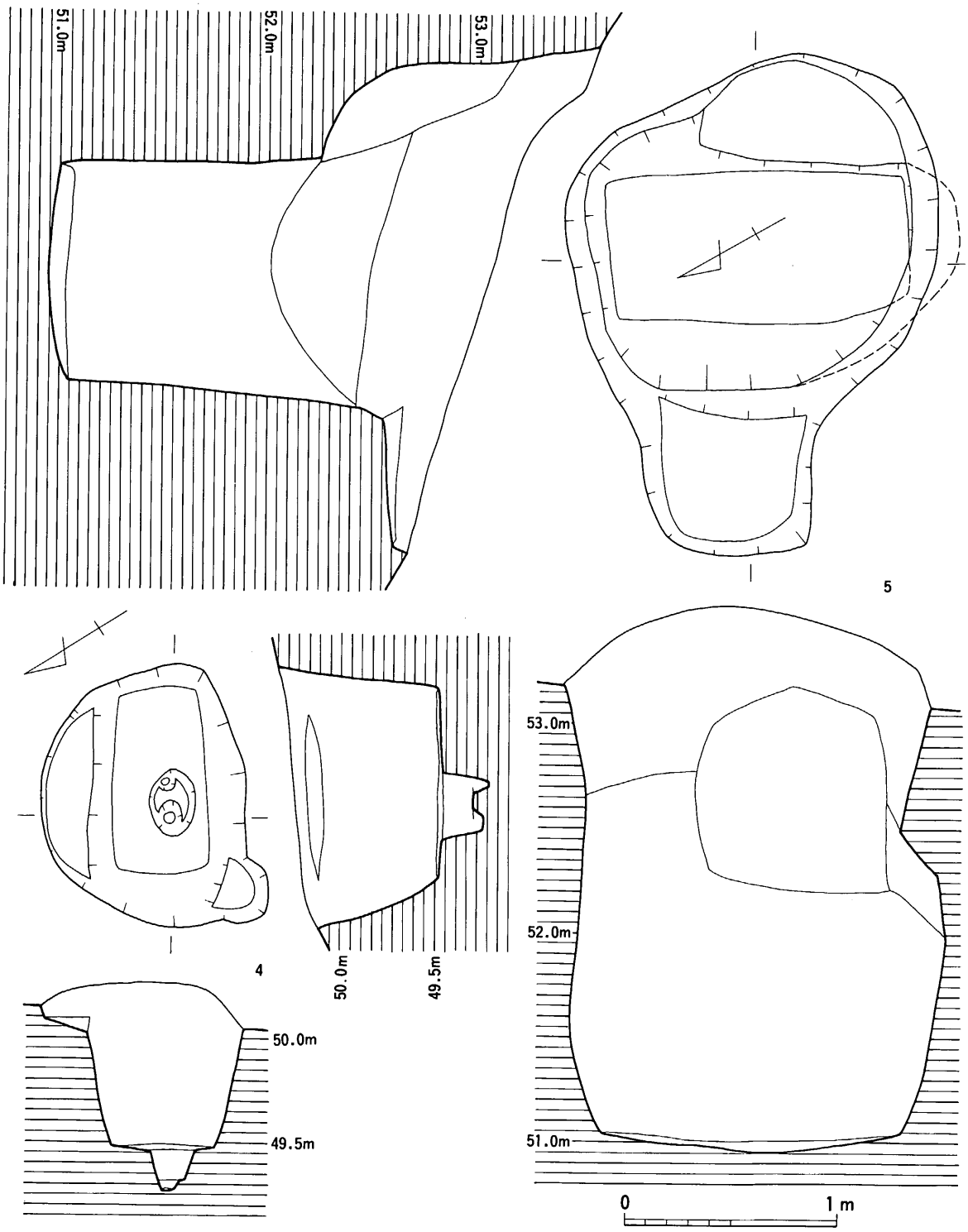
 もので刺し込まれたという感じである。土壙内の埋土はほぼ全体的に淡い暗褐色土であったが、この底面のピットに関してはいずれも黒褐色土が入っていた。平面プランの長軸はこの付近の等高線とほぼ平行する。遺物は全く出土していない。

2号土壙（図版4　第2図）　2号土壙も1号土壙とほぼ同じ標高で、1号土壙の北東8mにある。検出時点での平面プランは118×110cmの楕円形に近い隅丸方形であったが、深さ65cmで至る底面では97×70cmの長方形になる。この底面のほぼ中央部には、23×17cmの楕円形の範囲の中に深さ18cmと8cmの小さな穴が掘り込まれている。土壙内の埋土は1号土壙とほぼ同様で全体的に淡い暗褐色土であったが、この底面の小ピットに関してはやはり黒褐色土が入っていた。遺物の出土は全くない。平面プランの長軸は等高線と斜めに交差している。

3号土壙（図版4　第3図）　3号土壙は標高52m付近で、5号土壙の北西6m、4号土壙の南東7mに位置する。検出時点では168×135cmの不整円形で、約20cmほど掘り下げると北壁



第 3 図　3号土壙実測図（1/30）



第 4 図　4・5号土壙実測図（1/30）

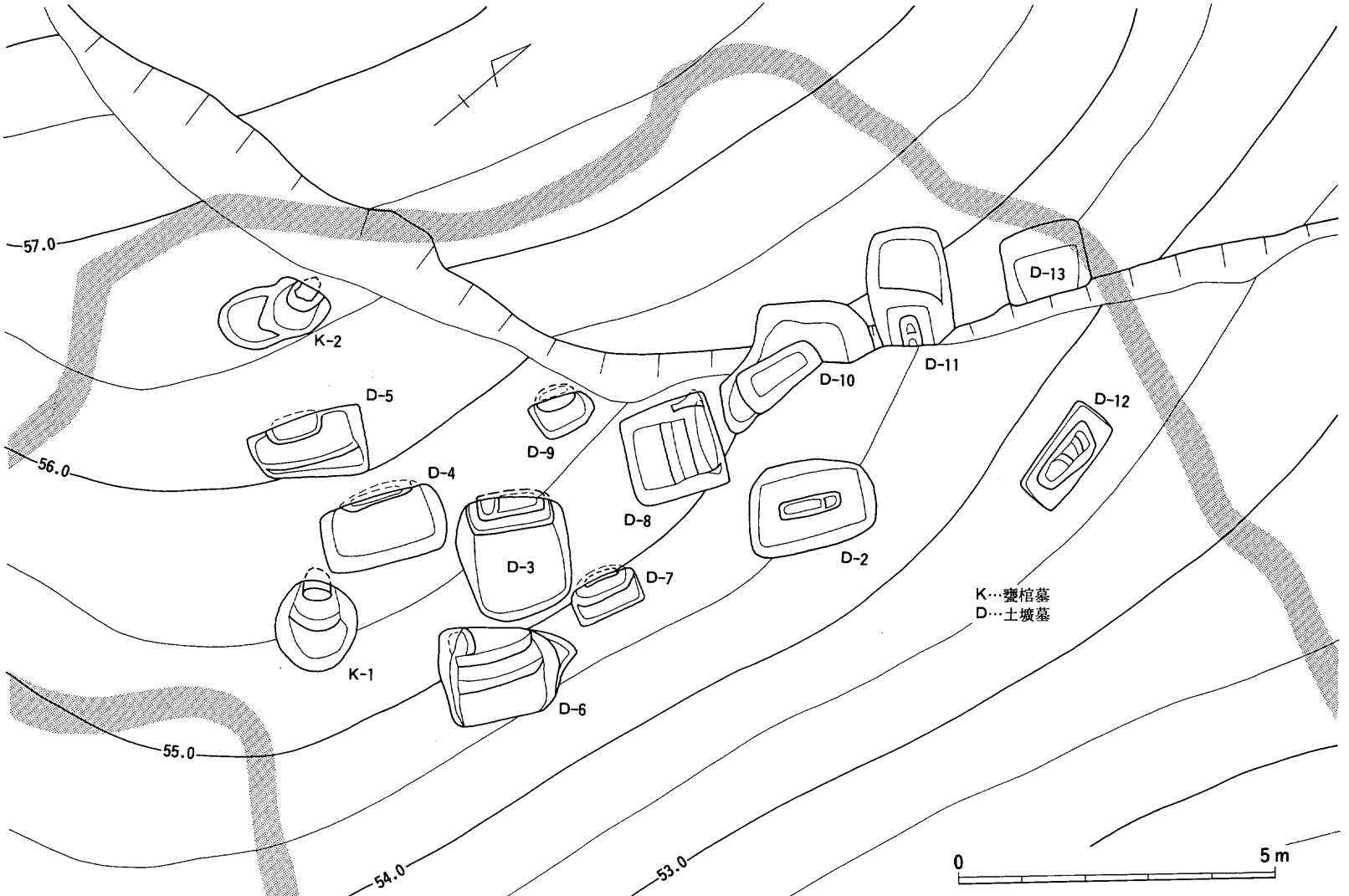
に細長いテラスが付く。断面形態としては底面へ向けてやや窄まっていくが、検出面から約70cmのところから明瞭な稜ができるほどに袋状に広がり、130×71cmの隅丸長方形の底面に至る。底面の長軸には13×13×25～35cmの小さなピットがほぼ等間隔で3つ並ぶが、これらは掘り込んだものではなく棒状のもので突き刺したような感じである。また、底面の北東隅にも25×12×15cmの小さなピットがある。この長軸線は等高線に平行する。

4号土壙（図版5　第4図）　4号土壙は標高50m付近で、1号土壙の南5m、3号土壙の北西7mに位置する。検出時点での平面プランは125×100cmの半円形に近い形態を呈し、北壁では検出面より10cmほど下がったところで狭いテラスが確認された。西隅にある突出部はこの土壙を切るピットであったが、その認識が遅れたため土壙と共に掘ってしまったものである。壁はほぼ直線的に下がり、80×43cmの長方形に近い底面へと至る。底面中央部やや南寄りには32×22×17cmにピットが掘り込まれ、さらにその底面には深さ5cmと8cmの浅いピットが存在する。長軸線は等高線にほぼ平行する。埋土は全体的に淡い暗褐色土で、検出面から約30cmの深さで第27図3のサヌカイト製石鏃が1点だけ出土した。重量は0.9g。

5号土壙（図版5　第4図）　5号土壙は5基からなる土壙群の中でも最南端、最高所の標高53.5m付近で、3号土壙の南7mに位置する。検出時点での平面プランは180×165cmの不整形な楕円形を呈し、その北西部には77×63cmの昇降口的な方形の突出部が付く。南東壁の上部では大きく抉れた部分があるが、これは壁の崩落によるものであろう。最上部から約100cmほど下がった所から四隅が明瞭に確認できるプランとなり、深さ260cmの142×72cmの長方形の底面までほぼ直線的に掘り込まれる。埋土は上部では淡い暗茶褐色土であったが、掘り進むにつれて淡さが抜け黒褐色土へと変わっていった。底面にはピットなど全く検出できず、その長軸は等高線に平行する。この土壙は本遺跡において最も深く規模の大きなもので、調査時点においても梯子などを使用せずに人間が昇降することは不可能であった。

3　弥生時代の遺構と遺物（図版2　第5図）

弥生時代に属する遺構としては近接して密集する2基の甕棺墓と12基の土壙墓からなる墓群のほかに、若干のピットがある。甕棺墓・土壙墓群は調査区東側斜面の標高56.5～54.0m、傾斜角度約20～25度のかなり急峻な斜面で、南北に14m、東西に8mの極く限定された範囲に密集する。いずれも近接して最短で10cmの間隔をあけて決して切り合わないことから、これらはいずれも極めて短い時間幅の中で構築されたものと考えられる。土壙墓のタイプについては所謂「横口式足元掘込み土壙墓」と「足元掘込み土壙墓」と「二段掘足元掘込み土壙墓」の三つに分かれる。また、本丘陵は少量の降雨でも赤水が発生する赤褐色土の地山からなるが、第5図で示したように、この甕棺墓・土壙墓群の密集する範囲に限って赤褐色土の下位層に相当する白色バイラン土が剝き出しになっており、ごく短期間に構築された墓域の性格や埋葬形態の

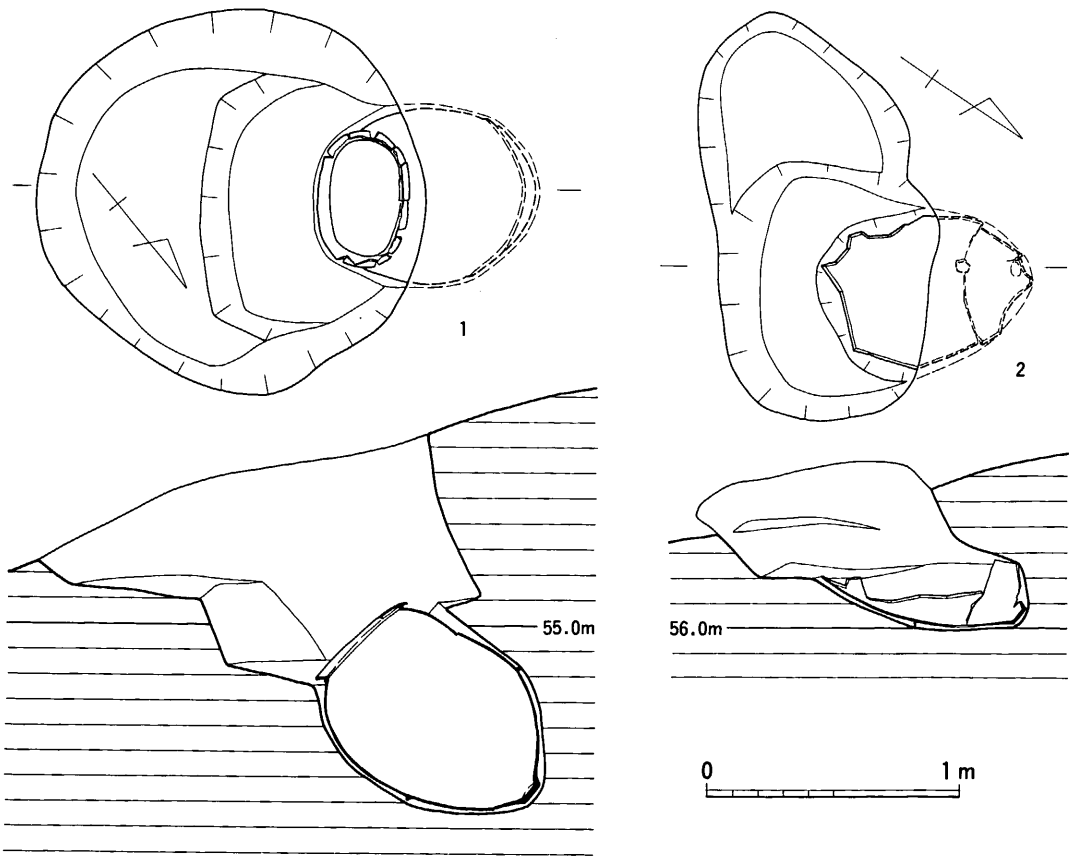


第 5 図　甕棺墓・土壙墓群配置図（1/100）

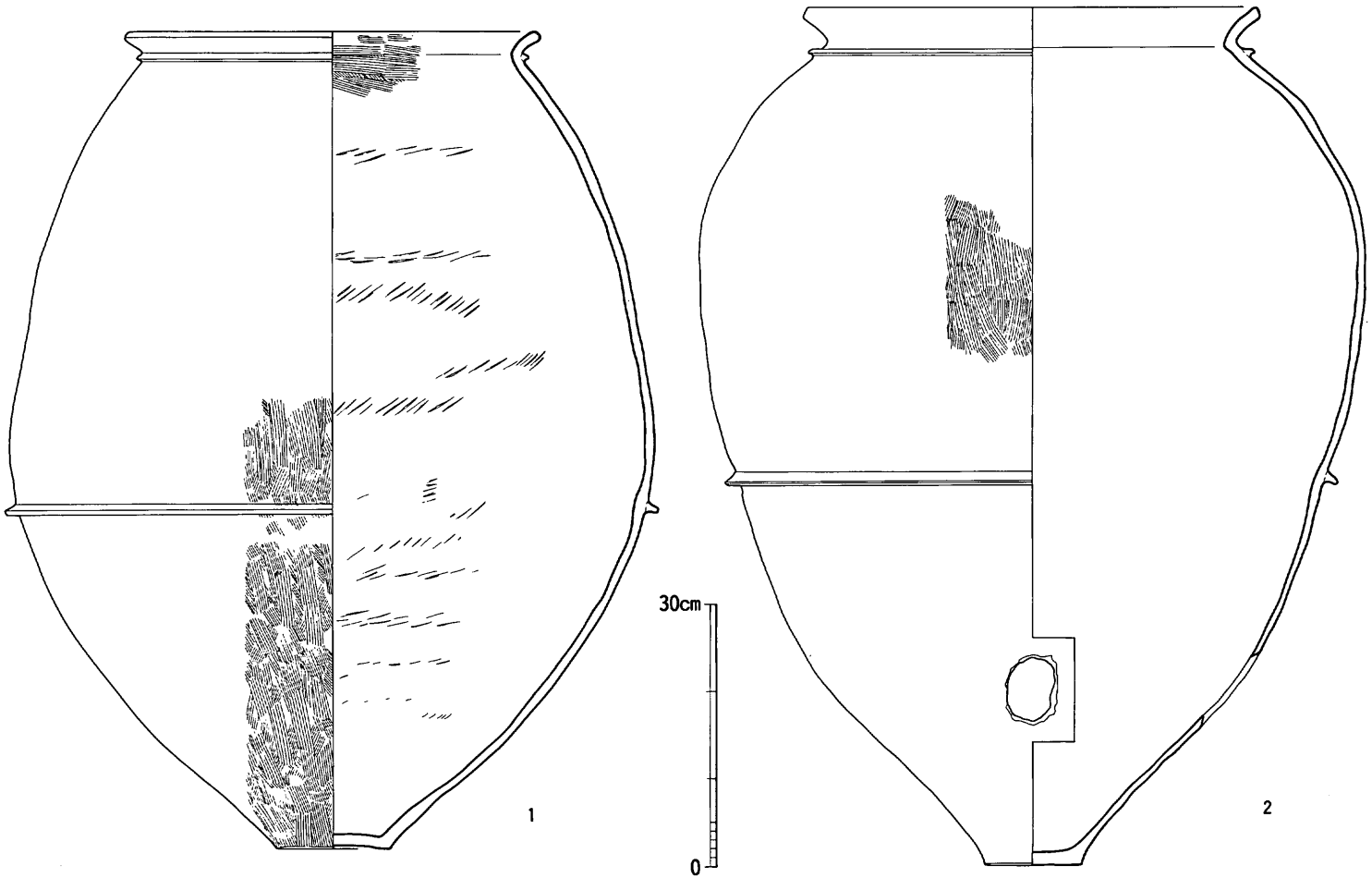
相違をも含めて注目すべきいくつかの特徴があげられる。以下、甕棺墓から順に遺構の説明を行ないたい。

1号甕棺墓（図版6　第6図）　1号甕棺墓は本墓群の中でも南東端、標高55.5m付近に位置し、4号土壙墓とは15cmの距離をおいて近接する。検出時点での平面プランは153×152cmのほぼ円形を呈し、等高線に直交するように北西方向へ2段の墓壙が掘り込まれる。甕棺自体は土圧によってやや扁平に歪んでおり、したがってその掘りかたも正確には把握できなかったが、埋土の状況から甕棺とほぼ同じ規模・形態のものであったと考えられる。甕棺は単棺で、蓋およびそれに付随するであろう目張りとしての粘土などは確認できなかった。棺内からの副葬品や人骨の出土はない。甕棺の主軸は北西－南東になる。

1号甕棺（図版23　第7図）　胴部中央部に最大腹径部を有する完形の大形甕棺。器高94.5cm、口径48.0cm、最大腹径74.2cm、底径12.8cm。先述したように、出土時点において本甕棺は土圧によってすでにやや扁平に変形しており、口径において最大値と最小値の差は約7cmほど認め



第 6 図　1・2号甕棺墓実測図（1/30）



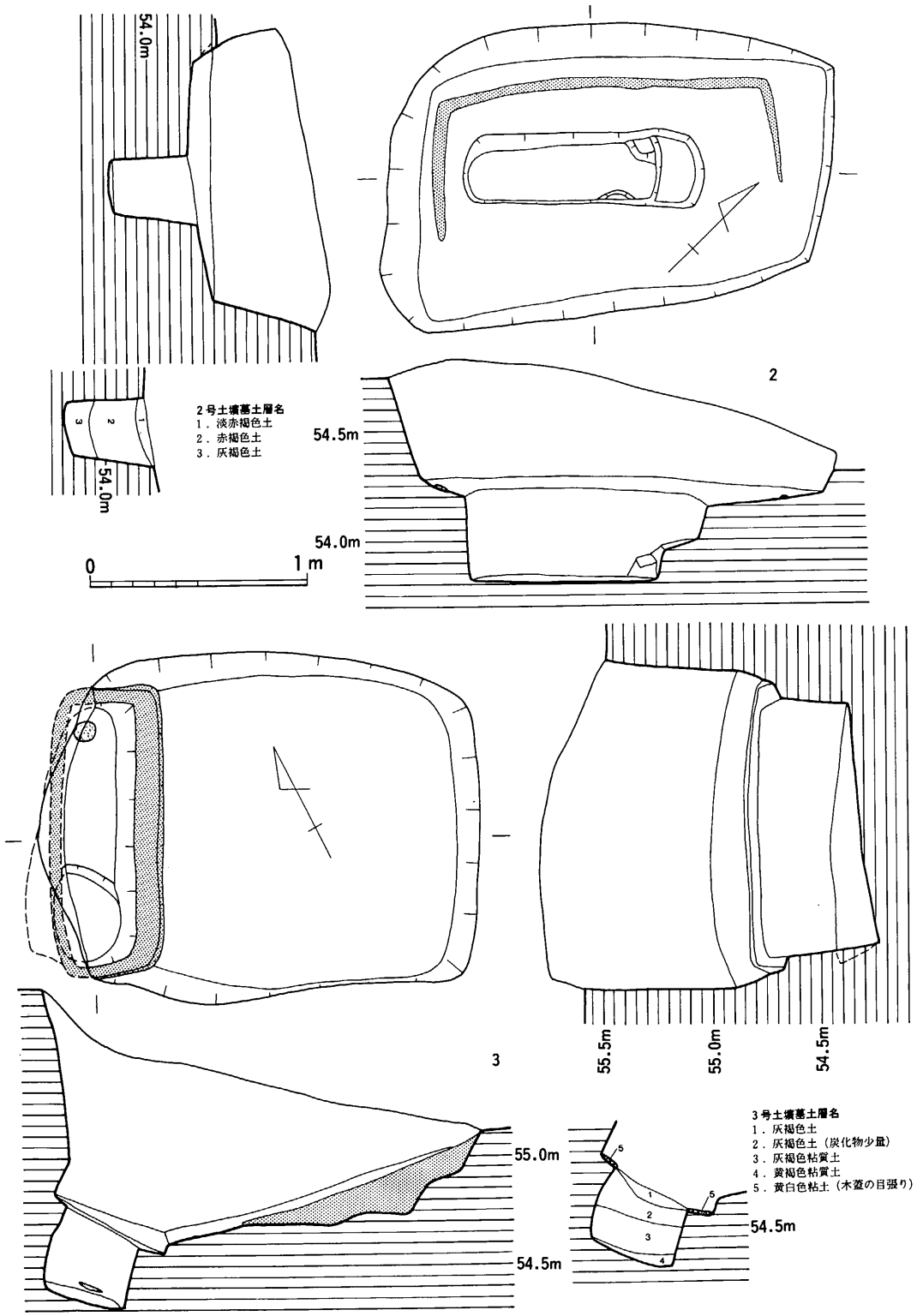
第 7 図　1・2号甕棺実測図 (1/8)

られた。そこで実測に際しては、全体的なプロポーションのバランスを念頭に、歪みの差の中間的な数値を主に選択した。頸部の突帯は断面が三角形を呈して、先端部がやや下方に垂れ気味になる。胴部の突帯は最大腹径部よりもやや下位に貼り付けられ、やはり下方に垂れ気味になり端部に面を作る。底部はごくわずかに上げ底状になる。外面の上半部は摩滅により器面調整が窺えないが、下半部では縦方向のハケ目が明瞭に残る。ただし、突帯を貼り付ける際のナデにより、突帯下5㎝の範囲はそれの大部分が消されてしまっているが、さらにその後粗くハケ調整が施された痕跡が観察される。内面は口縁部および頸部に横方向のハケが施される。胴部内面には全面に亘って8×8㎝程度の円形もしくは隅丸方形状のタタキ当具痕がわずかに観察され、器壁厚は最低で8㎜ほどになる。この当具痕はほとんどナデ消され、その後ヘラ状(?)の工具による接触痕がほぼ水平方向に、単位ごとに纏まった角度と方向で、あたかも接合部を意識するかのように、しかし決して全周することなく巡る。この接触痕がどのような製作技法においてついたものか判断に苦しむ。

2号甕棺墓（図版7　第6図）　2号甕棺墓は本墓群の中でも最南西端に位置し、5号土壙墓の西1ｍに位置する。ここは最近まで使用されていた歩道によって大きく削平された部分で、甕棺も削平が著しくまた抜き取られてもいた。検出時点の平面プランは150×85㎝の不整形な楕円形であったが、南西側に広がるテラス状の部分については、極端に浅いことと埋土が墓壙全体のものと若干異なることから、後世の攪乱でこの甕棺墓に伴うものではない可能性もある。2号甕棺墓は1号甕棺墓以上に土圧によって大きく押し潰されており正確な全体像が把握できないが、掘りかたの構造は1号甕棺墓とほぼ同様の2段掘り込みであったと推察される。胴下半部に焼成後に穿たれた孔は墓壙の底面に接していた。

2号甕棺（図版23　第7図）　残存する破片は全体の1/3程度であるが、図面としてはほぼ完形に復原できた。復原器高約98㎝、復原口径約52㎝、復原最大腹径約76㎝、底径12.4㎝。胴上半部、器高にして約70㎝付近に最大腹径部があるやや異質な感じのする大形甕棺である。口縁部は「く」の字状に外反し、頸部から1㎝ほど下がった部分に、先端部がやや垂れ気味になる断面三角形の突帯が貼り付けられる。胴部の突帯は胴部中央のやや下位に貼り付けられ、やはり先端部がやや垂れ下がり気味になる。この突帯は強く貼り付けられたためか、この部分が窄まったような器形になっている。底部から約20㎝ほどのところに、焼成後に外側から穿たれた8×6㎝の孔がある。内外面ともに全体的に器面の摩滅が著しいが、外面の上半部にわずかに縦方向のハケ目が観察される。

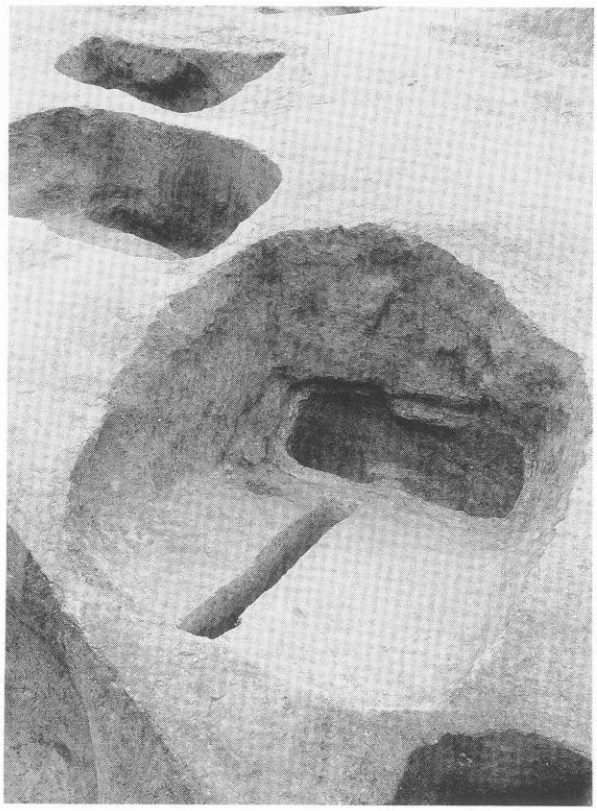
2号土壙墓（図版8　第8図）　2号土壙墓は本墓群の中央部やや東寄りの標高54.5ｍで、8号土壙墓の北東40㎝、10号土壙墓の東70㎝に位置する。検出時点での平面プランは205×134㎝の南北に長い平行四辺形状を呈し、約50㎝ほど掘り下げた段階で平坦面を検出した。この平坦面の中央部には112×34×42㎝の規模で、北側に約5㎝ほど開く主体部が掘り込まれる。また、



第 8 図　2・3号土壙墓実測図（1/30）

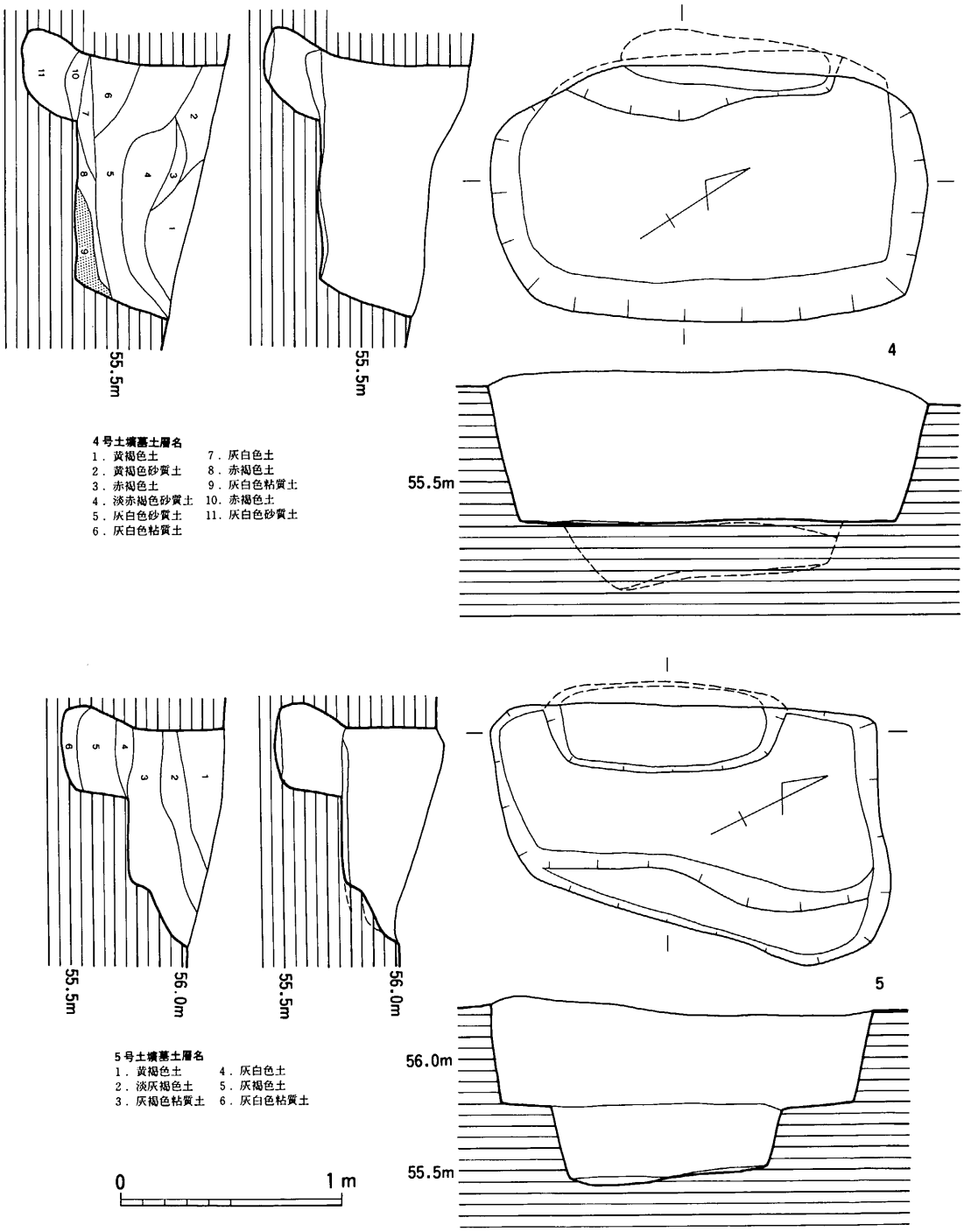
主体部を覆った木蓋を目張りしたであろう白黄色の粘土が主体部の西側に「コ」の字状に幅6㎝、厚さ1.5㎝で細長く検出された。削平されているわけではないが、東側からは目張り粘土は検出されていない。主体部は北東側に地山による階段状の高まりが作り出され、底面はほぼ水平。明瞭な足元掘込み土壙墓ではないが、北東側がわずかに開くのでそれが頭位と考えられる。

3号土壙墓（図版9　第8図）　3号土壙墓は本墓群の中央部やや南寄り標高55.5ｍで、4号土壙墓の北東10㎝、6号土壙墓の北西10㎝、7号土壙墓の南西10㎝に位置する。検出時点での平面プランは202×159㎝の長方形で、西壁辺が若干突出するのは壁の崩落によるものであろう。墓壙はまずここが斜面地であることに関係なくほぼ真下に掘り下げられ、それから西壁下端部に沿って122×38×40㎝の主体部がさらに斜め前下方に掘り込まれる。この主体部の上辺部には幅8～10㎝の平坦面が巡るが、ここには木蓋の目張りとなった白黄色粘土が2㎝の厚さで検出された。この粘土は全体的に均等に敷かれており、木蓋は1枚板であったと推定される。主体部の頭位は北北東で底面は南側方向に12㎝ほど下がり、頭の置かれていた付近では赤色顔料が検出され、底面は水平でなく全体的に東側（手前）に低く傾斜する。墓壙の平坦な底面は緩やかに主体部へ向けて傾斜していくが、この底面は本来凹凸のあった部分に灰白色粘土を入れて平坦に整地している。本土壙墓の検出時点において、東壁辺に沿ってこの粘土が幅5㎝程度の帯状ですでに若干観察されていた。横口式足元掘込みというタイプの土壙墓で、規模や赤色顔料から本墓群の中にあっては最も卓越した要素を備えた存在である。

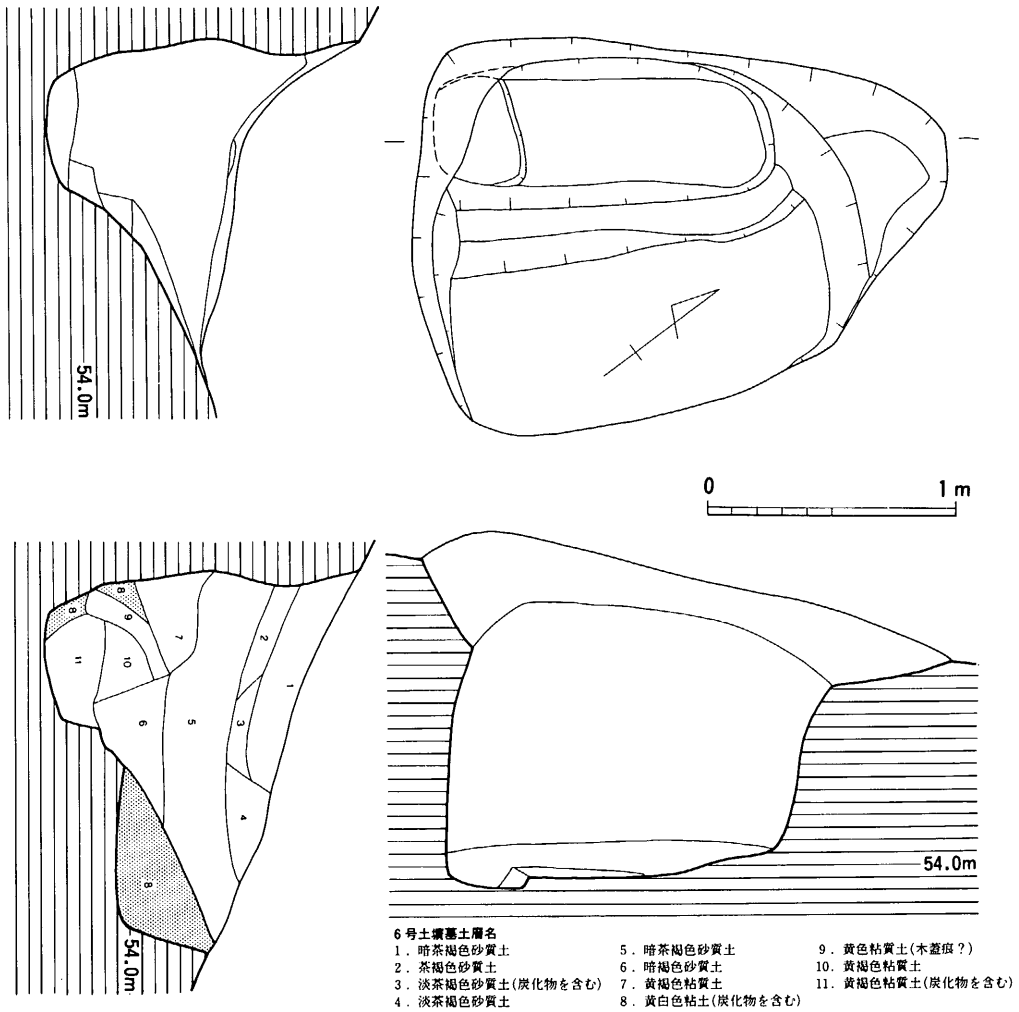


第 9 図　3～5号土壙墓（東から）

4号土壙墓（図版10　第10図）　4号土壙墓は本墓群の南寄り標高56.0ｍで、3号土壙墓の南西10㎝、5号土壙墓の東30㎝、1号甕棺墓の北西15㎝に位置する。平面プランは198×114㎝の隅丸長方形で、北西の方向へ緩やかに斜めに掘り込まれる。深さ70㎝ほどで平坦な面を作り、北西壁下端部からさらに奥へ96×28



第 10 図　4・5号土壙墓実測図（1/30）

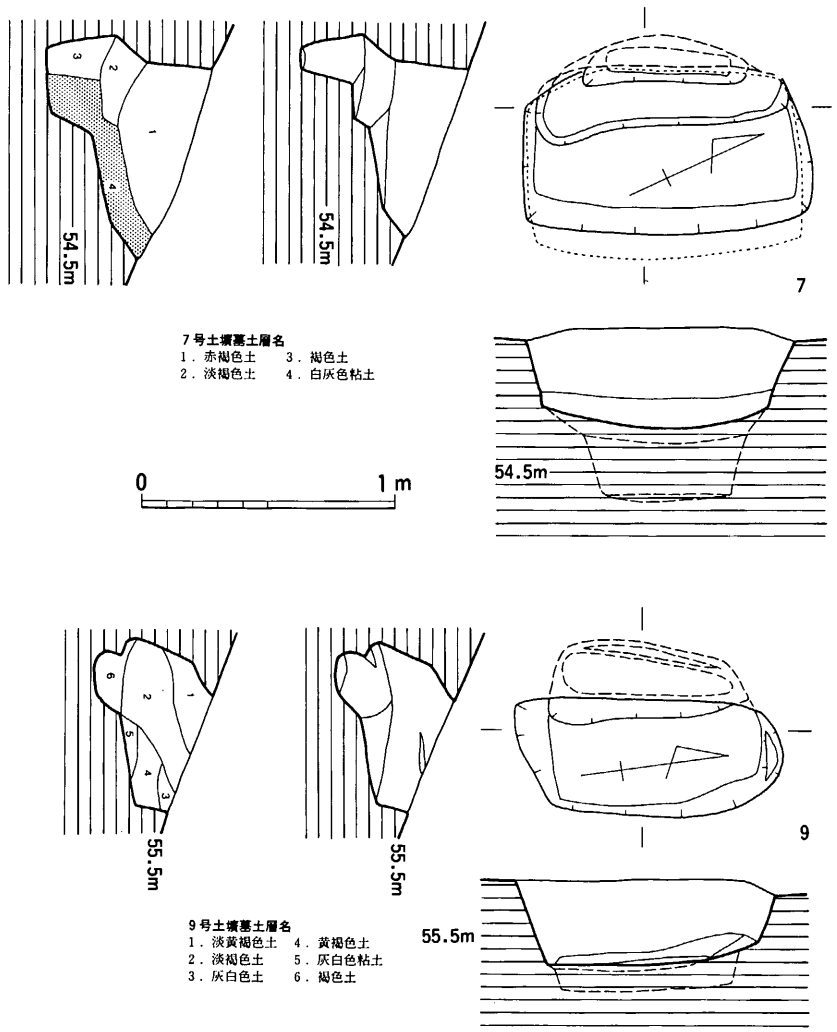


第 11 図　6号土壙墓実測図（1/30）

×25cmの長楕円形の主体部が作られる。主体部の頭位は北北東で底面はやはり南側へ10cmほど低くなり、これも横口式足元掘込み土壙墓である。木蓋等の施設は確認できなかったが、主体部の直上部には灰白色の粘土や粘質土（土層断面図第６・７層）がかなり厚く広がって観察され、木蓋に関連した性格のものと考えられる。

５号土壙墓（図版11　第10図）　５号土壙墓は本墓群の南端部で標高56.5ｍ、４号土壙墓の西40cm、２号甕棺墓の東１ｍに位置する。検出時点での平面プランは175×114cmの北側に開く長方形で、20cmほど掘り下げた段階で東壁に沿って細長いテラスが確認された。平面プランでの北側の広がり、すなわち北東方向への突出は、テラスや底面の形態から判断する限り壁の崩落ではなく、当初から意図的に掘られたものと考えられる。約50cmほど掘り下げると平坦な底面に至り、北西壁下端部からはさらに奥へ112×33×30cmの主体部が掘り込まれる。主体部の頭位は北北東で底面は南側に約10cmほど傾斜して、横口式足元掘込み土壙墓の形態となる。蓋に関連した施設については何も確認できなかった。

6号土壙墓（図版12・第11図）　6号土壙墓は本墓群の南側の東端標高55.0ｍで、3号土壙墓の南東10㎝、7号土壙墓の南35㎝に位置する。平面プランは215×160㎝の隅丸三角形に近い形態を呈するが、北側の突出部は壁の崩落によるもので意図的に作られたものではなさそうである。したがって、本来の平面プランはおよそ160×160㎝程度の正方形であったと考えられる。墓壙は深いところで約1ｍほどが一気に掘られ底面も平坦にされるが、3号土壙墓と同様に白黄色粘土を充填して、主体部へ向けて緩やかな傾斜を作っている。北西壁に沿って143×66×21㎝の主体部が検出されたが、幅が大きく浅いこと、明瞭な掘りかたが確認できなかったこと、北西壁の抉れ方が崩落によるものであること、土層断面図から木蓋の位置が土圧で大きくズレていること等から、本来の主体部の形態はかなり崩れていると考えられる。この主体部の頭位



第12図　7・9号土壙墓実測図（1/30）

は北北東で、南端が約10cmほど掘り込まれる。原型は留めていないが、基本的にはやはり横口式足元掘込み土壙墓である。3号土壙墓と同様で、検出時点においてすでに南東壁辺に沿った幅5cm程度の白黄色粘土が帯状に剝きだしになっていた。

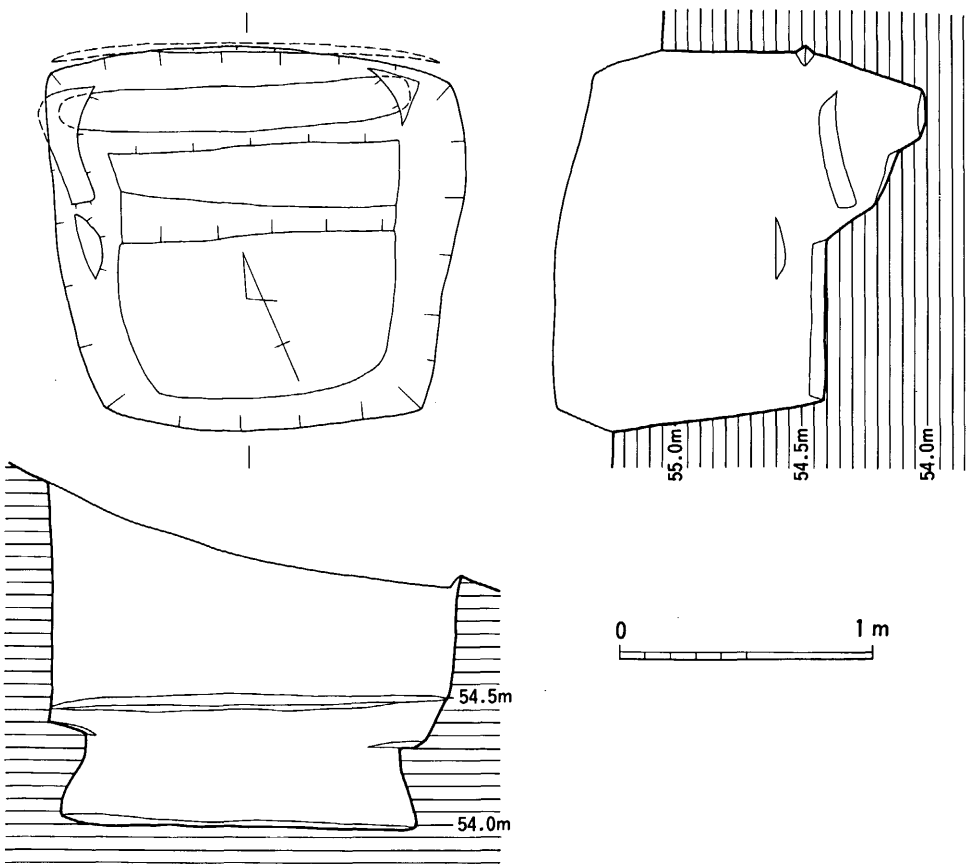
7号土壙墓（図版13　第12図）　7号土壙墓は本墓群中央部の東寄り標高55.0m付近で、3号土壙墓の北東10cm、6号土壙墓の北35cmに位置する。平面プランは111×65cmの長方形を呈し、規模から判断して小児用と考えられる。本土壙墓の構造はやや特殊で、まず40cmほど掘り下げた段階で北西壁下端部に沿って88×38×20cmの比較的大きくて浅い主体部に相当する掘り込みを行なう。そして白灰色粘土によって、主体部へ向けて緩やかに傾斜する墓壙底面と、2段からなる66×18×26cmの主体部を整形する。主体部の上端部に作られた段は木蓋の設置を意識したものと考えられるが、土層断面図から判断する限りそのような痕跡は観察されなかった。主体部の頭位は北北東で底面は南側がわずかに低くなり、これも横口式足元掘込み土壙墓の形態を呈する。本土壙墓も3・6号土壙墓と同様で、検出時点において南東辺に沿った幅10cm程度の白灰色粘土が帯状に現われていた。

8号土壙墓（図版13　第13図）　8号土壙墓は本墓群のほぼ中央部標高55.5m付近で、2号土壙墓の南西40cm、10号土壙墓の南20cm、9号土壙墓の北東40cmに位置する。平面プランは163×149cmの北側にわずかに開く正方形に近い長方形を呈し、約70cmほど掘り下げたところで平坦な底面が現われる。ここから北壁下端部に沿って110×70cmの範囲で主体部が掘り込まれ、約30cmほど下がって1度段が付き、そこから幅25cmでさらに細く下がる。北壁の最下端部から上へ50cmのところに奥行き4cmのほぼ水平な溝が掘られるが、これは木蓋が引っかかる場所になろう。この木蓋は水平に設置されたのではなく、おそらく大きな掘り込みの途中にある段を利用して斜めに立てかけられたものと考えられる。その根拠としては、水平だとすると幅が80cm近くになってしまうことと、その場合途中の段の意味が説明できないためである。主体部の長軸両端部は共に約10cmほど抉られ、底面は東側にわずかに傾斜する。頭位はおそらく西北西であろう。主体部は他の横口式のように明瞭に壁に向かって掘り込まれてはいないが、木蓋の立てかけ方や主体部底面の傾斜から判断して、基本的には横口式足元掘込み土壙墓の範疇に入るものであろう。

9号土壙墓（図版14　第12図）　9号土壙墓は本墓群の中央部やや西寄りの標高56.0m付近で、8号土壙墓の南西40cm、3号土壙墓の北西1mに位置する。検出時点での平面プランは105×47cmの多少いびつな隅丸長方形で、規模から判断して小児用と考えられる。この土壙墓の場合、墓壙を掘る段階ですでに西側斜め下方向に掘られ、約30cmほど下がったところで平坦面を作り、そこから71×22×14cmの小さな主体部をさらに西側斜め下方向に掘り込む。墓壙底面で主体部の肩口には灰白色粘土（土層断面図第5層）が存在するが、これは底面を整形して傾斜をつけたり平坦にしたりするためのものではなく、東壁下端部にある段と共に木蓋を固定

するためのものと考えられる。粘土自体は盛り上がるように検出され、他の土壙墓で見られたような木蓋の目張りとして細長く帯状に敷かれたものとはかなり様相が異なっていた。主体部の底面は南側にわずかに傾斜しており、頭位は北北東になろう。これも横口式足元掘込み土壙墓である。

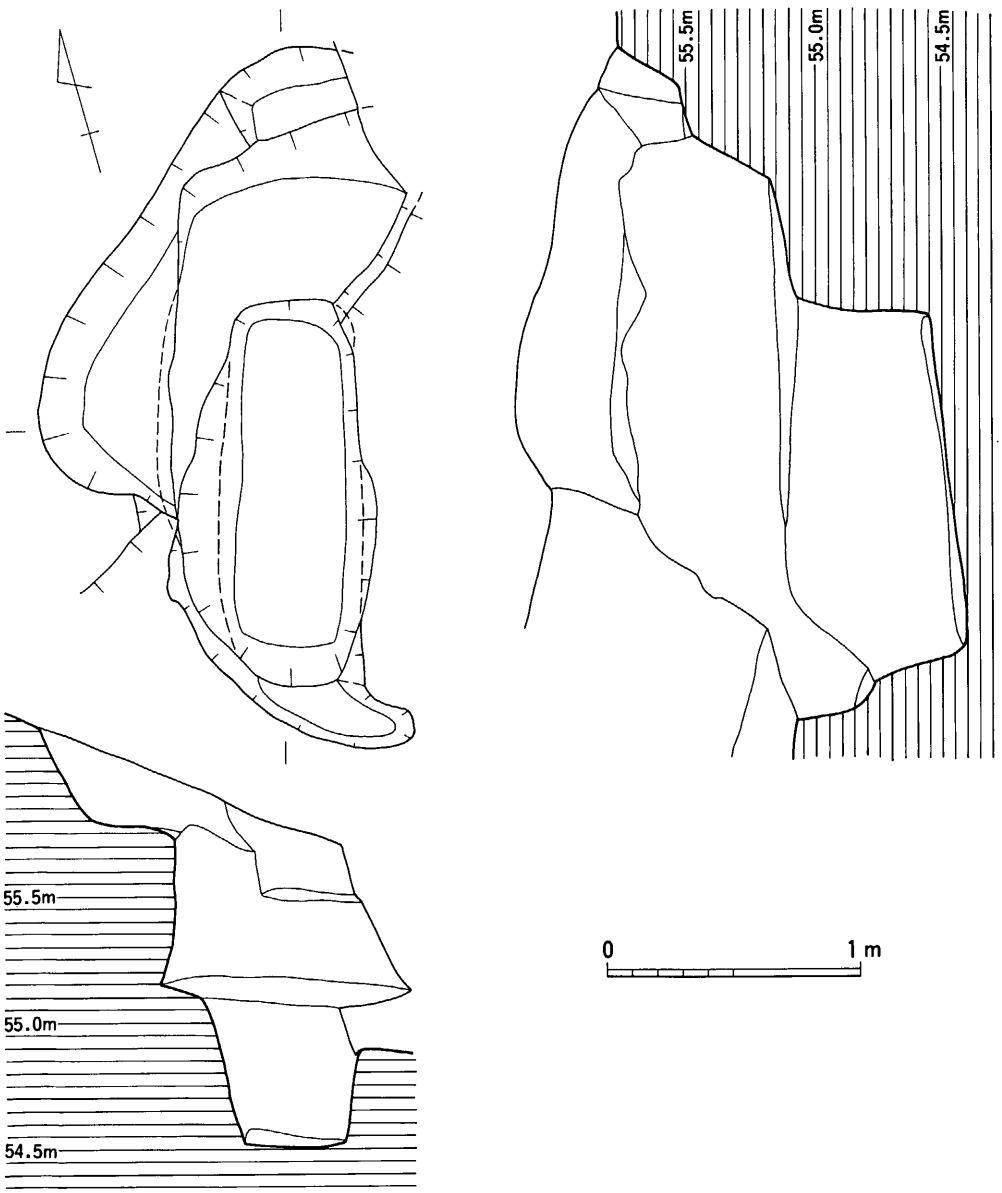
10号土壙墓（図版14　第14図）　10号土壙墓は本墓群中央部やや北寄りの標高56.0m付近で、11号土壙墓の南10cm、8号土壙墓の北20cmに位置する。現代の歩道により全体の1/3程度が削平されており、墓壙の正確な平面プランや規模はわからない。現状から判断する限り、270×150cm以上の規模は有していたと考えられる。墓壙は主体部に至るまでにいくつかのテラスを作るが、いずれも場所や大きさや平面形態が異なり、これまでの土壙墓とはかなり異なった様相が窺える。検出上端面から約1m近く掘り下げた段階で平坦な面を作るわけではないが、ここから132×77×55cmの主体部が掘り込まれる。この主体部も上面は整った長方形ではなく、壁の崩落があったことを想像させる。底面は10cmほど南側に傾斜して、北北東が頭位と推定さ



第 13 図　8号土壙墓実測図（1/30）

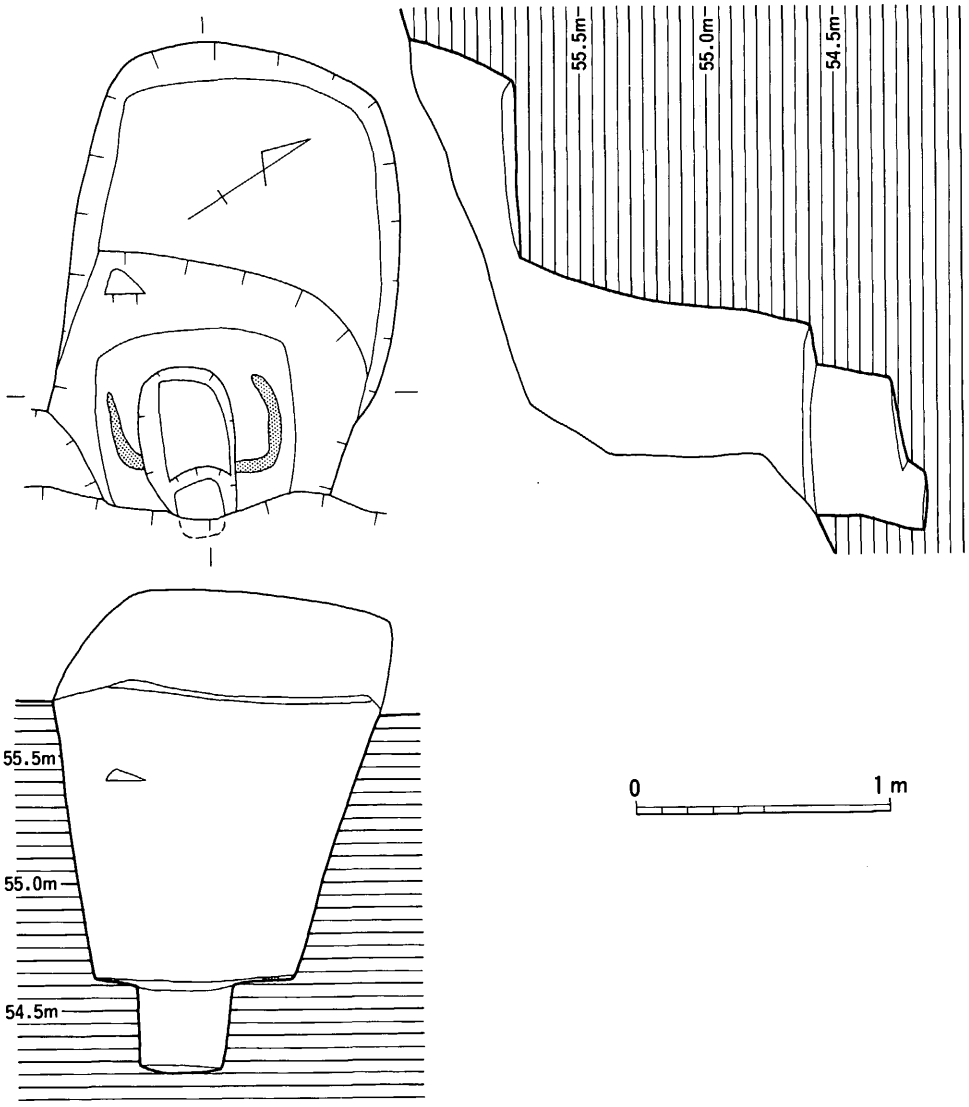
れる。主体部の形態については他の土壙墓と大差なく足元掘込み土壙墓であるが、少なくとも横口式にはならないであろう。

11号土壙墓（図版15　第15図）　11号土壙墓は本墓群の北側標高56.0m付近に位置し、13号土壙墓の南85cm、10号土壙墓の北10cmに位置する。これも現代の歩道に大きく削平され原型を



第 14 図　10号土壙墓実測図（1/30）

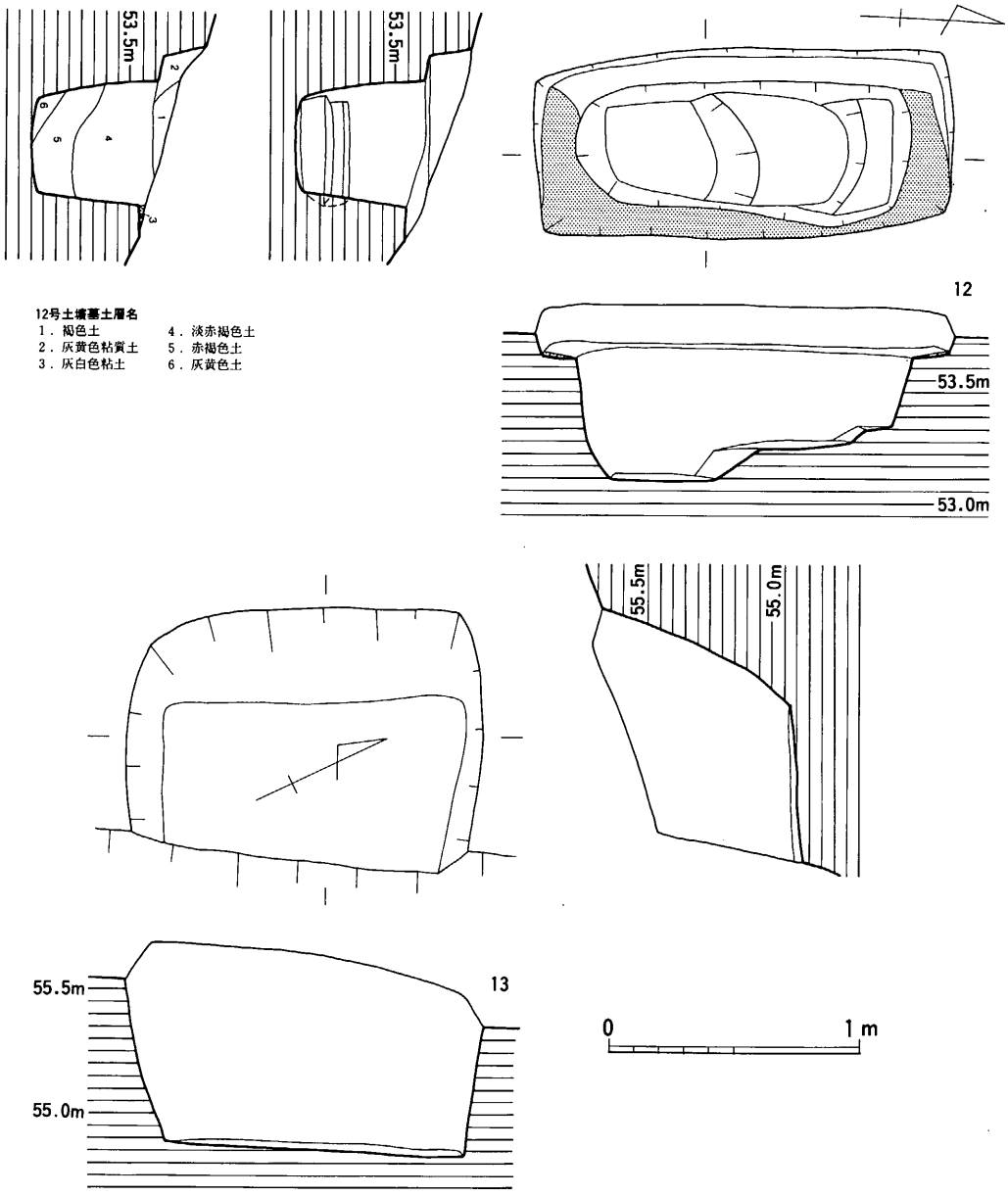
留めないが、190×130cm以上の隅丸長方形に近い平面プランを呈していたと考えられる。北西部に110×80cm程度の比較的大きなテラスがつき、そこから約１ｍ下がって平坦面に至る。この平坦面から59×37×33cmの小さな主体部が掘り込まれる。この主体部の底面は南東に緩やかに傾斜して南端付近で10cmほど大きく掘り下げられる。また主体部の上面北西側半分にだけ幅５cm、厚さ２cmの灰白色粘土が木蓋の目張りとして「コ」の字状に巡るが、この形状から判断して木蓋は２枚であったことが推定される。主体部の頭位は北西で足元掘込みの形態にはなるが、少なくとも横口式にはなりそうにない。10号土壙墓と同様に、敢えて斜面の傾斜方向に逆



第 15 図　11号土壙墓実測図（1/30）

らうように作られている感じさえする。

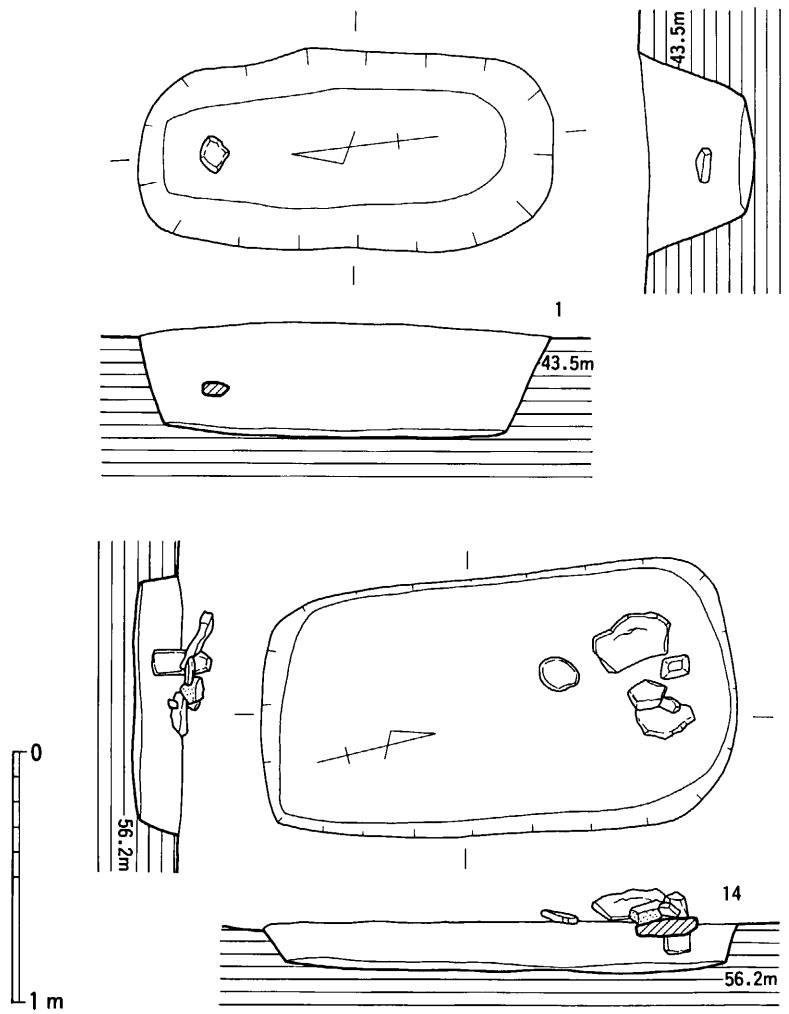
12号土壙墓（図版16　第16図）　12号土壙墓は本墓群北東端の標高54.0m付近で、13号土壙墓の南東1.4m、2号土壙墓の北東2.3mに位置する。検出時点での平面プランは167×82cmの隅丸長方形を呈していたが、この規模や主体部までの浅さを考慮すれば、かなり削平されていると考えられる。検出面から15cmほど下がると平坦面に至り、この中央部に138×55cmの主体



第 16 図　12・13号土壙墓実測図（1/30）

部が掘り込まれる。主体部の上面周辺東側3/4には「コ」の字状に２㎝の厚さで木蓋の目張り粘土が敷かれる。底面には南方向へ２つのテラスを有しながら20㎝ほど下がっていく。頭位が北になる足元掘込みの土壙墓であるが、横口式とかではなく２号土壙墓に類似した形態になろう。

13号土壙墓（図版15　第16図）　13号土壙墓は本墓群北端の標高55.5ｍで、12号土壙墓の北西1.4ｍ、11号土壙墓の北70㎝に位置する。この土壙墓も現代の歩道で大きく削平され、主体部は全く残らず全体像もほとんどわからない。遺存するのは140×104×80㎝の長方形の土壙だけであるが、10・11号土壙墓と並び方、形態、埋土が極めて類似しており、11号土壙墓の一番上のテラスのみが残っている状態と考えられる。



第 17 図　1・14号土壙墓実測図（1/30）

4　古墳時代の遺構と遺物（付図）

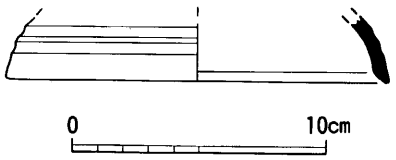
古墳時代に属する遺構と遺物は極めて少なく、土壙墓１基と溝１本だけである。

１号土壙墓（図版17　第17図）　１号土壙墓は丘陵の西側斜面の裾からさらに30ｍほど北側へいったところで、単独で１基だけ検出された。標高43.5ｍ付近で、この周辺ではピットさえ確認できなかった。検出時点での平面プランは164×78㎝の隅丸長方形で、135×44㎝の底面までは深さ45㎝を測る。埋土は黒褐色土が均等に全体的に入っており、若干の礫も認められた。遺物は第18図の須恵器坏蓋の口縁部小破片が１点だけ出土した。

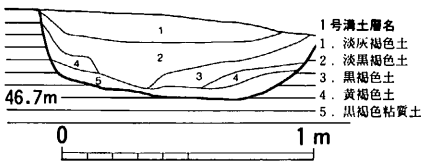
遺物（第18図）　須恵器坏蓋の口縁部で復原口径は約14㎝。器面調整は内外面ともヨコナデ。

１号溝（図版18　第19・20図）　１号溝はJR筑豊本線の南側、筑紫野バイパス５地点（旧天神田遺跡）で検出された長さ18ｍ、幅1.1ｍの溝である。標高45ｍの等高線に沿って、谷状の落ち込みを取り囲むように緩やかに湾曲する。溝の断面形態は第19図の土層断面図が示すように緩やかな「U」字形で、埋土から判断する限りではごくわずかに水が貯まった痕跡（土層断面図第５層）が窺える。出土遺物は第20図の須恵器片２点と土師器小片数点だけである。

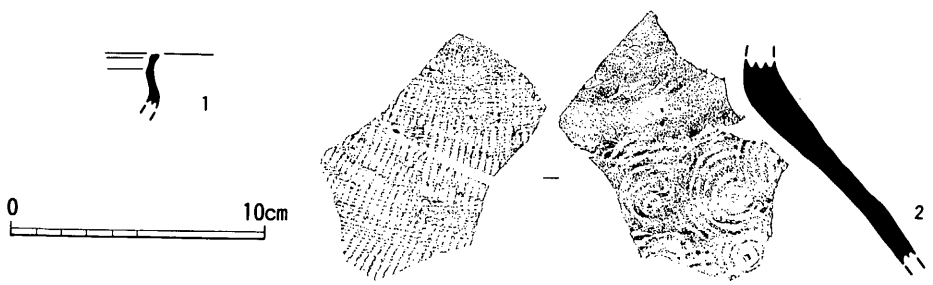
遺物（第20図）　１は須恵器坏身口縁部で、器面調整は内外面ともにヨコナデ。２は須恵器甕の頸部から胴上半部にかけての破片で、外面にはカキ目の後に平行タタキが、内面には青海波当て具痕が明瞭に残るが頸部付近ではナデ消されている。



第 18 図　１号土壙墓出土土器実測図（1/3）



第 19 図　１号溝土層断面実測図（1/30）



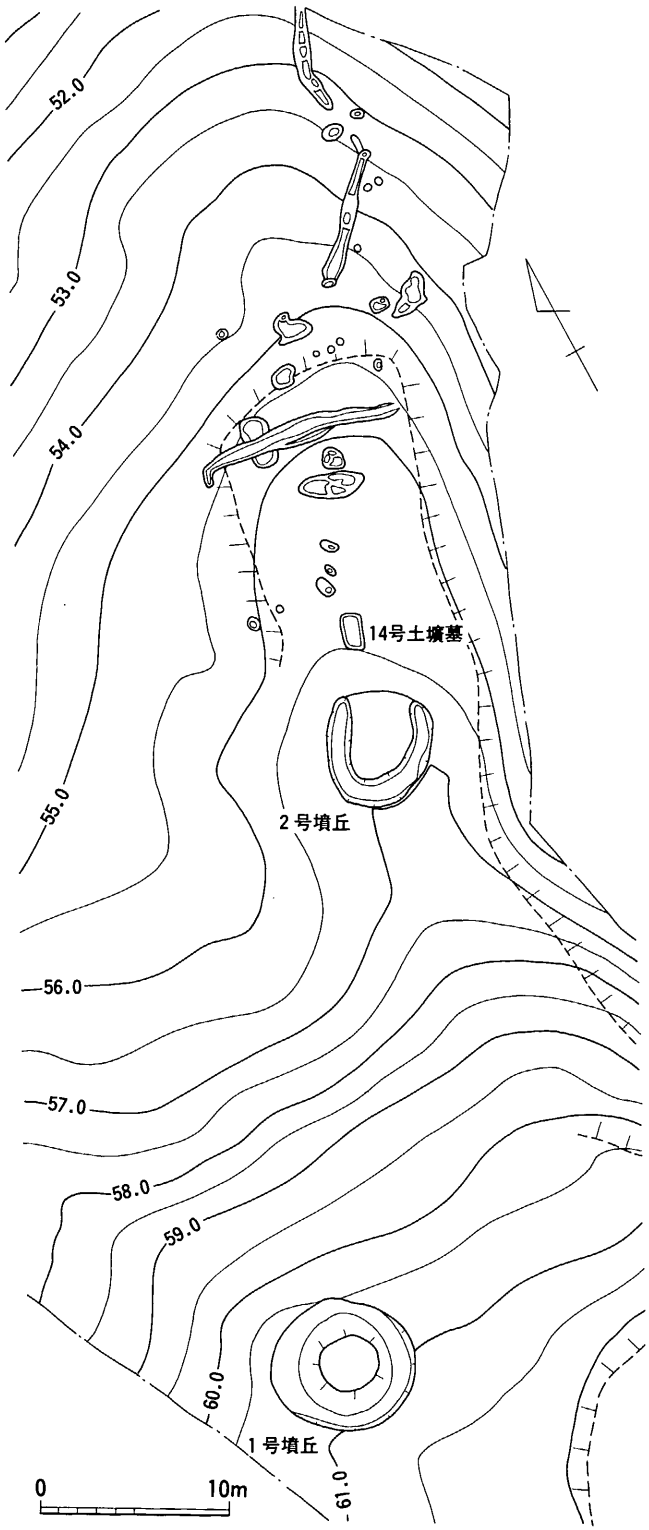
第 20 図　１号溝出土土器実測図（1/3）

5　近世の遺構と遺物（第21図）

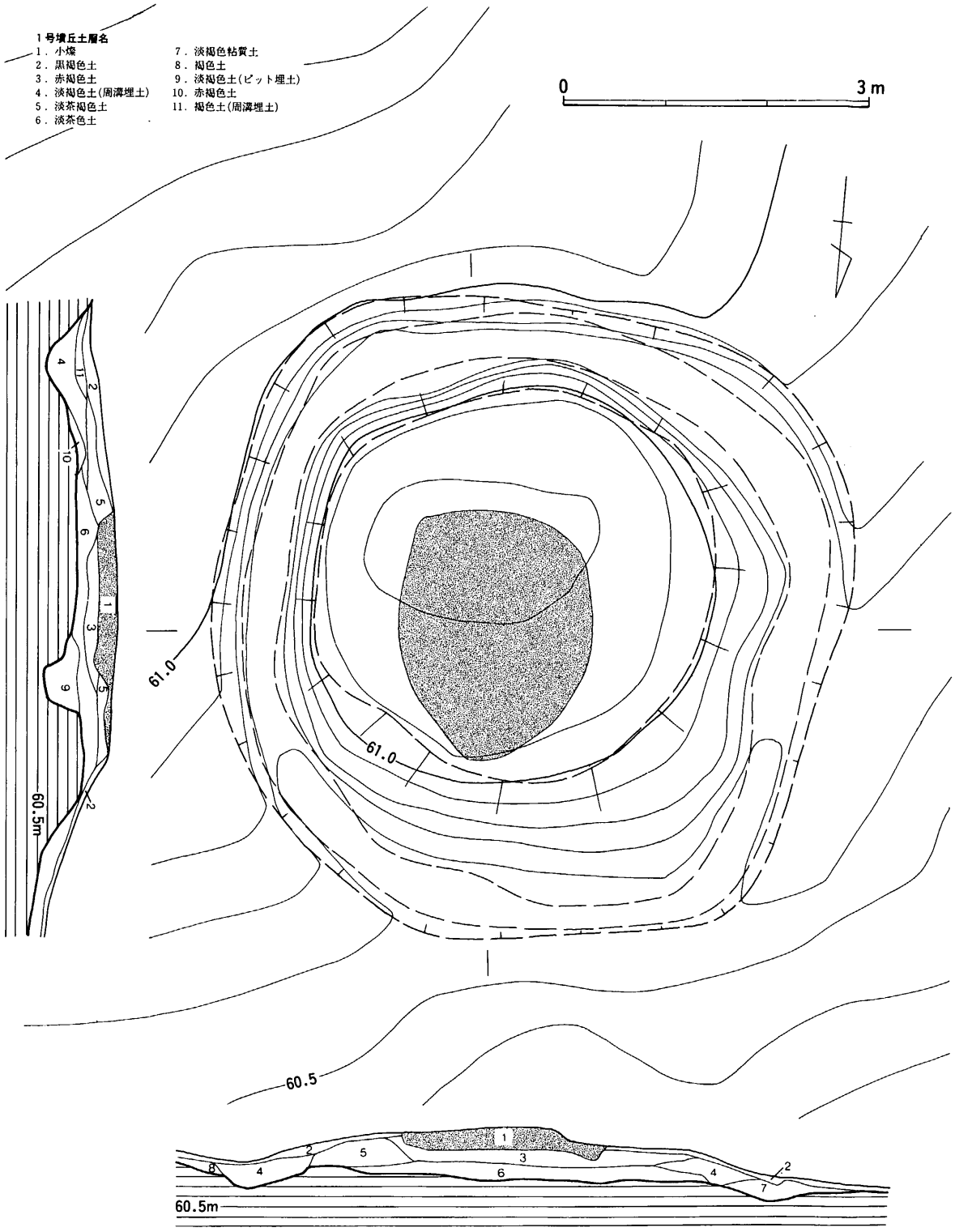
近世の遺構としては2基の墳丘、1基の土壙墓といくつかのピットがある。これらはいずれも丘陵の頂部から北東方向に伸びる尾根上、標高53～62mに点在する。出土遺物のほとんどは土師皿で、16世紀代に属するであろう。これらに近接して溝状の遺構も3本あり、遺物が全く出土していないため所属時期の決定ができないが、やはり近世に属する可能性が高い。

1号墳丘（図版19～21　第22図）

1号墳丘は丘陵頂部から北西方向に30mだけ伸びる、緩やかで低い尾根上、標高60.5～61.0mに立地する。幅40～100cm、深さ20～40cmの周溝が墳丘全体に巡るが、この周溝を含めて8.4×7.8mの規模を測る。墳丘は尾根のわずかな高まりを利用しているが版築等によって構築されたのではなく、周溝を掘った土（主に赤褐色土）をそのまま墳丘として最高60cm程度盛っている様子が土層断面から観察される。墳頂部からやや北側の290×230×25cmの範囲には、4～8cm程度の丸くて小さい礫が敷き詰められていたが、これらは一字一石経ではなくただの川原石である。この下位に何らかの主体部の存在が推定されたが、全く何も確認されなかった。遺物は周溝を中心に墳丘の上やその中からも出土したが、いずれも土師皿の摩滅した小破片ばかりがパン



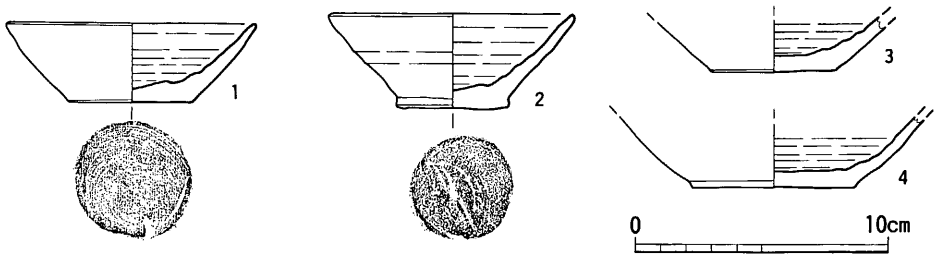
第 21 図　1・2号墳丘および14号土壙墓配置図（1/400）



第 22 図　1号墳丘実測図 (1/60)

ケース１箱弱程度になる。図示できたのは第23図の４点だけである。

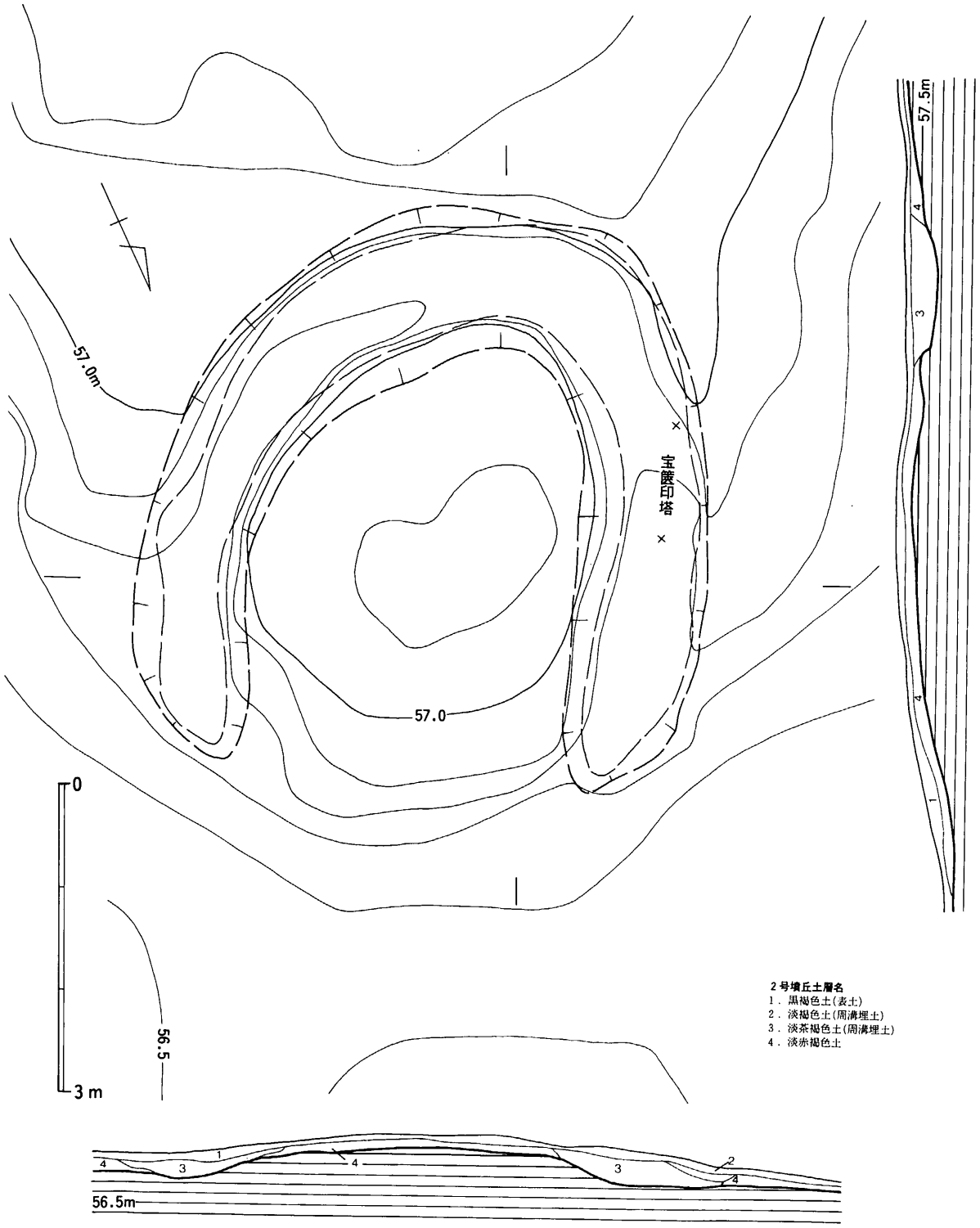
遺物（図版23　第23図）　すべて土師皿で摩滅の著しい小さい破片ばかりで、出土点数の割には実測できたものが少なかった。１は復原口径10cm、器高3.1cm、底径5.2cmを測り、糸切りが行なわれ底部内面にはナデが施される。２は復原口径10cm、器高3.6cm、底径3.6cmを測り、底部外面には板状圧痕が残る。３は復原底径3.4cm、４は4.4cmで、底部内面にはナデが施され、外面には糸切り後の板状圧痕が窺える。



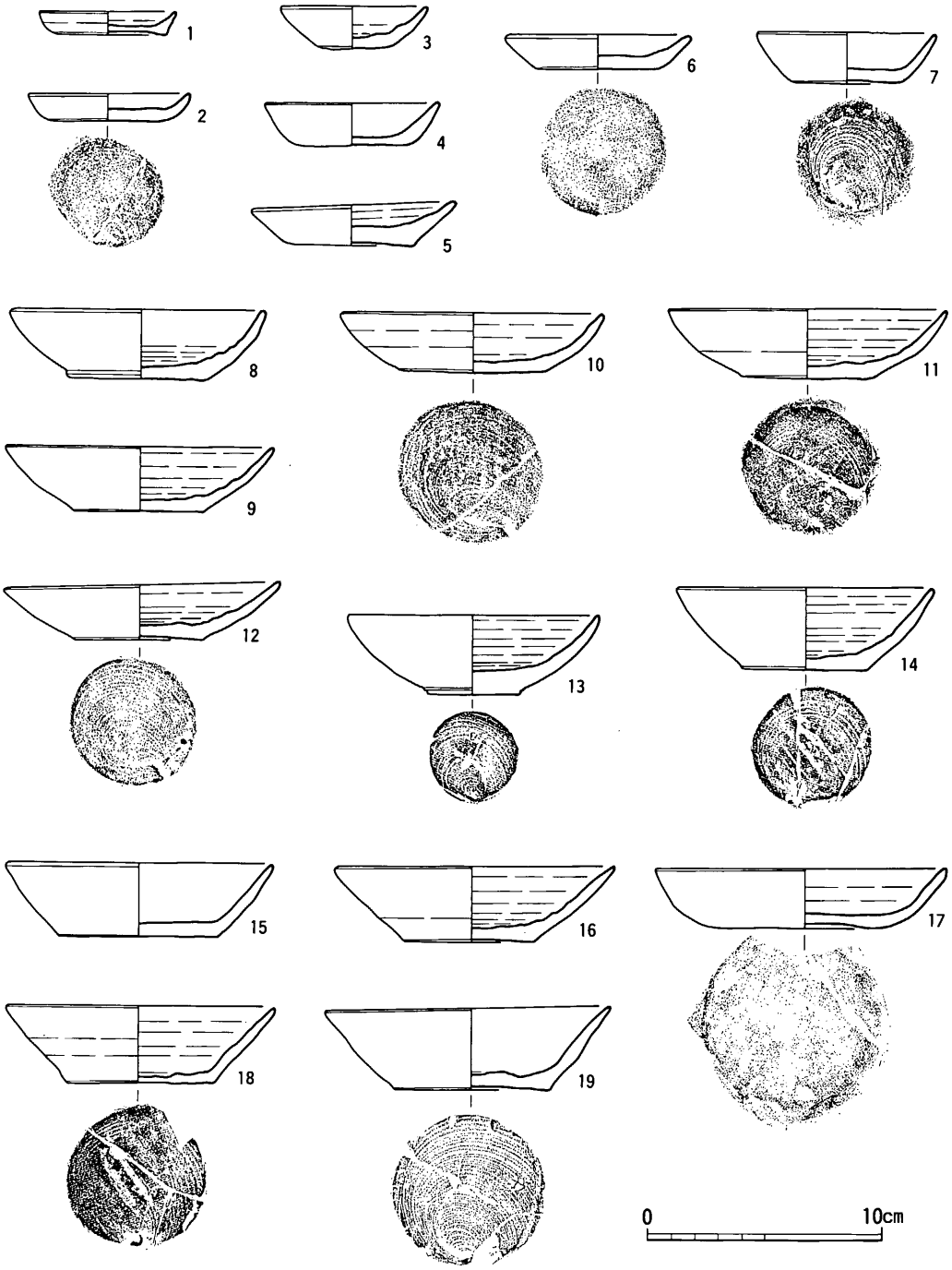
第 23 図　１号墳丘出土土器実測図（1/3）

２号墳丘（図版22　第24図）　２号墳丘は丘陵頂部から北東方向に伸びる尾根上でも比較的平坦になっている標高56.6～57.1ｍに立地する。幅１～1.5ｍ、深さ20～30cmの周溝が巡るが、これは全周せずに最も低い北側1/4は途切れる。周溝を含めて、7.2×6.6ｍの規模を測る。１号墳丘と同様に墳丘には版築等が行なわれた痕跡がなく、おそらく周溝を掘った際に出た土（主に赤褐色土）をそのまま盛ったものと考えられる。この盛り土は厚さ20cm程度であるが、墳丘自体は尾根の最も高いところにあり、また周溝によって周辺が若干削られているので、視覚的には高さ40cmほどの墳丘に見える。墳頂部には何らかの主体部的遺構の存在が想定されたが、やはり１号墳丘と同様で何も検出されなかった。遺物はほとんど土師皿ばかりがパンケース５箱分と多量であったが、これらは周溝を中心に墳丘内からも満遍なくかなり出土した。また周溝内より宝篋印塔の一部と考えられる石製品の破片が２点出土した。

遺物（図版24　第25・26図）　出土遺物のほとんどは土師皿であるが、法量や器形から大きく３つのタイプに分類できよう。第１類は口径が８cm以下、器高が２cm以下のもので口縁部までほぼ直線的に短く立ち上がる１～７。これ以外のものの法量はすべて口径が10～12cm、器高が2.5～3.5cmの範囲に収まるが、その中でも底部から口縁部まで緩やかに内湾して立ち上がる第２類８～14と、ほぼ直線的に立ち上がる第３類15～19とに分かれる。内面の器面調整は明瞭に稜の残るヨコナデで、底部付近についてはナデが施されることもある。外面もヨコナデで、底部についてはすべて糸切りが行なわれ、板状圧痕の伴うものやナデによってそれらを消してしまうものもある。28は宝篋印塔の隅飾突起である。現存高は8.7cm。29は格狭間の一部と考えられるが、これだけを見ると裏面には粗いノミ痕がそのまま残る板状のものであって、他の部材と組み合わせによる使用が想定される。しかし、宝篋印塔の格狭間は普通一石によって作



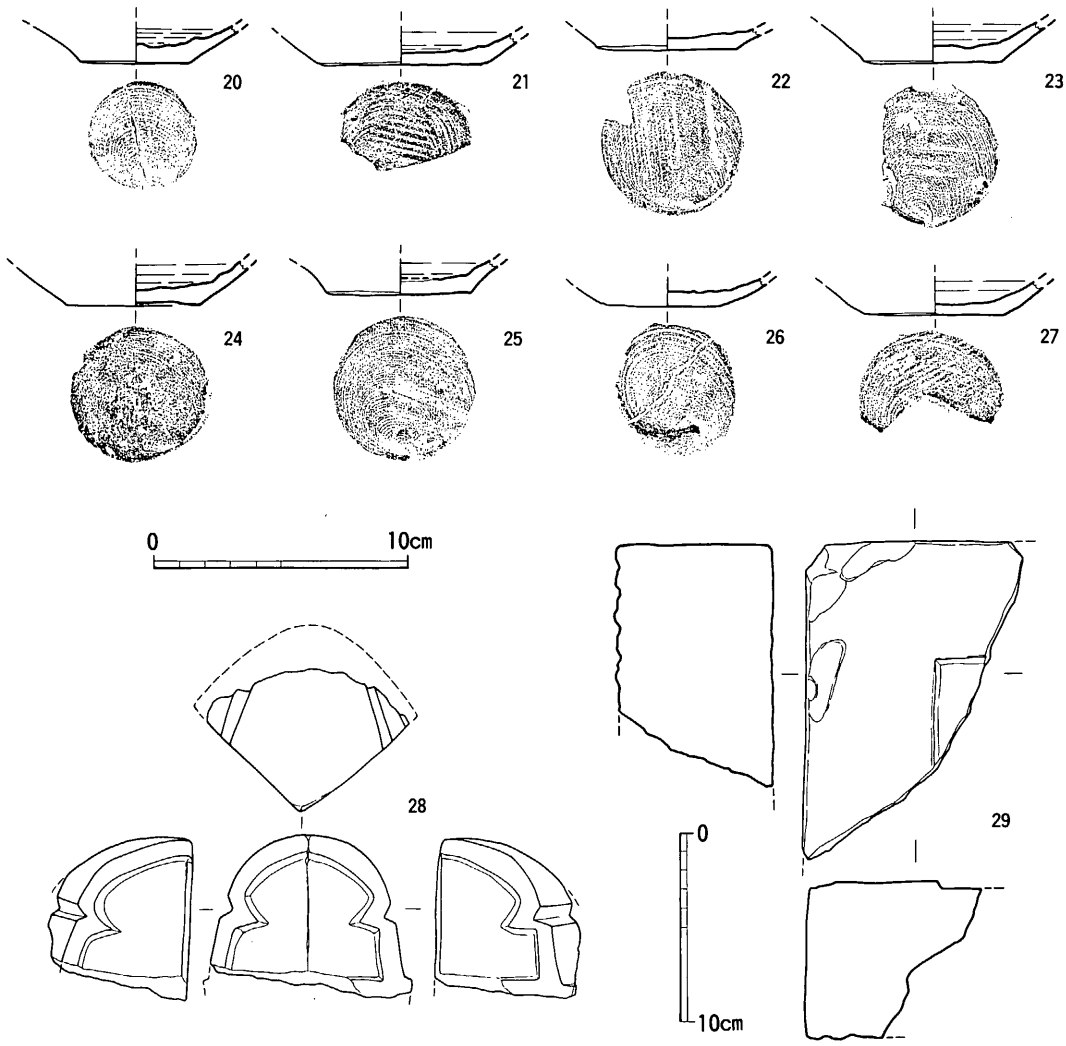
第 24 図　2号墳丘実測図 (1/60)



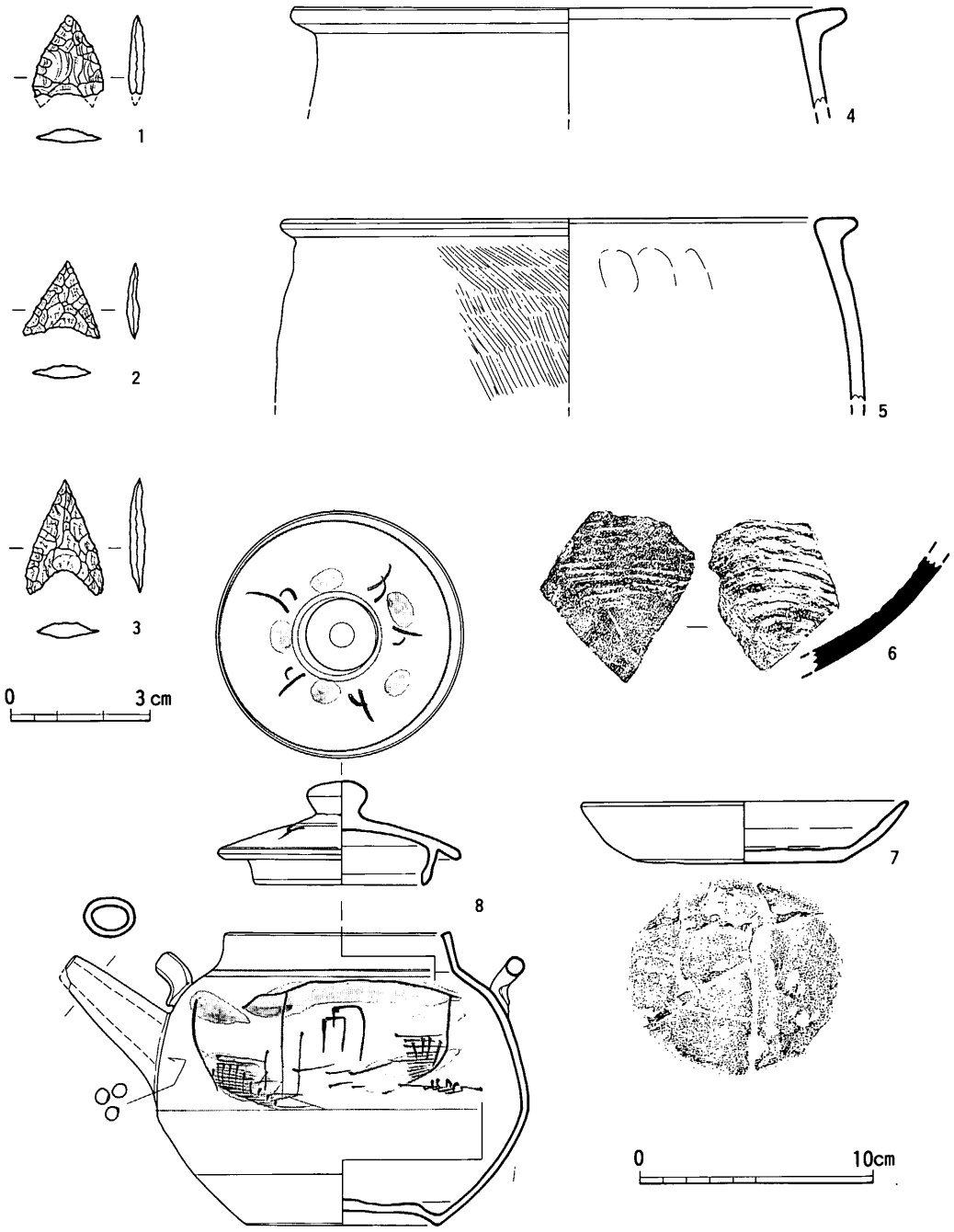
第 25 図　2 号墳丘出土遺物実測図 1　(1/3)

られており、板状石材の組み合わせによる類例が見当たらないだけに今後に課題を残す。現存するのは16.8×11.3cmで、厚さ8.2cm。

14号土壙墓（図版17　第17図）　14号土壙墓は丘陵頂部から北東方向に伸びる尾根上の標高56.5m付近、2号墳丘の北2mに立地する。平面プランは187×97cmの長方形を呈し、深さ15cmほどで平坦な底面に至る。北側には礫が浮いた状態で出土したが、その性格は不明。遺物は1・2号墳丘で多量に出土したのと同じ土師皿の小破片が少量出土したが、いずれも埋土中で底面からの出土ではない。墓としての積極的な根拠には欠けるが、土壙の形態を重視してとりあえず土壙墓として取り扱った。



第 26 図　2号墳丘出土遺物実測図2（1/3）



第 27 図　土壙・ピット出土および表採遺物実測図（1 ～ 3 は2/3,　4 ～ 8 は1/3）

6　その他の遺物（第27図）

ここで取り上げる遺物は、他の時代の遺構埋土やピットをはじめ、調査地内で表面採集されたものも含む。

縄文時代に属する遺物としては２点の石鏃がある。第27図１は腰岳産黒曜石製で重量は0.5ｇ。２はサヌカイト製で重量は0.8ｇ。いずれも採集品で遺構に伴うものではない。４・５は弥生時代中期前半の甕の口縁部付近で、丘陵西側斜面で検出された陥し穴状遺構の周辺のピットから出土した。このあたりのピットからは弥生土器片が少量出土しているが、図示できるのはこの２点だけである。５の外面にはハケ目が、内面には指頭圧痕が観察される。６は採集品で、須恵器甕の底部付近。平行タタキが残る。７も採集品で、口径14㎝、器高2.6㎝、内外面ともに比較的丁寧にナデられる。８は丘陵頂部で採集された土瓶である。福岡県春日市上白水の門田遺跡辻田地区墓地群の調査（井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第９集1978福岡県教育委員会）において全く同じ土瓶が埋設された状態で出土しており、後産（胞衣）処理の埋納器として報告されている。球形の胴部には白釉の下地に家・松林・帆かけ船等の染め付けが行なわれるが、このような手法は肥前陶器一般に広く見られるもので窯元の特定は難しい。出土した丘陵頂部には発掘調査の直前まで墓地が残っていただけに、後産（胞衣）処理の埋納器の可能性が極めて高い。

第３節　まとめ

倉良遺跡の調査で検出された主な遺構は、縄文時代の陥し穴状土壙（５基）、弥生時代後期前葉の密集した甕棺墓（２基）と土壙墓（12基）、古墳時代の土壙墓（１基）と溝（１本）、近世16世紀代の墳丘（２基）と土壙墓（１基）等である。6,700㎡という調査面積からすれば遺構の数は決して多くないが、いくつか重要な点があるのでここで纏めてみたい。

1　縄文時代の陥し穴状土壙について

丘陵西側斜面でも裾に近い標高48～54ｍの比較的急峻な傾斜地において５基の土壙を検出した。これらは幅７ｍ、長さ23ｍの範囲で、７～８ｍの間隔をもって等高線と直交するように配列されている（第１図）。個々の土壙を見た場合、規模、底面構造、主軸方向等において相違点は見られるものの、長方形の底面プランや淡い暗褐色土を埋土とする特徴はいずれも共通しており、基本的には従来より言われているところの「陥し穴状遺構」として纏めることができる。特に、等間隔で直線的な配列は注目に値しよう。近年、旧石器時代から現代までも陥し穴状遺構が確認されており、本遺跡の場合も縄文時代という年代的な根拠に欠けるきらいはある

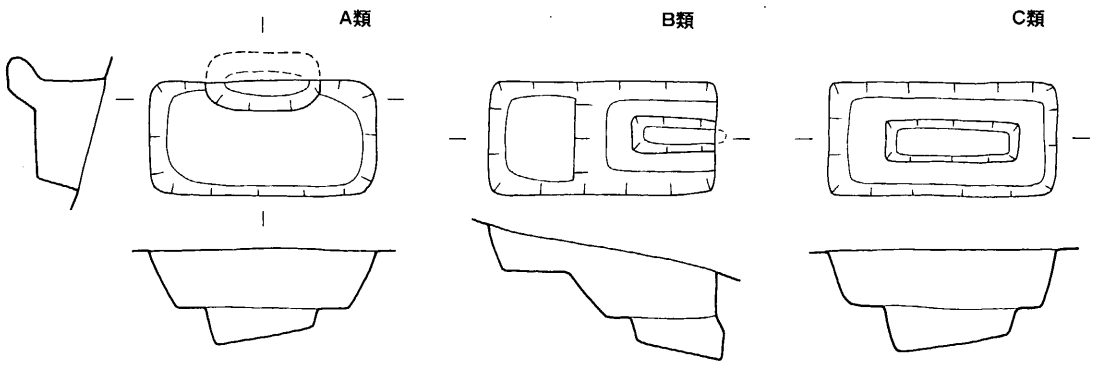
が、４号土壙から出土した縄文時代に属するであろうサヌカイト製の石鏃の存在を重視しておきたい。

2　弥生時代の甕棺墓・土壙墓群について

標高54.0～56.5ｍ、傾斜角度20～25度の急峻な丘陵東向き斜面の中でも、南北14ｍ、東西８ｍのわずか100㎡の範囲において、最短10㎝の間隔で決して切り合うことのない２基の甕棺墓、12基の土壙墓群を検出した。この極端に近接はするが決して切り合わない状況からは、甕棺墓・土壙墓群（以下「墓群」と称する）が形成された当時において、先に構築された甕棺墓なり土壙墓なりの盛り土や掘りかたが明瞭に残っている段階で、それらを切る（削平する）ことなく次の墓が構築された状況が想定されるのである。すなわち、墓群の合計がわずか14基にしかならないという事実と合わせて、この墓群が極く短期間のうちに小集団によって形成されたことを物語っているのである。

所属時期については２基の甕棺から判断することができる。１号甕棺は卵形の器形、２号甕棺は胴部上半部に最大腹径がくる比較的特異な器形という相違点を除いて、「く」の字状の口縁部形態、頸部に１条の突帯、胴中央部よりやや下位にある垂れ気味の１条突帯、１ｍ近い器高など類似点が多い。ここでみられる特徴は甕棺の総合的な編年的研究を行なった橋口達也のKⅣb期、小郡市横隈狐塚遺跡の甕棺をベースに三国丘陵を中心とした甕棺の編年を行なった速水信也のⅧ期に相当し、弥生後期前葉という年代観が与えられよう。したがって、本群の形成時期としては弥生後期前葉の中でも特に短い時間幅を与えることができるのである。また、当該期は甕棺墓の衰退期であり、この点からも２基の甕棺墓と12基の土壙墓によって構成される墓群がこの状況を的確に表出していると評価することもできよう。

さて、ここでわずか12基しかない土壙墓群の形態分類を行なうが、基本的にはＡ類「横口式足元掘込み土壙墓」、Ｂ類「足元掘込み土壙墓」、Ｃ類「二段掘り足元掘込み土壙墓」の３タイプのいずれかに属する（第28図）。

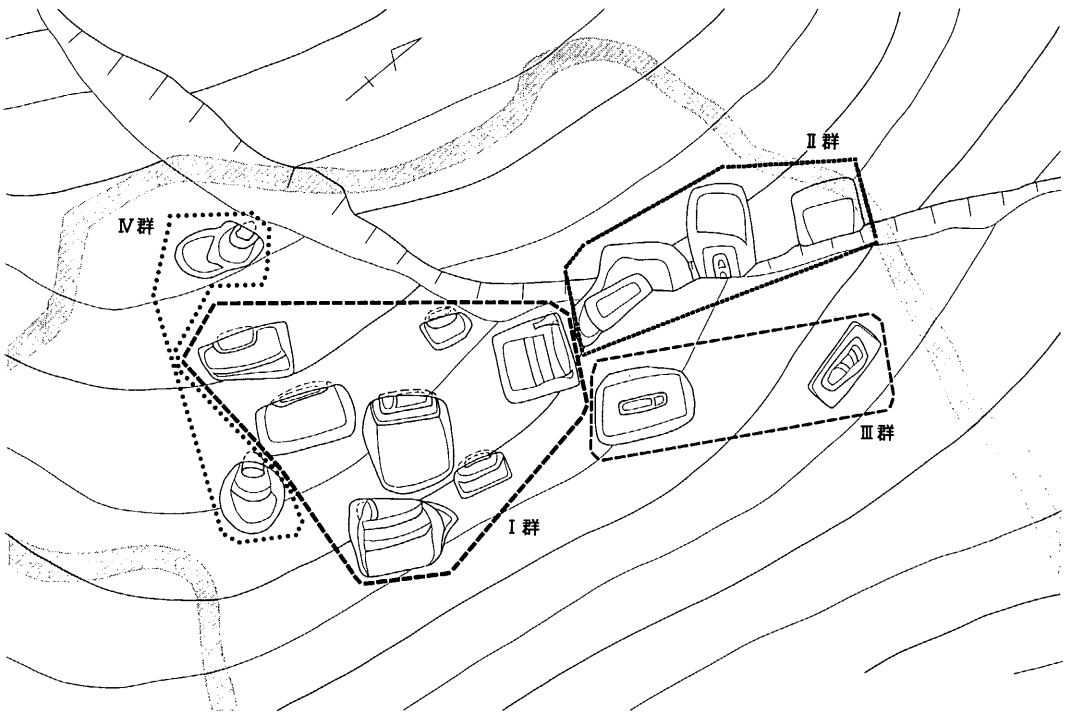


第 28 図　土壙墓の形態別分類模式図

A類「横口式足元掘込み土壙墓」（3～9号）：まず長方形に近い平面形態の墓壙をほぼ垂直に掘り下げ、それから傾斜の高い方、つまり丘陵頂部方向へ主体部を横位置に掘り込む。この場合、木蓋は主体部に対して水平に覆うのではなく、壁に立てかけるように斜めに覆うことが、残された目張り粘土（3・6号）や壁のほぞ穴（8号）から推定される。主体部は所謂足元掘込みで、足元だけを掘り窪めて明瞭な段を作出するもの（3・6号）と、足元方向に緩やかに傾斜させるもの（4・5・7～9号）とがある。また、墓壙もしくは主体部まで掘った段階でその形を整えるために、灰白色粘土を入れて整地・整形するものもある（3・6・7号）。

B類「足元掘込み土壙墓」(10・11・13号）：このタイプはいずれも現代の歩道によって大きく削平されているため、その全容を知ることが難しい。ただし、斜面の傾斜方向から判断して、A類のように傾斜の低い方から高い方へ掘り込むのではなくて、敢えて傾斜の高い方から低い方へ階段状のテラスを作出しながら墓壙を掘り込んでいるように観察された。主体部は所謂足元掘込みであるが、11号では小児用の主体部に2枚の木蓋を被せた痕跡が窺えた。本類型はいずれも全体像がわからないので、主体部の特徴である足元掘込みという名称だけを使用した。

C類「二段掘り足元掘込み土壙墓」（2・12号）：まず長方形に近い平面プランの墓壙をほぼ垂直に掘り下げ、その中央部に主体部を掘り込むタイプ。いずれも木蓋で主体部を覆ったことが、目張り粘土の存在から推定される。主体部は足元掘込みになっている。



第 29 図　甕棺墓・土壙墓群形態分類別群構成模式図

このように、いずれの土壙墓においても主体部は基本的には足元掘込みという構造になり、これら3類型の相違点は墓壙の主体部以外の構造の違いに起因するものである。そこで次に、これら3類型がどのような位置関係にあるのか、すなわち構造の違いにどのような意味があるのかを、分布の状況を通して考えてみたい。第29図に示したように、A類に相当する3～9号土壙墓は墓群の中でも南側に集中しており、この範囲の中に他の類型のものは含まれない。これをⅠ群とする。Ⅰ群の土壙墓の頭位は北北東であるが、8号土壙墓だけ西北西になる。8号土壙墓については一応A類として分類されてはいるが、構造的に3～7・9号土壙墓と微妙に異なっており、あるいはA類に含めることに問題があるのかもしれない。B類の10・11・13号土壙墓は墓群の中でも北側に並んでおり、これも他の類型を含まずⅡ群とする。2・12号土壙墓のC類は墓群北側でもⅡ群の東側に並んでおり、Ⅲ群として括ることができる。こうしてみると、3類型からなる土壙墓の構造の違いは、この狭い範囲においてもそれぞれに切り合うことなく、また混在することなく纏まって構築されており、ここに何らかの規制が作用していたと考えることができる。2基の甕棺墓についても墓群の南端部にあることから、3類型の土壙墓と同じ規制のもとにある可能性が高い（Ⅳ群）。このように、墓の構造の違いは決して偶発的で無意味な習慣によって生じたのではないことが、この分布状況から窺える。すなわち、墓の構造は何らかの明確な意図に基づいて選択されていることを強調しておきたい。なお、墓に見られる規制といえば、帰属集団や家族の出自の違いが連想される。確かに、14基という少ない墓群であっても赤色顔料を有するもの（3号）や小児用（7・9・11号）があり、様々な問題が連想されるが、ここではそういった問題が存在することだけを提示するに留めたい。

土壙墓の主体部は木蓋で覆われていたことが、目張りとして使用された灰白色粘土の存在からわかる。この粘土については、主体部の上面全周に幅広く巡る例が3号土壙墓で唯一見られるものの、他は全周することなく全体の3/4ほどを「コ」の字状に細長く巡るパターンである（2・11・12号　おそらく6号も）。敢えて全周させずに「コ」の字状に目張りする意義を調査においても必要に追求したが、明確な解答は得られなかった。類例の増加に期したい。

この墓群の地形的な特殊性についても若干触れておきたい。先述したように、この墓群はわずか100㎡足らずの狭い範囲に密集するが、この範囲に限って赤褐色土の地山の下位に存在する白色のバイラン土層が剝き出しになっている（第5図）。調査開始段階の表土を除去した時点で初めてこの事実に気付いたが、この丘陵の東および南側の低地や丘陵からもこの地点だけがわずかに白く浮き上がって見えた。おそらく、墓群が構築された当時においてもある程度は同じ状況であったと考えられ、視覚的に墓域が認識できる特殊な例のようである。

以上、倉良遺跡の甕棺墓・土壙墓群を見てきたが、そもそも横口式や足元掘込みの土壙墓は、中期末から後期前半にかけての糸島平野・福岡平野・背振東南麓・筑後川北岸地域、中でも特に福岡平野南部から背振東南麓に濃密な分布が見られるものである。倉良遺跡はこの分布のほ

ぼ中央部に位置し、甕棺墓衰退期における当該地域の最も普遍的な墓制形態を示している。わずか14基からなる甕棺墓・土壙墓群であるが、100㎡の急斜面の中にあって近接して決して切り合わない状況、墓の構造によって群構成が異なること、またこの墓域が遠方からも視覚的に認識できること等、多くの注目すべき要素を含んでいることを特に強調しておきたい。

3　近世の墳丘について

倉良遺跡では16世紀に属する２基の墳丘状遺構が検出されたが、これらはいずれも尾根線上にあってその高まりを利用したものである。版築による整然とした墳丘ではなく、周溝を掘ってその際に出た土を単に盛っている。１・２号墳丘ともほぼ同じ形態と構造を呈しているが、１号墳丘については墳丘頂部に小礫が敷き詰められ、２号墳丘については周溝より宝篋印塔の破片が出土しており、祭祀的な性格の存在を窺わせる。ただし、主体部を何も持たないことや、墳丘の盛土内に多量の土師皿が包含されていることを考慮にいれるなら、墳丘の上で何らかの祭祀的な行為を行なったというよりも、墳丘を作る行為自体に祭祀的な意味あいを多く含んでいたものと考えられる。本遺跡の２つ南の丘陵、距離にして南南西約500ｍの地点には『延喜式』

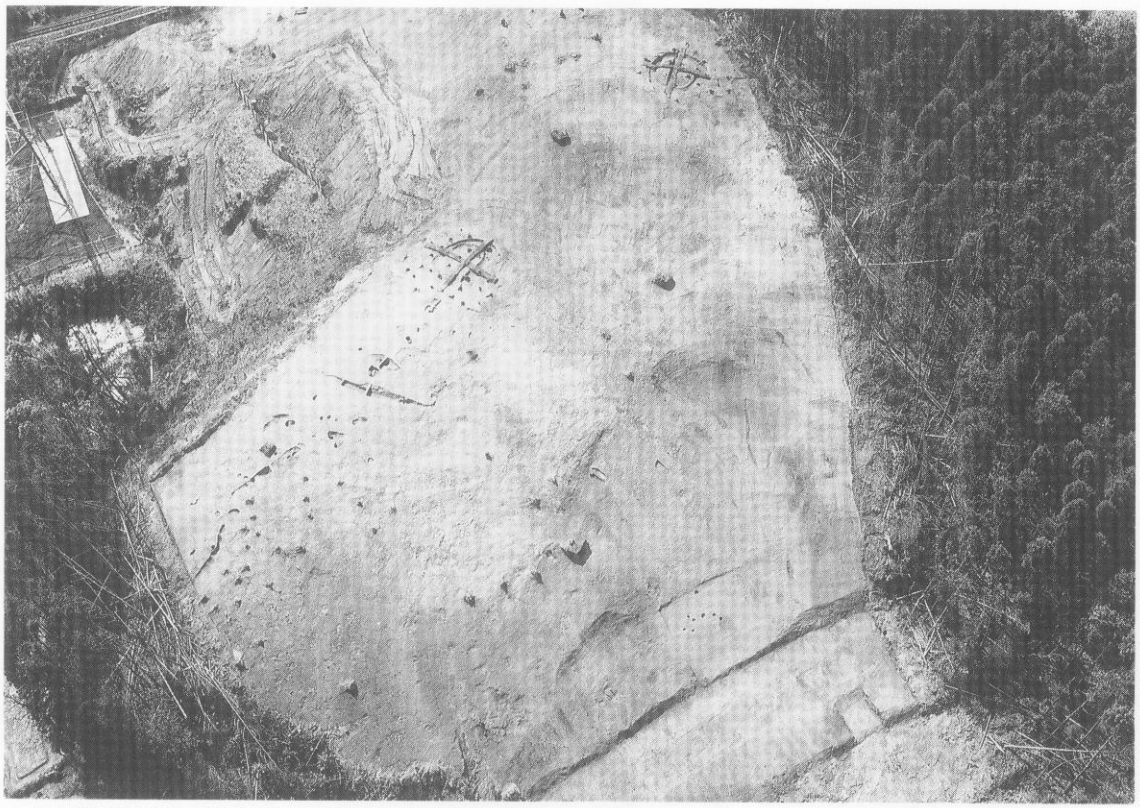


第 30 図　西側斜面調査風景（北西から）

に登場する筑紫神社があり、両者の関連性が想定される。しかし同時に、本遺跡の北北東約９㎞には修験道のメッカである宝満山が臨め、それに関連したものである可能性も当然存在しよう。

図　　版

倉良遺跡



1．調査区全景（北から）



2．調査区全景（南東から）



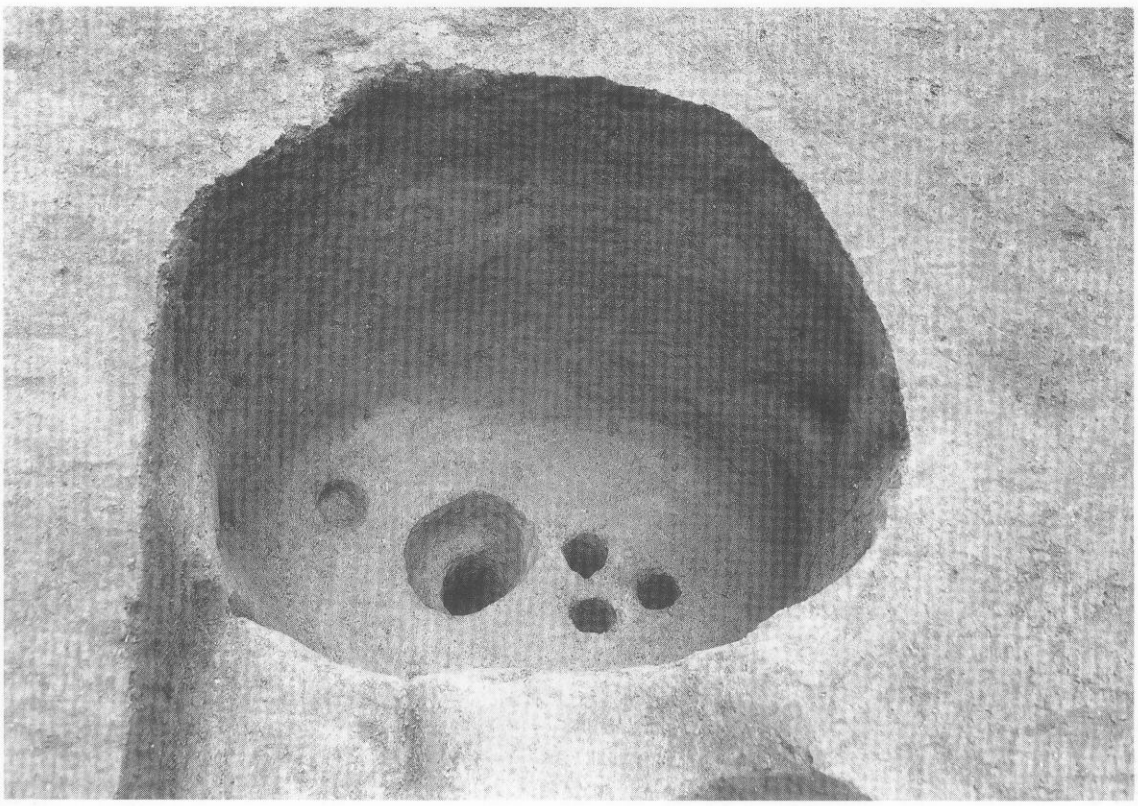
1．西側斜面全景（1・2号墳丘　北から）



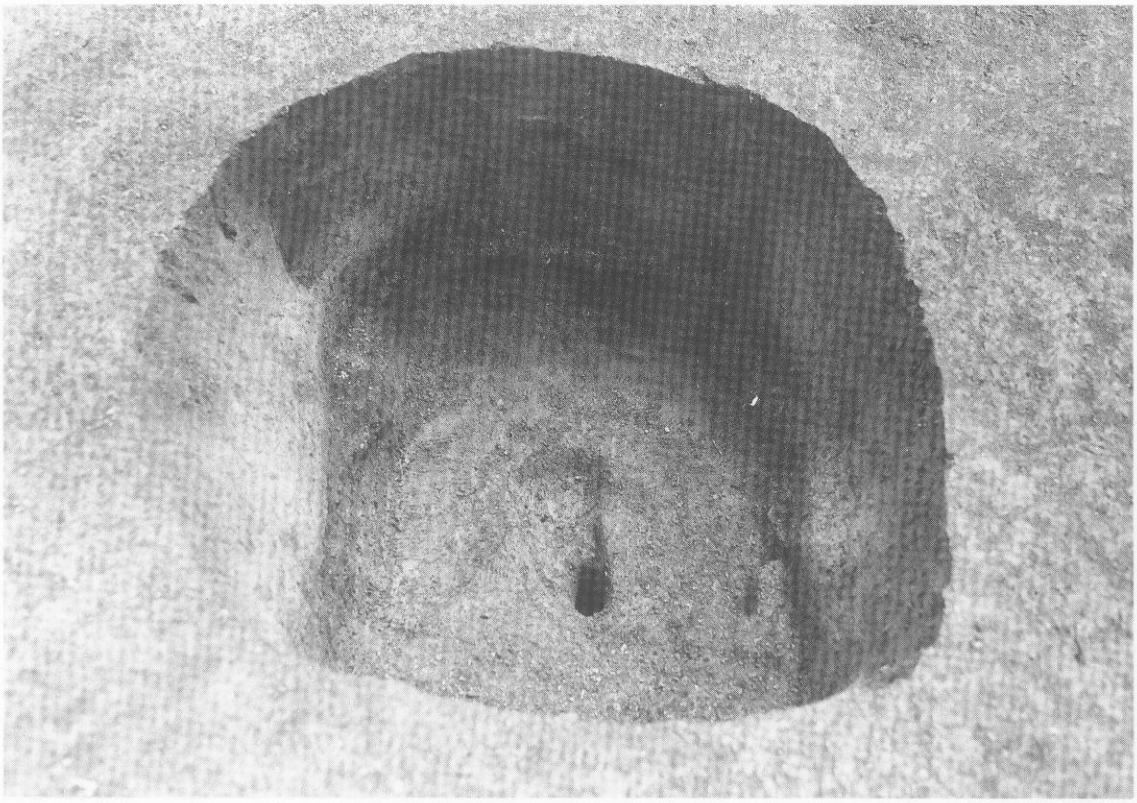
2．東側斜面全景（甕棺墓・土壙墓群　南東から）



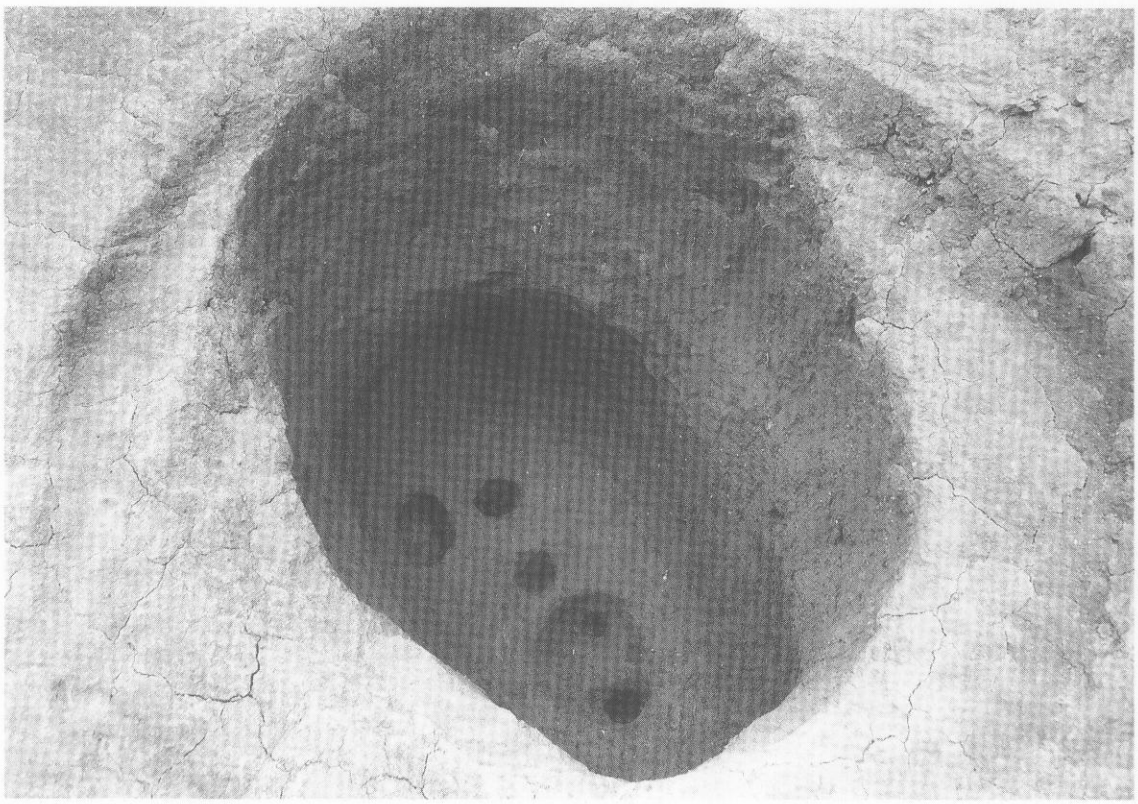
1．西側斜面全景（土壙群　北西から）



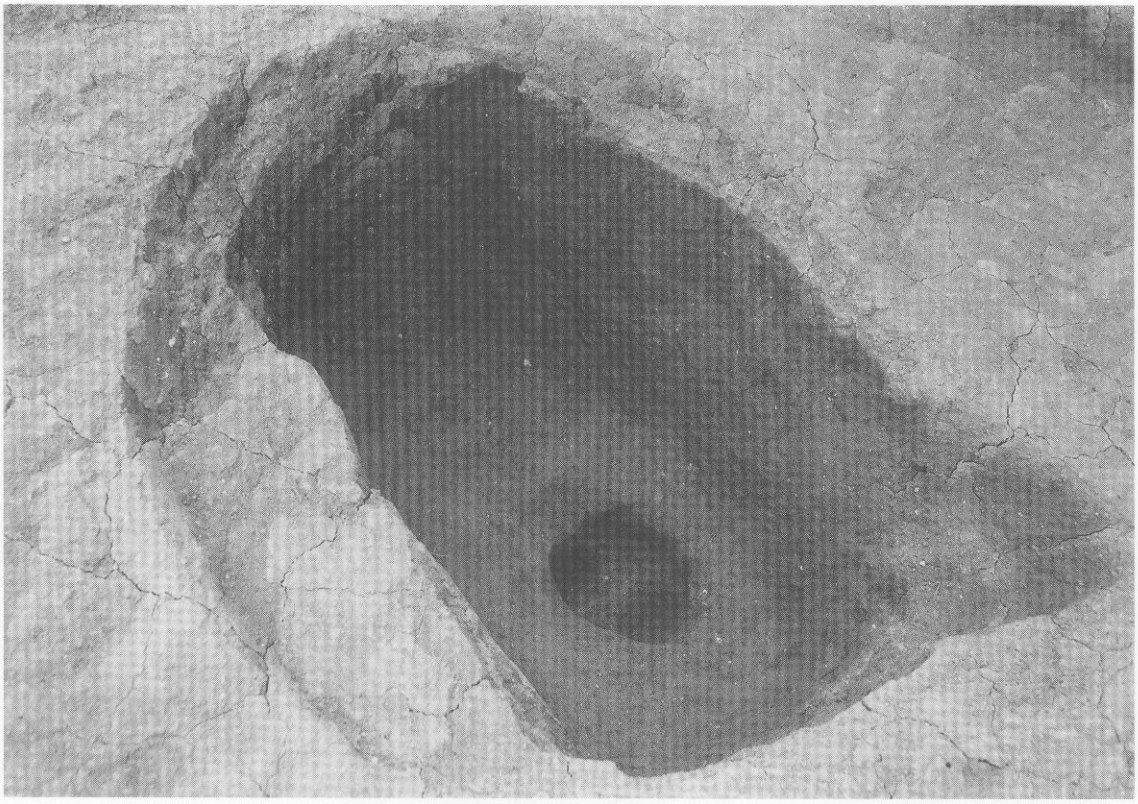
2．1号土壙（北西から）



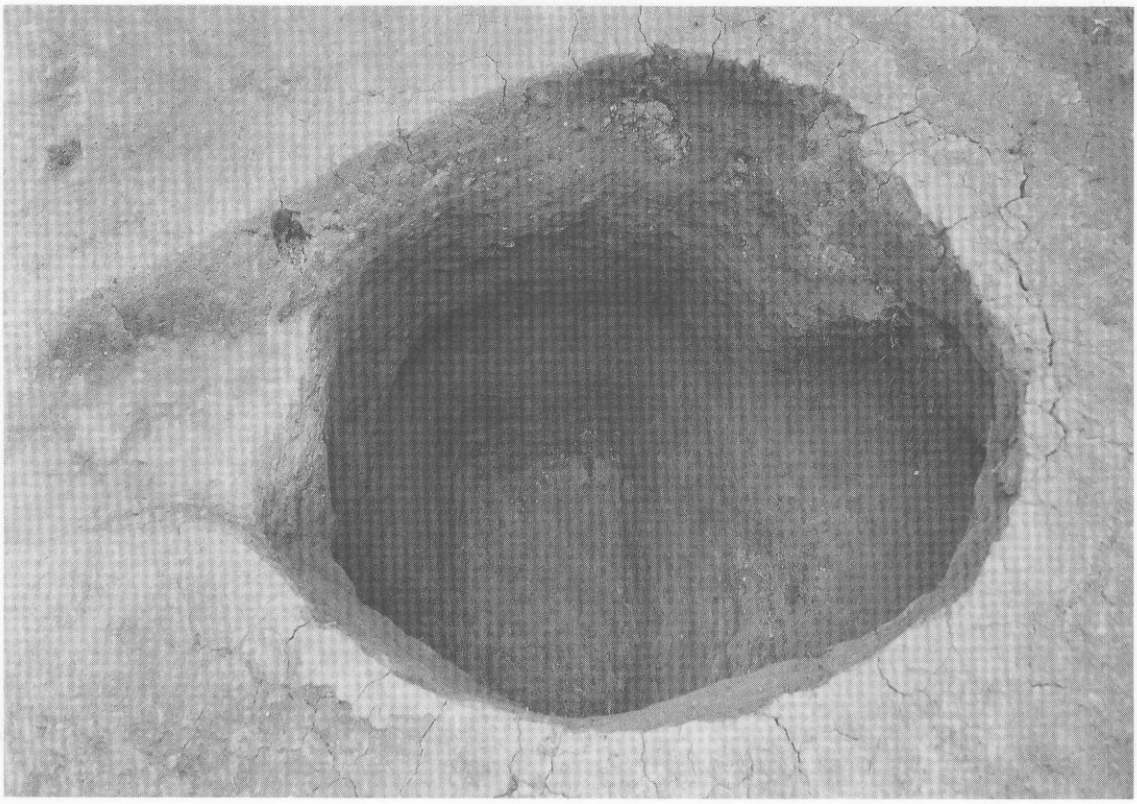
1．2号土壙（北から）



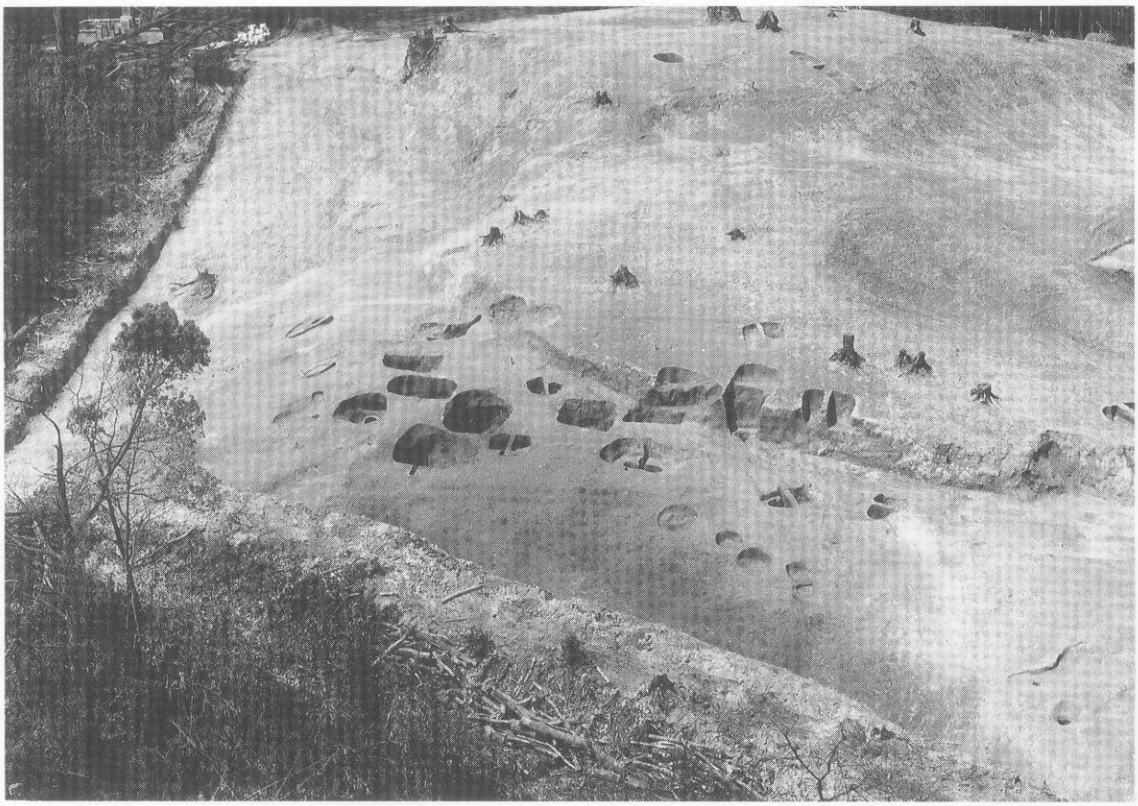
2．3号土壙（北西から）



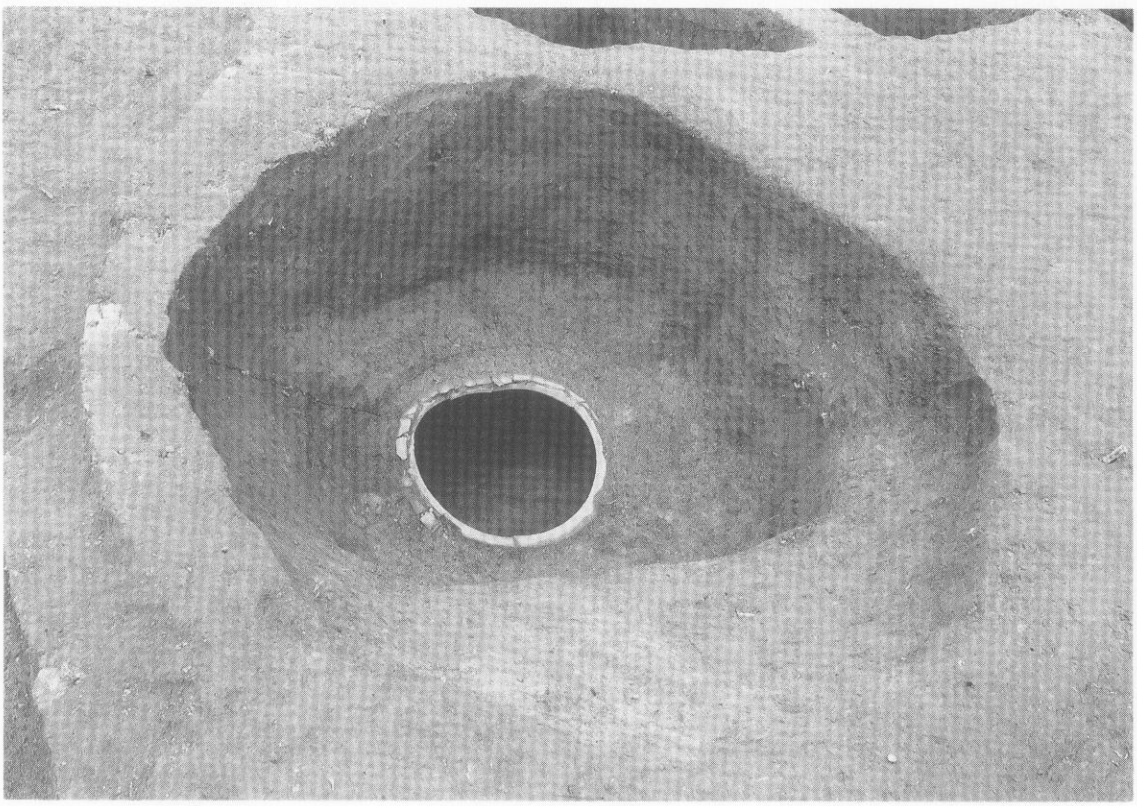
1．4号土壙（北から）



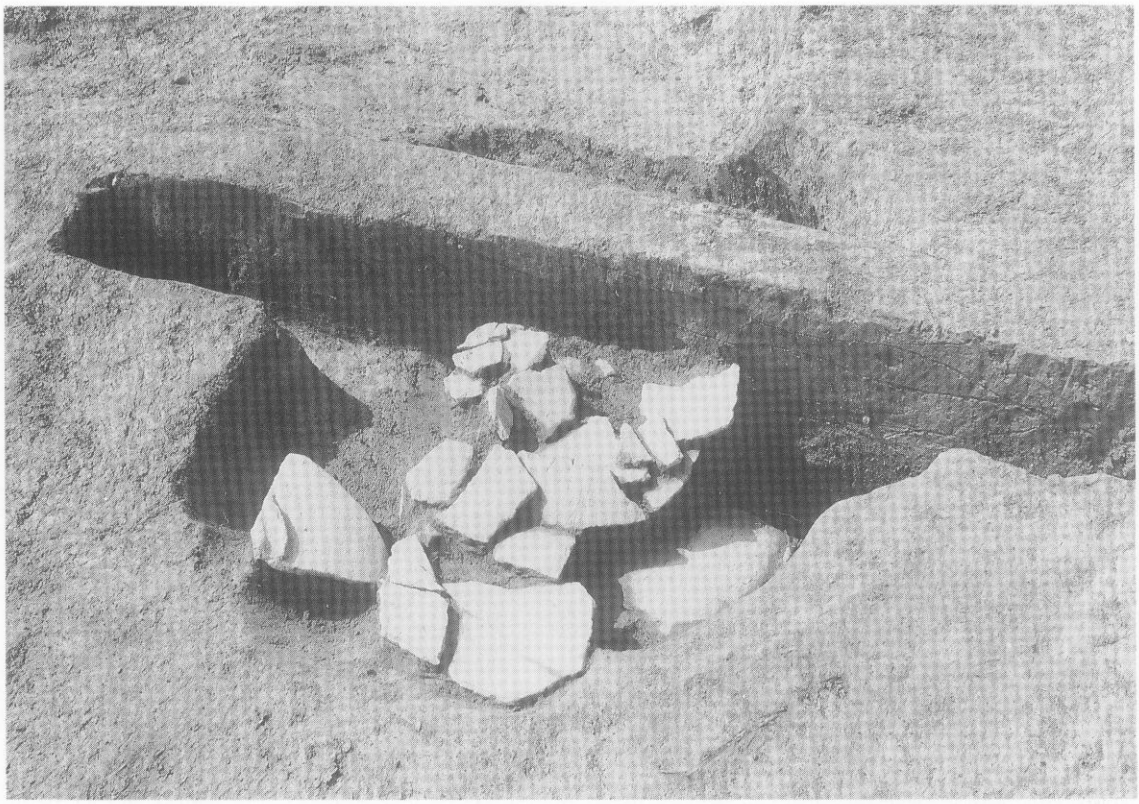
2．5号土壙（北東から）



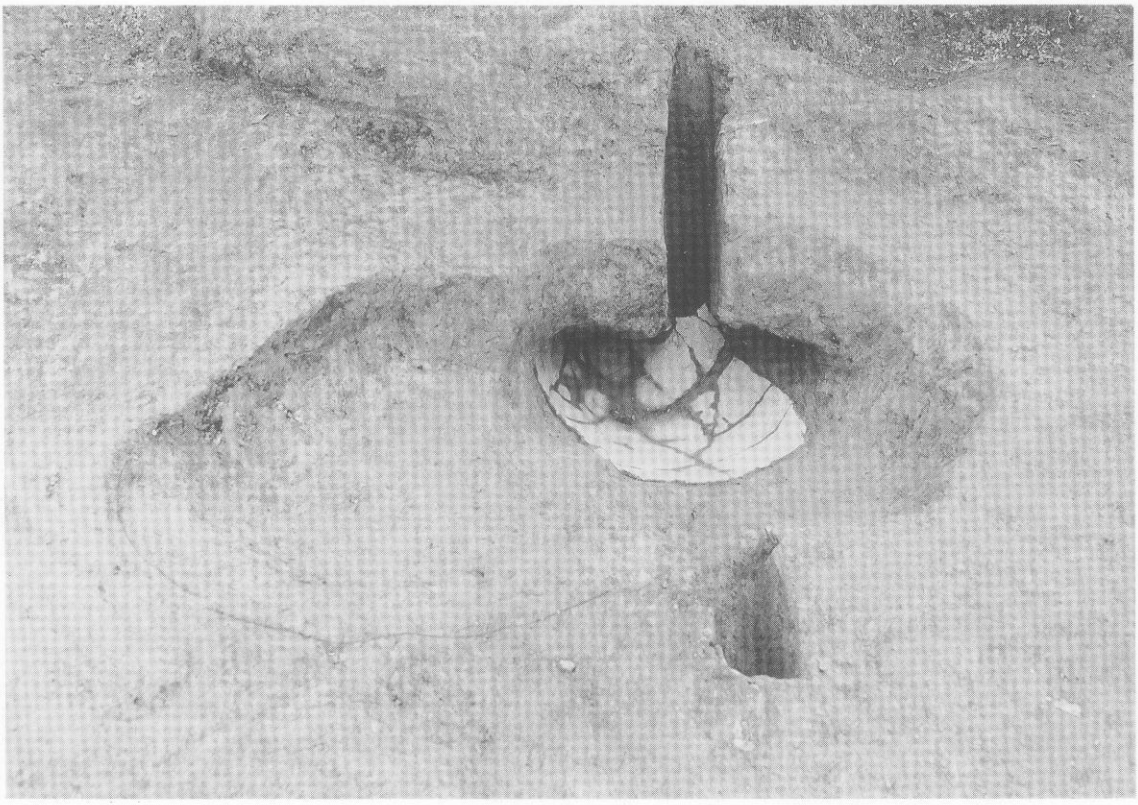
1．甕棺墓・土壙墓群全景（南東から）



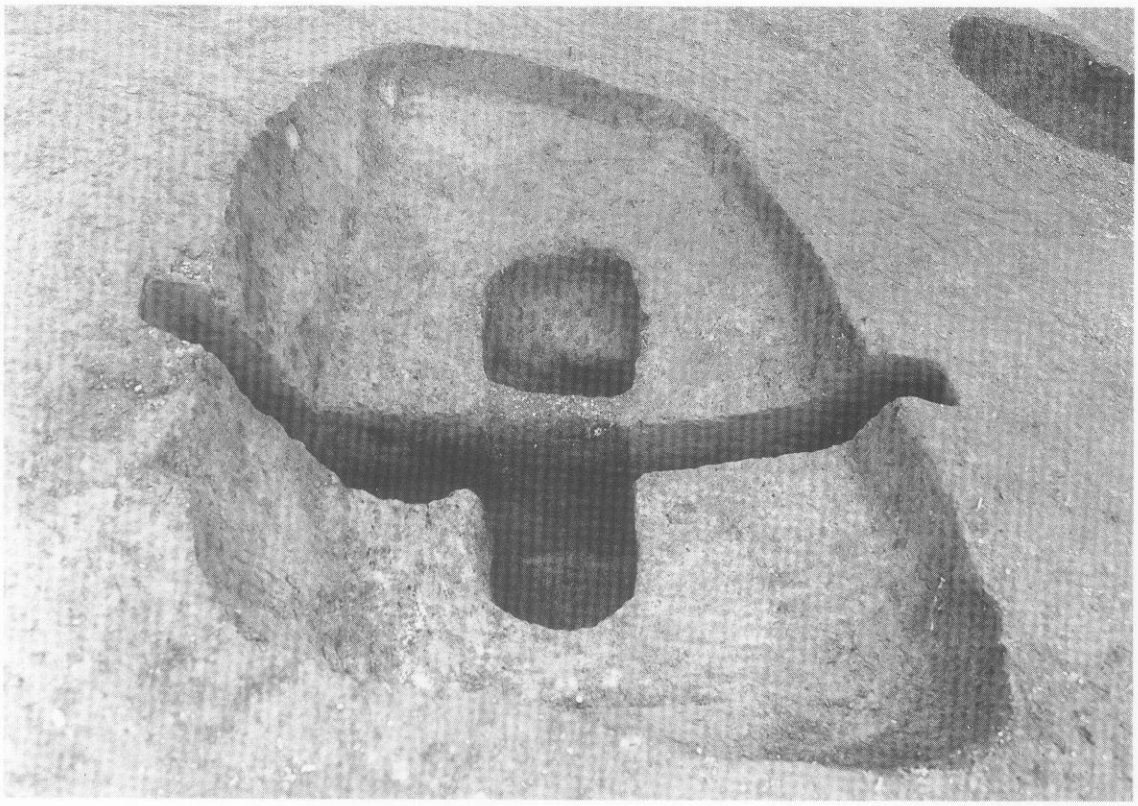
2．1号甕棺墓（南から）



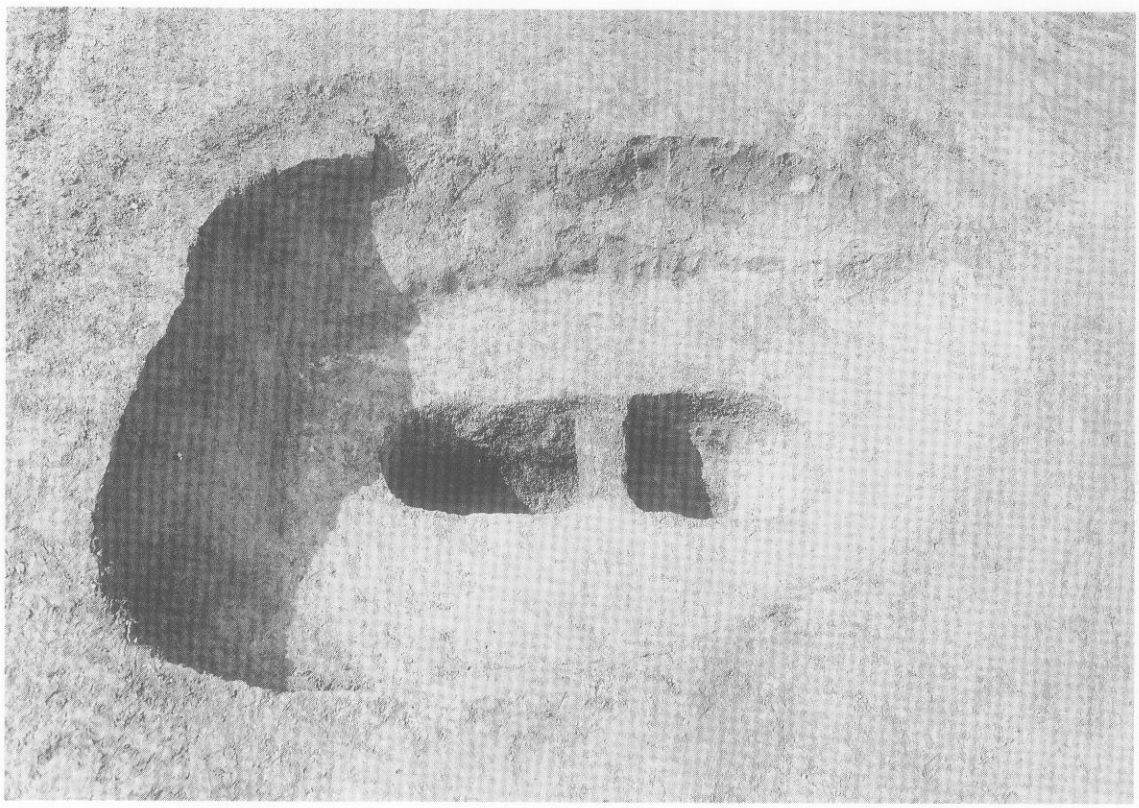
1．2号甕棺墓検出状況（北東から）



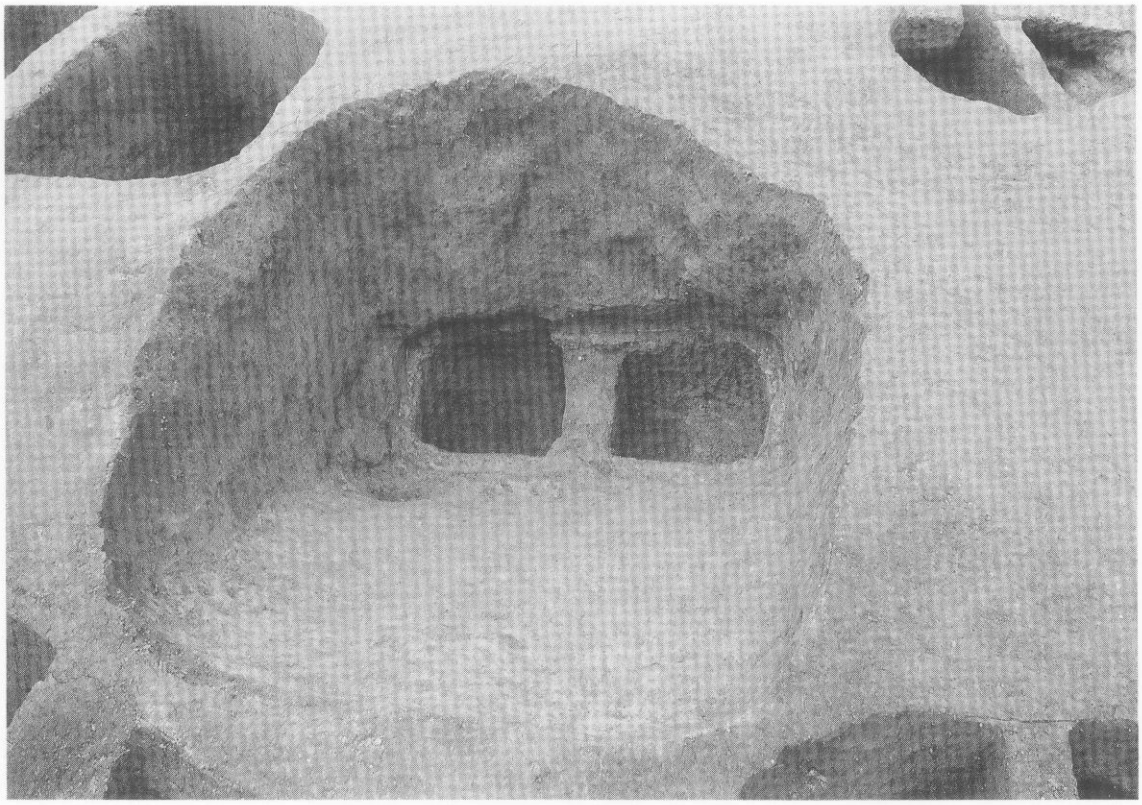
2．2号甕棺墓（南から）



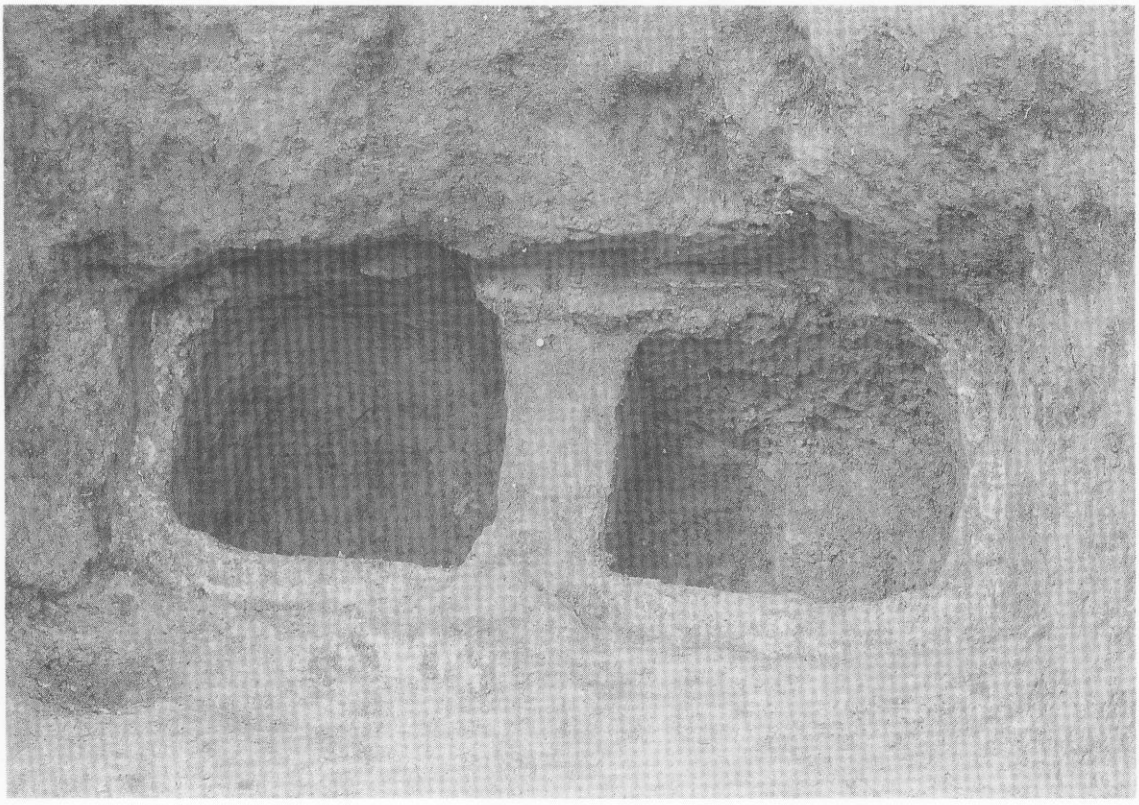
1．2号土壙墓土層断面（南西から）



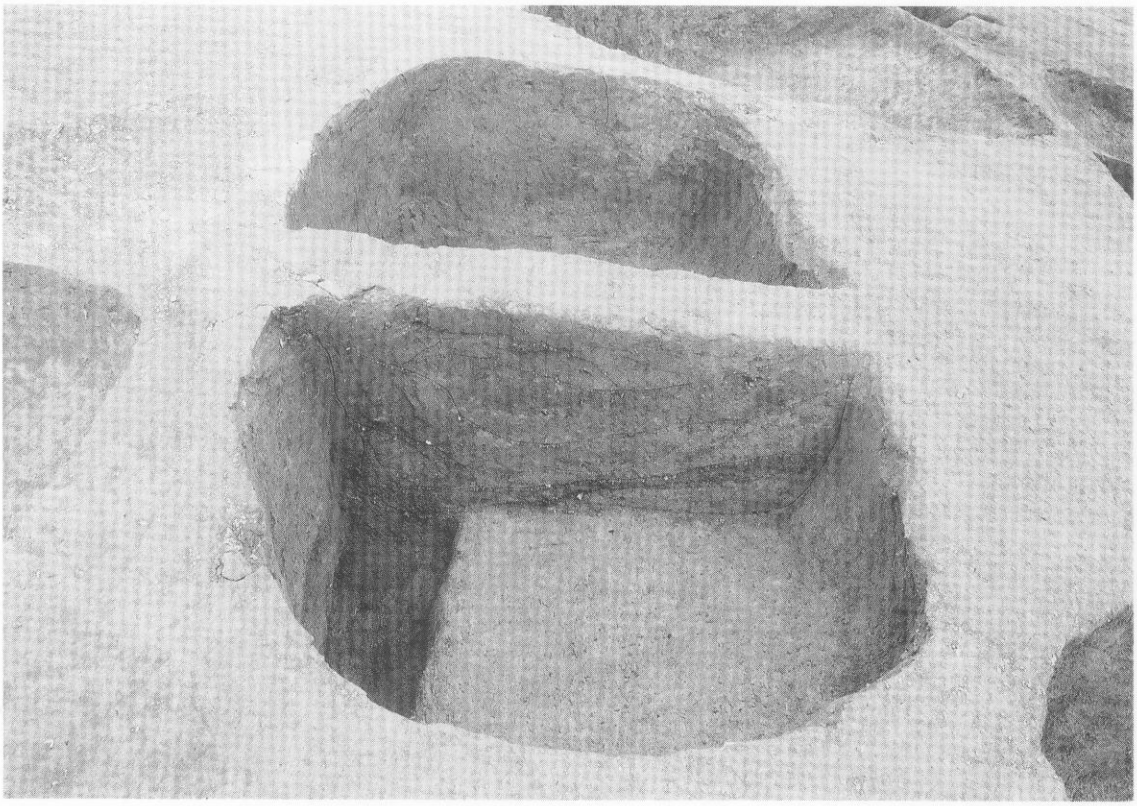
2．2号土壙墓（南東から）



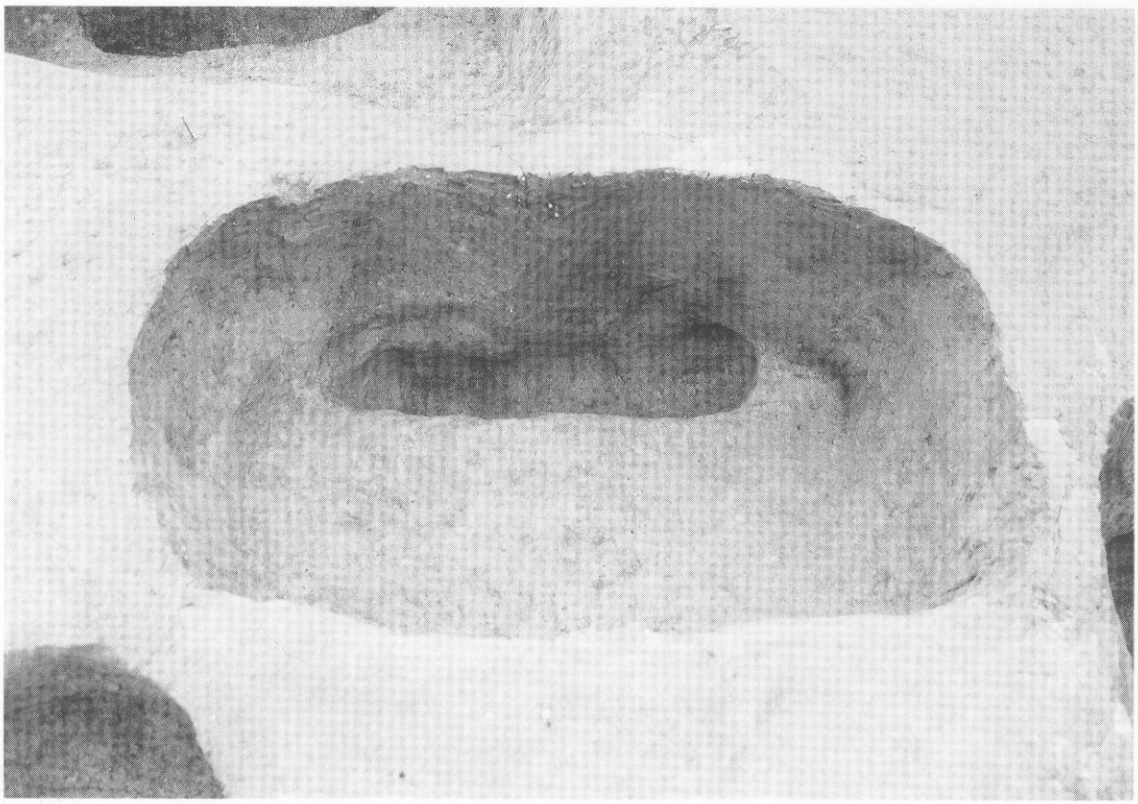
1．3号土壙墓（東から）



2．3号土壙墓木蓋痕（東から）



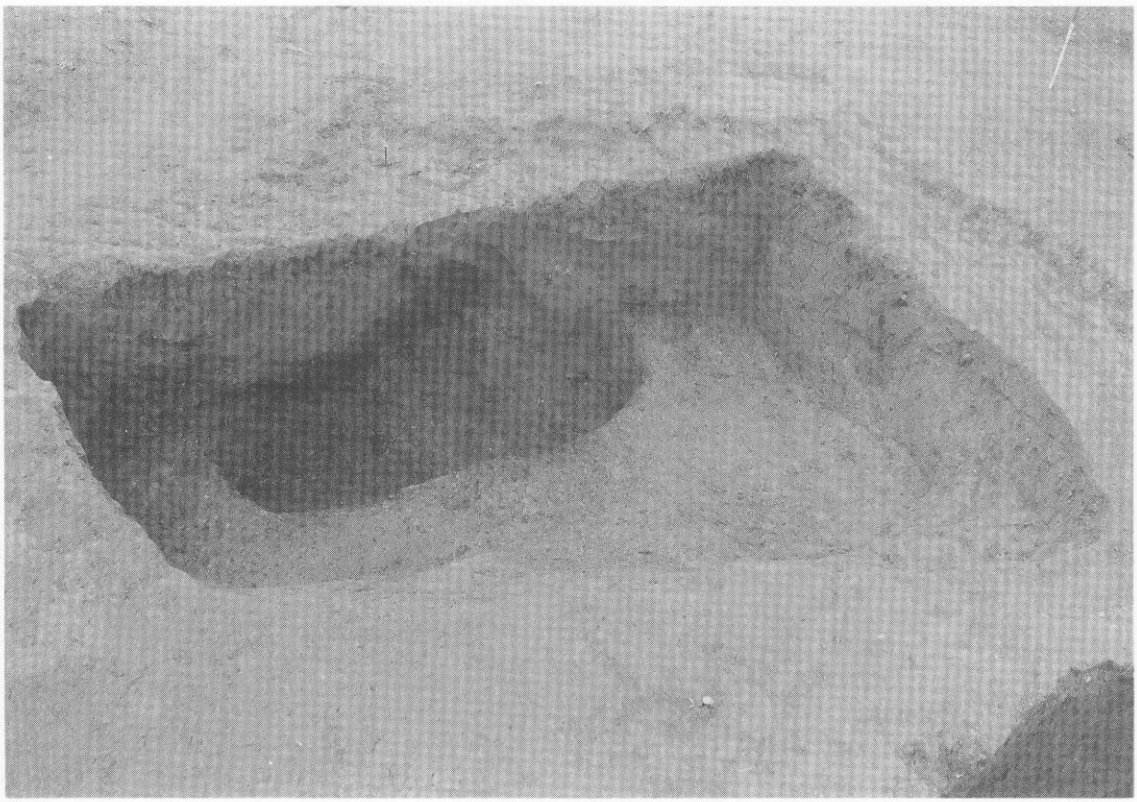
1．4号土壙墓土層断面（南西から）



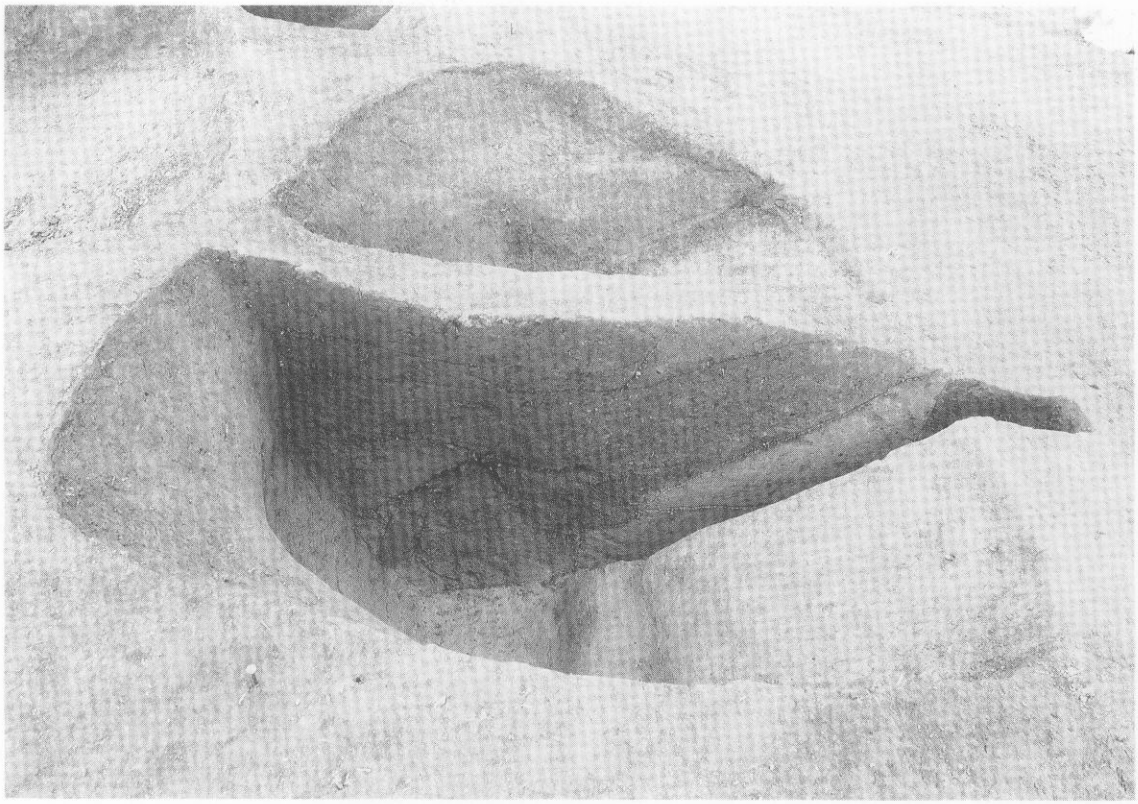
2．4号土壙墓（南東から）



1．5号土壙墓土層断面（南から）



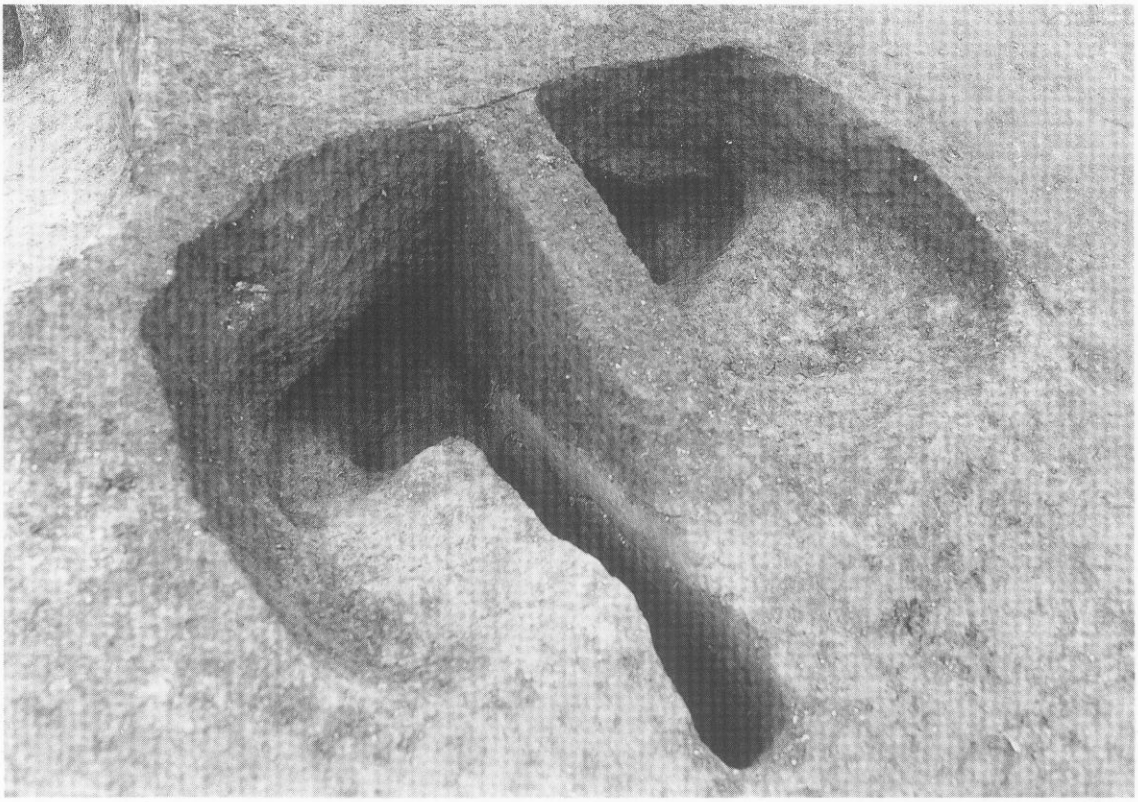
2．5号土壙墓（南東から）



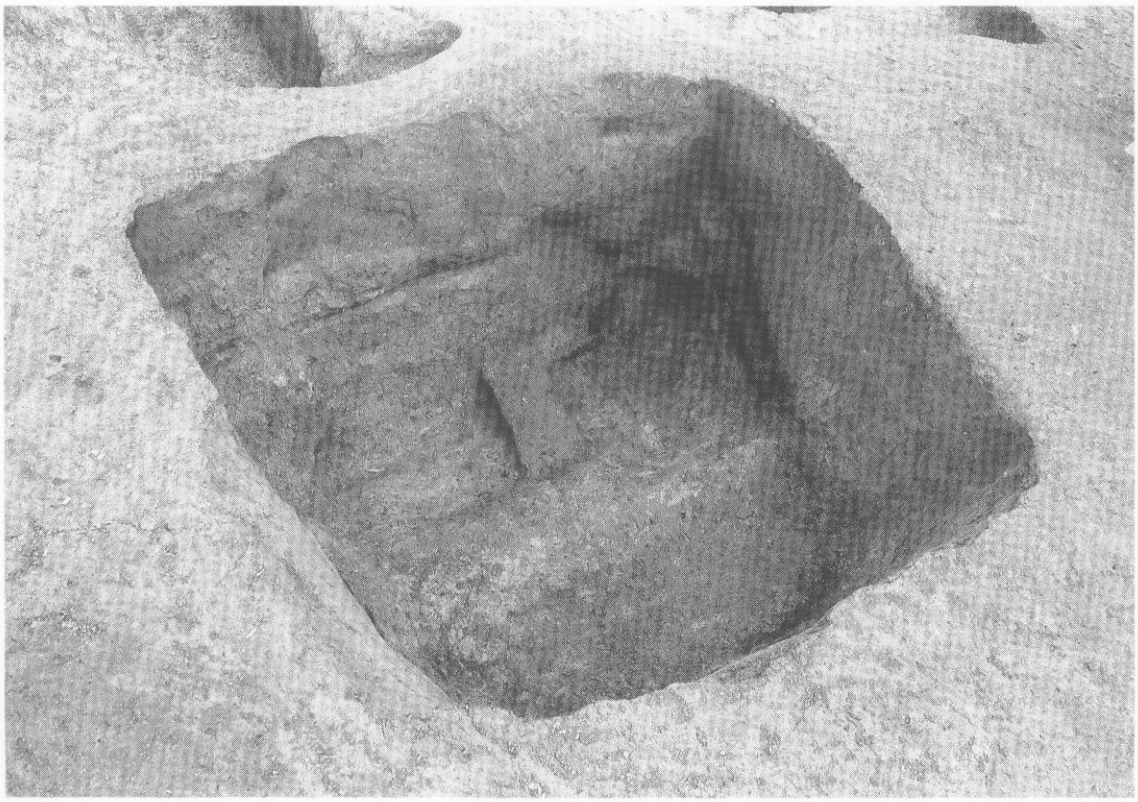
1．6号土壙墓土層断面（南西から）



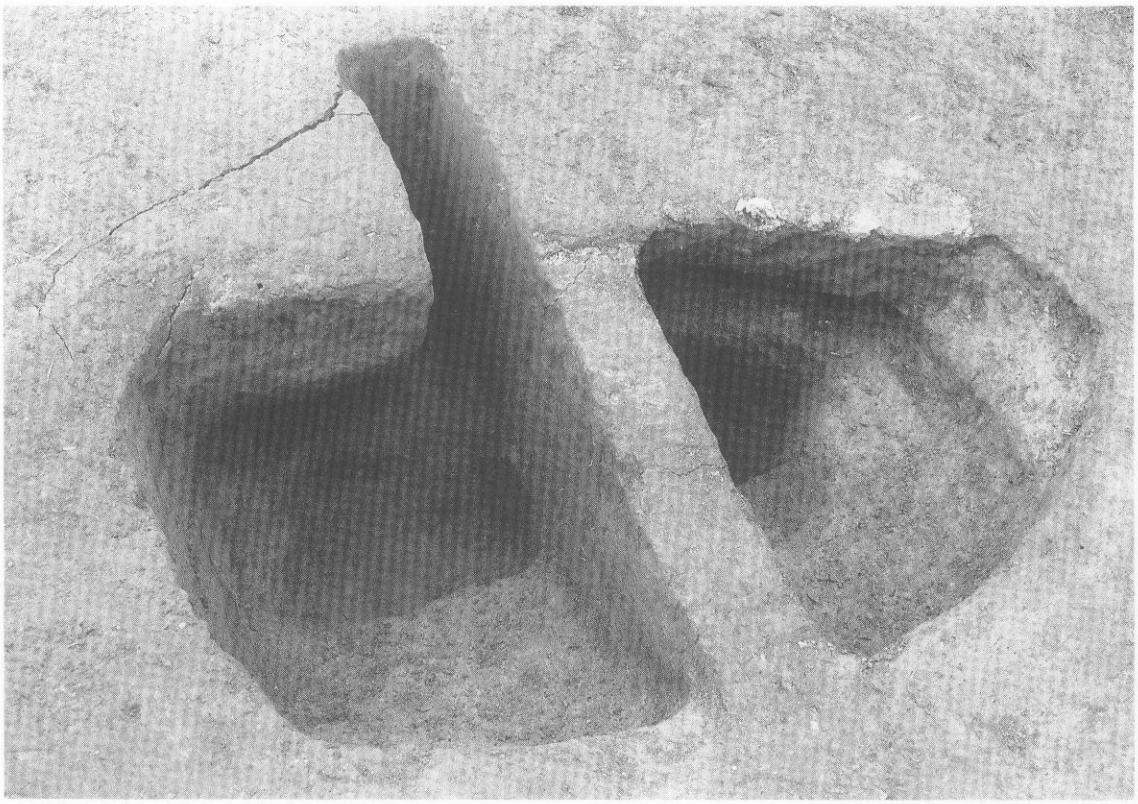
2．6号土壙墓（南東から）



1．7号土壙墓（南東から）



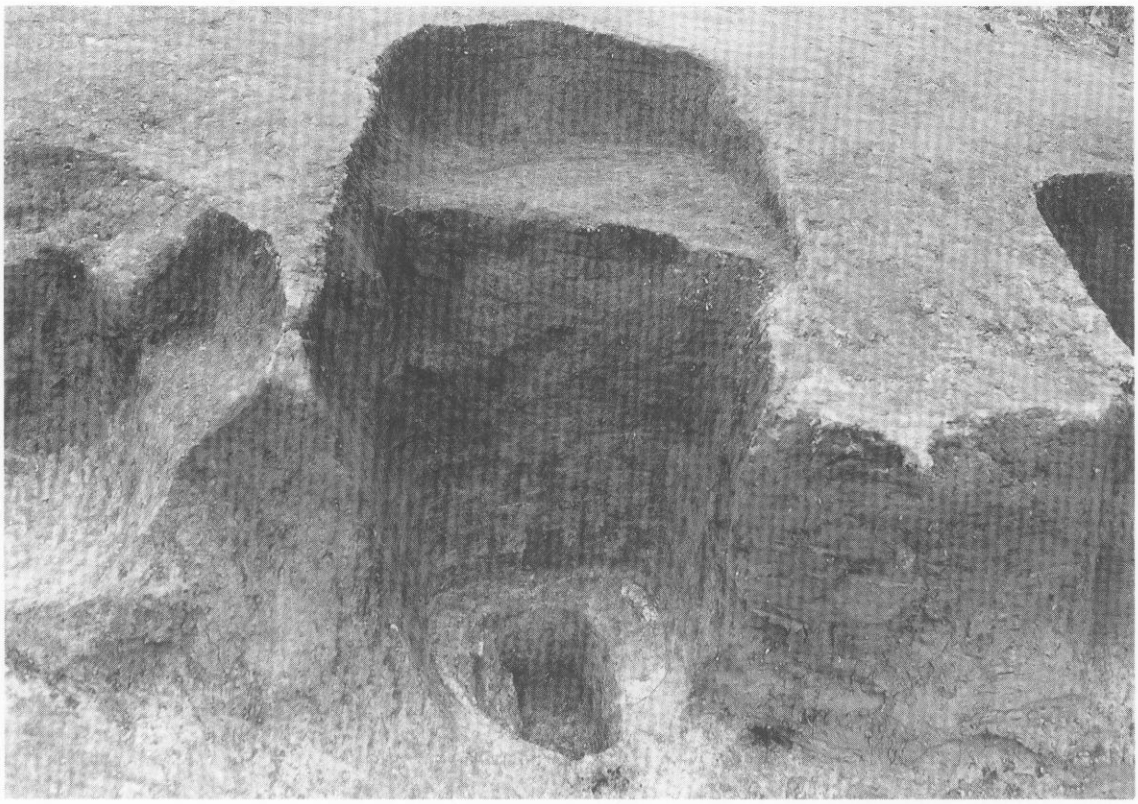
2．8号土壙墓（南西から）



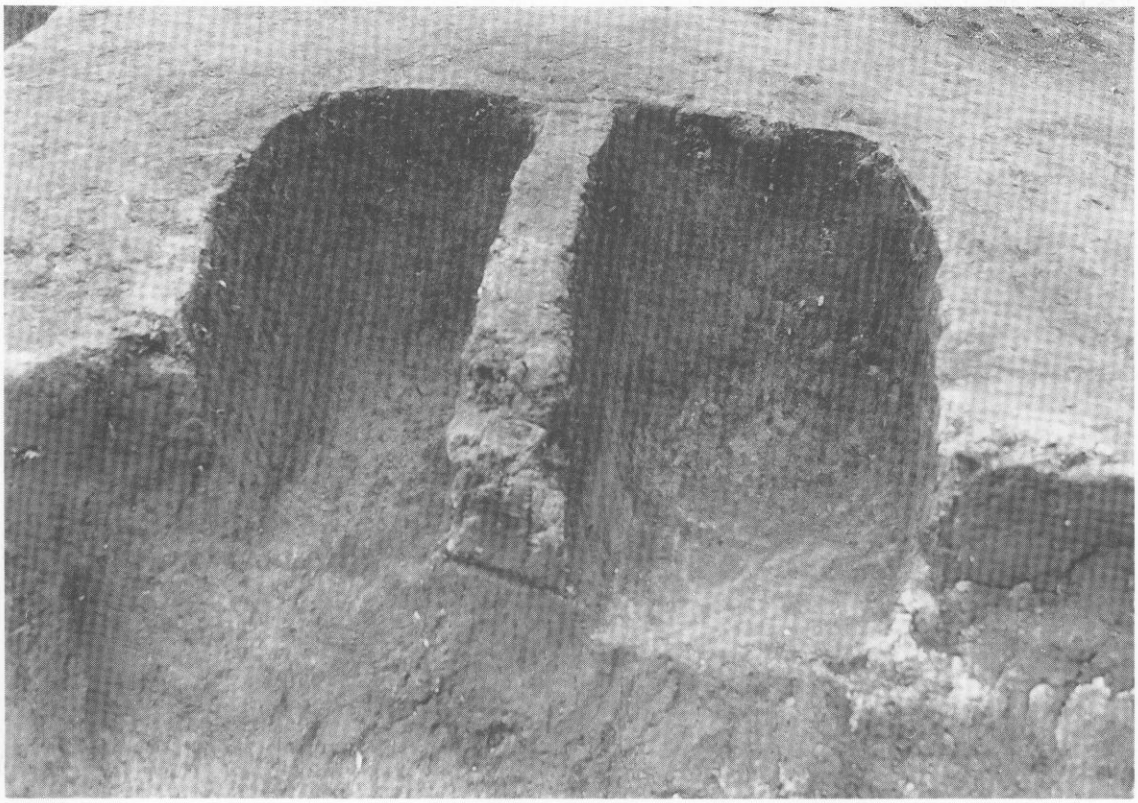
1．9号土壙墓（南東から）



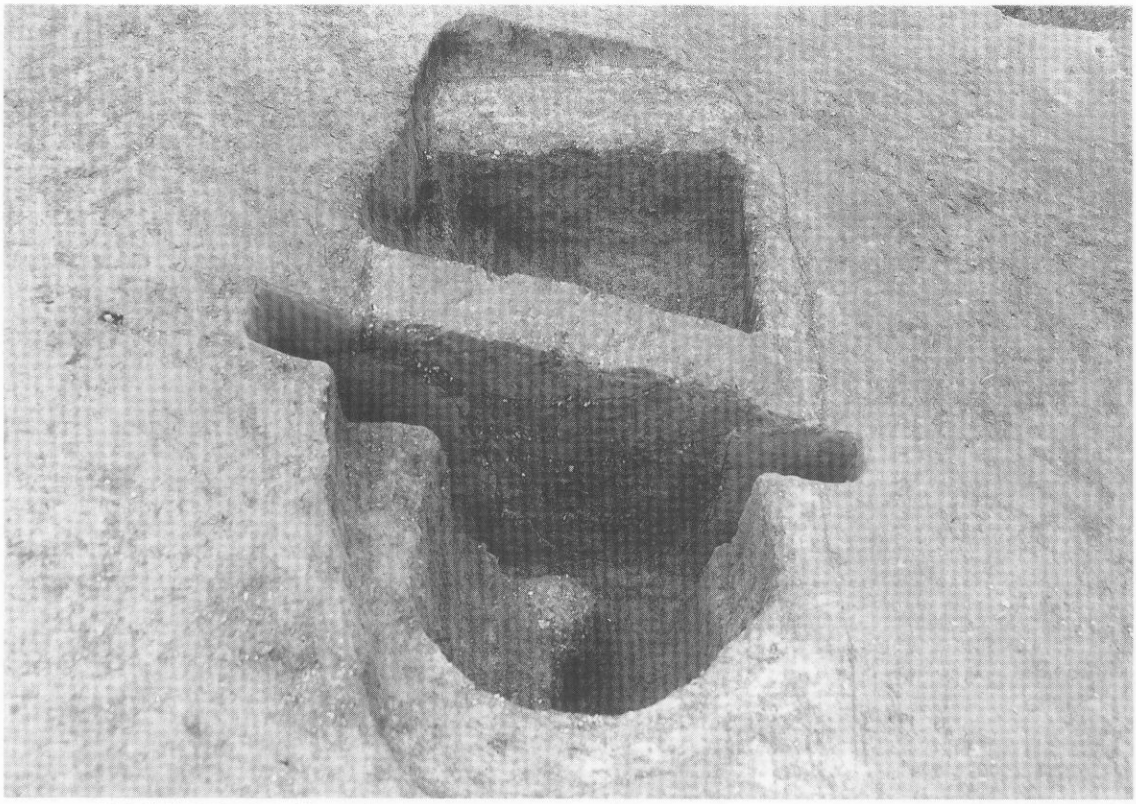
2．10号土壙墓（北から）



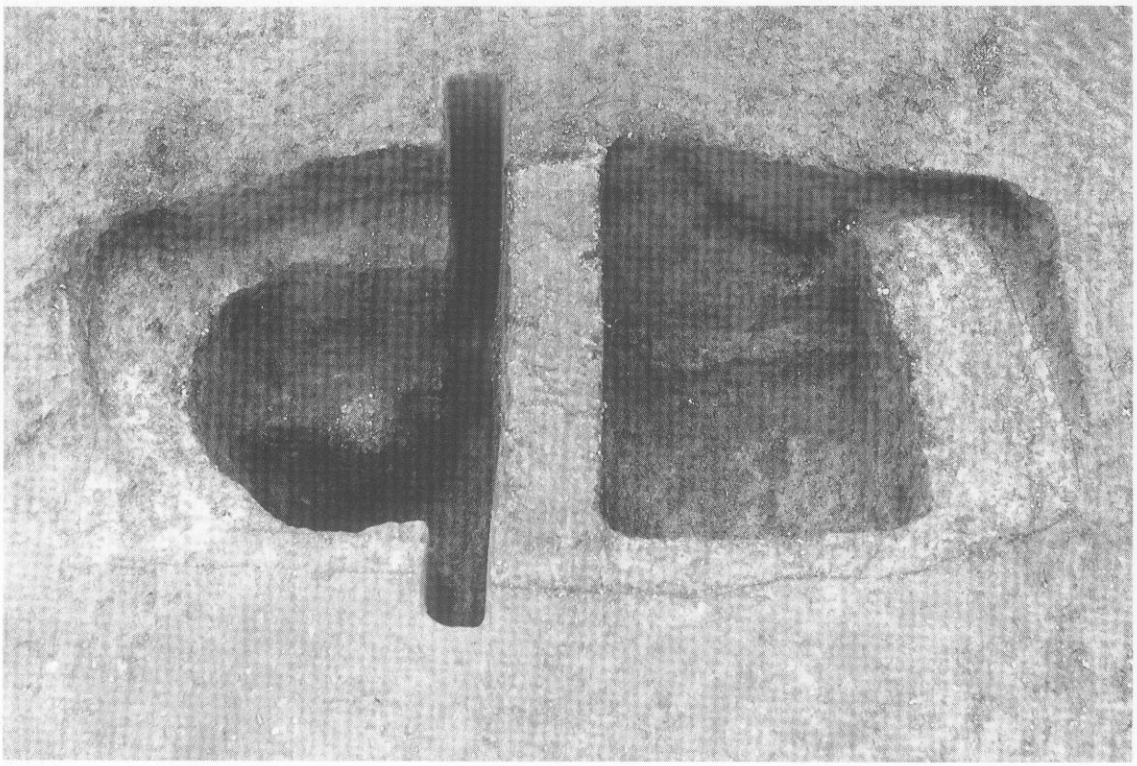
1．11号土壙墓（南東から）



2．13号土壙墓（東から）



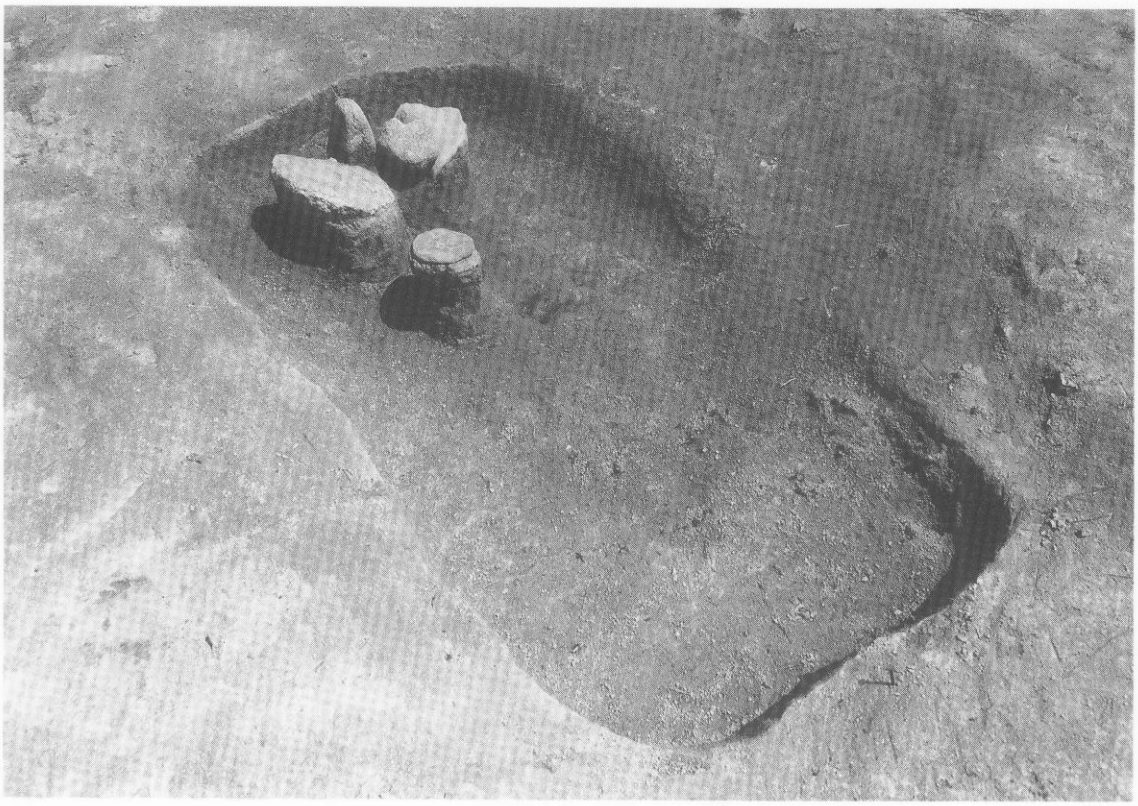
1．12号土壙墓土層断面（南から）



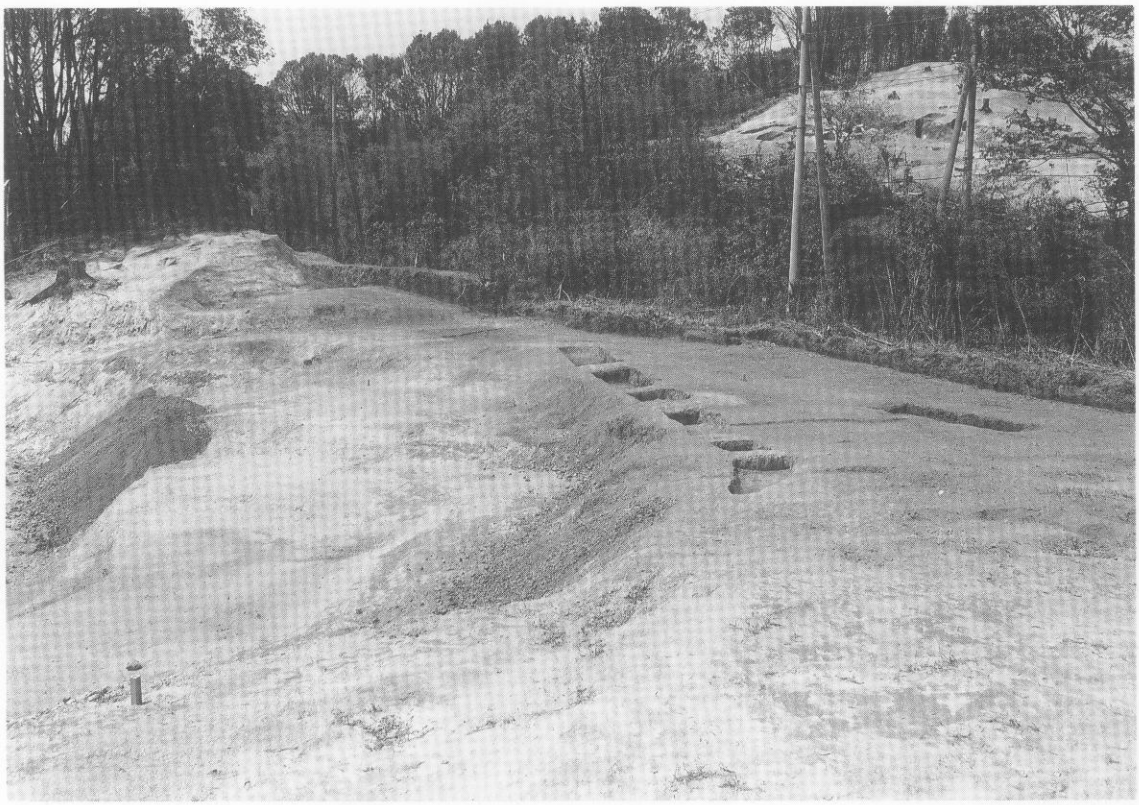
2．12号土壙墓（東から）



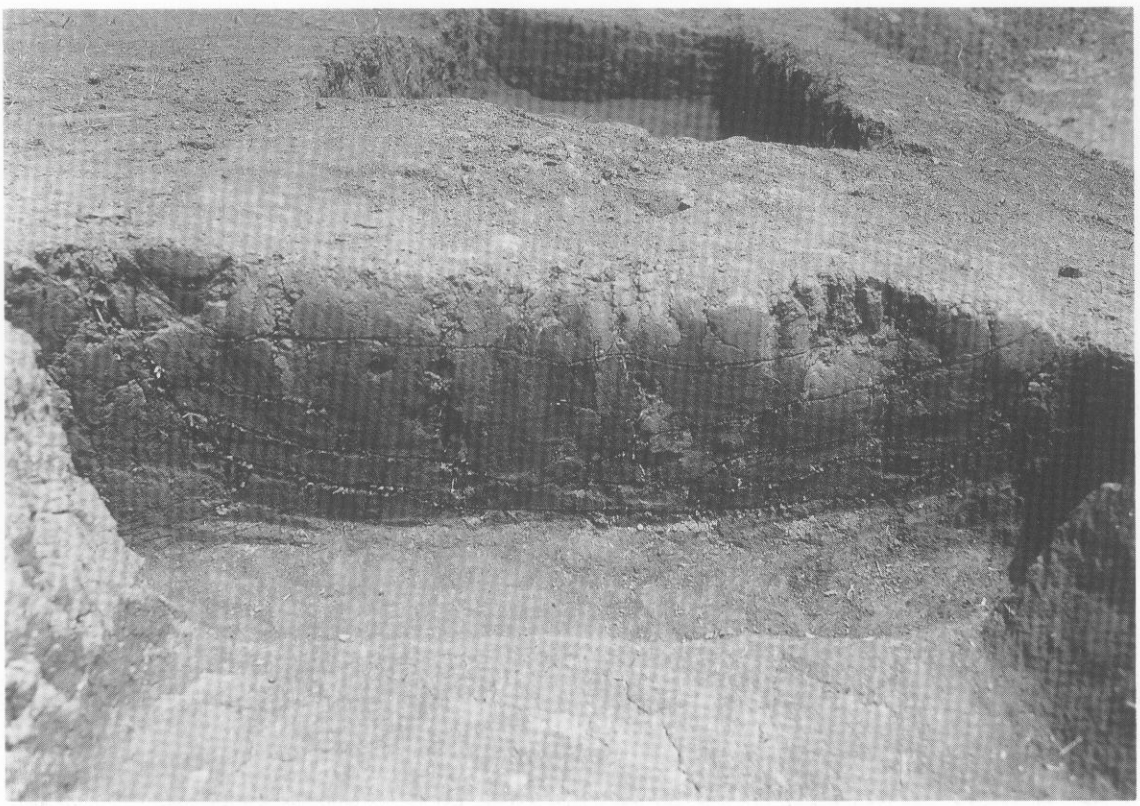
1．1号土壙墓（東から）



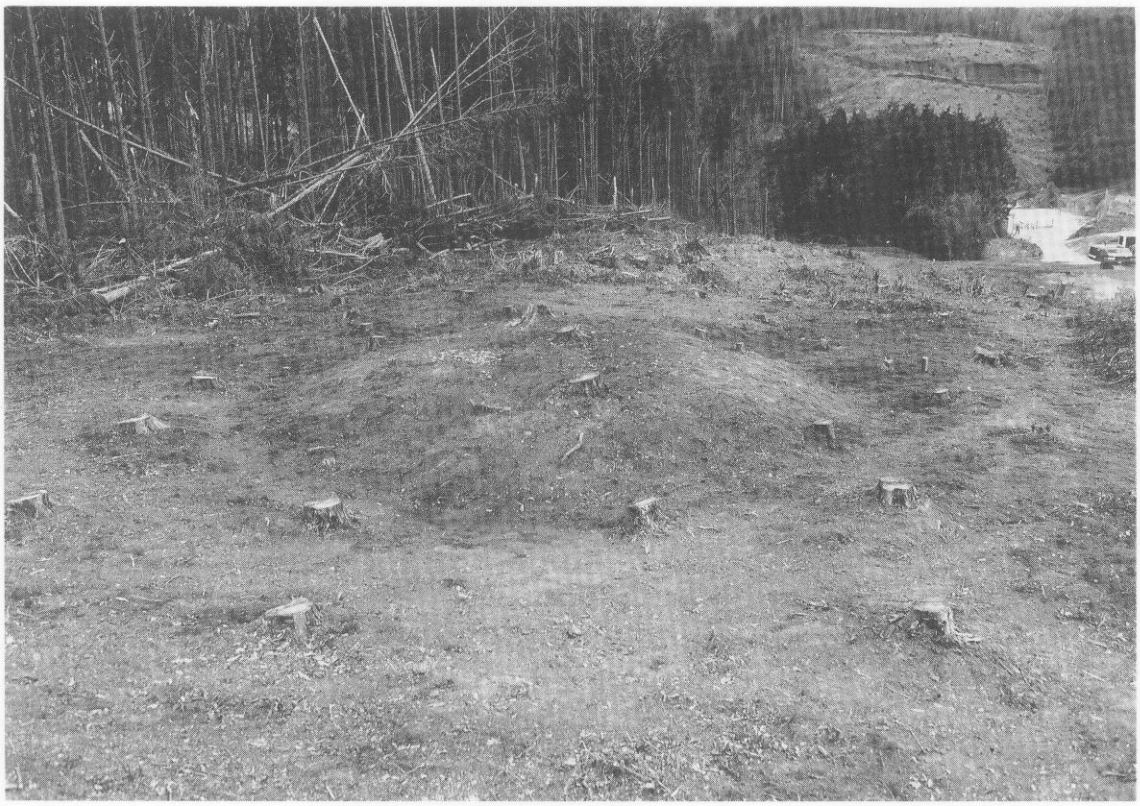
2．14号土壙墓（南西から）



1．１号溝全景（東から）



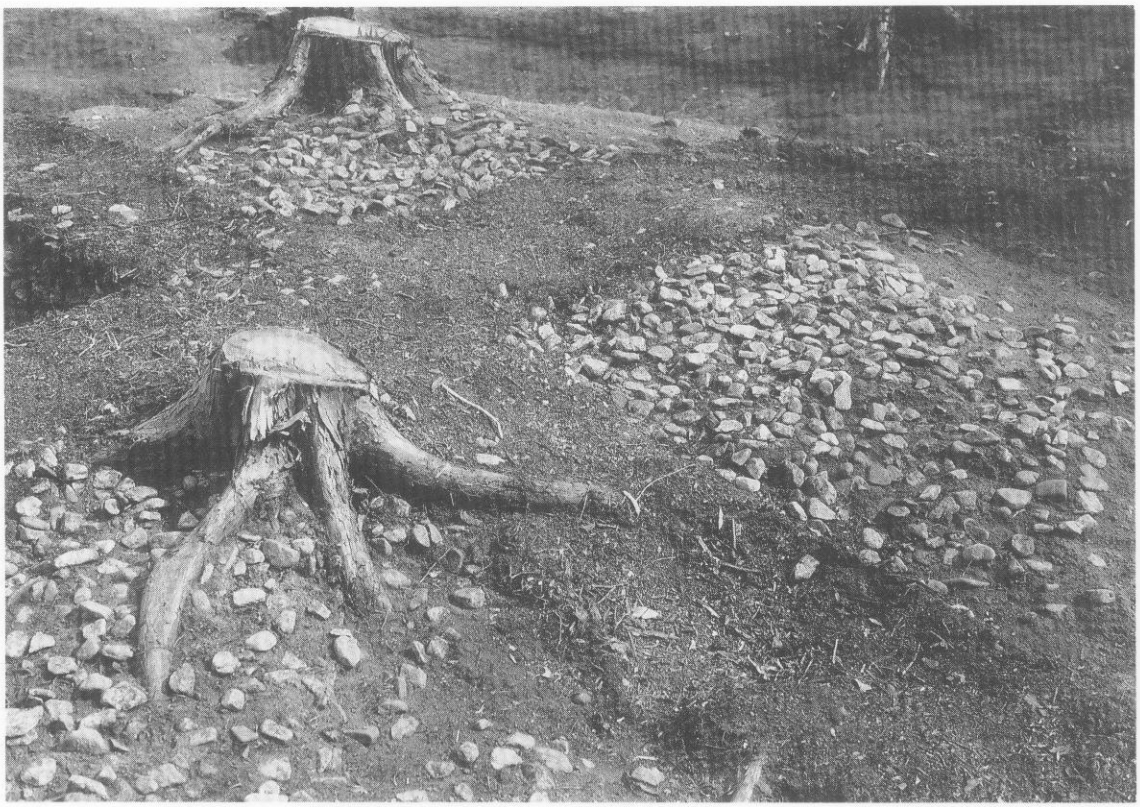
2．１号溝土層断面（西から）



1．1号墳丘検出状況（東から）



2．1号墳丘調査風景（西から）



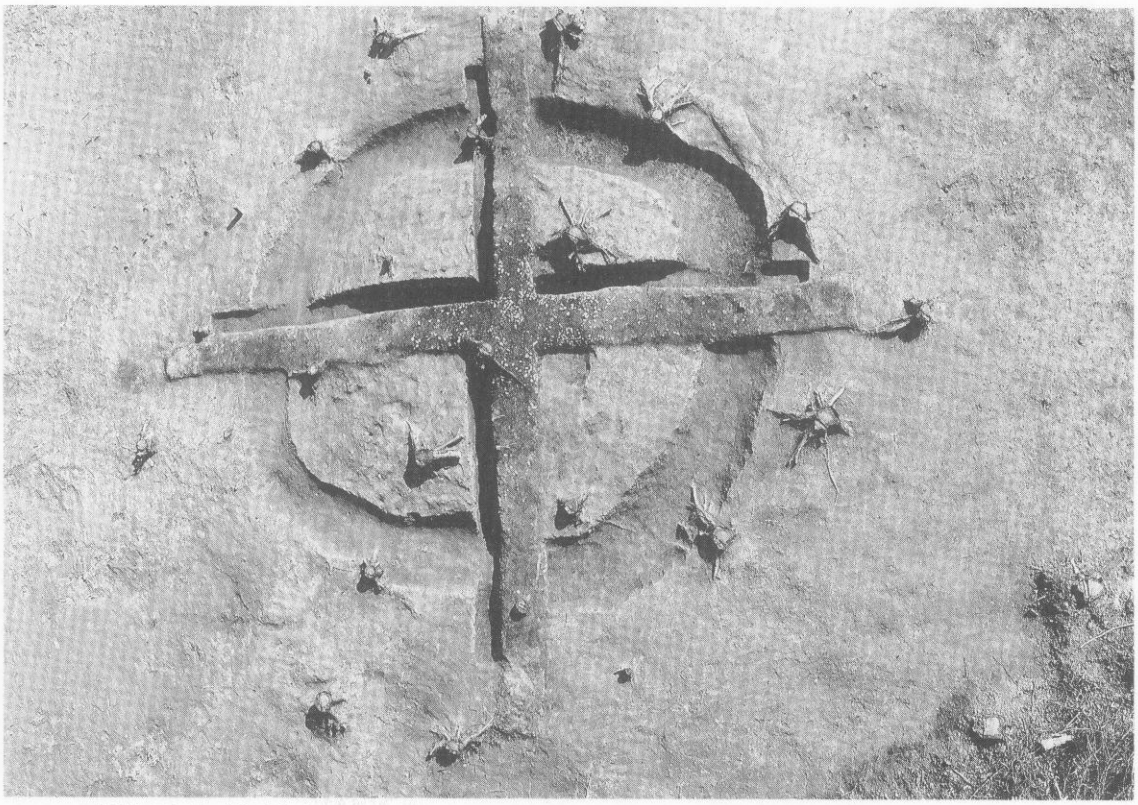
1．1号墳丘小礫出土状況（西から）



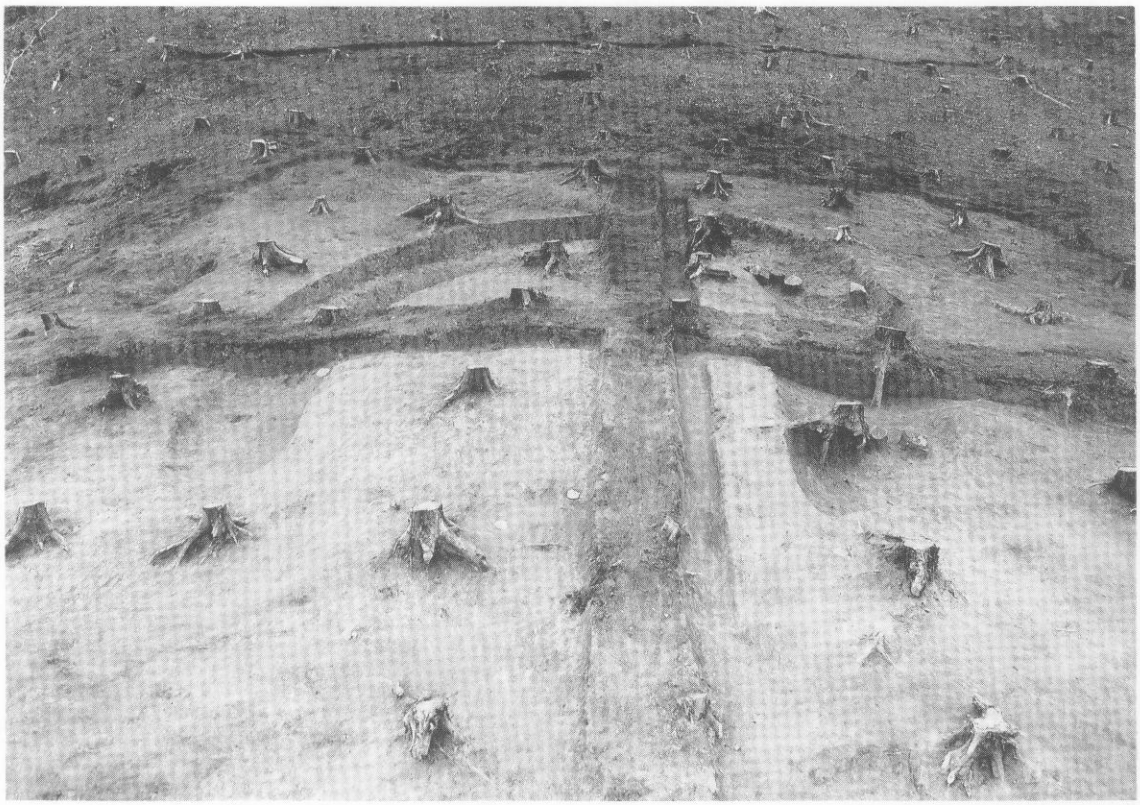
2．1号墳丘表土除去状況（南東から）



1．1号墳丘全景（北東から）



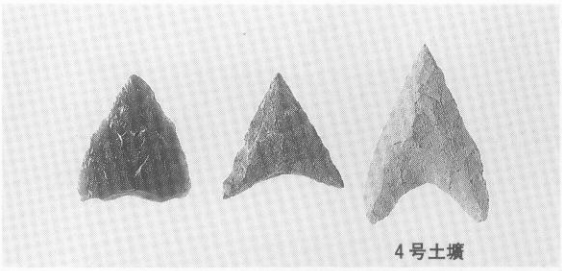
2．1号墳丘全景（北西から）



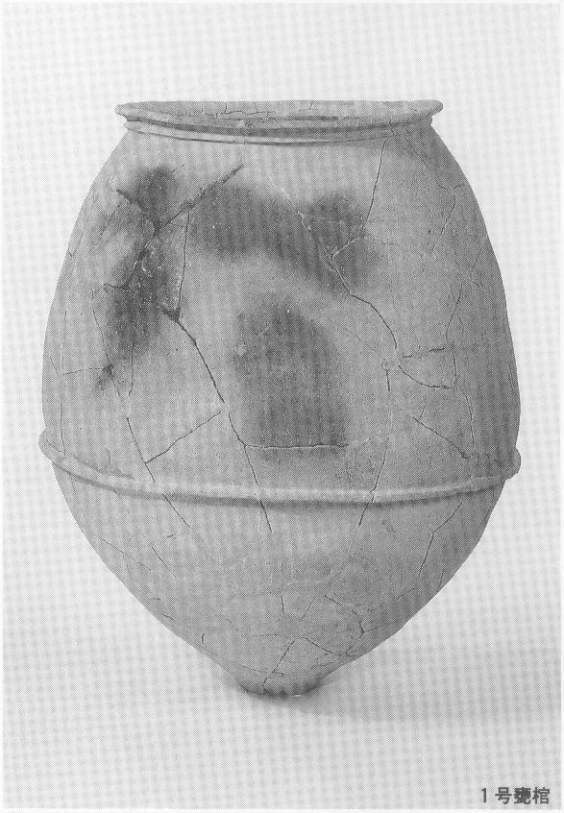
1．2号墳丘全景（北東から）

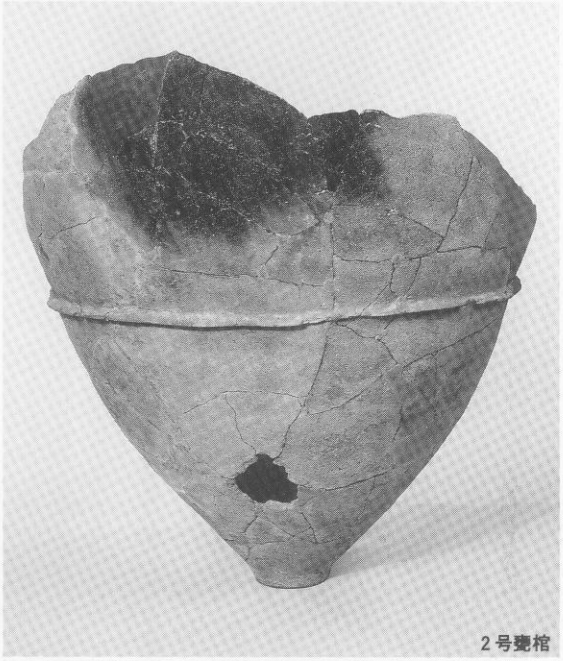


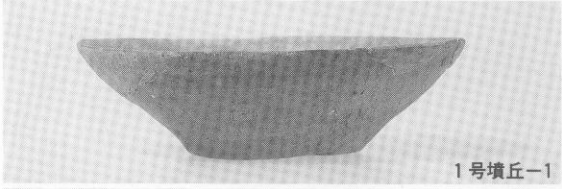
2．2号墳丘全景（北東から）

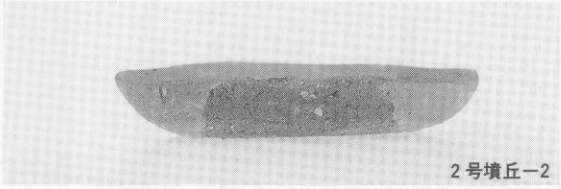

4号土壙


2号甕棺


1号甕棺

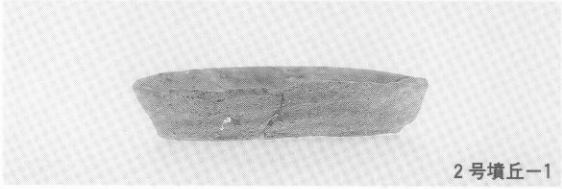

2号甕棺

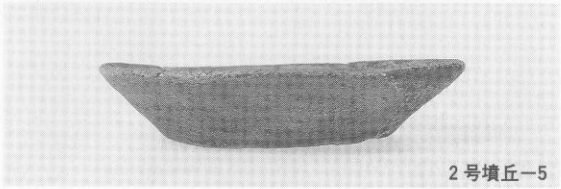

1号墳丘−1


2号墳丘−2

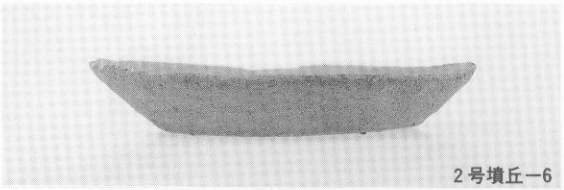

1号墳丘−2

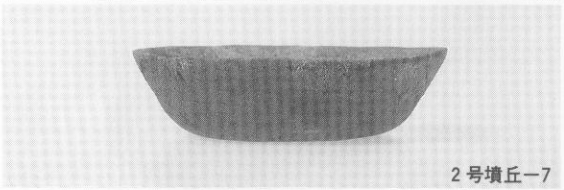

2号墳丘−3

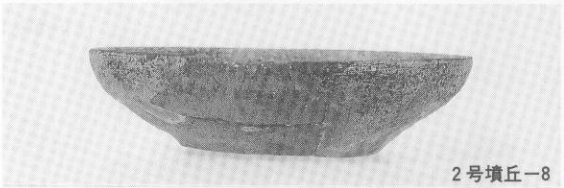

2号墳丘−1

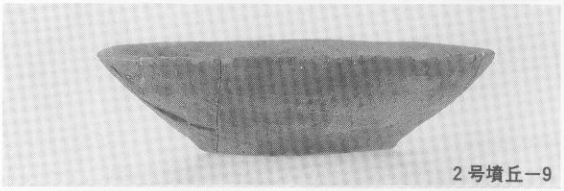

2号墳丘−5

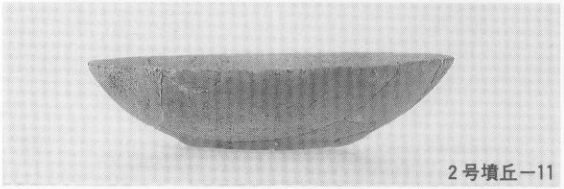
出土遺物1

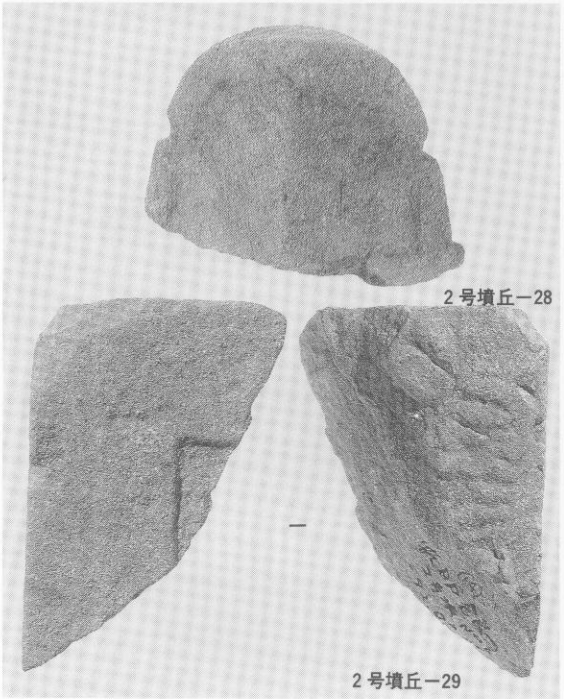

2号墳丘−6


2号墳丘−7

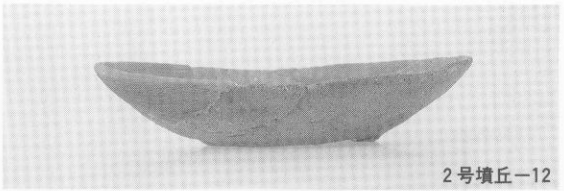

2号墳丘−8


2号墳丘−9


2号墳丘−11


2号墳丘−28

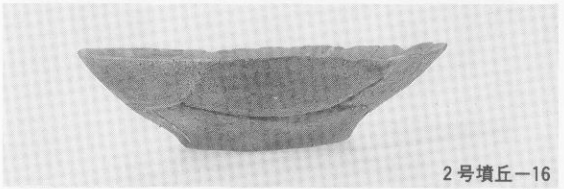
2号墳丘−29


2号墳丘−12


2号墳丘−13


2号墳丘−14


2号墳丘−15


2号墳丘−16


2号墳丘−17


2号墳丘−18

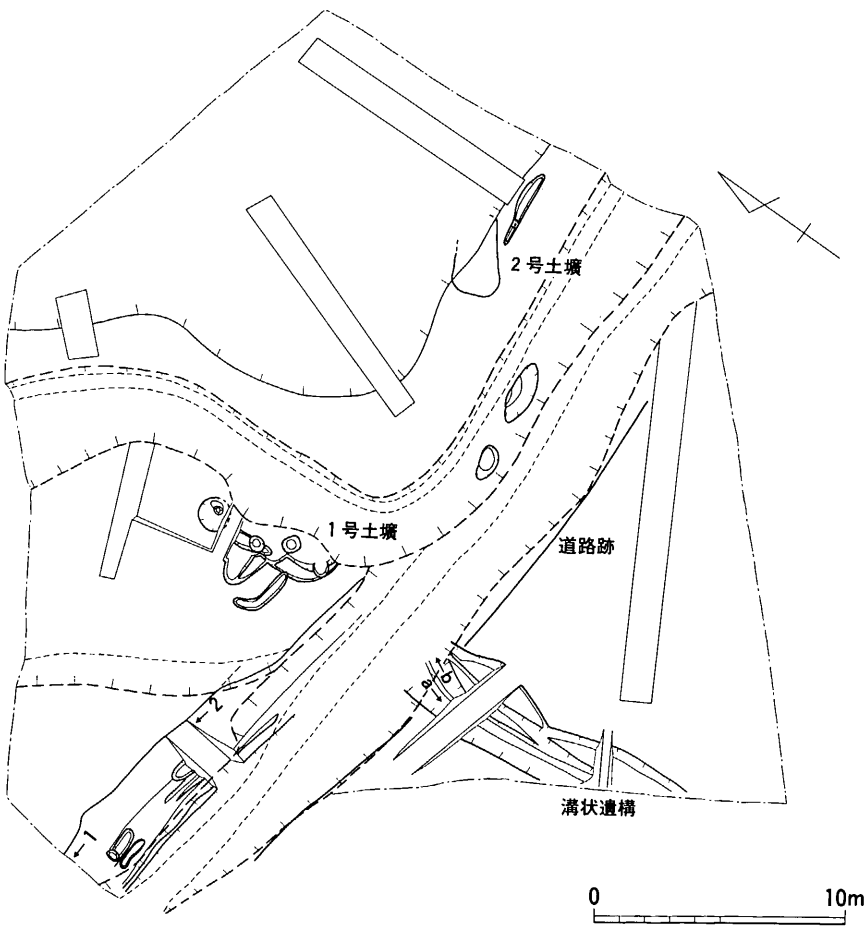


出土遺物 2

第Ⅳ章　天神田遺跡

第1節　はじめに

平成2年春、国道3号線南バイパスの建設を予定していた福岡国道工事事務所から、バイパス予定路線内に位置する鉄塔を移設するために、移設予定地内の文化財の有無についての照会が福岡県文化課になされた。予定地に周知の文化財は登録されていなかったが、周辺に多くの文化財が登録されていたために、文化課では同年5月2日に職員を派遣して試掘調査を実施した。その結果、本文に述べる道路遺構の肩を検出し、これを土坑の堀形であると判断して発掘調査の必要がある旨の回答を行った。



第 1 図　調査区全体図（1/300）

発掘調査は同５月10日に重機を使用して表土掘削を開始し、14日に作業員を投入した。最終的に６月11日に器材を撤収してすべての作業を終了した。

なお、調査中、道路跡の埋没状況がいわゆる「版築」に非常に似ていたことから、九州歴史資料館横田義章氏による土層の剝ぎ取りを実施した。

発掘調査に際しては九州電力、筑紫野市教育委員会、筑紫野市在住の方々のご協力・ご援助を得て無事に終了することができた。記して謝意を表します。

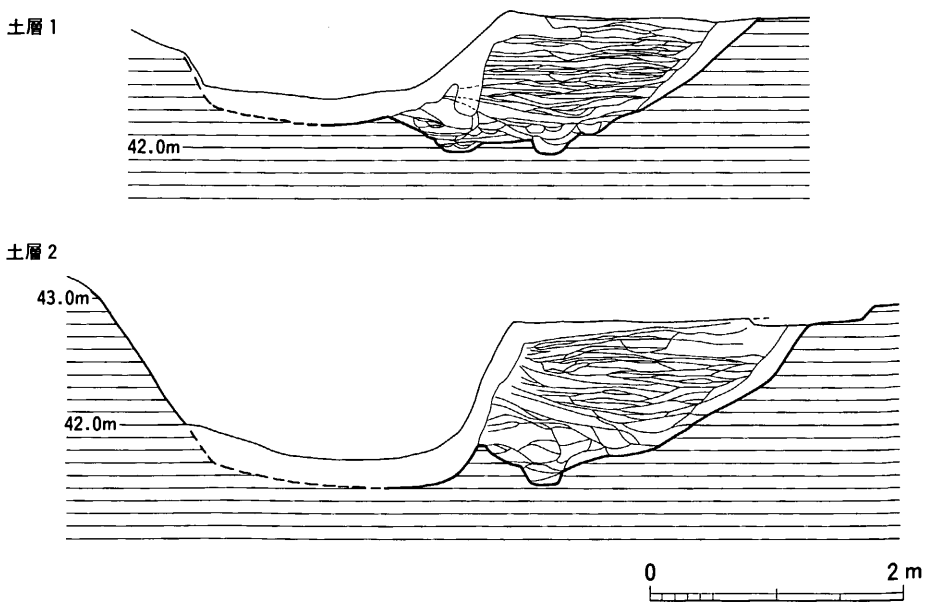
第２節　遺構と遺物

調査対象地は丘陵部分と谷部分に分かれる。丘陵部分の中央付近で調査区を斜めに走る道路遺構を検出し、その南で溝を、北で土坑などの若干を検出した。また、谷の部分では全体に青灰色土が堆積し、かつ東へ向かって深くなっていた。ここで土坑らしき落ち込みを検出したが、湧水が甚だしく性格を確認できなかった。以下で遺構・遺物について説明を加える。

１　遺構

道路跡（図版２～４、第２図）

調査区西隅で比較的良好に残存するが、東半ではすでに掘削されて大部分が崖面となっていた。また、残存部分でも現道路面が埋没した道路を再掘削して使用しており、再掘削時に道路



第２図　道路跡土層図（1/60）

敷きが南へ移動しているために本来の道路幅は確認できない。現道を含めた幅は約５ｍ前後、深さは約１ｍである。

この遺構を発掘中、埋没する土が非常に硬く締まり、かつ厚さ数㎝の土層がほぼ水平に堆積、しかも混ざりのない砂質土（花崗岩バイラン土）からなるために、版築が施された非常に特殊な性格の遺構ではないかと考えていた。しかし、北壁に沿って黄褐色の一様な、比較的軟質な土が入り、床面付近の土層が乱れ、付近に小さな落ち込みが無数観察されて、あるいは床面に轍と思われる痕跡が検出され、さらに床面近くから後述する染付が出土し、道路跡と判断したものである。

出土遺物（第５図）

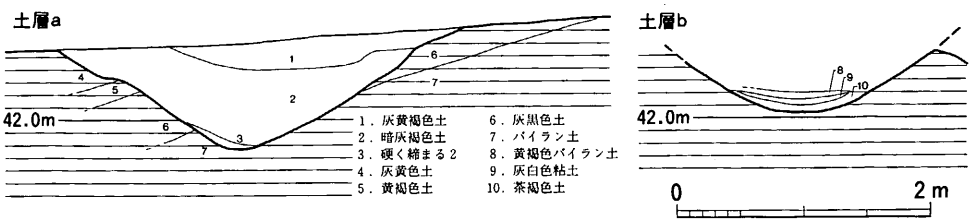
２・３は染付。２はいわゆるくらわんかタイプの椀で、畳付付近のみが露胎となる。外面に葡萄様の文様を付し、高台内に「大明年製」と思われる略字が記される。素地は白色で、釉も無色透明といえる。なお、露胎の畳付には砂目が付着する。３は口縁部が多角形となる皿の小片。内面に唐草文を描くようである。これも、素地・釉ともに精良・透明な精巧な製品である。４は摺鉢の小片。これも畳付のみ露胎で、他の部分には鉄釉を掛ける。胎土が粗く、摺り目は磨滅してほとんど残らない。

溝状遺構（図版２、第３図）

調査区南半にあって、ほぼ南北方向に走る。この部分は、道路跡を挟む北半より約0.5ｍ高い位置にあり、他の遺構を確認するためにトレンチを設定したが、若干の遺物を出土した以外に遺構は存在しなかった。

溝状遺構は幅2.5～3.5ｍ、深さ１ｍの浅いＶ字状断面で、底のレベルは発掘した約８ｍの範囲で0.8ｍほど北端が低くなっている。

埋土の大部分は土器片・炭の小片を含む、締まりのない暗灰褐色土からなり、一部で床面付近に薄く灰白色粘土・地山を形成する花崗岩バイラン土が堆積していた。



第 3 図　溝状遺構土層図（1/60）

出土遺物（第５図）

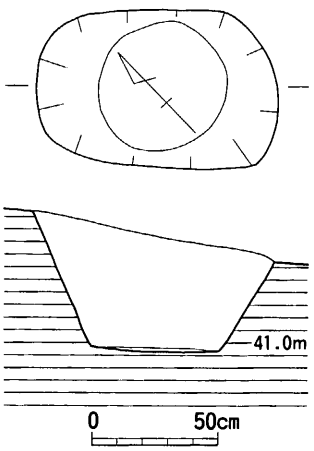
５は土師器の甕の小片。口縁部はまだ曲線を描いており、５世紀前半頃に属するものと思われる。６・７は土師器皿の小片。６は体部中位に緩い稜を持ち、以上が薄くなって終わる。７は体部中位付近が肥厚するタイプである。８は瓦質火鉢の小片。口端部が水平な面となり、その下位に断面三角突帯を付し、それにくい込むような位置に菱形のスタンプを押す。なお、器肉は黒色となる。９は土師質の火鉢で、淡灰赤褐色を呈する。口端部はやはり水平な面となり、内側へ小さく突出する。外面では篦磨きの痕跡が一部に観察できる。文様は菊花のスタンプを付す。10は龍泉窯系青磁椀である。釉は灰味の強い淡青緑色に発色し、残存部に文様はない。高台下端付近に稜線を有し、それ以下と高台内が露胎となる。

以上の土器類は小片ながら13世紀頃を中心とする時期に比定できそうであるが、火鉢としたものはそれらより新しい時期に属するものと思われる。

１号土壙（第４図）

道路跡の北側は斜面となって、その先端付近に風化土層がのっており、それを除去して検出した。この土坑以外にも遺構と確信を持てない落ち込みを掘り下げているが、省略する。

この土壙は上端が長軸0.95ｍ、短軸0.6ｍ強の隅丸長方形を呈し、下端は直径0.5ｍの正円に近い形態となる。深さは0.55ｍ。埋土は主として茶褐色の粘質土からなり、出土遺物は全くない。したがって、性格・所属時期ともに推測の手だてはない。



第 4 図　１号土壙実測図 (1/30)

２号土壙

谷部分の東端近くにある、1.7×３ｍ以上の長方形の落ち込みである。茶褐色粘質土が埋積し、土器小片を多く含んでいたが、湧水が激しく、一段掘り下げたところで発掘を断念した。

2　その他の遺物

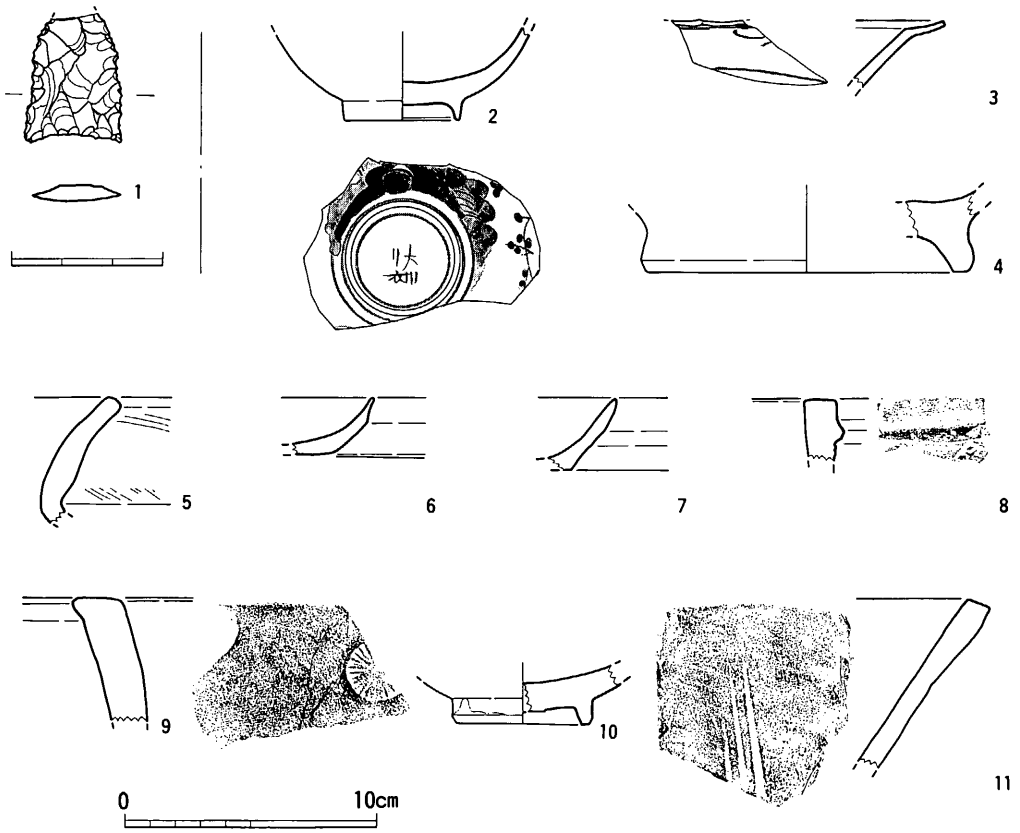
石鏃（第５図）　サヌカイト製で、先端を欠く。弥生時代か。溝状遺構東のトレンチ出土。

摺鉢（第５図11）　土師質の摺鉢。口端部はシャープに面取りを行うが、変化を加えていない。外面は指頭痕が著しく、内面の目は粗く太い。焼成が甘く、器表の磨滅が進む。同上トレンチ出土の小片。

第３節　おわりに

溝状遺構・１号土壙ともにその性格は不明といわざるを得ないが、前者は中世に掘削・廃棄されたものであろう。調査区付近はJR筑豊線が横切っており、また地形の改変が著しいが、この溝状遺構は丘陵先端部を切り離すような位置に掘削されていることが推測され、そうだとすればこの溝の内側（西側）の高所に中世の生活の跡が存在した可能性がある。

道路跡は最下層付近出土の染付から推して18世紀頃に開削されたものであろう。地山が真砂土からなっているために、雨水とともに流れた土砂が堆積し、発掘調査でみたような堆積状況にいたったものであろう。この遺跡北側の丘陵は宅地化して以前の面影をとどめないが、開発以前の地形図をみると国道３号線に同200号線が合流する付近から山裾を通って西へと続く道路が明瞭である。この道は今でも調査区東側に残っているが、今回調査した道路跡がこの道の前身であったのかも知れない。



第５図　出土遺物実測図（2/3・1/3）

図　　版

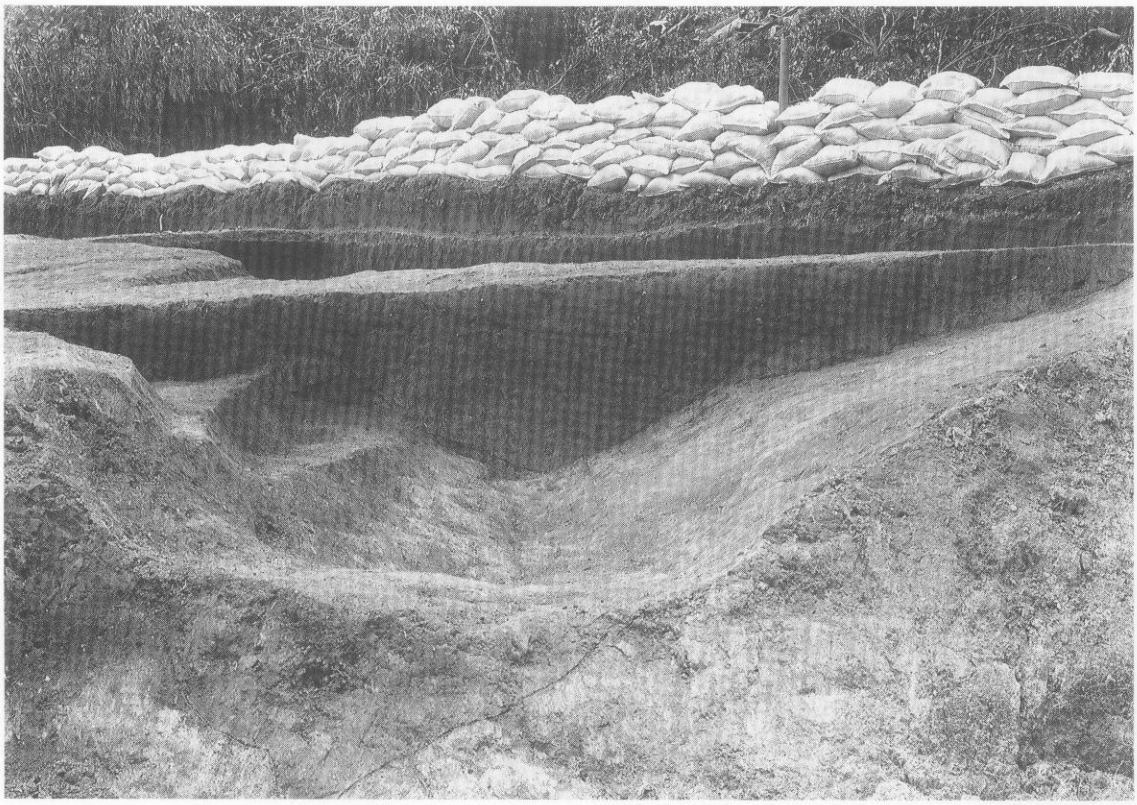
天神田遺跡



1．遠景（東上空から）



2．全景（東上空から）



1．溝状遺構土層（北から）



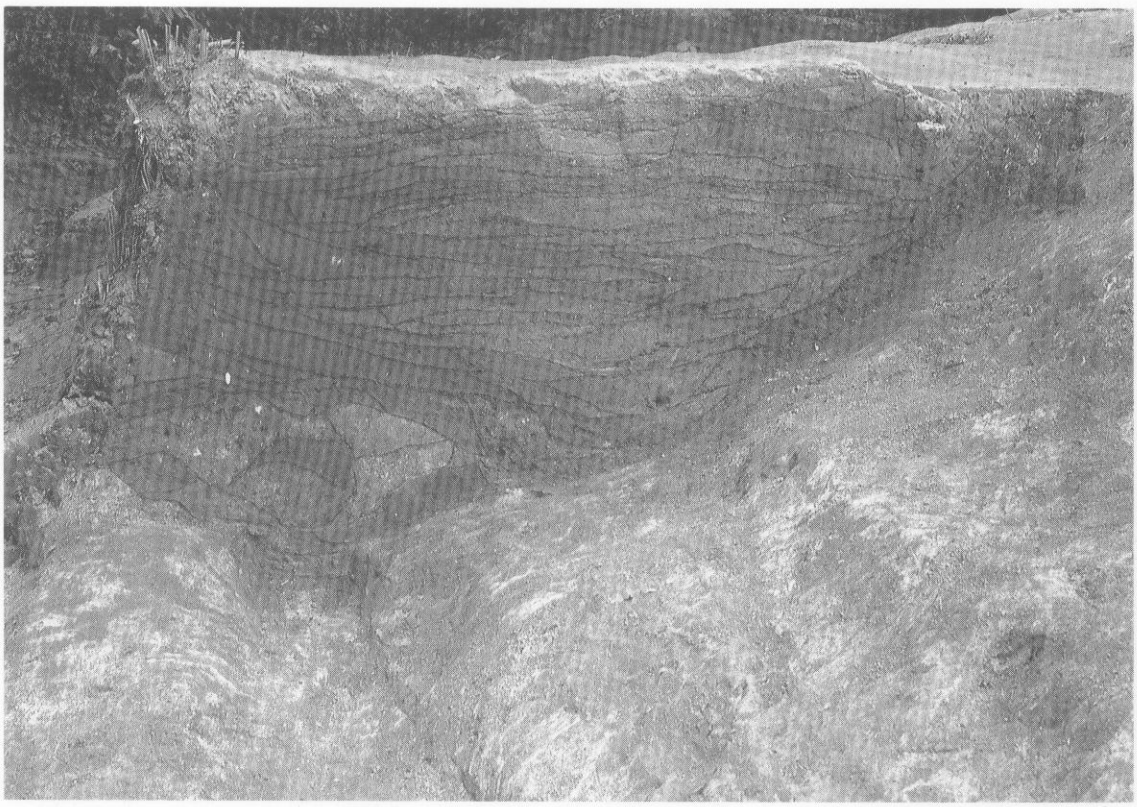
2．道路跡全景（東から）



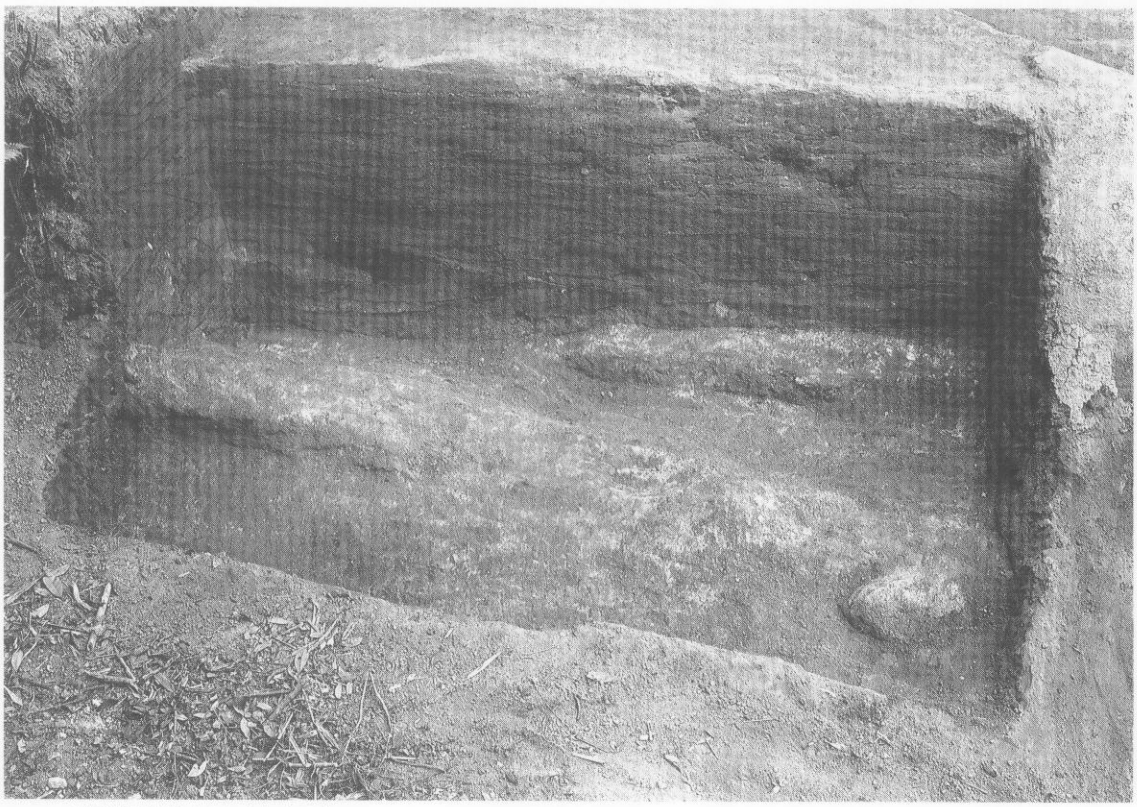
1．道路跡土層 1 （東から）



2．道路跡土層 1 （東から）



1．道路跡土層 2 （東から）



2．道路跡縦断土層（南から）

報告書抄録

ふりがな	くらくらいせき　くらよしいせき　てんじんだいせき
書名	久良々遺跡　倉良遺跡　天神田遺跡
副書名	福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	一般国道3号線　筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第2集
編著者名	馬田稔弘・飛野博文・水ノ江和同・秦　憲二
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812　福岡県福岡市博多区東公園7番7号　TEL092-651-1111
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
久良々遺跡	福岡県筑紫野市大字筑紫字久良々235	402176	170334	33度27分40秒	130度32分25秒	平成5年6月～10月	5,000	一般国道3号線筑紫野バイパス
倉良遺跡	福岡県筑紫野市大字筑紫字倉良326-3	402176	170307	33度27分35秒	130度32分32秒	平成4年2月～5月	6,700	同上
天神田遺跡	福岡県筑紫野市大字筑紫字天神田	402176	170307	33度27分30秒	130度32分35秒	平成2年5月～6月	1,400	九州電力鉄塔移転地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
久良々遺跡	散布地	縄文晩期			黒川式土器・擬孔列文土器	
	集落	縄文晩期～弥生後期	掘立柱建物	16		
			土壙	10		
	墓	中世	土壙墓	2	土師器	
	散布地	江戸			土器・陶磁器・石臼	
倉良遺跡	墓	縄文 弥生後期	陥し穴	5	石鏃	弥生後期の土壙墓は横口式足元掘込み
			土壙墓	12		
			甕棺墓	2		
	墓	古墳	土壙墓	1	須恵器	
			溝	1	須恵器・土師器	
	祭祀	近世	墳丘状遺構	2	土師皿・宝篋印塔	
天神田遺跡		中世	溝		土師器・陶磁器	
			土壙	1		
		近世	道路跡	1	陶磁器	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H6	登録番号 4

一般国道3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第2集

平成7年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

〒812 福岡市博多区東公園7番7号

印刷 正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺3－28－1

一般国道3号線 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集

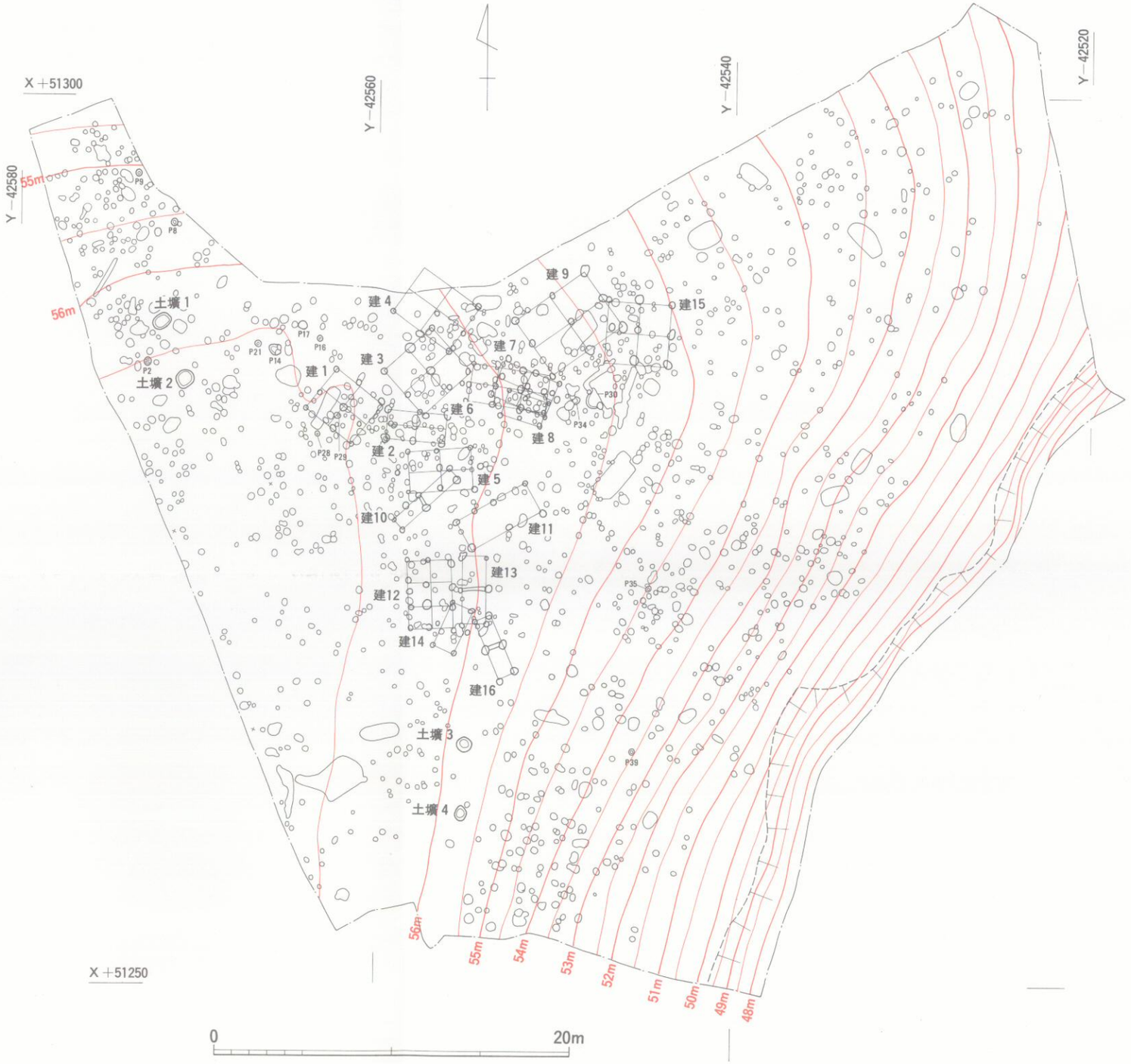
久良々遺跡
倉良遺跡
天神田遺跡

福岡県筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

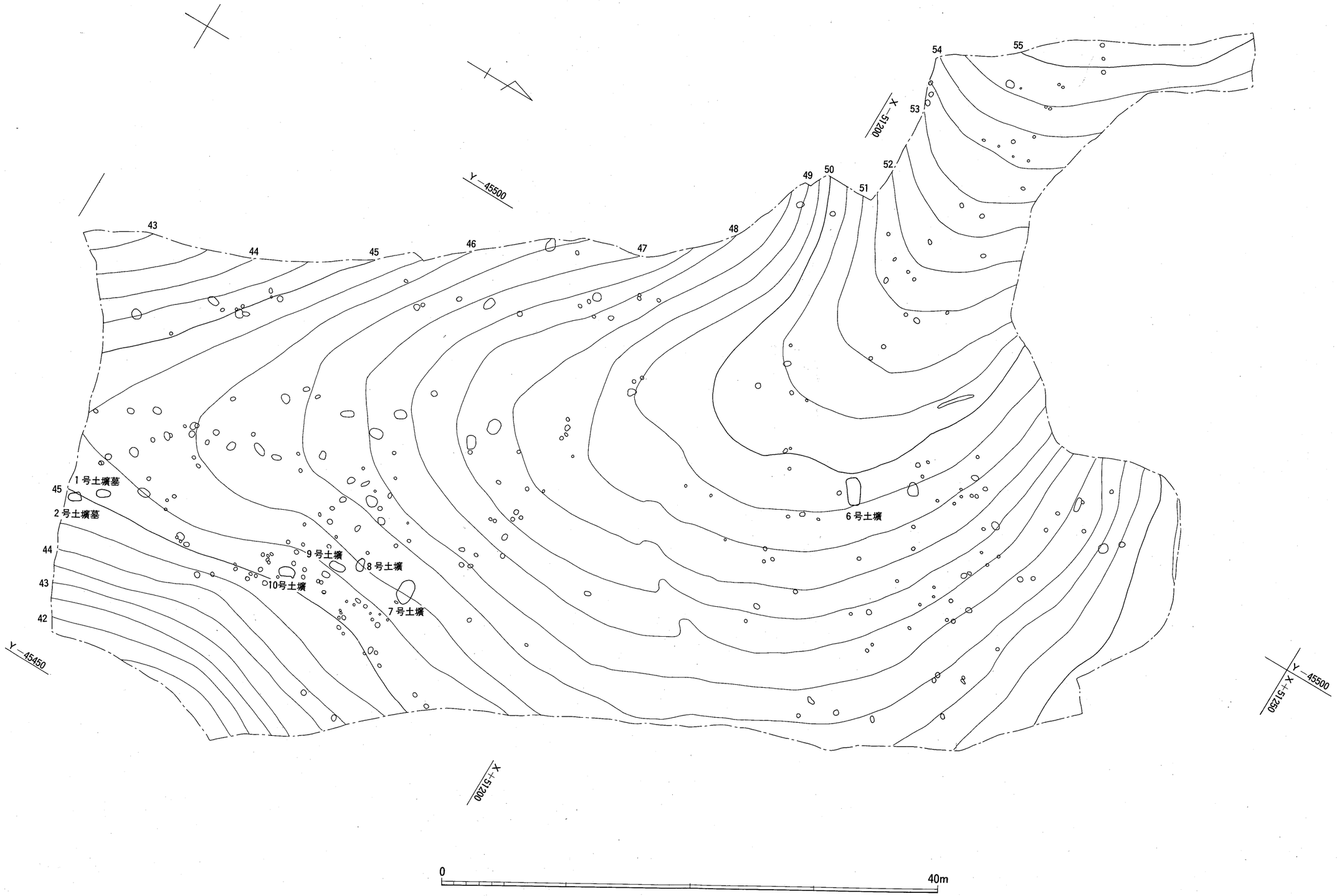
(付　図)

1995

福岡県教育委員会



付図1　久良々遺跡北丘陵（北調査区）遺構配置図（1/300）



付図２　久良々遺跡南丘陵（南調査区）遺構配置図（1/300）

土壙墓1

Y−42350

X+51100

土壙2

土壙1

土壙4

土壙3

土壙5

55

土壙墓14

倉良遺跡
(筑紫野バイパス4・5地点)

2号墳丘

X+51050

1号墳丘

09

60

55

±13

±11

±10

±12

±2

±9

±8

±7

±3

K2

±5

±4

K1

±6

55

X+51000

0

30m

至原田

JR筑豊本線

至飯塚

50

45

溝1

45

45

Y−42300

1号土壙

2号土壙

遺跡跡

溝状遺構

天神田遺跡(鉄塔移設地区)

付図3　倉良・天神田遺跡遺構配置図 (1/300)